

◇4 問題児たちが異世界から来るそうですよ？にお気楽転生者が転生 《完結》

こいし

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

めだかボックスの世界に転生し、早3兆年とちよつと。地球すら消え去った世界で宇宙を漂う瑛喰は手紙を手にする。

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。その才能を試すことを望むならば、己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、我らの『箱庭』に来られたし』

手紙を読んだ瑛喰は娯楽主義という性格から笑い、嬉々として異世界へと移る。チート過ぎて無敵な主人公は、問題児と出会い、黒ウサギと出会い、ギフトを賭けたギフトゲームを娯楽とした世界へと足を踏み入れた。

※大幅な原作崩壊とキャラ崩壊などありますので、ご不快に思われる方もいらつしや

ると思います。頭を空にして読んでいただける方以外はブラウザバックを推奨いたします！

なお、かなり原作崩壊とキャラ崩壊が激しい場面がありますが、原作を侮辱する意図はございません。あくまで二次創作であることを事前にお伝えいたします。

目次

物語の移動

更なるチートが異世界入り	1
瑛嗶の鬼畜ギフトゲーム体験版	15
白夜叉ちゃん妹属性(笑)	24
真つ白なギフトカード	32
とりあえず数が多い	39
フォレス・ガロとのゲームの裏で	49
十六夜メイド	55
ペルセウス消失事件	65
ワンサイドゲーム(総受け)	76

魔王襲来(笑)

嵐の前の静けさ	85
アイドルユニット	91
サラマンドラ	98
飛鳥の悩み	103
これで安心!瑛嗶さんの強化訓練鬼畜	110
式!	110
魔王と瑛嗶の他愛のないやり取り	115
他は戦闘してるのにな	125
ふざけて真面目に終わらせてみる	133
ギフト選択	144

	アイドルにはリアクションも大事	149
	鹽×24	156
	赤くなつたおでこ	164
	魔王系アイドル	173
	後は和服ロリのみ	180
	あれ？神様どしたの？	185
	原作入手までの時間稼ぎ	
	アイドルへの道	190
	十六夜とレティシア	196
	黒ウサギのちよつと恥ずかしい夢	
201		
修行という名の虐め		209
	白夜叉へのアプローチ	215
	本格的な売り出し	222
	レティシアグッズ作りの件	228
	ペストグッズ作りの件	234
	サンドラグッズ作りの件	238
	白夜叉グッズ作りの件	244
	白夜叉グッズ作りの件第二部	249
	白夜叉グッズ作りの件第三部	255
	レティシアドキドキ添い寝ボイス小説	
		261
	サンドラの純愛甘々ボイスCD	
266		
白夜叉ちゃんの御奉仕メイド小説		

嘔吐きは泥棒の始まり

戦果つて単語が多いね！

神キヤラ登場詳細不明

春日部耀。空気脱却

気付かぬ間の悪い予感

出発

特に進展が無いね

瑛嘎の身体能力

収穫祭

嵐の前のなんとやら

巨人族一掃

巨人族の襲撃理由

280

290

296

304

308

312

316

321

327

333

339

最早秒読みの展開

合流だけ

龍の純血種

よろ、取り敢えず捕獲で。おk？

360

審議決議

神出鬼没

飛鳥、再修行

魔改造開始

飛鳥の修行、第一段階

飛鳥の修行、第二段階

飛鳥の修行、最終段階

変化と圧倒

344

349

354

366

373

379

384

390

397

404

413

愛ある再会	420	495	
一時休止	428	暴くか暴かせないか	500
十三番目の太陽	433	蛟劉	505
謎解き失敗	441	瑛嘎×蛟劉	512
瑛嘎の負傷	447	お友達	518
ゲームクリア	453	なじみの力	524
巨龍討伐	460	喧嘩の仲裁	531
巨龍抹殺	468	この世界の少女はなア!	538
なじみの紹介	474	男性にとって最悪な	543
収穫祭流行を作る編		半沢リリ	552
人外という存在	481	こんなやりとりもあつて	558
牛魔王	487	苦勞獸	566
レズ……じゃ、ないね……うん		好戰的に	573

善悪と愉快	632
解放の為に	625
設定、物語、キャラクター	619
選択肢	614
れていくようですよ？	609
問題児によって魔王連盟が着々と潰されていくようですよ？	604
人類最終試練	599
魔王詰め合わせセットⅡ魔王連盟	593
えん坊の妹ボイス小説	579
黒死斑の魔王ペストたんを妹に！	586
感動のラスト	579
騎獣の涙	579

第三者から	638
悪は滅びる	643
人外の考え	649
その名前が欲しければ	658
近づく終わり	665
最強	672
遊ばれ飛鳥	678
瑛嗶の劣勢	684
諦めない限り	690
託し、託され	697
エピソード	706

物語の移動

更なるチートが異世界入り

ここは地球では無く、何処までも広がる宇宙空間。

だが、そこに少し奇妙な存在がいた。男が居たのだ。黒いインナーを着て黒袴を履き、上から青黒い着物を着て緑色の腰布で雑に締めた服装。宇宙空間でそんな格好をしている事もおかしいが、何より身体が潰されない上に無重力空間を優々と歩いている所が人間離れしている。

彼の名前は、泉ヶ仙瑛。神の趣向で週刊少年ジャンプの人気漫画、めだかボックスに転生した転生者である。そして、彼は転生後めだかボックスの物語を終えた。

主人公である黒神めだかも寿命で死に、登場人物達もとある人外の少女以外全員死んでいった。残ったのは彼とその人外の少女のみ。彼らは物語が終わっても生き続けたのだ。大きな力を持ち、研鑽して来た彼は、自分と同等と言わずとも面白い事を起こせる人材を探した。そんなことをしている内に時間は経ち、気付けば地球も太陽に呑み込まれる形で消え去った。そのまま宇宙で暮らし始めて約3兆年。とりあえずは人外の友人と同じ時間を生きてみたものの、対して面白くはなさそうだった。

「あーあ、そろそろ死んでやろつかなあ〜」

人外の少女が少し散歩に出ている間、そう呟く事も有り。

と、そこに瑛嗶以外の奇妙な物が現れた。

「手紙?」

そう、手紙。宇宙空間に漂う手紙。先程まではそんな物は無かったのに突然現れた。瑛嗶はゆらりと笑ってそれを手に取る。そして何の躊躇いも無く開いた。内容はこうだ。

——— 悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。その才能を試すことを望むならば、己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、我らの「箱庭」に来られたし。

その文面は、瑛嗶の口元を吊り上げた。望む所、というのが彼の考え。最早老人というには年を取り過ぎた彼。その身に秘められた力の数と質はまさしく人外。

そして手紙は光を放つ。そして瑛嗶は感じ取った。自身が世界を渡るのを。

「来られたしって……これじゃあ来いやコラって感じだなあ」

苦笑し、瑛嗶は光に包まれ、宇宙の空間から消えた。

こうして本当の意味で、めだかボックスは物語を終える事になる。



そして、気が付けば空の上。上空何百mの所に瑛嗶はいた。眼下には湖、周囲には三人と一匹の同じ境遇者達。瑛嗶はその三人と一匹を少し見た後、空中で体勢を立て直した。

「めだかボックスに転生した最初を思い出すなあ」

上空からの落下。これは瑛嗶にとって特に問題では無い。寧ろ懐かしさを感じる程度の物なのだ。

そして瑛嗶を除いた三人と一匹はそのまま湖へと落下し、瑛嗶は水面へと着地した。跳ねる様な音と共に三人と一匹は水面に顔を出し、すごすごと不満気に岸へと上がる。服はびしょ濡れ、叩き付けられたダメージも多少はあるようだ。実に不満気な表情が浮き出ている。

瑛嗶はそんな彼らを見て、おもしろそうにゆらりと笑い、水面を歩きながら同じ様に岸が上がった。

「つたく……場合によっちゃその場でゲームオーバーだぜコレ。石の中に呼び出された方がまだ親切だ」

「……………。いえ、石の中に呼び出されては動けないでしょう?」

「俺は問題ない」

「そう。身勝手ね」

軽口を叩いているヘッドホンの少年と気丈そうな少女。そして最後に無口なシヨトカットの少女は猫を抱き抱えながら無言で濡れた服を絞っていた。

「というか、オマエ。なんで水面に着地したんだ? それがお前の力か」

「そうだね。あらゆる所に立つだけの簡単な力だよ」

瑛嗶はヘッドホンの少年からそう問われ、苦笑しつつそう返した。どうやらこの問いからして、この目の前にいる少年少女は何かしらの力を持っているらしい。そして彼らの様子と態度から、それは恐らく自身達からしても強力な物なんだろう。

(この世界でもスキルは使える、と。これならスタイルも使えそうだなあ……さて、どうしたものか。こいつら全員プライドの高いだけのガキみたいだし、どうも気乗りしない)

瑛嗶はそう思いつつ、彼らの会話を聞いている。どうやら自己紹介をしている様だ。

「お前じゃない。私の名前は久遠飛鳥よ。以後は気を付けて。で、その猫を抱えてる

あなたは？」

「春日部耀。以下同文」

「そう、よろしく春日部さん。で、その野蛮で凶暴そうな貴方は？」

「どうやら無口っ子もプライドが高そうだと、と瑛喰が思っているとヘッドホンの少年は両手を広げてなにやら自慢げに自己紹介を始めた。

「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快楽主義と三拍子そろった駄目人間なので、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれお嬢様」

「そう、取り扱い説明書を作ってくれたらそうするわ」

「マジかよ。今度作っとくわ」

おそらく気が合わない二人の皮肉を込めあった会話に瑛喰は面倒そうに頭を掻いた。餓鬼のお守りをする為に来たわけではないのだから。

「で、その着物の貴方の名前は？」

「ん？ ああ、見たまんま普通で温厚な泉ヶ仙瑛喰です。気まぐれで天邪鬼で娯楽主義と三拍子そろった普通の人間なので、用法と容量を守った上で適当な態度で接してくれお嬢ちゃん」

とりあえず何も思い付かなかったから一個前の十六夜君の自己紹介を真似してそう

言った瑛嗶。そんな自己紹介に十六夜は皮肉を感じたのか少しむっとし、飛鳥の方はクスリと笑った。

「素敵な自己紹介ね。でも貴方は私とそう年齢も違わないでしょう？ お嬢ちゃんなんて呼ばれる筋合いはなくてよ？」

「ははは、それもそうだね。悪かった、飛鳥ちゃん」

「分かってくれたならいいのよ」

実際、瑛嗶の年齢と飛鳥の年齢差はとんでもなく激しい。それこそ桁が違う程に。なにせ、地球の氷河期から生き続け、地球が滅ぶまでの7500億年を生き抜き、その後宇宙空間で3兆年程生きて来た男だ。十幾つの少女じゃ見たとおり、文字通り、経験が違う。むしろ敬語で話すべき年上なのだ。

だが、瑛嗶としてはそんな事を気にする様な小さい器を持っている訳でもない。子供がわーきゃー騒ごうが喚ごうがさらつと流して穩便に済ますだけの度量は持っている。つまりは大人なのだ、この場の誰よりも。

「おいおい、楽しそうに話してんじやねえよ。お前、今の自己紹介は皮肉のつもりか？」
「確か十六夜君だったか。いやいやそんなつもりはないぜ？ これといった自己紹介が思い付かなかったただけだよ」

「ほお、それにしても随分と即答だったようだが？」

「思い違いだよ。それに、お前如きに皮肉を言う程俺はお前に興味を持ってないんだ。悪いね」

瑛嗶の吐く毒に十六夜はびきつと青筋を立てた。気の短い所は見た目通りだな、と瑛嗶は考えつつゆらりと笑った。そして、十六夜は怒りのままに瑛嗶の懐へ入り殴ろうと拳を突き出した所で、瑛嗶に踏みつけられていた。

「はっ。」

「気の短い男は総じて器も小さいんだ。あまり気を悪くするなよ」

瑛嗶はそう言つてゆらりと笑う。そして十六夜の背中から足を退けてそのまま十六夜を立たせた。

やった事は簡単。直進した来た彼の背中に回り込んで前のめりな体勢の身体を背中から地面に蹴り倒し、踏みつけただけ。その速度が踏まれた本人からは認識出来なかったのだ。

「さて、気の短い彼もいる事だし……そろそろ説明役の子が出てきてくれても良いと思うんだけどなあ」

「それもそうね……というか、貴方は気付いていたの？ 十六夜君？」

「ちっ……ああ、生憎とかくれんぼじゃ負けなしだぜ。お前も気付いてんだろ？」

「……風上に立たれたら嫌でも分かる」

「へえ、面白いなお前」

立ち直りの早い十六夜は、目をすつと細めた。

「で、貴方も気付いているのよね？」

「何に？ お前ら何に気付いてんの？ うわー怖いわー、見えないのに何か……いる！

とかいう中二展開はやめて欲しいかなってお兄さん思うんだけど」

「……まあ気付いている様だから話を進めるわ」

勿論瑗嗚も気付いている。岸近くにある木の後ろに此方の様子を窺っている人物がいる事に。そしてその人物こそ、彼らを呼んだ人物でもあるのだ。

「で、まあそんなに殺気だつてたら出て来れないだろう？ ほれ、何もしないから出てお

いでお嬢ちゃん」

「や、やだなあ皆々様。そんな狼みたいな顔で睨まれると黒ウサギは死んでしまいます？ ええ、ええ、古来より孤独と狼はウサギの天敵にございます。そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここは一つ穩便に御話を聞いていただけたら嬉しいでございますヨ？」

出て来たのは青い長髪を持ちウサミミを生やしたちよつと露出の高い少女。その台詞からはどうにか場を収めようという思惑と十六夜達に対する関わりたくないオーラが汲み取れた。

対する彼らの反応は、

「断る」

「却下」

「お断りします」

の拒否。

「あつは、取りつくシマもないですね♪」

自身を黒ウサギと言った少女はもはや投げやりだ。

だが、そんな中でも黒ウサギは瑛嗶達に鋭い視線を送っている。どこか品定めをしているように。

「おいおい、お前ら。そんなんじや社会でやっていけないぜ？ まだ子供の内は良いけど、大人になってからは大変なんだ。ほら、ウサギちゃんの話をちゃんと聞いて、どういう状況なのかちゃんと確認しよう」

「おお……問題児様方の中にも常識と良心のある方がいらしたのですね！」

「おーよしよし。こんな役目に就いて災難だったね。ほら、もう少し頑張ってみようか」
瑛嗶はそんな三人と違って黒ウサギを支援した。そしてそんな瑛嗶に感動し涙を流す黒ウサギの頭を撫でて優しくそう言う。黒ウサギは瑛嗶の優しさに更に感動していた。

だが、そんな黒ウサギの感動とは裏腹に、瑛噺は黒ウサギの頭を撫でながらウサミミをさり気なく弄っていた。

「あいつの言葉絶対うすつべらいだろ」

「耳を全力で弄りにいつてるわね」

「ちよつと私も触つてみたいけど。本物なのかな?」

三人は黒ウサギに聞こえない様に瑛噺の行動を見てそう小さく会話する。そしてその会話聞きとつた瑛噺は本物なのか疑問を持った春日部耀に視線を送つて、撫でていない方の手でサムズアップした。

「どうやら本物の様だ。」

「さて、気を取り直して説明宜しくウサギちゃん?」

「うう……はい! 任せてください! 張り切つていつちやいますよ!」

黒ウサギは両手を胸の前でぐつと握り、やる気に満ち満ちた顔で瑛噺にそう言った。そして、こほんと咳払いをし、瑛噺達に両手を広げて笑顔でこう言った。

「ようこそ、『箱庭の世界』へ! 我々は御四人様にギフトを与えられた者達だけが参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼントさせていただこうかなと召喚いたしました!」

瑛嗶はそんな言葉を聞いて、ゆらりと笑う。もしかしたら箱庭繋がりで呼ばれたのかなあと思ったが……ギフトゲーム、中々に面白そうな響きである。

「ギフトゲーム？」

「そうです！ 既に気づいていらっしやるでしょうが、御四人様は皆、普通の人間ではございません！ その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でございます。『ギフトゲーム』はその恩恵を用いて競いあう為のゲーム。そしてこの箱庭の世界は強大力を持つギフト所持者がオモシロオカシク生活出来る為に造られたステージなのでございますよ！」

両手を広げて箱庭をアピールする黒ウサギ。瑛嗶達はそんな黒ウサギの説明に興味深そうに聞いている。何せ、神や悪魔や精霊や星といった物まで出てくるスケールだ。この問題児十人外が興味を持たないわけがない。

そしてその説明を聞いた、久遠飛鳥が質問する為に挙手した。

「まず、初歩的な質問からしていい？ 貴方の言う我々とは貴方を含めたれかなの？」
「YES！ 異世界から呼び出されたギフト所持者は箱庭で生活するにあたって、数多とあるコミュニケーションに必ず属していただきます」

「嫌だね」

「属していただきます！　そして『ギフトゲーム』の勝者はゲームの主権者が提示した賞品をゲットできるというところでもシンプルな構造となっております」

今の反応は逆廻十六夜がコミュニティに入らないと言っただけの反応、黒ウサギの顔に必死さが窺えた。瑛嗶としてはその反応に様々な疑問が浮かんだが、どうせ黒ウサギたちのコミュニティは弱小コミュニティで、起死回生の一手として自分達を呼び出したとかそんなところだろうと自己完結させた。

「……主権者ってなに？」

「様々ですね。暇を持て余した修羅神仏が人を試すための試練と称して開催されるゲームもあれば、コミュニティの力を誇示するために独自開催するグループもございます。

特徴として、前者は自由参加が多いですが主権者が修羅神仏だけあって凶悪かつ難解なものが多く、命の危険もあるでしょう。しかし、見返りは大きいです。主権者次第ですが、新たな恩恵を手にもすることも夢ではありません。後者は参加のためにチップを用意する必要があります。参加者が敗退すればすべて主権者のコミュニティに寄贈されるシステムです」

「後者は結構俗物ね……チップには何を？」

「それも様々ですね。金品・土地・利権・名誉・人間……そしてギフトを賭けあうことも可能です。新たな才能を他人から奪えばより高度なギフトゲームに挑む事も可能です

しよう。ただし、ギフトを賭けた戦いに負ければ当然——ご自身の才能も失われるのであしからず」

ギフトゲームの説明は以上。確かに面白そうではある。

（つてことはここではスキル \parallel ギフトつてことか。スタイルに至つてはコミュニケーションだし）

瑛嗶はめだかボックスの世界で【嗜考品】^{プレフェレンス}というスキルを持っていた。これは考えた事をそのまま実現するスキルを創るスキルである。

これによって、瑛嗶は3兆7504億8392万1234年と213日のこれまでの人生の中で多くのスキルを生み出している。その数、2104京7893兆3423億6713万0435個。日常の些細な事までスキルで解決出来てしまう生活を送っていた瑛嗶のスキル量は人外以上に化け物だった。

そしてこの世界において、スキルはギフトとイコール。ということは、瑛嗶がもし殺し合いや喧嘩でのギフトゲームをした場合、相手はこの全スキルを、全ギフトを相手に戦わなくてはならないのだ。

また、この全てを無効化出来たとしても、新たなスキルが創れる以上瑛嗶の手は無くならないのだ。どうやって勝てというのだと思う。

「ま、それはそれで面白い」

瑛噺はそう言つて、ゆらりと笑つた。

瑛夏の鬼畜ギフトゲーム体験版

ギフトゲーム。誤変換すると義父とゲーム。いやそんな事はどうでもいいのだが、十六夜達はゲームの説明を受けた後、黒ウサギによる体験版ギフトゲームを受けさせてもらえる事になった。

というのも、説明を終えた黒ウサギの提案だったのだが、その際に若干面倒そうな顔を浮かべた十六夜達問題児三人に対し、この程度も出来ないなら正直いらね。といった感じの挑発を吹っ掛けたのだ。案の定、じゃあやってやんよと挑発にむぎむぎ乗った問題児達。瑛夏の感想としては、

(こいつらチョロいな)

の一言に限る。とはいえ、瑛夏はそんな挑発に乗る必要も義理もないのでその場から動かない。

そんな瑛夏に黒ウサギは若干焦った様な声で歩み寄って来た。

「えと、あの貴方はやらないのですか？ 体験版ギフトゲーム……？」

「ああ、やらない。だってやる意味も義理もないし、そのアホな三人と違ってそんなやつすい挑発に乗るほど俺も若くないしね」

ピクツと三人の肩が動いたが、気にせずに瓊瓊は黒ウサギにそう言った。

その言葉に対し、黒ウサギは肩を落として三人の下へ戻っていく。正直言つて、彼女にはギフトゲームを体験させる事以外に目的が有ったのだが、この際仕方ないと結論付けたのだ。

「で、では御三方にゲームの説明をさせていただきます。ルールは簡単」

パチンと指を鳴らし、魔法の様にカジノにありそうなギャンブルテーブルを取り出す黒ウサギ。そしてその短いスカートのポケットからランプ一式を取り出し、シャツフル。

「このテーブルに散りばめられた裏面のトランプをそれぞれ一枚選び、53枚のカードの中からK・Q・J・ジョーカーの絵札、計13枚のどれかを引く事が出来れば御三方の勝利となります。引けなかった場合は黒ウサギの一人勝ちでございます」

「ほお、意外と単純なルールだな、分かりやすいぜ。それで、俺達は何を賭ければいいんだ?」

「いえ、今回はギフトゲームがどのような物かを御理解頂く為の予行演習ですので、賭けや報酬は無しで結構です。強いて言うのなら、賭けて頂くのはご自身のプライドですね」

ノーリスクノーリターン。それが体験版。初心者に対する配慮である。

だがこの問題児達は、刺激を求める思春期真つ只中の少年少女。賭けも何も無い唯のゲーム等、つまらない。

「嫌だね。何か報酬が無いとつまらない」

「……そうですね。それでは黒ウサギが何か一つ言う事を聞く、というのでどうでしょうか」

「そうか……」

黒ウサギの言葉に、三人の中で唯一の男。逆廻十六夜がその視線を黒ウサギの豊満な胸に寄せた。瑛嗶はそんな十六夜に苦笑する。

そして黒ウサギがその視線に気づいて身体を抱き締める様に一步後ろに下がった。

「性的な事は駄目でございます！」

「チツ」

「わっはっは、随分とまあ思春期真つ盛りじゃねーの十六夜ちゃん。なんなら俺が何でも願い事を叶えてやっても良いぜ？ ウサギちゃんに勝ったらね。報酬はそれでどうだ？ ついでだ、三人とも叶えてやるよ」

「性的な事は？」

「有りでどうだ」

「乗ったア!!!」

瑛嘎の提案は、かなり魅力的だったのか黒ウサギが少し渋ったものの、通った。瑛嘎を除く4人に対してリスクが無いというのが案が通った一番の要因だろう。

だが、瑛嘎にそんな事が出来るのか黒ウサギは疑問だった。しかし、瑛嘎にはそれが出来る。何故なら、それが出来るだけの力を瑛嘎は持っているのだから。

「それでは始めましょう」

黒ウサギは三人にカードのチェックをさせた上で、そう言った。そしてカードがテーブルの上に散りばめられ、十六夜が先陣を切ってテーブルの上に立ったその時、瑛嘎の口元がゆらりと弧を描いた。

「——っ!？」

瞬間、カードが全て小さな螺子でテーブルに留められた。テーブルを叩こうとしていた十六夜の手が止まる。そして、背後に居た飛鳥と耀の二人の表情にも驚愕が浮かんだ。

何故なら、二人がカードのチェック時に絵札に付けた目印がどのカードにも無くなっていたから。

「わはは、俺がそんな簡単に勝たせると思ったか。俺は願いを叶える報酬を支払うんだぜ? イカサマを許す筈が無いだろう」

瑛嘎は三人の背後にあった大きめの岩に寝転がってそう言った。使ったのは小さな

螺子をカードのある座標に計53本突き刺し、カード全ての時間を巻き戻し、再度シャッフルしたのだ。

瑛嘎式スキル、否。瑛嘎式ギフトの一つ、時間を巻き戻すギフト【跡戻り】^{バックトラック}と対象を別対象と入れ換えるギフト【神経衰弱】^{ターゲットシャッフル}。螺子に関してはただ持っていた螺子を投げて突き刺しただけ。

「なっ……いー ギアスロールが……!?!」

黒ウサギが驚愕の声を上げる。その手元にあるのは、このギフトゲームを開始する際に生み出された、ルールやプレイヤー、報酬と賭け品が書かれた契約書、ギアスロール。そのギアスロールが何故か、書き換えられていたのだ。ルールの部分に先程までは書かれていなかった一文が現れていたのだ。それが、

——イカサマが発覚した場合、問答無用で敗北となる。

という物。この文はギアスロールに記された正当なルール。つまり、十六夜達は正々堂々、正面からルールに則って、黒ウサギを打倒しなければならない訳だ。

瑛嘎式ギフトの一つ、ルールを書き換えるギフト【謀規則】^{メデイカルルール}。もはや何でもありである。このような事が出来れば、もはやギフトゲームで負けることなど無いだろう。最

悪、勝利条件を都合の良い様に書き換えればいいのだから。

「さあガキ共。真正面からそのウサギちゃんに勝ってみろよ」

瑛嗶はそう言つて、意地悪そうにゆらりと笑つた。

「……ちつ……仕方ねえ……俺は自分の運つて奴を信じてやるよ」

そう言つて十六夜が引いたカードは、数札。つまり、敗北である。瑛嗶はその様子を面白そうに笑つた。

最終的に、彼ら三人の内、絵札を引いたのはいない。三人共黒ウサギの前に敗北したのだ。

「わはは、自分の力を使わないと何も出来ないんだな。調子に乗ってるからだぜ？」

「……っ、じゃあテメエは絵札を引けんのかよ？」

瑛嗶の言葉に十六夜が悔しそうに突つかかる。その後ろでは飛鳥と耀が共に恨めしそうに見ていた。瑛嗶はそんな三人を見て、まだまだ子供だなあと改めて思いながら立ち上がり、テーブルの前に歩み寄つた。

そして、一枚のカードを螺子毎外して黒ウサギに投げ付ける。

「つとと……えーと、なっ!？」

引いたカードは、ジョーカー。つまり絵札である。瑛嗶は53枚の内1枚しかないジョーカーを引いて見せた。

そして後ろで驚愕している三人に振り向いて、ただただ笑って見せた。それがより一層三人の悔しさを誘うのだった。



「くそ……何時か絶対負かしてやる」

「ええ、絶対よ絶対」

「……」

三人が黒ウサギに連れられて黒ウサギのコミュニティに移動している途中、瑛嘎の後ろでそう言う。瑛嘎は楽しげに黒ウサギの隣を歩いている。その表情は実に楽しそうだ。流石は3兆年も生きた人外。平気で大人げない行動を取って見せる。

普通の人間で例えるなら、大人が小さな子供を殴り飛ばす並に大人げなく、えげつない。この例は物理的だが、瑛嘎の場合は精神ダメージだ。より酷い。

「でだ、ウサギちゃん。此処だけの話なんだけど」

「なんでございましょう?」

「ウサギちゃんのコミュニティってそこそこ問題有るでしょ?」

「っ!」

瑛噺は誰にも聞こえない様に、黒ウサギにだけ聞こえる様に、そう言った。そしてその言葉に黒ウサギは眼を見開いて驚愕する。その様子は暗にそれが事実である事を物語っていた。

そして瑛噺はそんな黒ウサギに苦笑し、その頭にぽすつと手を乗せた。

「まあその程度でコミュニティ入りを拒否する程俺もコミュニティを選ぶつもりはないから安心したまえ」

「……ありがとうございます」

黒ウサギは瑛噺の言葉に少し俯きがちにそう言った。コミュニティに入るのなら別に黒ウサギのコミュニティで無くても良い。それこそ、ルールの書き換えというギフトを持つ瑛噺ならどのコミュニティでも喜んで歓迎してくれるだろう。

だが瑛噺は敢えて黒ウサギに味方することを選んだ。どうせ勝つのなら何処に入っても同じ事だ。

「あ、でも瑛噺さん！ 先程のギアスロールを改竄する、なんて横暴はやめてくださいね？」

「はいはい。確かにルール書き換えたのはちょっとやりすぎたかなって思ってるよ」
基本的に、ギアスロールに対するギフトは無効化される。それは瑛噺のギフトも同じ事。

だが今回瑛嗶が弄ったのはギアスロールではなく、それによって決められたルールを改竄した結果、ギアスロールにも変化が起きた、というのが実際の所。これならギアスロールに間接的な干渉が可能なのだ。

しかしそれも今回限り。瑛嗶としても、そんな勝ち方はあまり面白くない。十六夜辺りならその辺あまり気にしないのだろうが、その辺が快樂主義者と娛樂主義者の違い。無駄に娛樂を貪ったりせず、そこに自分で決めた決め事や誇りという物が有る。故に、黒ウサギの言葉は瑛嗶も拒否しなかった。

「さて、それはそれとして……後ろを向いてみ？」

「え？」

振り向く瑛嗶と黒ウサギ。背後には付いて来ている飛鳥と耀。だがそこに、十六夜の姿は何処にもなかったのだった。

白夜叉ちゃん妹属性（笑）

「というか貴方、少し前から思ってたんだけど……一体幾つなのかしら？ 時折私達の事をガキだのお嬢ちゃんだの言ったり、自分の事を若くないとか言うけれど、本当の所はどうなのかしら？」

ことう言ったのは、久遠飛鳥。

現在瑛嗶及び、飛鳥、耀の三人は黒ウサギの案内の下、コミュニティ「ノーネーム」のリーダー、ジン・ラツセルの下へと案内されていた。そしてその足で黒ウサギは髪の色を黒神めだかよろしく赤く染めて世界の果てへと失踪した十六夜を探しに駆けて行った。その速度は瑛嗶から見て、中々に遅かった。

「俺の年齢が気になるのか？ まあ教えてあげるのは吝かではないけれど、正直冗談だろって思うだろうし……」

「もう！ じれったいわね！ 『正直に自分の年齢を教えなさい！』」

飛鳥は自分のギフト、自身の霊格より格下の相手を支配するギフトを使って瑛嗶にそう命令した。彼女の思った通りなら瑛嗶は命令通り自身の問いに答える筈。

だが、その思惑は通用しない。人間が人外に勝とうモノなら、まずは人間を止める所

から始めるべきだろう。つまり、

「ははは、それがお前のギフトか。まあアレだ……良いんじゃない？ お嬢様っぽくて」

瑛嗶にはなんの効果も発揮しなかった。

「なっ……！」

ガタツと椅子から立ち上がり、驚愕する飛鳥。これまで命令をすれば誰もが従って来たのだ、初めて命令を跳ねのけられたのなら、吃驚もするだろう。

だが、命令とは関係なく瑛嗶はゆらりと笑ってその問いに答えた。

「教えてやるよ、ギフトも教えてくれたしね。俺の年齢は——」

「失礼」

「あ？」

瑛嗶は年齢を答えようとして、遮られた。割りこんできたのは虎の様な獣人。スーツを着ていて、何処か紳士的な雰囲気の中に悪意が潜んでいる気配を感じる。

瑛嗶はその似非虎紳士を一瞥し、一瞬で興味が失せた。

「コミュニティ、フォレス・ガロのガルドさん……」

そう言ったのは先程まで空気がだった二人の内の一人、瑛嗶達の入るコミュニティのリーダー。ジン・ラツセルだ。齡11歳の少年で、少しでも威厳を持ちたいのかダボダボのローブを身に付けているが、実際にはなんの威厳もない。

「え？ 何？ フォース・エロのニャンコちゃん？」

「フォレス・ガロのガルドです！」

「え、だって見てみ？ この紳士を取り繕った様な雰囲気にかけて飛鳥ちゃんと耀ちゃんの身体をやらしー目で見てるぜ。わははは」

「い、いや！ そんな事は無いですよ？」

焦るニャンコ。凶星の様だ。この分だと黒ウサギの事も狙っていそうではある。言ってしまうえば女性を雑種に食い散らかしそうな感じだ。

「で、何の用だニャンコ」

「ガルドです」

「いいじゃないか。どうせ序盤で出て来て最終的に咬ませ犬としてフェードアウトして、幸運にも名前を与えられたモブキャラでしかないんだし」

それを聞いた彼はぐさつと何か心に刺さった様に項垂れてしまった。まあ元気を出してくれとしか言いようがないだろう。瑛嗶はそう思いつつ、運ばれてきたコーヒーを口を含み、黙った。これ以上は話が進まないと思っただろう。

「もう少しデカイイベントが欲しいなあ……そう、それこそ初期装備で魔王を相手にする様な……」

瑛嗶はそう呟いて、飛鳥達とガルドの話が終わるのを待つ。いつしか瑛嗶の年齢の話

は後回しにされてしまっていたのだった。



「はい、という訳で。飛鳥ちゃんと耀ちゃんがフォース・エロのニャンコちゃんとギフトゲームをする事になりました。はい拍手」

その後、結局瑛嗶の言った通りの展開になった。そして十六夜を連れて帰って来た黒ウサギと合流し、サウザンドアイズの支店の一つへとやってきた瑛嗶達はその一室で話していた。

乾いた拍手が鳴り響く。飛鳥と耀は中々やる気で、十六夜は面白そうに笑みを浮かべ、黒ウサギは肩を落とすし、瑛嗶は心底どうでも良さそうにだらけていた。

「いやおんしらいきなりやってきて随分とまあ勝手じゃのう？」

こう言ったのは、このサウザンドアイズの支店にやって来ていたサウザンドアイズの幹部、白夜叉である。白髪和服ロリという容姿に反して随分と威厳を持っている少女だが、これでも元魔王。白夜の精霊であり夜叉の精霊というトンデモ人物である。

ちなみに、サウザンドアイズというのは、特殊な【瞳】のギフトを持った者たちを中心とする群体コミュニティ。箱庭のすべての地区、層に精通する超大手商業コミュニティで、各地に支店を持つ。東区画の箱庭3345外門に本拠を構えている、まあ凄いコミュニティという訳だ。

「はあ、正直どーでもいいんだよね……元魔王だの妖精だの言われてもいまいちピンとこない上にあまり強そうでもないし……」

瑛嗶は本当にどうでも良さそうだ。白夜叉の下へやってきた理由はこんな話をする為ではないのだ。

「さて、それじゃあ本題に入ろうか」

「待て待て待て、この状態は何かがおかしい気がするんじやが」

「何がだ」

見てみると、確かにおかしな状況だ。何故なら、瑛嗶が上座に座り、対面に十六夜達が並んで座っている。本来なら上座にはこの中で一番偉い白夜叉が座る筈だ。

では白夜叉は何処に座っているか？ それは簡単。上座だ。但し、上座に座る瑛嗶の膝の上という条件で。

「十六夜ちゃん。何かおかしな所あるか？」

「ちゃん付け止めろ。……いや特に無いな」

「嘘じゃろ!？」

「ほら、おかしな所なんて何も無い。話を続けよう?。」

今この場において、白夜叉と瑛嗶だけがこの状況のおかしさに気付いている。だが、他の全員は気付いていない。何故なら、この場において瑛嗶のギフトが発動しているからだ。

瑛嗶式ギフトの一つ、あらゆる違和感を払拭するギフト【平常運転（イマールイテンテクシヨウ）】

これによつて瑛嗶と白夜叉を除く全員がこの状況を普通の物だと思つているのだ。

「あはは、こうしてみると白夜叉様も瑛嗶さんも和服ですからまるで仲の良い兄妹のようですね!」

「んなつ!? 黒ウサギ、おんし何を言つとるか!？」

「本当だね。瑛嗶さんは容姿は整つてるから見た感じ良いお兄ちゃんに見える」

黒ウサギと耀がそう言う。白夜叉はどういう状況なのか全然分かつていなかった。

（どういふことじゃ!? 何かのギフト……いやギフトの気配はしない……となると本当に? いやいやこの状況はどう見てもおかしいじゃろ! 一番怪しいのはこの儂を膝に乗せとるこの男じゃが……どういふことじゃ……?）

勿論、瑛嗶はギフトの発動を隠蔽するギフトを発動させている。最早この場は瑛嗶の手の平の上だ。

（わはは、元魔王って言うからちよつと悪戯したくなつたんだけど、大したことないね）
瑛噺は膝から降りればいいのにそうしない白夜叉の慌てる表情を見て、ゆらりと笑うのだった。



「全く……おんし、随分と盛大にやらかすのう……」

その十分後、瑛噺は存分に楽しんだ後ギフトを解除。白夜叉に席を譲って下座に座り直すのだった。

「わはは、元魔王といつてもこの程度かと思つちやつたぜ。まあそういきり立つなよ、器が知れちやうぜ？」

「むう……まあ良い。で、おんしらが来た理由はなんじや？」

「はい。実はこの御四方のギフトを鑑定してただこうかと思ひまして。春日部さんや飛鳥さんのギフトは大体予想が付くのですが、十六夜さんや瑛噺さんのギフトはもう意味不明で……それに、御自身のギフトを知るのも良いと思ひまして」

黒ウサギは疲れた様子の子の白夜叉にそう説明する。すると、白夜叉はため息を吐いて頭を抱えた。

「此処まで辿り着くのに10分も掛かる物じゃろうか……」

「頑張れ白夜叉ちゃん」

「おんしのせいじゃろうか！」

「はいはい謝るよ。表面上」

「心から謝罪せんか！ 膝手ごと頭を垂れて！」

「はははやなこった」

瑛嗶と白夜叉、人外と元魔王。この二人の力関係は、やはりというか人外＜元魔王と
いう図式になるのだった。

真つ白なギフトカード

さて、サウザンドアイズ、ひいては白夜叉という人物はとんでもなく重要人物だった。黒ウサギやその仲間は白夜叉との付き合い故に、その気さくさと少しの変態性を持っていてる事を知っている。

だがそれ以上に彼女は魔王という肩書き通りの実力と格を持ち合わせている。だからこそ、魔王並の強敵一人や二人、圧倒して倒してしまふ位の。

「さて、まずは自己紹介をしておこうかの。いろいろと遠回りしたが、私はサウザンドアイズの幹部、白夜叉だ。この東の外門では並ぶものもない最強のホストである」

最強を強調して言う白夜叉。瑛噺は正直その言葉を聞いて、自分の実力を誇示したい子供かと心の中で突っ込み、どうでもよさげに寝っ転がった。

「おい待てコラ。おんし、私の言葉を聞いて何故寝っ転がる。というか人の支店の中で寝っ転がるってどういう見だ？ 全く、先程の事といい、おんし随分と自由じゃな！」

「おいおいお嬢ちゃん。冗談はそのとろけた脳みそだけにしとけよ。全く、俺にとって強さなんて鼻で笑い飛ばす物だ」

「ほお……随分と自信が有る様じゃなあおんし。まあこの私にギフトの発動を悟らせな

かったその手腕は認めてやろう。じゃが、ギフトだけで通用するほど、箱庭は甘い場所では無いぞ?」

白夜又の目が細くなり、何やらカードを取り出して光を放つ。

「どうやら、おんしとは違ってその三人は私と勝負がしたそうじゃ。その意気やよし、じゃが一つ問うてやろう。おんしらが望むのは挑戦か? もしくは——決闘か?」

その言葉と同時に景色が変わる。白夜又の名の通り、その景色は『白夜』。シャッターの遅いカメラで撮った星空の様にぐーっと伸びた星が薄暗い空を飾り、白夜又の容姿をそのまま景色にした様な白と黒の混ざり合った世界。

「ハ、これは!」

「落ちつけ。ここは私の持つゲーム盤の一つだ」

「これが唯のゲーム盤!」

十六夜の慌て様に白夜又が説明をするが、それに対し飛鳥が更に驚愕した。

そして白夜又は未だ地べたに寝っ転がる瑛噺に視線をやる。瑛噺も眠そうに白夜又に視線を合わせた。

「どうだ小僧。驚いたか?」

「いや別にこれ位は珍しい物でも無いだろう」

「はっ。」

「俺も出来るし、なんなら俺の知り合いも出来たぜ」

瑛腹にとつてそれは別に珍しい物では無い。教室空間を作りあげた奴もいたし、ゲーム盤が凄い位の物なら特に気にするほどでもないだろう。

「ふむ……おんしのギフトがどのような物か気にはなるが、まずはこの三人の要望を聞くでしょう。それで、どうする？ 挑戦か、決闘か」

白夜叉は十六夜達に聞く。すると、耀と飛鳥は驚いたままであったが、十六夜がいきなり笑いだした。

「ははははは！ まいった。こんなに凄いモン見せられちゃあ仕方ねえ。今回は大人しく為されてやるよ、白夜叉」

「ふむ、よかろう。それでは始めようか。おんし達には、アレの相手をしてもらおう」
そう言つて白夜叉が扇子で差した先、そこからはなんと――

「……………あれ？」

――何も来なかった。

「おーよしよし、なんだお前何食つたらそんなでかくなるんだ？」

と一瞬の沈黙の後に響いたそんな瑛腹の声。全員がそちらを見ると、そこには白夜叉が呼んだ者、グリフォンが瑛腹に弄りまくられていた。

『ちよ……………やめろ貴様！ 痛い！ 羽を筆るな！』

グリフォンは悲痛の声を上げる。すると白夜叉はそんな瑛叟の方へ全力で駆けだし、跳んだ。

「自由すぎじゃおのれええええええええええ!!」

白夜叉はそう叫んで、瑛叟の背中に跳び蹴りを入れるのだった。



その後、動物相手という事でグリフォンの相手をしたのは春日部耀。試練の内容は特にこれといった面白さもないので割愛するが、取り敢えず試練には合格したという結果だけを述べておこう。

「さて、まあ鑑定して欲しいという事だし……祝いだ、受け取れ」

ぱんつと手を叩く白夜叉。試練も合格という結果に終わったので、元々の目的であるギフトの鑑定をする事にしたのだ。

「まさかギフトカード!?!」

「何それ? 御中二元?」

「御歳暮？」

「お年玉？」

「……カードゲームみたいなもんだろどうせ。十六夜ちゃん俺のと交換しようぜ、俺青いカードの方がいいや」

「違います!! ギフトカード! ギフトを収納しておける上に、各々のギフトネームも分かる超高価な恩恵でございます!」

ボケる三人と素の瑛叟に突っ込む黒ウサギ。

ギフトカードとは、顕現しているギフトを収納しておける恩恵をカードの形にした物。持てばギフトの名前も分かる上に、収納したギフトは出し入れ可能という珍しい恩恵。本名はラプラスの紙片だ。

「なるほど……」

瑛叟達はそれぞれが受け取ったカードを見る。そこには確かにギフトネームが示されていた。

春日部耀は【生命ゲノムの目録】

久遠飛鳥は【威光いこう】

逆廻十六夜は【正体不明ゴッド・アンソング】

である。

「ふーん、なら俺のはレアケースな訳だ……」

「アンノウンじゃと……? ギフトカード、ラプラスの紙片でも判別できんとは……」
今までにない事例。十六夜のギフトは判別できなかつたらしい。

「瑛唄さんのはどうなんですか?」

「ん? 見せてやるよ。読めればいいけど」

「どれどれ……ええ!? 読めない!」

黒ウサギの声に、瑛唄はカードの表を全員に見える様に掲げた。そこには一面真っ白なカードがあり、文字など何処にもなかった。

「ギフトが表示されない? また……この小僧以上におかしな例を引つ張り出しおつて

……」

「……ま、読めないならいいさ」

瑛唄はぼそつとそう言つて立ち上がる。

実際、ギフトカードにはちゃんと瑛唄のギフトが『全て』表示されている。但し、その数が多すぎて、ギフトネームが重なり合い、カード一面が真っ白に見えるほどに文字が表示されているのだ。分かりやすく言うのなら、ノートに文字を書き過ぎて真っ黒に塗り潰してしまったのと同じ事。

「わはは、これなら全部ひっくるめてクリエイション・ピネフエット【恩恵の創作】とでも名付けるかな」

瑛噺はそう言つて、ゆらりと笑うのだった。

とりあえず数が多い

ノーネーム

数あるコミュニティの中でも、名前やコミュニティを表す旗印を持たない弱小コミュニティの事を、総じてそう呼ぶ。

また、瑛嗶達問題児と人外の4人が加入した黒ウサギ達のコミュニティもまた、名無しの弱小コミュニティ、「ノーネーム」。過去、大きな名声と実力を持っていたというコミュニティだったそうだが、とある魔王とのギフトゲームに参加する事になり、土地の命も、仲間も、恩恵も根こそぎ奪い取られてしまったらしい。

そこでコミュニティ復興の為に召喚されたのが、瑛嗶達。つまりは強力なギフトを持つている人材を他世界から呼んで強力してもらおうという他人任せかつ自分勝手に苦し紛れの策。

その結果呼び出されたのは、十六夜という規格外のギフトを持つ問題児や、飛鳥という支配者のギフトを持つお嬢様や、耀という親密な動物の能力を使役するギフトを持つ無口少女。そして瑛嗶という膨大な数のギフトを持ち、かつ新たなギフトを創り出せる人外だ。

苦肉の策は成功以上に大成功、いやそれ以上に厄介な存在を箱庭に招き入れてしまった。下手すれば魔王よりも恐ろしい存在が来てしまったのだ。魔王程度でどうこう出来るほど、人外という存在は甘くない。

さて、そんな人外こと瑛嗶だが、現在荒廃したノーネームの拠点の談話室で同じく呼び出された三名と共に寛いでいた。

とりあえず、荒廃した拠点は世界の果てに失踪していった十六夜がその先で八つ当たり気味に倒した水神から貰った水樹によって水には困らなくなったものの、未だ土は死んでおり、木々もない。まだまだ復興には時間がかかりそうだ。

「というかよお。瑛嗶のギフトがどんなもんかは知らねえが、この廃れた土地をどうにか出来るんじゃないのか?」

「確かにそうね。貴方のギフトがどんな物は知らないけれど、出来るんじゃないの?」
「出来そうだよね。瑛嗶のギフトがどんな物は知らないけど」

三人は唐突にそう言う。実際、彼らの言うとおり瑛嗶がその力を振るえば忽ち元の豊かな状態に戻すことは可能だろう。

だが、瑛嗶はゆらゆら笑って首を横に振った。

「嫌だ。そんなのつまらないぜ」

「なんでよ」

「お前らはアレか、どこでもドアがあればタケコプターは要らないってタイプか？ 何でもギフトで解決すれば良いってもんじゃないんだぜ？ 結果までの過程も重視した方がいいのさ」

瑛嗶はかつて友人が言った台詞をそのまま言った。

「ふーん、まあ一理あるな。やっぱり自分の手でどうにかした方が達成感ありそうだ」

「ま、そう言う事にしておきましょう」

十六夜と飛鳥はそう言うってこの話題を切り上げた。

空は既に夕刻。もうじき日も落ちて暗くなってくる時間帯である。

「そういえば、瑛嗶の歳って幾つなの？ 結局さつきはガルドが来たから聞きそびれたけど」

そこへ、春日部耀の話題振り。ガルドとの会談までに話していた瑛嗶の年齢の話だ。

瑛嗶はその話題にそういえばと思いだし、飛鳥と十六夜は共に興味深そうに瑛嗶へ視線を向けた。

「んー、幾つに見える？」

瑛嗶はそこそこのおばさんが言いそうな返しをする。すると、十六夜達は少し考えた後、順に答えた。

「18」

「25」

「敢えて14」

上から飛鳥、十六夜、耀の順。瑛嗶はその答えに苦笑した。まだまだ常識の範囲内、問題児は結局の所、瑛嗶にとつてまだまだ普通の域にいる唯の人間だった。

常識に囚われない考え方の出来る子供の方がまだ正解に近付けるだろう。馬鹿な子供なんてふざけて「1億歳！」とか言い出すのだから。

瑛嗶はそんな問題児達にゆらりと笑つて正解を教えた。

「――全員外れ。俺の年齢は3兆7504億8392万1234歳、だ」

瑛嗶の答えに、時間が停まった。十六夜は冷や汗を流し、飛鳥はカタカタと音を立てながら紅茶のカップを口に含み、耀は無表情で猫の頭をただひたすらに撫でている。

「とんでもない冗談は止めてくださいませこのお馬鹿様！」

そこへ黒ウサギがやってきて、聞いていたのか瑛嗶の頭をハリセンで叩いた。瑛嗶はそんな黒ウサギに視線を向け、苦笑する。

「だから信じられない年だつて言つたんだよ。ちなみに嘘じゃない。俺は地球が氷河期の時に生まれ、地球が滅ぶまでの7500億年を地球上で過ごし、滅んでからは宇宙空

間で3兆年の時を過ごした。手紙が来なかったら多分そろそろ死んでやろうかなあと
思ってたんだぜ？」

「な、な、な……！」

言葉も出ない黒ウサギ。彼女自身、200年は生きているが、瑛嗶はそれ以上。箱庭
の中で言っても一番年上かもしれない。

ギフトも規格外なら年齢も規格外。問題児以上に化け物だった。

「ええええええ!!? さ、三兆!!? どれだけの時間を過ごしてるのよ! というか人間がそ
んなに長く生きてられるわけないわ! まして、宇宙空間では呼吸すら出来る筈がない
!」

「それが出来るギフトを持つてることか……」

「正確にはそれが出来るギフトも持つてるって所だな」

瑛嗶は飛鳥の驚愕と十六夜の言葉を軽く流した。

だが、十六夜は見た目と違って意外と頭が働く方である。瑛嗶の言葉になにかしらの
結論に至った様な顔をした。

「なあ瑛嗶……お前、一体幾つのギフトを持つてるんだ?」

疑問。年が年だけに、ギフトの数も複数個有るのではないかと思つたのだ。

勘が良いな、と瑛嗶は笑つた。飛鳥と耀、黒ウサギもその十六夜の言葉にはつとなる。

瑛夏のギフトがどのような物か分からなかったが、複数個の恩恵を持つているとなれば、今までの行動の説明も付く。

「此処までのお前の行動で、ギフトでないと説明出来ないのは、水面歩行、俺の速度に付いてくる身体能力、黒ウサギとの勝負の時の螺子とルールの改竄、カードのシャッフル、カードの修復、白夜叉の支店での違和感の払拭、白夜叉にギフトの発動を悟らせなかった事、合計で8個。最低でも八つの恩恵を持つてる事になる。まあ叩けばもつと出てきそうなもんだが、その所どうなんだ？」

「わはは、まあ言ってる事に間違いは無いね」

「まあ隠しておきたいのなら別に深くは問わねえが、教えてもらえるもんなら是非知りたいところだな」

十六夜は目を細くして瑛夏に問う。ギフトの数もその内容には劣るがれっきとした自身の情報。明かす事で自身が敗北することになる事だつてあり得るのだ。

故に、話さなくても良いし、話してくれるのなら儲け物という所だ。

だが、十六夜だけでは無く黒ウサギ達も知りたい、という思いを眼に浮かばせていた。瑛夏はそんな彼らの視線に対し、やはりゆらりと笑って両手を広げた。

「まあ教えるのは吝かではないぜ。教えた所で対処出来るようなもんでもないだろうしね」

「ほお、じゃあ教えて貰おうか。幾つだ？ 100か、200か？ それとも……1000か？」

十六夜は瑛叟の年齢からそれくらい持つてもおかしくは無いなど思える数を挙げた。黒ウサギ達もその位持つていてもおかしくは無いなど考える。

だが、それでもまだ常識の範囲内。少しは常識以上の考えをする様になったようだが、それでもまだ序の口。

「まだまだだね。まあお前らが俺の恩恵の数がどれ程多くて、どれ程強いのか気になるのも分かる。十六夜ちゃんに至ってはかなり好戦的だし」

「バレてんのなら話が早いけどな」

「まあどんなもんかは気になる所ね」

「少しだけ……」

瑛叟は正直でよろしい、と笑みを浮かべた後に立ち上がり、歩く。そしてさながら探偵の解決シーンの様に口を開く。

「まあ好戦的なのは結構。俺のギフトは基本的に人にとって幸せプラスに働くモノと不幸マイナスに働くモノに分かれる。まあ要するに、異常アブノーマルに働くギフトか過負荷マイナスに働くギフトか、つてことだ」

「なるほど、そいつは凄そうだ」

「でもまあ、案外簡単かもしれないぜ？」

瑛嗶はくるっと回って十六夜達の方へ向き、両手を広げながら笑う。

「1504京4672兆2132億2354万0102個の異常ギフトアフターマルと600京3221兆1291億4359万0333個の過負荷ギフトマイナス、合わせて2104京7893兆3423億6713万0435個のギフトを持つ、俺に勝つ事位」

瑛嗶の言葉は、先程と同じ様に時間を停止させた。恩恵の数が2000京を超えている、そんなの勝ち目が無い。

「っ、こいつは面白え……」

十六夜はそれでも尚、強がって笑うが、その瞳は笑ってない。引き攣った笑みに頬を伝う汗、瑛嗶に挑もうという意志は既に無くなっているようだった。

「で、なんだっけ？俺と一戦交えようって話だっけ？」

「いや、良いです！ごめんなさい、私達が間違っていました！」

飛鳥と耀は吃驚するほど息を合わせて立ち上がり、直角に身体を折って勢いよくそう言った。自分自身の力と瑛嗶の実力を比べて勝てると言える程自信が有るわけでも世間知らずという訳でもないつもりだ。

強者への挑戦は勇敢と言えるが、負けると分かって挑むのは無謀、蛮勇というものだ。

「まあいいか。俺は365日、24時間どんな勝負も受け付けるから、挑戦したくなったらおいで」

瑛唄はそう言って、この会話を終わらせたのだった。

◇ ◇ ◇

それから少しして、瑛唄は一人ノーネームの拠点の屋根の上で寝転がっていた。正直言って、瑛唄にはノーネームが如何こうしようと関係無いし、復興させてやろうという気概もない。やるなら勝手にどうぞ、という所だ。

だから、下の方で十六夜とジンがフォレス・ガ口の差し金でやってきた奴らを相手にごちやごちややってようと、黒ウサギ達が風呂に入って寛いでいようと瑛唄は手を出さない。

「覗きはするけどね！」

瑛唄は瑛唄式ギフトの一つ、他場所の光景を見るギフト【進光景】^{プレイバック}を発動させ、黒ウサギ達の入浴シーンを現在進行形で覗いていた。人外も中々に人間らしい事をする。

「それにしても、十六夜ちゃん達も中々子供っぽいよねえ……自分の力を過信して、序盤はイケイケだけど後半痛い目に遭う、そういうのが実に俺好みだねえ、げらげら」

瑛嗶は笑う。そしてそのまま立ち上がり、上から十六夜達のやり取りを見守る。石を飛ばして敵を蹴散らしたり、好き勝手に変な事を言いまくったりしている光景は、随分と面白そうだ。

多分、この世界はめだかとは違う原作なのだろう。主人公として立てるのなら、あの十六夜辺り。

「まあこの先どうなるかは別として、中々面白そうだ」
そう呟いて、瑛嗶は口元をゆらりと吊りあげた。

フォレス・ガロとのゲームの裏で

ギフトゲームは恩恵と恩恵の衝突と言っても良い。より強いギフトを持っていれば勝つ、という簡単な物では無いが、如何様なギフトを持ち、どう使いこなし、どの様に戦うかでその勝敗は何時だって変わってくる。

故に、強力なギフトを持っていようが、大した事のないギフトを持つ者に負ける事もある。

それは単に、どれだけ多くのギフトを持っていようと、たった一つのギフトの前に敗北する事だつてあるという事だ。

ルール次第、制限次第、やる気次第、やり方次第、相性次第、戦い方次第、モチベーション次第、コンディション次第、幾つもの要素を掛け合わせ、そこから様々な手段やギフトを行使して初めて勝利に手が届く。

「つまり、この俺に勝つ事も簡単つて訳だ」

瑛嗶は、そう言った。

瑛嗶達が呼び出されてから翌日。現在、久遠飛鳥と春日部耀、ジン・ラッセルは黒ウサギの審判の下フォレス・ガロとのギフトゲームに出払っている。

コミュニテイノーネームの拠点には十六夜と瑛喰、そして獣人の子供達が待機している。

そんな中瑛喰と十六夜は二人、対峙していた。

「それはアレか。俺に対してハンデをくれるって事か？」

「そういうこと。ルールは、これだ」

瑛喰がそう言うのと、十六夜にギアスロールを投げた。そこには、どう考えても瑛喰にとつて不利なルールが描かれていた。

ギアスロール

プレイヤー：泉ヶ仙瑛喰及び逆廻十六夜

ルール：先に一撃当てた方の勝ち

追記：泉ヶ仙瑛喰の禁止事項。泉ヶ仙瑛喰はこの勝負においてギフトを使う事を禁ずる。

成程。中々どうして、舐めている。

だが、十六夜にとつてこれだけのハンデを貰わないと勝てないのもまた事実。寧ろ、これでも対等になったと言えるかは不明だ。

「オーケー。いいぜ、その条件でやろう」

「なんだ、随分と素直だな」

「俺もそこまでしてもらわねーと勝てない事くらい分かるさ」

ギフトゲーム、異世界人の喧嘩。一撃を入れるだけで勝者が決まる。但し、片方はギフトを使って、片方はギフトを全面的に使用禁止。圧倒的な条件の差だと思えた。

「さあ始めようぜ。来いよ、少し位なら手加減するのも吝かじゃねーから」

瑗嗶はそう言つて、ゆらりと笑つた。



十六夜 side

こんな状況になつて、久々に高揚している。元々いた世界ではつまらない日常を繰り返すばかりで楽しい事も面白い事も何も無かつた。

だが、この箱庭に来てその日常は変わった。黒ウサギやオチビには高圧的な態度を取るが、内心この世界に呼んでくれた事にどうも感謝しても良い。

この世界に来て出会つた問題児達。春日部やお嬢様も俺と同じで強力なギフトを

持ってた。そして目の前に佇むコイツ。

泉ヶ仙瑛嗶

3兆を超える年齢や2000京を超えるギフトの数、数多く驚かされた奴だ。そして俺はいつも、こんな奴を待つてたんだ。俺の退屈を紛らわせてくれる奴、俺の全力を相手取れる奴、俺以上の問題児つよいよっを。

その結果現れたのは、想像以上、願い以上の人外だ。

ああ、今俺は楽しい。うずうずする。コイツと一秒でも早く戦いたい。だから、

「良いね良いね良いなあオイ！　良い感じに盛りあがって来たぞお!!」

駆ける。全力で。拳を握る。過去を探っても最高の一撃、最速の一撃。勝利を確信出来る程の、全力の一撃を、コイツにぶつける。

「おらああああ!!」

そして振りかぶった拳に足を地面に踏み込む事で更に力を溜める。そして、そのままゆらゆら笑っている瑛嗶の顔に、ぶつけた———筈だった

「面白〜」

そんな声が聞こえた……背後から。急いで振り返る。そこには先程と同じ様に笑っている瑛嗶の姿。躲された、躲せない。瑛嗶はその手をデコピンの形に変えて、俺の額に打ち放つ。

バチンという音が俺の頭に響き、俺の意識は闇に落ちていった。

（——あーあ、やっぱり勝てねえか……）

◇◇◇

実際、この勝負が始まった理由こそただの暇潰し代わりだったが、瑛嗶としてはそこそこ楽しめるイベントだった。

十六夜の攻撃は瑛嗶にとっても予想以上に速かった。が、それでも瑛嗶にとっては遅かった。ギフトを使わずとも光速を超えられる瑛嗶としては、人間の範囲内を走る十六夜の速度は人間の中では速いと言っても人外レベルには入って来ない。瑛嗶にとってはまだまだ遅い。

故に、瑛嗶は十六夜の直進をくると回って躲し、背後に回り込み、そのままデコピンを放った。デコピン一つとっても異常な威力。十六夜の意識を刈り取るには十分すぎるほど十分だった。

「さて……」

瑛嗶は氣絶した十六夜の身体を抱えて屋敷の中に入る。そしてゆらりと笑った。

ギフトゲームとは、勝負のルールを決めるがその勝負の後には賭けた物を勝者が手に入れる事が出来る。

今回の勝者は瑛嗶。十六夜はルールの部分しか見ていなかったから見逃していたが、今回の報酬は大きかった。

十六夜が勝った場合は瑛嗶のギフトの中から一つランダムに譲渡、そして瑛嗶が勝った場合は、十六夜がメイド服を着てギフトゲームを終えて帰って来た黒ウサギ達を甲斐甲斐しく迎え入れる事。罰ゲームにも程が有る。

「とりあえずメイド服だけでも着せとくかな。意識が無いんじゃないもんね」

瑛嗶はそう言つて、十六夜の服をギフトを使ってメイド服に入れ替えた。ギフトの無駄使いとはこの事である。

「ホント、ギフトって便利」

そう言つて、瑛嗶は屋敷を歩いていった。

その際、十六夜の格好に子供達が呆然としていたのは、印象深かった。

十六夜メイド

「……おかえりなさいませ、お嬢様方」

啞然。

フォレス・ガロとの勝負の後、春日部耀が負傷した物の勝利を収めた黒ウサギ達の凱旋に応えたのは、メイド服姿の逆廻十六夜の姿だった。

仏頂面を隠す事もせず、腰に手を当てる佇み、黒ウサギ達を迎え入れる。元々、その身体から生み出される大きな力はギフトによる物で、実際は平均的に背は高い物の細い身体をしている十六夜は中々女物の服装を着こなしていた。

流石の瑛喰も着こなせるだろうと思っただけだが、男の意地という物を汲みとってミニスカートではなくロングタイトのメイド服に譲歩している。故に、清純で素朴なメイド服を仏頂面の不良が着こなしているというのは中々どうして、違和感満々であった。

「ど、どうされたんですか十六夜さん！ その御姿は!?!」

「知らねえよ。瑛喰の奴とギフトゲームをして、負けて、気絶して、起きたらこの姿だったんだ。なんでもこの姿でお前らを出迎えるのが勝者である瑛喰の報酬らしいぜ。ギフトアスロールに定められた事だったからかお前らを出迎えねえと脱げねえ様になってる

らしい」

「似合ってるだろ？ くははっ」

瑛嘎はそう言つて腹を抱えて笑う。そんな瑛嘎に十六夜は齒噛みして睨みつけるが、何処吹く風、瑛嘎はゆらりと笑つて十六夜の視線を受け流した。

「くそ……オイ瑛嘎。出迎えたんだからもうコレ着替えても良いだろ？」

「ああ、うん。そうだね」

瑛嘎は笑いを堪えつつ、瑛嘎式ギフトの一つ。衣装を換えるギフト【メイクアップ衣換え】を発動させ、元の学ランとズボン、黄色いTシャツを十六夜の着ているメイド服を取り換えた。

日常でもギフトが役立てる瑛嘎のギフト量は中々どうして、便利極まりない。元々、瑛嘎の持つギフトの三分の一は基本的に日常の中で使えるギフトだ。呼称するならば生
活ギフトである。

例を挙げるなら遠くにある物を引き寄せるギフトや課せられた課題や仕事を想像通りに終わらせるギフト、なんかがある。生活の中でギフトを惜しみなく使えるというのは、十六夜達から見て羨ましいと思える物だった。

「そうそう、ニヤンコとの勝負はどうだったよ飛鳥ちゃん達」

「まあ春日部さんが怪我を負ったけど……一応勝ったわ」

「そうかい。そいつは重畳」

瑛嗶の問いに飛鳥が答えた。そしてその答えに瑛嗶は一つ頷き、時間を巻き戻すギフト【バックトラック跡戻り】を使って春日部耀の身体の時間を戻し、怪我を負う以前の状態に戻す。その結果、怪我はテープの巻き戻しの様に消えて行った。

「怪我は俺が直してやるよ。治さないけど、直す位はしてやる」

「本当に規格外ね貴方の力って」

「まあ元だからね」

まだ十六夜達には明かしていないが、瑛嗶のギフト……というよりスキルは元々一つ。

—— 思考をそのまま現実にするスキルを創るスキル 【ブレフエレンス嗜考品】

このスキルにより、このギフトにより、瑛嗶は長い時間の中で数多くのスキル、もといギフトを生み出してきたのだ。

だがそれこそ異常。この世界で言うのならギフトを生み出せる存在であるのだ。瑛嗶は。

ギフトは神や修羅神仏、精霊、悪魔、星達によって与えられた恩恵である。それを、自由自在に生み出せるとなれば、それはそれらと同等の存在と言う事になる。

与えられたギフトを行使して勝負し、その頂点に立つ魔王とかそういう次元では無い。ギフトゲームをする為の道具を与える側、ゲームをする子供達にゲームを買い与え

る親の側なのだ。

それが人外の領域。サッカーをする素人小学生に混じって全力を出すサッカー選手のような、卑怯さと圧倒的な実力差、時間が経てば追いつけるとかそんな次元では無い。最後まで勝ち逃げるのである。

「で、他には？ どうやら昨日の内にその少年と十六夜ちゃんがか話してたみたいだけど、それは別に雑談じゃあないだろう？」

「……まあな。で、おチビ、どうだったんだ？」

「あ、はい。一応十六夜さんの言ってた通り、フォレス・ガロに旗印を奪われたコミュニティにはそれぞれ旗印を返還しました。あと、僕達ノーネームが打倒魔王を目標にするという事も一応……」

打倒魔王。これが十六夜のノーネーム復興方法。その為に魔王を倒す為の戦力と、それを指示するコミュニティの連携を作るつもりなのだ。その最初の第一手が、フォレス・ガロとの勝負を利用した打倒魔王宣言と、旗印返還。

どうやら十六夜は十六夜で、ノーネームの復興には乗り気の様だ。とは言っても、一番手つ取り早いのは瑛噺がそのギフトを駆使してくれることなのだが、瑛噺はコミュニティ復興には興味が無い。寧ろノーネームのままでもいいんじゃないかね？ とまで思っている位だ。それは望めない。

「とはいえ、気になるのはガルドの様子がおかしかった事ね」

「おかしい?」

「はい。ガルドは吸血鬼化しているようでした。自我は無く、力の限り暴走して襲い掛かってきました」

「ふーん……」

吸血鬼。この世界において、その存在がどのような物かは知らないが、基本的には人を襲い、吸血し、生き永らえる鬼。弱点としてポピュラーなのは日光。説は色々あるが、水流や銀の弾丸、大蒜、十字架といった物も弱点として様々な物語に出て来ている。マインナーな物としてはまあ波紋とかもそれに当たる。

「吸血鬼、ね。俺も長い時間生きてるけど、吸血鬼に会ったのは数回位だね」

「有るのかよ」

「今更何言ってるんだ。俺は神様にだって会った事が有るんだぞ」

「ええええええ!! それは本当でございますか!?!」

「本当だよウサギちゃん。随分と気が合う神様だったから仲良くさせて貰ってるぜ」

瑛嗶がそう言うのと、更に黒ウサギは眼を丸くして驚いた。十六夜達は最早驚くを通り越して溜め息を吐く。正直、もう驚き疲れたのだ。

「さて。怪我は直ったし、耀ちゃんはとりあえず医務室のベッドに寝かせてきなよ。ほ

ら十六夜ちゃん、男だろ。ぼーっとしてないで運べ」

「はいはい、分かったよ……黒ウサギ、手伝え」

「あ、はい！」

「私も行くわ。今回の春日部さんの怪我は私にも責任があるもの」

「いつてらー」

十六夜が耀を抱えて部屋を出る。黒ウサギが案内に同行し、飛鳥も同じ様に部屋を出て行った。

「少年はどうする？」

「僕はちよつと子供達の様子を見てきます」

「おー」

そしてジンも働いている子供達の様子を見に、部屋を出て行った。そうして瑛叟は部屋に一人になる。そしてそのままゆらりと笑った。

「全く、くだらねーことでよくもまあやる気を出せるもんだなあ」

そしてそう呟いて、口元を更に吊り上げる。そしてその視線を窓に移してその手をその方向へと突き出す。

「さて、やあ吸血鬼ちゃん。入って来いよ、俺はお前を『檻迎』しよう」

瑛唄はその手を握り、引つ張った。そしてその後そう言う。すると、窓が開いて金髪幼女が部屋の中に強制的に入れられた。そしてその言葉通り、幼女は何処からともなく現れた檻によって閉じ込められた。

スタイル【誤変換使用】

言葉を間違える事で間違えた言葉を現実にするスタイルである。例えば、今の様に歓迎という言葉が歓迎という言葉に誤変換することで檻を生み出し監禁する形で迎えるという状況を作った。

ちなみに幼女が部屋に引つ張られたのはギフトである。先程紹介した、遠くにある物を引き寄せるギフトウイストロインク【吸引制】である。

また、スタイルとはめだかボックスの中で登場した力である。言葉によるコミュニケーションを基盤にした共鳴ともになきし、共振ともにふるえし、共感ともにかんじるする、言葉スタイル。

スタイルとは様々なパターンがあるが、基本的には言葉を様々な形に現実にする力なので、言葉の通じる相手には基本的に通用する。そして今のがその内の一つ『誤変換使用』である。

ちなみに言っておくが、流石にスタイルの数まで京を超えたり億を超えたりしていない。精々指で数えられる程度だ。

「な……これは……」

「やあやあ吸血鬼ちゃん。金髪幼女とはまたベタだね」

「この檻はお前のギフトか？ 私に一切悟らせずにここまで……」

「まあギフトと言うよりは……いいか。それで、お嬢ちゃんは誰だ？」

「私は……レティシアⅡドラクレア。元々このコミュニティに席を置いていた元魔王の一人だ」

レティシアⅡドラクレア。箱庭の騎士と呼ばれる純血の吸血鬼である。元はノーネームになる前のこのコミュニティに在席していた元魔王の一人。

「なるほど、元魔王。だがまあそれにしてもその覇気も感じられない。本当に吸血鬼かどうか疑わしい物だけど、まあいいや。それで？ 何をしに来たんだ？」

「……このコミュニティが打倒魔王を掲げたのを聞いた。それで、このコミュニティに任せられるが実力を測りに来たんだ。ちなみに、フォレス・ガロのガルドを吸血鬼化させたのは私だ」

「へー」

「……興味無さそうだな」

「興味無い。吸血鬼っていう属性は金髪ロリっていう要素と掛け合わせれば萌え要素になるけれど、正直俺はノーネームがどうなろうとどうでもいいし、こんないきなりな展

開で新キャラ登場とか言われてもねえ？」

瑛嗶はメタ発言をぶち込みながらそう言う。するとレティシアはどうか檻から出ようと檻の破壊を試みるが、その前に瑛嗶が檻を消した。

そして、瑛嗶は佇むレティシアの下まで歩み寄り、目線の高さが合う位置まで屈んだ。
「？」

「…………お嬢ちゃん。ここまで無警戒に俺を近づかせた時点でお前負けてるぞ？」

「!？」

バツと後方へとバックステップで下がるレティシア。瑛嗶はそんな彼女を見てゆらりと笑いながら屈んでいた体勢を戻して佇む。そして眼をすつと細めてゆらりと笑った。

「ふむふむ、元魔王とは言った物の…………その力は殆ど失ってるみたいだね。つまりは雑魚なわけだ」

「つ…………貴様、何者だ？」

「泉ヶ仙瑛嗶。面白い事が大好きな、唯の人外だぜ」

瑛嗶の言葉にレティシアは顔を歪める。実力を測りに来た、とは言った物のコレは予想外。全盛期の自身以上の実力を持っていると一目で分かった。コレは最早人間では無く、怪物だ。と彼女は思う。

そしてそんな怪物を自分の元居た場所であるこのコミュニティに置いておくのは不安極まりなかった。

「さて、実力を測るだったか……いいぜ、ちよつくら力比べと行こうか」

だがそんな不安を余所に、瑛嗶は楽しそうにそう言った。

ペルセウス消失事件

「くっ……!?!」

「わはは、ガンガン行こうぜ」

現在、レティシアと瑛叟は力比べをしていた。その勝負方法はレティシアの用意したランスを投げ合い、取り損ねた方の負け、という物だった。無論ギフトだって使っていない。

だが、瑛叟が他人の用意したランスで、他人の用意したルールに則り、他人の考案したゲームをする筈が無い。

よつて、その勝負は瑛叟の気まぐれにより却下。ではどのような勝負にするのかとレティシアが問うた所、瑛叟の選出した勝負方法は余りにもありきたりで、余りにも庶民的な、シンプルかつ簡単な物だった。

所謂——腕相撲。

どこからか現れたテーブルに対峙する様に向かい合う瑛叟とレティシア。そして肩肘を着いて手をしっかりと握る。スタートの合図は瑛叟のフリーの手から放たれるコインが地面に落ちたら。

そしてつい先ほどその勝負は開始された。

レティシアはぶるぶると肩を震わせながら瑛嗶の腕を倒そうと力を込めているが、瑛嗶の腕は一切動く気配が無い。対して、瑛嗶はレティシアの腕を倒そうとはせずただ瑛嗶の腕を倒そうとするレティシアの力を軽く受け止めている。その上余裕の笑みを浮かべていると来た。

傍から見れば、金髪幼女が大の大人相手に微笑ましくも腕相撲をしているが、大人げなくも相手の大人は少女に勝ちを譲らず、ただひたすらに意地悪く笑っているばかり。最悪の絵面である。

「ふううう……!!!」

「頑張れ頑張れー」

「い、このー」

レティシアは顔を真っ赤にしながら更に力を込めて必死に瑛嗶の手を押す。だが、ピクリとも動かない。吸血鬼のギフトを持つている故に、その筋力や胆力は人間よりは数倍はある筈だ。だがそれでも瑛嗶の腕を倒すには至らないのだ。

「貴様……私を馬鹿にしているのか？」

「してないよ」

「そ、そうなのか？」

「そうだよ」

「くっ……唯の人間が何故こんな力を……!」

レティシアは瑛嗶に言いくるめられながらも力一杯頑張る。瑛嗶はそんな彼女を見てにやにやと嗜虐心4割、悪意6割の笑みをゆらゆらと浮かべる。本当に大人げない人外である。

「瑛嗶さん!?! レティシア様まで……一体コレはどういう状況でございますか!?!」

「おーウサギちゃん。随分と遅かったね」

「部屋に戻ったら瑛嗶様の御姿が無かったので探してたのでございます!」

「なるほど。まあ今はちよつとした力比べしてるところだから少し待っててね」

「あ、はい」

やってきた黒ウサギはレティシアに同情の視線を送りながら遠い目をし始めた。そんな黒ウサギを尻目にレティシアはまた頑張る。当然のことながら、瑛嗶の腕は少しも動かない。

「くっ……はあ……はあ……も、もう——」

レティシアはそんな瑛嗶の力に対し、自分では適わないと考えて降参を宣言しようと思いを開く。

だが、瑛嗶はそんなレティシアに対し、ゆらりと口元を吊り上げて先手を切った。

「あれ？ 諦めちゃうの？ うわー、格好悪いなあ。それでも元魔王かよ（笑）」

何か切れた音がした。そして何かが一気に刺激され、レティシアの中で燃え上がった。瑛嗶はその赤い瞳を向け、ギリツと歯を食いしばった。

瑛嗶はそんなレティシアに、見下ろす様に視線を送りながら笑う。狙い通り、思い通りとばかりに。

「面白い……此処までコケにされて引き下がるわけにはいかないな……」

切れたのはレティシアの逆鱗。刺激されたのはレティシアのプライド。元魔王とはいえ、現在は他の誰かの所有物。彼女自身もそれを自覚し、受け入れていたし、それが自身の力不足による結果だとも思っていた。

だが、それでも彼女は元魔王にして純血の吸血鬼。箱庭の騎士とまで言われた誇り高き吸血鬼なのだ。勿論のことプライドや誇りといった物を持っているし、自身がそれを磨いてきたのだ。ここまで馬鹿にされては所有物だとしても、力不足だとしても、見逃せない。

それが例え、瑛嗶の思い通りだとしても。

「はあああああ!!!」

「頑張れ頑張れ」

「このおとおお!!!」

「わははははっ」

「ふむううう!!!」

「……レティシア様……」

身体のを全て出し切って、瑛嗶の腕に当たる。

だがそれでも、瑛嗶の腕は動かない。

「まあこんなもんか」

瑛嗶はそんな彼女の姿を見て、心底楽しそうに笑った後、一手間といったばかりにひよいと彼女の細く小さな腕を倒したのだった。



「……………」

「悪かったよ」

「……………」

勝負が終わった後、なにやら先程の自分の醜態に恥ずかしくなった挙句、そんな醜態

を晒す原因になった瑛嗶に対して睨みを効かせていた。つまりは拗ねているのだ。

「子供つてすぐに拗ねるよね」

「さてそれじゃあ本題に入ろうか」

(チョロいな)

瑛嗶の言葉にレティシアはすぐに手の平を返した。余程子供と見られたくなかったと見える。

そして、そこからは瑛嗶の出番は無い。元より妙な話し合いは黒ウサギや問題児達の領分だ。瑛嗶が関わったらどうなるか分かった物では無い。

「え、ギフトゲームが中止!？」

「ああ……」

黒ウサギが話しあいの途中で悲鳴を上げた。なんでも、コミュニティ、ペルセウスの開催するギフトゲームにレティシア自身が景品になっていたらしい。元々の仲間という事で今度参加してこの機会に彼女を取り戻そうと考えていたらしいが、そのギフトゲームが中止になったようだ。

「そんな……折角のチャンスでしたのに……」

「何、その幼女がそんなに欲しいのか？」

「はい。彼女は元々私達の仲間でしたから……」

黒ウサギがその耳をしゅんとさせながら肩を落とし、小さくそう言った。レティシアもそんな状況に陥った自分に悲観的になり、落ち込んでいるようだ。

「ふーん……じゃああれか。そのペルセウスとかいうコミュニティを潰せばいい訳だ」

「それはそうだが……そう簡単に行く物ではない」

「まあまあ。さてウサギちゃん。聞くけど、この星空つてのはコミュニティの旗印が掲げられてるんだよね？」

「え？ ああ、そうですね」

それを聞いた瑛嗶は空に向かって指差した。その指の先にある星座は、ペルセウス。それを確認した黒ウサギは冷や汗を流しながら瑛嗶に聞いた。

「あの、瑛嗶さん？ 貴方は一体これから何をしようとなさってますか？」

「んー、まあちよつくらあの星座を吹き飛ばしてやろうと思つて」

「このお馬鹿様！ なんて鬼畜外道な事をなさろうとしていらつしやいますか！」

瑛嗶は黒ウサギの糾弾にそんなの関係あるかと笑つてその指をペルセウスに再度向けながら、ギフトを発動させた。

「びきゅん」

その日、黒い空を飾る星空から、一つの星座が消滅した。



「……まさかだよ」

「……まさか本当にやるとは思わなかったわよ」

「本当じゃな……」

その後、瑛噺達はレティシアを連れてサウザンドアイズの支店にやって来ていた。そこには白夜叉とペルセウスのリーダーであるルイオスがいた。

そして、黒ウサギと十六夜、飛鳥と瑛噺、レティシアの五名は拠点に耀達を残して白夜叉とルイオスと顔を合わせ、先程の事を話しあっていた。

「やったったぜ」

「やったったぜじゃないんだよこの野郎！ 僕のコミュニティの旗を消滅させるつてどんだけだよ!?!」

「やっちゃったぜ」

「黙れ!」

勿論、そんな暴挙に出た瑛噺に怒りをぶつけているのはペルセウスリーダーのルイオ

スだ。ペルセウスの旗を満天の星空から消失させる。誰もそんな事が出来る奴がいるなんて誰が思っただろうか？ 手を伸ばせば届きそうで届かない星空は、誰も犯す事の出来ない聖なる領域。

だが瑛嗶は手を伸ばし、指先を届かせた。聖域の中で輝く星に、その凶刃を届かせた。その結果、ペルセウスという星は消失した。それも、ただの吸血鬼を黒ウサギが欲しがったから、という気まぐれで。

「どうすんだよ……どうしてくれんだよ！」

怒りの形相で瑛嗶の胸ぐらを掴み、食って掛かるルイオス。流星の白夜叉もこの事態は予想外。レティシアを盗み出してノーネームに仕向けた物の、こうなるとは思わなかったのだ。

これは単に、瑛嗶の実力を測り間違えた白夜叉と瑛嗶の気まぐれさを甘く見ていた黒ウサギと安易にノーネームにやって来てしまったレティシアという要素が絡み合い、起こってしまった事態だ。

「今回の件は、幼女をこっちに送り付けた白夜叉ちゃんと、俺にレティシアが欲しいと言った黒ウサギが悪い。だから、俺は悪くない」

「ふざけんなよこのガキイ！」

「いかん！ ルイオス！」

ルイオスは瑛嗶の言葉に怒り、その手に丸い刃の武器を顕現させ、それを瑛嗶に向かつて振り下ろしてきた。無論、瑛嗶はそんな攻撃でやられるほど甘い存在じゃない。瑛嗶はクイツと何かを引く。するとルイオスの身体がピタリと止まり、その手の刃は瑛嗶の顔の直前で止まった。

「なっ……………」

「わはは、そんなに怒ったらだめだぜ坊っちゃん。旗が消滅した位でごちゃごちゃうるせーよ」

「デメエ……………」

「なんならその首に付けてる元魔王のギフトでも使うか？ まあそれでもいいけど、そしたらウチの十六夜メイドが黙ってないぜ」

「メイドじゃねーよ」

瑛嗶の言葉に十六夜が睨みつけながらそう言う。ルイオスはそれでも瑛嗶を睨んで食って掛かろうとする。それでも瑛嗶はゆらりと笑うばかり。

「まあなんだ。人のモンに手を出すとこうなるんだよ。特に、俺の物にはね？」

「ぐ……………くっ……………」

瑛嗶の言葉にルイオスは泣きそうになりながらガクツと沈黙した。

「さて、それじゃあこゝで提案だ。正式に俺とお前らでギフトゲームをしよう。お前ら

が勝ったら消失した旗印は元通りに戻してやるよ。でも俺が勝ったらその金髪幼女は俺の物だ」

「!? 戻せるのか!?!」

「戻せるさ。それくらい、呼吸をするより簡単だぜ。さあ、やるか?」

瑛嗶の甘い言葉。まだ取り返しがつくという希望が、ルイオスの心を首の皮一枚で繋ぐ。そしてルイオスは瑛嗶の不気味な笑みを見て、息を呑み、その首を縦に振ったのだった。

ワンサイドゲーム（総受け）

ひよんなことから決まった琰嗶とペルセウスのギフトゲーム。これはあくまで琰嗶個人がペルセウスというコミユニティに売った喧嘩であり、ノーネームの面々は一切関係ない。手出し無用という訳だ。

が、ここで問題なのは原作とは違ってペルセウスに挑戦するのではないという所だ。今回はあくまで、琰嗶『に』ペルセウス『が』挑戦するのだ。つまり、勝利条件も勝負のルールも全て琰嗶が決める。ペルセウスは琰嗶の用意するルールに従って、勝利条件を満たせば勝利。結果的に琰嗶からペルセウスの旗を元に戻して貰う事が出来る。

だが、琰嗶が勝った場合はレティシアは琰嗶の所有物という扱いになる。ペルセウスにとつては商品が持っていかれる形になる。

「さて、それじゃあギアスルールを渡そうか」

「……」

フィールドは白夜叉が持っているゲーム盤を借りている。例のあの白夜の空間だ。そこにはペルセウスの総戦力と琰嗶だけが存在していた。審判は白夜叉で、勝利条件もとても簡単な物だった。

ギアスロール

プレイヤー：泉ヶ仙瑛唄及びコミユニテイ、ペルセウス

勝利条件：泉ヶ仙瑛唄へダメージを与える事。

報酬：ペルセウスが勝利した場合、泉ヶ仙瑛唄は責任を持って消失した旗印を元に戻す事。泉ヶ仙瑛唄が勝った場合、ペルセウスは泉ヶ仙瑛唄へ指定の商品を譲渡すること。

これがルール。ギフトゲーム、人外への挑戦。この勝負では、ペルセウスの面々が泉ヶ仙瑛唄に少しでもダメージを通す事が勝利条件である。ギフト、打撃、斬撃、何でもいい、とにかくダメージを与えればペルセウスの勝利だ。制限時間は10分、瑛唄はその間攻撃をしない。

これだけの好条件を出されて、敗北するのはありえない。というのがルイオスの見解だった。

いざという時には隷属させた魔王、アルゴンの悪魔、アルゴールの恩恵もある。何が何でもダメージを与えてやろうという意気込みがペルセウスのメンバーからはひしひ

しと伝わってきた。

瑛嗶はそんな面々を相手に一人、佇み笑う。必死にこちらから勝利をもぎ取ろうとするペルセウスは、なんとなく滑稽に見えた。

「さて、それじゃあ始めようか。白夜叉ちゃん合図」

「う、うむ……それでは、瑛嗶とペルセウスのギフトゲームを開始する。始めっ!!」

轟く轟音。その正体はペルセウスのメンバーの雄叫び。総勢200名を超える人数が瑛嗶に向かって襲い掛かって来た。そして各々が持つ槍が瑛嗶の肉体に届く。

届いて——砕けた

「な、何?！」

「脆いなあ……脆すぎるぜ。やる気あんのか?」

瑛嗶の身体には一切傷が無い。別に何かをした訳じゃない。ギフトも使っていない。ただ純粹に、瑛嗶の肉体の前に貧弱な刃が砕け散っただけだ。

「く……怯むな! まだ終わってはいない!」

「そうだ。諦めるなよ? まだまだ時間はたっぷりあるんだから」

瑛嗶はゆらりと笑い、掛かってくる全員を全て受け止める。

殴られれば、拳が碎ける

蹴られれば、骨が折れる



「さて、俺の勝ちだね。約束通り、あの金髪ロリは貰ってくぜ」

「くっ……!」

ルイオスは四つん這いになり、悔しさに肩を震わせる。瑛嗶はそんなルイオスの頭をその足で踏みつけた。頭は地面にぶつかり、地割れを起こす。

ルイオスは飛びそうになる意識をなんとか繋ぎとめ、瑛嗶に踏みつけられた事を理解した。

「な、なんだ! これ以上何をしたいんだ!」

「オイオイ、これで諦めるのか? 俺は言った筈だぜ? 俺が勝ったらレティシアは貰って行く、お前らが勝ったら旗は元に戻す。じゃあ、お前らが負けたら?」

「……? つ!?!」

その言葉の意味は、こうだ。確かに、瑛嗶が勝った場合はレティシアを貰うと言ったが、それはペルセウスが負けたらどうなるかというのとイコールではない。瑛嗶が勝った場合はレティシアを貰い、ペルセウスが負けた場合はどうするかは言っていない。

ただの経理屈、詭弁でしかないが、瑛嗶はそれを認める。

「……頼む、僕達は負けたが……僕達の旗印を返してくれ……！」

「嫌だ」

「っ……！」

瑛嗶はそう言って足を退け、溜め息を吐き、その場を去ろうとする。

だが、それを見たルイオスはがばつと頭を上げ、土下座をしながら大きな声で言った。

「お願いします！ 僕達の旗印を、返してください!!」

その言葉に、瑛嗶は足を止めた。そして首だけ振り返り、ゆらりと笑う。

その笑みに全員がゾクリと身体を硬直させたが、気付けば白夜の世界が消え失せて元の箱庭に戻ってきている。そして瑛嗶はそんな中、空を指差した。それを見た全員が空を見る。そこには煌々と輝くペルセウスが、確かに存在していた。

「人に物を頼む時はそうやるんだよ」

瑛嗶はそう言うと、そのまま転移ギフトを使って景品であるレティシアを抱えながらその場を後にした。

ルイオス達ペルセウスはそんな瑛嗶の姿が消えた事で身体から力を抜いた。そしてそれと同時に思った。

——二度と関わり合いたくない。と



「……何故瑛嗶は私を奴らから奪ったのだ？　瑛嗶は私にこれといった興味は無いだろう？」

瑛嗶とレティシアはその後コミュニケーションノームの本拠地に帰って来ていた。十六夜達は消化不良気味な表情をしていたが、レティシアが戻ってきたという事で納得したようだった。

現在はパーティーの準備をしている。レティシアが戻ってきた祝いをするらしい。

ということ、現在瑛嗶とレティシアが初めて出会ったあの談話室に二人きりで向かい合って座っていた。

「無いよ。俺は別にロリコンって訳じゃないし、吸血鬼が好きって訳でも無い。強いて言うなら、暇だったからだよ」

「暇？」

「そう、つまりは暇潰し。旗を消し飛ばしたのも、ペルセウスに喧嘩を売ったのも、全部

全部暇潰し。まあその為にはお前を俺の物にするっていう大義名分が必要だったただだ」

暇潰し。それを聞いてレティシアは戦慄した。

これまでの事が全て暇潰し。

暇潰しで星を一つ消し飛ばし

暇潰しでコミュニケーションを潰し掛け

暇潰しで星を一つ元に戻し

暇潰しで吸血鬼を所有物にする。

その余りにも高い実力と化け物染みたギフトで行なわれる暇つぶしのスケールが大きすぎる。しかも、それをちゃんと自覚しているというのがもつと酷い。無自覚で力を振り回しているのなら道を正していくのも手だったが、矯正の余地もないのだ。

「お前の価値観は、狂っている」

「そんなの人間辞めた時から分かってるよ」

「その生き方は、危険だ」

「全力を出せなくて少し困ってるくらいだからね」

「気まぐれも程々にしないと、何時か大切な物を失うぞ」

「身に染みてるさ。それでも止められないんだよ。これが俺の生き方で、娯楽主義者の

生き様だ」

レティシアの言葉は、瑛嗶にとつて最早今更といったもの。価値観が狂つてるんじゃない、他が付いてこれないだけ。生き方が危険なんじゃない、この生き方に周囲が脆すぎるだけ。大切な物ならこれまで幾つも危険に晒してきた。

全部全部今更。その上で止められない生き方が、今の瑛嗶だ。狂おしい程に娯楽を愛してしまっているのだ。今更止めろと言われても止められない。

「俺に合わせるな。俺に付いて来い。とは言つても、俺は普通の人外だから——全部まとめて面倒見てやる位しか出来ないぜ？」

瑛嗶はそう言つて、ゆらりと笑つた。

魔王襲来（笑）

嵐の前の静けさ

「ところで、私は一体何をすればいいのか……」

そう言ったのは、晴れて琰嗶の所有物となった純血の吸血鬼、レティシアである。元々は箱庭の騎士として名の知れた人物ではあった物の、今では全盛期の力の殆どを失い、元魔王とはいえかなり弱体化している。

結局、琰嗶の所有物になってノーネームに戻ってきたは良い物の、何をすればいいのかさっぱり皆目見当も付かなかった。

という訳で、レティシアがそう言っただけ聞いた相手は当然の事所有者の琰嗶だ。

「別に何もしなくても良いんじゃないの？」

「そういう訳にもいかない。私も曲がりなりにノーネームの一員になったのだ。何かしないと……」

「ふーん……仕事したい人か。面倒な性格だね」

琰嗶はそんな彼女に対してとても面倒そうに対応する。所有権があるとはいえ基本的に放置していたのだ。といってもレティシアはそれを納得しない。騎士としての使

命感とかそんな物が残っているのだろう。

本当に、心底面倒だった。

「……じゃあ、肩を揉め」

「了解。マスター」

瑛嗶は適当に命令する。レティシアはそれに対して従順に従った。寝つ転がる瑛嗶の背に跨り、肩に手を掛け、力強くぐいぐいと押し始めた。そのテクニクは中々の物で、瑛嗶としても少し見直す所だと感じた。

元々、瑛嗶は疲労感なんかは全部ギフトで消し去る事が出来る。それでも瑛嗶は基本的に疲労をあまり感じないのでそんな事は滅多にしないのだが、やはりマッサージというのは良い物だ。

「あー……あれだ。孫にマッサージして貰ってる爺の気分だ」

「それを言うなら私の方が年上だろう。一応これでも吸血鬼だぞ。大抵の人間の何倍も生きている」

レティシアはそう言うが、実際に瑛嗶の年齢を知らないからこそ言える事だ。瑛嗶はそんなレティシアに苦笑し、それじゃあお互いの年齢とか色々自己紹介しようかと提案した。

ただマッサージするだけというのもなんなので、レティシアはそれを受け入れる。女

性に年齢を聞くのは少しマナー違反と言えるが、最早そんな事を気にする様な年でも無いので、お互いそんなマナーを持ち合わせていないのだ。

「では私から。名前はレティシアⅡドラクレア。年齢は五百を超えてからは数えていないが、恐らく千は超えてると思う」

「億は超えてるのか？」

「いや、流石にそこまで生きてはいない筈だ」

「ふーん……まあいいや。じゃあ次俺な……名前は泉ヶ仙瑛嗶。年齢は……約3兆だ」

瑛嗶の言葉にレティシアは肩を揉む手を止めずに黙った。そして少しの静寂の後、瑛嗶の背中に小さく問いかけた。

「……で、本当は幾つなんだ？」

「いやだから、3兆歳だって」

「嘘だ！ そんなに長い間生きている人間など聞いた事もない！」

「人外だからね」

「……」

瑛嗶はそう言ってゆらりと笑った。レティシアはそんな瑛嗶に驚愕しながらも若干不満気に肩揉みを再開した。傍から見れば金髪ロリが大の男の背中に馬乗りになり、一

生懸命肩を揉んでいる光景。なんとなく親子に見えなくもなかった。所謂、親孝行する娘の図である。

「ん、もう良いよ」

「分かった」

瑛嗶はレティシアを止めて背中から降ろす。そして上体を起こしてぐいつと伸びをした。

ペルセウスを倒してから二日程。十六夜達が行なっているコミュニティ復興の為の行動とかに参加していないので、暇で仕方が無い。

「暇ならば黒ウサギ達を手伝ったらどうだ？ マスター」

「んー……まあ暇つぶしの道具は一応あるんだけど……」

そう言つて瑛嗶が取り出したのは、一通の手紙。宛先は何処かのコミュニティの様だが、内容は少し興味を惹かれる物だった。

【火龍誕生祭】

各コミュニティの集まる美術・工芸品の展覧会及び様々なギフトゲームが開催される大きな祭りである。主催者は北のフロアマスターであるコミュニティ、サラマンドラのリーダーである。

面白そうではある物の、行きたいとは思ふ物の、動くのがだるいというのが、瑛嗶が

まだこのコミュニケーションに居る理由。無いだろうか？ やらないといけないけど動くまでに時間が掛かるという様な状況が。今の瑛嗶はソレだ。

「……行くのだからいなあ。動きたくねえ……」

「流石は三兆歳……老人魂が染みついているな」

「ま、それでもいいけどさ。俺としては一人で向かうのも吝かじゃないけどこういうのは連れが居ないと面白くないよね」

「連れ、だど？」

「そうだよ。こんな物があつたらあの問題児達が行かない筈が無いだろう。だから、この手紙をアイツらにも見せてやろう」

そうすれば、きっと瑛嗶の思い通りに展開は進む。あの快樂主義者や退屈に飽き飽きしているお嬢様達の事だ。当然行こうとするだろう。宛てなら白夜叉でも頼ればいいし、なんなら瑛嗶を頼ってくれば転移のギフトで移動するのも良いだろう。

「さて、それじゃあれテイシアちゃん。この手紙を黒ウサギが隠してたと言つてあの三人の誰か……そうだな、耀ちゃん辺りに渡しておいで。その結果アイツらがこの祭りに出ようと動き始めたら黒ウサギの味方をしてやってくれ。きつと、俺の思い通りに動かせアイツら。なんせ、全員チョロいからね」

「……分かった。では行つてくる」

瑛嗶の命令に、レティシアは手紙を受け取って部屋を出て行った。ちなみに彼女は原作の様にメイド服を着ている訳ではない。赤い普段着を着ている。

だが、瑛嗶は自分の事をマスターと呼ぶことから、メイド服でも着せてやろうかと考えている。とはいえ、それはまた何時かの話で瑛嗶はメイド服の件について考えるのを止めた。

「全く……チヨロいのはレティシアちゃんもなんだけどね」

瑛嗶はそう呟き、また寝っ転がるのだった。

アイドルユニット

さて、瑛嗶の策略によつて、レティシアから齎された手紙は、十六夜達を思い通りに、狙い通りに動かした。

十六夜達は面白そうだという理由で、問題児三人、火龍誕生祭へと赴く事にした。また、黒ウサギが隠していたという事で、黒ウサギに自分達を捕まえないとコミユニティを抜けるという置き手紙までして出て行つたのだ。本当に思い通りに動いてくれる物である。

そして、瑛嗶も問題児達の向かう先へと出向いていた。転移のギフトはその効果を存分に發揮し、ほんの一瞬の瞬き程度で瑛嗶をずっと遠くの火龍誕生祭会場へと移動させた。

瑛嗶がいない以上、彼らが頼るのは白夜叉だ。となれば、何れ此処にもやつて来るだろう。興味は無いが。

「さてさて、俺は工芸品には興味はないけど、随分とまあ活気のある祭りじゃないか。思わずぶち壊したくなるね」

物騒な事を言いながら明るく彩られたお祭り雰囲気の街を歩くのは、本作の主人公で

ある瑛嗶である。一足先に街にやってきたので、一人寂しく散歩しているのだ。

見ればそこらじゅうが工芸品や美術品の展示で彩られており、コミュニティの旗印や名前がそこらじゅうに表示されていた。それこそ、この祭りに参加しているコミュニティの数だけ。

「……そういやギフトゲームもやるって言ってたけ……俺が出たら興醒めか、止めとこう」

この判断は、この祭りを台無しにするかしないかの重要な判断なのだが、そんな物は瑛嗶の匙加減。気まぐれ半分悪意半分でこの祭りは壊れていた。今回はそれが壊されない方向に向かっただけ。

「……」

というか、瑛嗶の一人歩きの状況だと何も展開が進まない上に会話も続かない。独り言も多すぎれば唯の変な人だ。

「あーあ、本当にこの祭りぶっ壊してやろっかなあ」

「恐ろしい事を言うでないわ!」

「ん?」

瑛嗶は自分の独り言に返事が返ってきたので、後ろを振り向いた。そこには瑛嗶よりも随分と背の低い少女が腰に手を当てて不機嫌に佇んでいた。そう白夜叉だ。

「白夜叉ちゃんか。どうしたよ、十六夜ちゃん達はどうした？」

「あ奴等はちゃんとこっちに連れてきておるわ。おんしには少し頼みごとが有るのだ」
「俺に？」

「おんし、というよりはノーネームにじやな」

「へえ、言ってみろ」

瑛嗶は白夜叉がどんな事を持ちこんでくるか少しだけ期待し、話を促す。すると、白夜叉は一つ頷き、腕を組みながら簡単に話し始めた。

「何、そう難しい事では無い。実は——」

白夜叉の頼みとは、コミュニケーションの方針「打倒魔王」という物を知って、火龍誕生祭の主権者である東のフロアマスターから頼みがあるらしいということ。

今回の大祭は東のフロアマスターが世代交代した事で、そのお披露目も掛かっているのだ。よって、その事もあって祭りを盛り上げてほしいという事。

また別として、サウザンドアイズのメンバーの一人がこの火龍誕生祭で魔王が動き出すという予言をしたので、魔王が動いた際に協力してほしいということらしい。

「ふーん……ちよい待ち」

「むっ？」

瑛嗶はその話を聞いて、少し眼を閉じた。白夜叉はその様子に怪訝な表情を浮かべる

物の、何かをするつもりなのか瑛嗶がギフトを発動させたのを感じ取ったので黙る。

そして瑛嗶が数秒そうしたあと、目を開けた。

「どうした？」

「確かに魔王ちゃんが来るみたいだね。なるほど中々どうして、可愛らしい魔王様だね」「おんし、どのような魔王が来るのか分かったのか!？」

「まあね。ヒント位ならあげるけど……欲しい?」

瑛嗶のギフトは2000京。その中には当然、未来予知のギフトもある。瑛嗶としてはあまり使わないギフトなのだが、魔王が来ると言うのが本当かどうかを確認したのだ。

「まあ情報は有るに越した事は無いの」

「ふーん。じゃあ……」「ハーメルンの笛吹き」とだけ言っておこうか。さて、それで十六夜ちゃん達はどうしたよ?」

「ハーメルンの笛吹き……分かった、心に留めておこう。で、小僧達じやが、今は黒ウサギと追いかけてこ中じやよ。耀の奴は既に掴まってしまったし、黒ウサギのスピードは小僧達と比較しても速い。何れ全員捕まるじやろうよ」

「ふーん……じゃあいいや。じゃあ白夜叉ちゃん、聞きたい事が有るんだけど」

瑛嗶は十六夜達の動向を聞いた後、すぐに切り替えて白夜叉に向かい合った。白夜叉

はそんな追う暇の様子に少し身構えた物の、すぐに真剣な表情で瑛嗶に視線を送る。

「その依頼の話、十六夜ちゃん達にはまだしてないだろ？　なんでわざわざ俺を探してまで最初に俺に話に来たんだ？」

瑛嗶はコミュニティこそノーネームに入っている物の、打倒魔王を掲げているのは十六夜達だけだ。実際、瑛嗶は打倒魔王など言つて無いし、やるなら勝手にやれよというスタンスを持っている。

それなのに、白夜又は敢えて瑛嗶に話に来た。魔王の襲来に対する協力をしてくれ、と。

「……まあそうじゃの。黒ウサギやレイシアからおんしが打倒魔王に協力的ではない事くらい聞いておる。じゃが、それでも私はおんしに協力してほしいのだ。聞けば、おんしは2000京ものギフトや3兆歳という年齢等々、規格外な人もんだいじ外らしいではないか」

「まあ否定はしないよ」

「じゃからこそ、おんしに頼みたい。下手すれば私よりも化け物染みているだろうおんしが協力してくれさえすれば、これほど心強い者は無い」

「ふーん」

瑛嗶の力を一つ一つ説明していけば、確かに化け物にも程がある。くどい様だが20

00京ものギフトにスタイルという力を持っていながら、それらを使わずとも身体一つで十分人外の域に居るのだ。寧ろこの七桁の外門にいる事が既に異常だ。周囲は全員雑魚同然なのだから。

「報酬は？」

「無論、満足りく物を出そう」

「へえ……それじゃあ襲来してくる魔王の所有権を貰おうか」

「何!？」

「聞こえなかった？ 襲来してくる、魔王を俺に隷属させろっていつてんだよ」

魔王の隷属。そうでなくとも、魔王を瑛夏の所有物として認めろと言っているのだ。どのような魔王が来るにせよ、そんな事するのはかのペルセウスのルイオスと同じである。

「まあおんしが望むのなら、依頼中に現地調達で報酬を手にしてもらう事になるが……許可しよう」

「オッケー。それなら協力してやるよ」

瑛夏はそう言つてゆらりと笑う。そして、踵を返して歩きだす。白夜叉はそんな瑛夏の協力を得られた事に一時安堵し、隣に並んで歩きだした。

瑛夏は隣の白夜叉を一瞥しながら口元を吊り上げた。そして、至極くだらない事を考

え始める。

(白夜叉ちゃん、レティシアちゃん、そして今回の魔王ちゃん……並べてお揃いの浴衣メイト着せてアイドルユニット結成しよう……ぷくくつ……!! 絶対売れるよコレ)

本当にくだらない事を考えていた。何を考えているのだと思う。

すると、すぐ近くの建造物が大きな音を立てて崩壊していった。視線を向ければ十六夜と黒ウサギがじゃれあっているのが分かった。

「さて、白夜叉ちゃん。十六夜ちゃんも掴まった様だし、合流しようぜ?」

「うむ。耀の奴は既に話の出来る場所に行つて貰つておる。案内するぞ、付いて来い」
白夜叉がそう言った後、瑛噎に肩車されて歩きだした。

「はっ! またかコラ! 降ろせ降ろせ降ろさんかい! 子供扱いするなあ!!」

「わっはっは、白き夜の王と言つても大したことないなあ!」

「こんの……降ろせええええええ!!」

白夜叉の悲鳴は、その場に居た通行者の視線を集めたのだった。

サラマンドラ

さて、瑛嗶達と十六夜達は無事に合流したのだが、その場所は耀を向かわせた場所では無く、コミユニティ【サラマンドラ】からの呼び出しが有った場所だった。

理由は十六夜と黒ウサギが追いかけてこの中で建造物を壊し、通行人を危険に晒した事をとがめる為。瑛嗶達は何も関係していないが、白夜叉が十六夜達を連れ込んだので共に行く事になったのだ。

そして瑛嗶達はサラマンドラの今代リーダーに対面したのだが、

「またロリか！」

瑛嗶はそう突っ込んだ。

それもその筈、最初は白夜叉、次はレイシア、瑛嗶にとつては未来形で襲来してくる魔王、そして今度はサラマンドラのリーダー、現11歳の少女サンドラと来た物だ。この世界はロリキヤラが上位ポジションを取り過ぎている感が否めない。

「え、な、なんですか？」

「いや、もういいや。なんでもないから話を進めろお嬢ちゃん」

「貴様！ その態度はなんだ！」

「うるせえよ。この世界の法則的な物に触れたんだよ」

瑛嗶のサンドラに対する態度に、側近らしき男が食い掛かってきたが、瑛嗶は面倒そうに手を振って応じた。その態度に更に青筋を立てた男は腰の剣を抜こうとするが、その剣は瑛嗶の手に握られており、腰にはもう無かった。

「な……!!？」

行動を起こす前に機先を取られる。いくらなんでも先読みしすぎている。

だが、これはスタイルの基礎中の基礎。相手の気持ちを理解して言葉を届かせる力故に、相手の行動が読める。気持ちがかかるから、行動の先を取れるのだ。

「物騒な事は止めようか。今は話の途中だけ」

「く……」

瑛嗶は剣を放り投げて側近、サンドラの兄であるマンドラに返した。マンドラは剣を受け取り、少し不満気に自粛した。

その様子を見ていたサンドラは少し唾然としていた物の、咳払いを一つした後話を再開した。

「ノーネームの皆様。この度は火龍誕生祭に足を御運びいただき、ありがとうございます。それで、今回の件に関してですが、建造物の崩壊による怪我人はおらず、建造物に關しても白夜叉様が修復して下さいという事で、私はこの件に關しては不問と処すとこ

ろです」

「……へえ、そりや太つ腹なことだ」

「まあおんしらを連れて来たのは他でも無いこの私じゃし、報酬の前金とも思っておけ」

サンドラの言葉に十六夜が反応したが、白夜叉がそう説明したので、黒ウサギやジン達はホツと肩の力を抜いて安堵する。

とはいえ、白夜叉は瑛叟に話した依頼の件の報酬の前払いとして不問としてくれと頼んでくれたのだ。それはつまり、この件は不問にしてやるから依頼は絶対こなせよと言外に言っている。流石は白き夜の王、その幼い外見とは違つて頭は回る様だ。

「……つまらないなあ」

十六夜達のやつた事に対する話は終わったが、今は白夜叉達が部下を下がらせて瑛叟に話した依頼の件を十六夜達に話している。既に聞いた話故に聞き流すが、こういう事務的な、業務的な話は元々性に合わないのだ。

キヨロキヨロと周囲を見渡す瑛叟だが、特にこれといって興味の湧く様な物は無し。溜め息を吐くばかりだ。

(……さつき考えたアイドルユニット、サンドラちゃんも入れようか……どうせロリキャラ集めただけのユニットだし、色的にも白髪、金髪に加えて赤髪つてのも悪くない

だろうし。でもあのシスコンお兄ちゃんが邪魔だ。立場的にも面倒そうだし………まあその辺は追々考えておくか)

もはや琰嗶にとつてアイドルユニットは確定事項の様だ。

「——別に、どっかの誰かが魔王を倒しちまっても問題は無いんだろ?」

「なるほど……いいじゃろう。この私が許す。じゃが、琰嗶の目当ては今回の魔王らしいから、琰嗶よりも早く魔王を倒せる自信が有るのなら……まあ頑張るがよい」

「……琰嗶、それマジかよ」

「ん? うん。なんなら今すぐ倒して来ても良いけど?」

「琰嗶さんは襲来してくる魔王が何処に居るのか分かっていいるのですか?」

「おいおいウサギちゃん。俺を誰だと思ってるんだよ。魔王の所在、目的、襲来のタイムミン
グ、プロフィール、ギフト名、実力に至るまで全部俺は知ってる」

琰嗶はそのギフトの数々を駆使して未来を知った。故に、今回に限り琰嗶はカンニングしながら確実に正解の道を進む事が出来る。元々未来予知のギフトは琰嗶にとつてあまり面白くは無いギフト故に使う事は無いのだが、ちゃんとイベントが起こるのか確認する為に使わせてもらったのだ。

それはつまり、この場にいる全員の中で、尤も状況を把握している人物と言う事になる。

「ならば何故その情報を開示しない？ その情報が有れば、この件を尤も安全に対処出来る筈だ」

「おいおい、そんなの決まってるだろ？」

マンドラは瑛叟の言葉に不満を隠せないようだが、瑛叟はそんなマンドラに対してゆらりと笑って両手を広げた。

「そっちの方が、面白いからだ」

娯楽主義者。その生き様は、他人に対して良い方に進む事が殆ど無い。悪い言い方をするのなら『人類最低の遊び人』、最低故に有害である。そして最低故にぶれないのだ。

飛鳥の悩み

瑛嗶達は魔王が来るまでの間は暇という事で、何も常時警戒していろという訳ではないので自由行動を許可されていた。その結果、その日は各々自由に動き回り、それぞれ楽しんで過ごしていた。

春日部耀は白夜叉の提案でサラマンドラの開催しているギフトゲームの出場。結果的に翌日の決勝戦へと上り詰めた。

逆廻十六夜はジンや黒ウサギと共に街を見て回り、比較的穏やかな時間を過ごした。

そして久遠飛鳥は街中で出会った群体妖精の一匹と共に街を見て回り、その群体妖精が自称した所属コミュニティ、ラッテンフエンガーという名前を聞いて襲い掛かって来たネズミ達に若干の怪我を負わされた。

そして現在はその全員が今晚を過ごす温泉宿に集まって寛いでいた。ちなみに瑛嗶は特に興味もなかったので十六夜達が街へ出ている間、既に温泉宿でゴロゴロしていた。

「ふう……流石はサウザンドアイズの温泉ね。浸かっただけで傷が癒えたわ」

さて、その中で唯一何者かに襲撃された飛鳥は温泉に浸かりながら一人、息を吐いて

いた。群体妖精は御湯の上に浮かべている桶の中でキャイキャイと遊んでいるが、そのテンションとは反対に飛鳥のテンションは駄々下がりだ。

その理由は、先の襲撃で思う所があるからだ。どんな相手かは知らないが、飛鳥を襲ったのは大量のネズミ。飛鳥の威光のギフトが有れば簡単に従属させる事が出来る相手だ。

だが、今回そのギフトは一切効果を發揮しなかった。その理由としては、飛鳥よりも霊格の高い人物による支配を受けていたから、というのが飛鳥の見解。

今まで自分の命令は曖昧やルイオスといった格上の人物以外には関係なく効果を發揮していた。まして、ネズミという小さな存在には問答無用の効力を發揮する筈だった。

それなのに、ただ自分より格上の相手が関わっていたから、という理由だけで飛鳥のギフトはてんで役に立たなくなる。元々飛鳥は自分自身での戦闘に疎い故、ギフトが効かなくなるとただの非力な少女となる。

相手次第で自分の強さがはつきりと別れてしまうこのギフトは、あまり使い勝手が良いとは言えないのだ。

「……悔しい……でも、使いこなしてみせる……ギフトを支配するギフト……！」

御湯の中で膝を抱えて、強い意志と共にそう決める。おそらく、十六夜や耀、曖昧と

比べても、飛鳥の実力は一番下だろう。確かに強い力だが、飛鳥より格上の相手はこの箱庭に五万といるのだから。それこそ、この七桁の外門で梃子摺っている様では魔王を倒すなどとても無理だ。

「ギフトを使いこなすのなら、やっぱり……ギフトを一番知っている人に聞くのが一番よね」

そこで飛鳥が思い付いたのが、瑛嗶の存在。2000京ものギフトを使いこなす人外だ、たった一つのギフトすら使いこなせない飛鳥にとってこれほど指南を受けたいと思える存在はいない。

「瑛嗶さん……教えてくれるかなあ」

「呼んだ？」

「わきゃあああ!?!」

ここは女子風呂。故に飛鳥は裸である。そこに、瑛嗶は唐突に現れた。なんの躊躇いも無く、何の恥じらいもなく、何の悪びれもなく、堂々と、ゆらゆら笑って、その姿を現した。

「な、な、なんで此処に居るのよ!」

「俺が何処に居ようと俺の勝手だろう」

「変態!」

「わはは。悪いがガキの身体には興味はない。俺を誘惑したいなら最低でも3兆年生き
た平等な人外レベルになってからおいで」

瑛嗶に罵倒を吐きかける飛鳥だが、瑛嗶はそんな飛鳥に対して笑い飛ばす様にそう
言った。遠回しに、お前の身体には色気も何も無いと言っていた。

「……で、何か言う事はないかしら？」

「謝罪が欲しいのなら謝ろうか？」

「……もういいわ」

瑛嗶は飛鳥の諦めた様な様子に苦笑し、瑛嗶式ギフトの一つ。衣装を入れ換えるギフ
ト【メイクアップ衣換え】を発動させ、全裸からバススタオル姿に衣装を換えた。

飛鳥は十六夜メイドの件でそのギフトを知っていたおかげもあって、驚かずに自分の
身体を覆うバススタオルが現れた事を冷静に理解し、取れない様に片手で抑えた。

「それで、俺に何か用があるんじゃないの？」

「まあ……そうなんだけど……」

「……ギフトを使いこなせる様になりたいってか」

「！」

「どうやらネズミ相手に痛い目みたそうじゃねーの。わはは、ざまあみろ」

瑛嗶の言葉に若干ぐさりと来て肩を落とした飛鳥。瑛嗶はそんな飛鳥を見てゆらり

と笑い、しゃがんでいた状態から立ち上がる。そしてそのまま御湯の上を召喚された時同様歩いた。

「……それ、最初会った時にもやってたわね」

「ああ、あらゆる場所を歩くだけのギフト。名前は【ウォーキングトラベラー歩劫者優先】だ」

「本当……いろんなギフトを持つてるのね」

「まあね」

瑛夏のギフトに少しの嫉妬と羨望を向ける飛鳥。

だが瑛夏はそんな飛鳥の言いたい事を既に察している。察した上で少しだけ意地の悪い選択を持ちかけた。

「なあ飛鳥ちゃん。俺は知つての通り多くのギフトを持つてる。その中には『ギフトを譲渡するギフト』も有るんだぜ？」

「!？」

「例えば、無条件に相手に命令を下せるギフトなんかを君に譲渡すれば、君はその悩みから解放される。霊格だのなんだの関係無く、格上も格下も全部まとめて屈服させる事が出来るからね」

「それは……」

「さ、どうする?」

瑛嗶の甘い言葉。正直言えば、欲しい。そんなギフトがあれば、この悩みからも解放され、十六夜達ともタメを張れるだろう。

だが、飛鳥はそんな甘言に迷いつつも、自身のプライドと誇りを取った。

「いらないわ。私は、私のギフトを使いこなして強くなりたいのよ！」

瑛嗶はそんな飛鳥の言葉を聞いて、ゆらりと笑う。一瞬とはいえ、迷った心はこうも簡単に立ち直れない。それなのに、こうやって立ち直ってくる辺り、彼女の心の強さが垣間見えた。

(へえ、こいつは面白い)

瑛嗶はそう思つて、水面で振り返る。

「いいね、面白いじゃないか。久遠飛鳥、お前の悩みをお前の思う様に解決してやるよ」

瑛嗶はそう言つて、飛鳥に手を差し伸べた。

「ありがとう。それではよろしく、瑛嗶先生？」

飛鳥はそう言つて、瑛嗶の手を取った。

だが、このまま終われば綺麗にまとまる筈だったのだが、この物語はシリアスまたは真面目な雰囲気は稀にしか出てこない。故に、

「ちこそうさまっ！」

「っ———?!?」

瑛嗶の手を取った事でバスタオルがひらりと落ち、瑛嗶の視界に艶めかしい少女の若干紅潮し、濡れた肌が晒された。太くも細すぎもしない脚、そこから腰とウエストへの曲線と15歳にしては発育の良い胸、その全てが瑛嗶に見られていた。

そして、次の瞬間。瑛嗶はその場から転移ギフトで消え去り、飛鳥は顔を真っ赤にしながら瑛嗶の顔が在った空間にそのピンタを空振ったのだった。

これで安心！瑛嗶さんの強化訓練鬼畜式！

現在、白夜叉達が十六夜達と翌日の耀の出るギフトゲームの審判を黒ウサギに頼むという話をしている最中、瑛嗶と飛鳥……ついでに群体妖精は夜の冷たく心地いい風が吹く中庭に出て対峙していた。

その理由は、飛鳥の頼みである実力の底上げである。

瑛嗶がいつも通りにゆらゆらと自然体で佇む反面、飛鳥はフォレス・ガロのリーダー、ガルド・ガスパーとの勝負の中で手に入れた銀の剣をギフトカードから顕現し、威光のギフトで強化する。そしてその剣先を瑛嗶に向けて素人同然の隙だらけな構えを取った。

その剣は女性にも持てる様な軽い剣で、所謂十字剣と呼ばれる品物。別名で言えば、レイピアとも呼べる。達人が扱えば神速の突きと連撃が可能になる速度と切れ味に特化した細い剣だ。

だが、素人が扱えば途端に脆く細い唯の鈍器になる。最早刀剣も言えない代物になってしまうのだ。

今の飛鳥がまさしくそれ。瑛嗶から見ればいつでも何処からでも押し折って殺せる

様な脆弱な素人だ。ギフトが無ければ最早戦場に立つことすらおこがましい。

「さて、まずは格の差と自分の脆弱さを知ってもらおうか」

「あら。私だって馬鹿じゃないわ。貴方と戦えば次の瞬間にでも気を失ってもおかしくない事くらい理解してるわ」

「いや、お前は理解して無い。自分の弱さを」

「どういふことかしら?」

瑛嗶は飛鳥がそう問い返すのに対して、十字剣を無刀取りで奪い取る事で答えた。飛鳥は何の感触も無く剣を奪い取られた事に驚愕し、瑛嗶に眼を丸くして視線を送る。

瑛嗶は飛鳥のそんな視線に対して、十字剣をひゅんつと一振り。そして一つ問いかけた。

「なあ飛鳥ちゃん。お前、自分がどれくらいの実力を持つてると思ってるんだ?」

「……………どういふことかしら?」

「例えば、例のニヤンコと君が一对一で戦った場合、どっちが強いと思う?」

「……………そりゃあ私よ。実際、勝ったもの」

「じゃあ、俺が叩きのめしたルイオス君と戦ったら?」

「……………ルイオスの方が強い、かな?」

瑛嗶はその答えを聞いて、溜め息を吐く。そして前髪をくしゃつと弄りながら視線を

飛鳥に送った。

「いいか、良く聞け。お前の強さははつきり言つてノーネームの戦闘要員の中じゃ最弱だ。ウサギちゃんよりも、レティシアちゃんよりも、耀ちゃんよりも、十六夜ちゃんよりもな。そして、今言つたガルドとルイオス。この二人もはつきり言つてお前より上だよ」

「なっ……!?!」

飛鳥は言葉に詰まった。ノーネームの中で最弱と言うのは分かる。ルイオスよりも下と言うのも分かる。でも、かつて勝利したガルドよりしたとはどういう事か。

「お前の威光のギフトは相手に命令しなければならぬよな? ということはだ。命令する前に倒してしまえば良い。それこそ、一言言い終わるまでに1, 2秒は掛かる。それだけあれば虎の脚力でどうにでもなる。それに、お前はこの剣をニヤンコの喉に突き立てる事で勝利を得たらしいが、この剣だつて向こう側が用意したものだろう? 元々は無手だった筈だ。それなのに、お前はあのニヤンコに勝てると言えるのか?」

「うぐ………」

飛鳥は何も言えない。言っている事が全て正論だからだ、自分のギフトは現在、命令を言葉にしないと効果を発揮しない上に、命令を出す自身は酷く脆い。

事実、ガルド戦は飛鳥よりも実力は上の春日部耀がやられたのだ。飛鳥が勝てたのは

単に、状況と相手の状態が飛鳥にとって都合の良いものだっただけ。

例えば、ガルドが剣を用意していなかったら？ 例えば、ガルドが理性を持って冷静に戦って来ていたら？ 一対一の制限がある中で、飛鳥が勝利することはほぼ不可能だ。何故なら、向こうは野生の鋭い感覚と、一体化した爪や牙と言う武器が有るのに対し、彼女は斬れば赤い鮮血を噴き出す様な柔らかな肌に、武器に出来そうなものすら持たないギフト便りの少女だ。実力差は歴然である。

「お前はお前が思っている以上に、弱いよ」

「……………じゃあどうすれば……………」

「だが、だからこそ、俺がその欠点を補正してやる。矯正してやる。修正してやる。俺のギフトや今までの経験を使って、最低でもガルドを瞬殺する位に鍛え上げてやるよ」

その為に使う時間は、一晩だ。かつての完璧超人の兄は、子猫を一晩で虎へと変貌させる事が出来たし、かつての平等な人外は四カ月で普通の人間を非凡な人物達と並び立てるほどに成長させた。

ならば、この最低の人外は、一晩で良いトコのお嬢様を最前線で戦い舞う戦乙女へと変貌させて見せよう。それくらい、簡単な事なのだから。

「それじゃあ始めようか。まず、お前にはギフト云々は使わせない。ただその剣を使って戦って貰うぞ」

「え」

「さて、長い長い夜の始まりだ」

瑛噺はそう言つて、両手を広げてゆらりと黒い笑みを浮かべた。

かくして、時間は翌日へと進んで行く。少女はどのように変化するのか、それはまだ人外の彼しか知りえない。

「あ、そうだ。修行中に変な所に触つても不可抗力だから」

「ふざけんな！」

魔王と瑛嗶の他愛のないやり取り

さて、翌日。

瑛嗶との一晩中に及ぶ訓練を終え、一睡もしていない飛鳥はよろよろと十字剣を杖代わりに十六夜達の前に現れた。

その姿を見て十六夜達はネズミ達同様誰かに襲われたのかと勘違いし、飛鳥に駆け寄った。

「おい、誰にやられた!？」

「ちがつ……」

「血? 怪我しているのか、黒ウサギ!」

「はい! 今すぐに医者を呼んできます!」

十六夜が疲労で倒れた飛鳥を抱えて、黒ウサギは急いで医者を呼びに行った。勘違いは勘違いを呼んで取り返しが付かなくなる。

「しつかりしろ、お嬢様!」

「十六夜……君……瑛嗶……さんが……!」

「瑛嗶が……? まさか、瑛嗶の奴も!？」

十六夜は飛鳥の言葉をまた勘違いし、瑛嗶までもが飛鳥と同じ様にピンチなのかと思つた。だが、知つての通り瑛嗶は化け物だ。そんな相手を窮地に陥れる相手など、勝ち目が無い。

冷や汗を流す十六夜。飛鳥はそんな十六夜を見て焦る。

「そうじゃないの……十六夜君……これは……瑛嗶さんが……」

「は？」

既に黒ウサギが医者を呼びに行き、耀も部屋を飛び出す様に付いていった。そんな中、勘違いは飛鳥の踏ん張りで解けたのだった。



「やー、悪い悪い。傷を直すの忘れてたよ」

「あのね……もう少しで死ぬ所だったじゃない！」

「大丈夫だって。多分」

「多分?!」

その後、瑛嗶が何処かで朝食を食べて優々と戻つてきたので、飛鳥は瀕死の状態からどうにか戻つてきた。瑛嗶のギフトでなんとか傷を直す事が出来たのだ。

そして瑛嗶は回復して喚き立てる飛鳥にただケタケタ笑って対応した。一応飛鳥が死んだとしても、瑛嗶には蘇生のギフトが有る。例を挙げれば現実を虚構に出来るギフトとか、そんなのだ。いざとなればスタイルでも蘇生が可能だ。

「全く。修行とかいってあんなに鬼畜な方法とって……それに、面白半分でセクハラしないで欲しいんだけど！」

「言つたじゃん、不可抗力だつて。それに、あれ位やらなきやお前如きが強くなるなんて夢のまた夢だぜ」

「……はあ……」

瑛嗶の言葉に飛鳥は溜め息を吐く。最早この人外は扱いきれないのだ。

「さて、そんな事より今日は耀ちゃんの決勝戦だっけ？ 応援に行かないとね」

「ありがとう」

「いやいや。そっちの方が面白いし、気にしなくても良いよ」

応援に行くと言つた瑛嗶に礼を言つたのは勘違いを解いて戻ってきた耀だ。瑛嗶が帰ってくるまでの間にレティシアが黒ウサギと耀を連れ戻しに行ったのだ。誤解は解けた物の、心配だったのは本当で、少しの間ほつと肩の力を抜いていた。

「とはいえ、耀ちゃんのギフトって面白いよね。多分、俺の持つてるギフトの中にもないぜ？」

「そうなの？」

「うん。だって回りくどいし」

「……………瑛嗶つて中々に最低だよね」

「自覚はしてるよ」

瑛嗶はそう言つてゆらりと笑つた。一番問題児らしからぬ雰囲気と行動を取る物の、その人格は一番問題有りな瑛嗶。他の三人の問題児を簡単に丸め込み、疲れさせるやり取りは、ある意味黒ウサギの心労を減らしていた。

「さて、それじゃあ頑張つていこうか」

瑛嗶は最後にそう言つて、くるりと回つた。



「ん……………瑛嗶は？」

「知らないけど……………」

夕刻、耀のギフトゲームをVIP席で見ていた十六夜がそう聞くと、飛鳥が辺りを見渡しながらそう言い返した。この席はサラマンドラの好意で用意して貰った席で、今回の依頼を受けた事によるちよつとした優遇だ。

だが、この場に瑛嗶の姿は無く、応援すると言っていたのに少しだけ心配になった。無論、瑛嗶自身ではない。瑛嗶が何をしでかすか、という心配だ。

「おんしら、あの男はどうした？」

「いや知らねえけど居ねえんだよ」

「ふむ……まあ、あ奴の事だ。どこかで見ておるだろうよ。ほら、耀の試合を始めるぞ」「おう」

白夜叉も瑛嗶がいない事に少し首を傾げたが問題はないと判断してゲームを開始する。白夜叉からのアイコンタクトをえた今回の審判役、黒ウサギが一つ頷いてゲームを始める為に声を上げた。

「それでは皆様！ これより火龍誕生祭のメインギフトゲーム！ 造物主達の決闘の決勝戦を開催死体と思えます！ 審判役はこのサウザンドアイズの専属ジャッジでおなじみ、黒ウサギが務めさせてもらいます！」

黒ウサギの声で歓声が上がリ、ボルテージはどんどん上がっていく。

「……そういやよ、白夜叉。黒ウサギの見えそうで見えないあのスカートはなんだ？」

チラリズムなんて、趣味が古すぎるぜ」

「ふっ、おんしほどの男が、真の芸術を理解できておらんとはな……」

「何？」

「良いか。真の芸術とは、己自身の飽くなき探求心。真の芸術とは、己が宇宙の中にある！」

「己が宇宙の中、だと？」

「それは乙女のスカートの中も同じ。見えてしまえば唯の下品な下着でも、見えなければ芸術だ！」

「見えなければ、芸術か!!」

白夜叉と十六夜が変態トークを繰り広げている。ちなみに、見えそうで見えないスカートというのは、なんとも言い難いエロさがあると思う。

「今こそ共に確かめようぞ……この世に、奇跡が起こる瞬間をな……!」

「白夜叉……」

白夜叉と十六夜はお互いにふっと笑い、黒ウサギに向かって双眼鏡を構えたのだ。た。

「あ、あの……」

「見るな。馬鹿が移る」

そんな姿にサンドラが何か言おうとするも、兄のマンドラは教育に悪いとばかりにそう言い捨てた。また、飛鳥もそんな二人に呆れ返って溜め息を吐き、少しだけ思考に耽っていた。考えている事はラッテンフェンガー、ハーメルンの笛吹きについての事

だ。

「……そんなこと、ある訳ないわよね」

現在、飛鳥の膝の上で寛いでいる群体精霊が、魔王の配下の者とは思いたくなかったのだ。ラッテンフェンガーに魔王が関わっていると知ったからには、少しだけ、不安になった。

だが、そんな不安とは裏腹に、ゲームは進んで行く。耀とコミュニティ、ウイルオウイスプの一人は白夜叉の合図と共に衝突したのだった。

◇ ◇ ◇

さて、その頃、ゲームのテンションとは真反対に動く存在の影が三つ。一人は斑模様の服を着た少女、一人は露出の多い女性、一人は大きな笛を持った男だ。

彼女達は所謂魔王と呼ばれる存在で、今回の魔王襲来の予言に出てきた人物である。

「……始めるよ」

「YES、My master」

少女の言葉に二人の男女が頷く。少女が乗っている大きな笛の容姿を持つ悪魔も、戦いの準備が出来たとばかりに大きな風を吹かせる。

そして、眼先でギフトゲームが始まったのを見て、少女が動きだそうとした所で、少女の背後から声がした。

「見つけた」

三人は驚愕に眼を見開いて背後へ振り向く。そこには青黒い髪を少し跳ねさせ、青黒い着物を着流している男がいた。ゆらりと口元を吊り上げて、少女達に視線を送る。

「貴方、誰？」

「お前こそ誰だ」

「見つけたって言ったんだから、知ってるんじゃないの？」

「知らないけど？」

「……………」

瑛嗶は、少女を、黙らせた。

すると、少女の配下なのか二人の男女が少女の前に出て瑛嗶にたいして戦闘態勢を取った。

「アレ？ やるの？ だるいなあ……………」

「舐めてんじゃねえぞ…………兄ちゃんよお！」

動き出そうとする男。だが、その動きだしの前に瑛嘎は男の懐に入っていた。そして男の耳元に口を近づけて小さく言う。

「舐めたら汚いだろ」

「っ!？」

見えなかった。対峙した男も、露出の多い女も、魔王である少女も、瑛嘎の動きが全く見えなかった。それはつまり、それほどの速度を瑛嘎は持っているという事である。

「……それと、この笛は返そう」

「な、いつのまに……」

「悪いけど手品は好きなんだよ」

瑛嘎はそう言って無刀取りよろしく奪い取った笛を男に返した。そしてそのまま笛を受け取った男から数歩距離をとる。

すると、少女はそんな瑛嘎の実力が高い事を理解し、瑛嘎に質問した。

「貴方、何処のコミュニティ？」

「生憎とノーネーム所属なんだよ」

「嘘……貴方みたいな人がノーネーム？」

「そうだよお嬢ちゃん。俺は君みたいに立派なコミュニティには入ってないんだよ」

それを聞いた少女は少しだけ考えた後、瑛嘎に視線を送った。その姿は何処までも

飄々としていて、気まぐれな狐の様な印象を得た。

だが、瑛嗶の実力は本物だ。全てを見た訳ではないが、先程の一合を見れば十分だった。

「それで、貴方は何が目的で此処に来たの？」

「俺の目的、ね。それは——」

「？」

瑛嗶はすつと少女に向けて指を差した。指を向けられた少女はその手を隠し尽くす袖を口元を持っていき、首を傾げた。

瑛嗶はそんな少女の事を見て口元を吊り上げ、こう言った。

「お前を俺の物にしてアイドルに仕立て上げるんだよ」

他は戦闘してるのにな

誰も言葉を発さなかった。瑛嗶が魔王つ娘アイドル化計画を口にした時から、誰一人、一切、何も言葉を発さなかった。それだけ衝撃が強かったのだ。特に、魔王の少女の配下である二人にとっては。

そして、この静寂をどうにか破ったのは、そんな妙な計画の対象にされていた魔王本人。

「……アイドル？ 私を？」

「アイドル。お前を」

少女の確認に瑛嗶は即答した。少女は頭痛がするのかこめかみに手を当てて唸る。配下の二人は未だに固まっている。

「貴方、自分が何を言ってるのか分かってるのかしら」

「分かってるけど？」

「……もういいわ。二人とも、いい加減元に戻って」

「はっ……！」

少女は瑛嗶の言葉を一旦スルーすることにした。こんな妙な雰囲気を作りあげてし

まった彼を少し呆れる所もあるが、瑛嗶の実力は先程見たとおりかなり上位の物。下手をすれば上位の魔王よりも上かもかもしれない。少女としては、その部分だけ見れば十分だった。

「とりあえず、ゲームを始めろわ」

少女が両手を広げてそう言うと、空から大量の黒いギアスロールが降り注ぐ。瑛嗶はその様子をただ見ていた。そして不意に近くに降って来た一枚を手にとつて読んでみる。そこには、魔王らしいゲームが記されていた。

ホスト、指定ゲームマスター：白夜叉

プレイヤー：この場に居る全コミュニティ

ホスト側勝利条件：全プレイヤーの屈服、殺害

プレイヤー側勝利条件：偽りの伝承を砕き、真実の伝承を掲げよ

随分とまあ抽象的な勝利条件が記された物だと瑛嗶は思う。とはいえ、このクリア条件を解く必要は瑛嗶にはない。正直言つて、このゲームに参加してはいるものの、勝利を目指すつもりはないからだ。瑛嗶としては、どのような形であれとりあえず魔王隷属させてやろうと考えているのだ。

「ラッテン、ヴェーザー。行つて」

「な……でもマスター！」

「大丈夫、コイツの目的は私を隷属させる事。なら、私を傷つける気はない筈だから」

少女の言葉に、露出女ラッテンと軍服っぽい服を着た男ヴェーザーは少し迷ったものの、自分達の目的を想い浮かべ、主が心配ではある物の、作戦通りに行動を開始した。

少女と瑛嗶の下を離れ、高い塀の上から飛び降りていく二人。瑛嗶はその二人を一瞥しながら少女の方へと視線を向けた。

「俺がお前を傷つける気はないってなんで思うんだ?」

「だって貴方は私をアイドルにしたいんでしょう? アイドルに傷を付けるわけにはいかないんじゃない?」

なるほどその通り。と瑛嗶は思いながらもくすつと笑った。少女はそんな瑛嗶の様子に首を傾げるが、瑛嗶はそんな少女の様子を見て口を開いた。

「正直、俺としては怪我を元に戻せるギフトを持つてるから傷つけようと関係無いんだけどな」

「!」

「でもまあアイドルにするなら怪我を負っちゃ駄目だよな。いいだろう。俺はお前の身体に一切傷を付けず、隷属させてやるよ」

「出来ると思ってるの?」

「出来るさ。それくらい、簡単過ぎて欠伸が出るね」

少女は瑛嗶の自信満々な様子が少し不気味に思えた。傷を付けず、隷属させる。そんな方法があるのだろうか？ 実際、隷属させるといつてもその方法は様々。だがそのどれにしたって隷属させられた側が一切傷を負わない結果など、ある筈が無い。

「そう、素敵ね似非プロデューサー？」

少女はそう言つて、黒い霧の様な物を纏つた。瑛嗶はそんな少女に対して視線を少女から切つた。

「？」

「そうそう、その前に紹介しておかないと……」

「何を？」

瑛嗶はその視線の先、こちらへやつて来ている人物の下へと移動し、抱えて即座に戻つてきた。

「……」

「……」

「え？」

瑛嗶に抱えられていたのは、レティシアである。魔王が居る、という事でやつて来たのだらうが、その姿はあくまで金髪ロリに黒い羽が生えた物で、とてもじゃないが戦場に立つような存在には見えなかつた。

「その子がなんなの？」

「コイツがお前とユニットを組むメンバーの一人、金髪ロリ担当レティシアちゃんだ。愛称はくまちゃんだ」

「な、なぜ私がアイドルになる事になってるんだ！ それになんだその適当な愛称は！」

「……ちなみに私の愛称は？」

「ねこちゃんだ」

「なんで？」

「なんとなくだ」

「……………」

最早瑛夏の独壇場である。

とそこへ瑛夏の背後から火炎弾が迫ってきた。少女はそれに対して少し身構えるも、瑛夏は横を通り過ぎようとするそれを手を振って蚊を散らす様に掻き消した。

「！……まさか……まさかとは思うけど」

「そのまさか、紹介メンバー2。まだ予定だけど、アイドルユニットメンバー候補のサンドラちゃんです」

「マスターが何を考えてるのか分からない！」

「悪いけど私も分からないわ」

「あの、なんで攻撃掻き消されたんでしょう？ それと、何やら変な話が聞こえてきたんですが……」

瑛唄の独壇場その二。ここに白夜叉が居れば更にカオスな空間になっただろうが、傍から見ればこの状況は一人の男の周囲にロリっ子が三人いる光景。良い風に見れば妹と居る兄、悪い風に見れば幼女に近づく男である。少しセーフとアウトの境界線が微妙だ。

「というか自分で言うのもなんだけどなんで私達みたいな年端もいかない容姿の子ばかりなの？」

「そっちの方が、需要が有るからだ」

「マスター、聞きたいのだがその計画はいつから？」

「お前の所有権を手に入れた後だったかな」

「私の馬鹿！ 何故この男とルイオスが勝負する時に止めなかったのか！」

レティシアのキャラが崩れてきた所で、魔王の少女は瑛唄とレティシアとサンドラを見ながら頬を掻きながら気まずそうに言った。

「そろそろ始めても良いかしら？」

「どうぞで」

瑛唄がそう言うと、少女は纏っていた黒い霧を動かす。そして少女の乗っている笛を

大きくしたような怪物も轟音と共に風を巻き起こした。

それを見て、緩んだ空気が引き締まる。レティシアもサンドラもすぐさま臨戦態勢に入った。唯一人、瑛唄は観戦モードだ。

「うん。メンバー同士の喧嘩も時には必要、か」

「「それは違う」」

少女達はそう言いながら、衝突した。

◇ ◇ ◇

一方その頃、十六夜達はというと、何らかの方法で白夜叉が封印状態にされ、ラツテンとヴェーザーによる襲撃の対処に当たっていた。十六夜は単体でヴェーザーを先制攻撃し、そのまま戦闘へ。飛鳥はラツテンによって気絶させられた。ジンと耀はなんとか飛鳥の尽力で黒ウサギの下へと逃げのびた。

「おおっらあ!!」

「ぐ……このクソ餓鬼イ!」

十六夜とヴェーザーはかなり互角の勝負を繰り広げていた。十六夜のギフトは正体不明という名称を与えられており、どういう物なのか良く分からないが、黒ウサギ曰く、

天地を砕く恩恵とのこと。

だが、十六夜はヴェーザーの恩恵を時折破壊していた。それはつまり、恩恵を砕く力を持つているということ。恩恵と恩恵を砕く力を両立させて持つているというのは、なんとというか確かに正体不明に相応しかつた。

「おいおいどうしたよ。随分と温い攻撃じゃねーか！」

「はっ！ テメエこそ単調な攻撃ばかりで当たってねえぞ！」

お互い、気が合うのか相手を挑発しながら戦闘を継続する。十六夜の拳とヴェーザーの笛がぶつかる度に衝撃波が辺りに撒き散らされる。お互い周囲に味方がいないことが幸いしていた。

「おおおおお!!」

「はああああ!!」

そして何度目になるかの衝突の直前、笛の音が鳴り響き、戦況は変化するのだった。

ふざけて真面目に終わらせてみる

笛の音が響く。その笛の音は、何処までも遠くに、何処までも深くに、振動として伝わっていく。生物の正気を狂わせ、狂気を生み出し、暴走させ、演奏者の思うままに操る人形へと変えていく。

その名も「ハーメルンの笛吹き」

グリムグレモワール・ハーメルンというコミニティの一人である、露出狂ラッテンによる笛の演奏は、サラマンドラの配下の者達を人形へと変え、人々を襲わせた。それに対して、協力を要請されていたノーネームの飛鳥はラッテンの前に敗北、何処かへ連れ去られた。耀は一般民の避難を協力していたが、途中で原因不明の体調不良に苛まれ、唯一十六夜と瑛喰、レティシアの三名が事の対処に当たっていた。

また、サラマンドラの面々はもはや壊滅的であり、機能しているのは避難民を誘導しているマンドラと魔王と対峙しているサンドラ位だ。戦況は圧倒的に魔王側が優勢だった。

とはいえ、この状況下でも戦況を引っくり返す手段と戦況を一時的に停止する手段が、サラマンドラ側の陣営には有った。いや、というよりはノーネームの戦力にはその

二つの戦力があると言うべきか。

まず、戦況を一時的に停止させる手段としては、審判権限を持つている黒ウサギが箱庭中枢へと状況の伝達をして今回のゲームルールに対して不明瞭な点に関する両陣営の会談を行なう事。

しかし明らかな言いがかりなので、この会談でルールに不備が無ければ魔王側は言いがかりを持ちあげてゲームを有利な状況で再開することが可能になる。少しリスクがある物の、これも一つの手段だ。

次に、戦況を一気に引っくり返す手段としては、強大な力を持つている瑛嗶が魔王やその部下をまとめて叩きのめした後、ゆっくりとクリア条件を達成するやり方。

どちらにせよ、戦況に変化を齎す手段である事には変わらないが、今回彼らが取ったのは、前者だった。つまり、黒ウサギによる一時ゲーム中断である。

「ジャツジマスターの発動が受理されました。これにより、ギフトゲーム、ザ・パイドパイパーオブハーメルンは一時中断し審議決議を取り行います。プレイヤー側、ホスト側は即座に交戦を中止し、速やかに交渉テーブルの準備に移行して下さい！」



「でだ。俺としてはセンターに魔王ちゃん、右にレティシアちゃん、左に白夜叉ちゃんつ
つー配置が良いと思う訳よ。サンドラちゃんはとりあえず候補だから外したけど、入れ
るとしたらもう四人全員センターに出して全体を売りこんだ方が良いと思うんだ。だ
からとりあえず明日辺りから四人共一緒にダンスのレッスンを、発声練習、各々のギフト
を組み合わせたパフォーマンスの考案、歌の練習なんかをしていきたいと思うんだ。あ
あ、安心してくれ。お前らが歌う歌に関しては俺が作詞作曲して演奏もしてあげるか
ら。問題は宣伝とライブの場所の確保だよね。そこらへんはノーネーム以外にもサラ
マンドラとハーメルンのコミユニティにコネが出来る訳だし、人員はそこそこあるから
手伝って貰うでしょう。あとはそうだな、ユニットを組むならそれなりに信頼関係と連
携が出来ていないと駄目だね。そうだ、差し当たって今度皆で遊園地に行こう！一
緒に遊んだり飲み食いしたりすれば自然と絆も深まるもんだろ。全員かなり単純な幼
女なんだしさ。ああでもその前にいろんな所に許可を取りに行かないといけないよね。
ライブ会場を貸してくれるスポンサーとかにさ。うん、とりあえず遊園地に行く前に四
人でそこらへんに挨拶しに行こう。いいかい？ 最初が肝心だからね。とりあえず最

初に偉い人に会ったら作り笑いでもちゃんと笑って可愛く見せるんだ。どうせ男なんて女子供には弱いんだからコロツと行くって。わっはっは」

「スポンサーどうのこうののに許可を取る前に私達に許可を取るべきじゃないかマスター！」

「おいおい、俺の十四行にも及ぶプロデューサーとしての仕事内容の語りをそんな一言で斬り伏せるなよレティシアちゃん。傷つくぜ」

「その前に今この場において話し合うテーマが違うのでございます！」

さて、瑛嗶による出オチ的な会話は開始されたが、勿論会談内容はアイドル結成の事では無い。ギフトゲームの話だ。今回のゲーム、白夜叉の考えではクリア方法が存在しない可能性があるとの事。この会談はその疑念を解消する為の物である。

「あーはいはい。とりあえず会談を進めてくれウサギちゃん」

「……んんっ！ それでは審議決議及び交渉を開始したいと思います。まずホスト側に問います、此度のゲームですが……」

「不備はないわ」

「！ よろしいのですか？ 黒ウサギの耳は箱庭中枢に繋がっています。不備があればすぐに分かりますよ？」

「その上で言っているのよ。それより分かっているのかしら？ 私達は言われの無い罪

でゲームを中断させられているのよ?」

少女の言葉は、やはりというか当然の良い分。つまり、不備が無かった場合の自陣の有利なルールの付与を認めろという事。

そしてそれをなんの躊躇もなく言ってくるというのなら、当然不備はないという自信が有るのだろう。

「この意味は分かるわよね?」

「ルールに不備が無かった場合、自分達に有利なルールを付けくわえる、という事ですか」

「まあルールの付与に関しては、後に話し合いますよ?」

少女の言葉に全員がとりあえず頷いた。そして黒ウサギがその耳を使って箱庭中枢へルールの確認と不備の有無を確認する。その間、誰も話す事はなかった。

「なあレティシアちゃん。これってどういう感じの話し合いなわけ? お兄さん良く分からないうだけど」

訂正、瑛嗶は空気を読まなかった。

「マスター。とりあえず会談が終わったら全部懇切丁寧に説明しますので今は黙っててください」

「敬語を使う程面倒臭いのか。よく分かった、お前絶対アイドルにして売りこんでや

る」

最早レティシアは瑗唄の相手役の様なポジションを確立したようだ。所有者と所有者の関係だが、この二人に関してはあまり意味はない様だ。

「……はい。箱庭中枢に確認を取りました。このゲームに不備はありません……」
「……！」

黒ウサギの通告により、サンドラ達の表情が歪む。反対に魔王の口元が吊りあがった。

「それじゃあルールは現状維持。問題はゲーム再開の日時。ジャツジマスター、ゲームの再開時期は最長で何処まで伸ばせるの？」

「最長で、ですか？ 一カ月ほどかと……」

「それじゃあ一カ月後よ」

「待ってくだs「ok」——え？」

ジンがその提案に対して拒否を示そうとした時、横からそんな声が聞こえた。

「今、何と言ったのかしら？」

「だからオーケーだって言ったんだよ。一カ月後、ルールはそのまま、ゲームを再開するんだろ？」

「……いいの？」

「だってそうすればその一カ月で色々といさつ回りとか出来るじゃん」

無論、横やりを挟んだのは瑛唄である。やはりというかあくまで瑛唄の目的はアイドルユニットらしい。その為ならギフトゲームがどのように動こうとどうでもいい様だ。

「待つてください！ そんなの無理です！」

「……まあそうよね。普通そういう反応をするべきよね」

「瑛唄、とりあえず黙ってろ」

「十六夜ちゃんもアイドルになる？」

「黙れ」

「へーい」

瑛唄はつまらなそうにべつと舌を出してそっぽを向いた。正直、このシリアスモードが瑛唄にはあまり好ましくなかったから茶々を入れていただけなのだが、やはり真面目に話し合いをしている側からすれば少し苛立ちもする様だ。

「こほん……まず、貴方の両隣りに居るのはラッテン、ヴェーザーだと聞きました。そして、貴方達と共に居た笛を体現したあの悪魔はシュトロム……だとしたら、貴方の名は……ペストじゃありませんか？」

「ペストだ?!？」

「はい。14世紀以降に大流行した人類史上最悪の疫病」

「正解よ。貴方名前は？」

「ノーネームの……ジン・ラッセルです」

「覚えておくわ。でも手遅れだったわね。私は既に参加者の一部に病原菌を感染させている」

少女、ペストの言葉はその場にいた全員を驚愕させた。ペスト病、または黒死病と呼ばれるこの病は、過去8000万人の死者を出した最悪の細菌だ。感染してから時間が経つに連れて肌が所々黒くなって、最終的には死に至る疫病。彼女はその霊群である。

「瑛嘎」

「……」

「おい」

「……」

「悪かった……俺が悪かったから！ もう喋っていいから！」

「その言葉を体感時間で3億年は待ったぞ！」

瑛嘎は存外面倒な性格をしているようだ。さすがは最低な遊び人、会話の節々に苛立ちを感じさせる。そこに痺れも憧れもしないけれど、傍から見てる分には面白い気がする。

「くっそコイツめんどくせえ……まあいい。瑛嘎、お前黒死病治せる？」

「出来ないこともないけど？」

「だ、そうだ。つーことは別に手遅れって訳でも無さそーだぜ？」

「……」

「いや、俺が治せるだけで治すとは言ってないぜ」

「マスター、そこは空気を読めよ!!」

話が進まない。

「……まあその男は治すつもりは無さそうだし、結局貴方達の命は私の手の上つてこ
とね」

「……ちっ」

「それじゃあこうしましょう？ 貴方達ノーネームとサラマンドラが私達の傘下に入
る。これで手内にしましょう？」

「そんなことっ……!!」

「まあそういうでしょうね。なら、代替案として……その男が私達の傘下に入る、とい
うのはどうかしら？」

そういつてペストがその手を覆い隠した袖で差したのは、頬杖をついている瑛喰。そ
してこの発言は、十六夜達を大きく揺さぶった。

なにより、瑛喰を持っていかれる事はノーネームの戦力をおおよそ7割持つていかれ

る事と同義であり、今後ペストのコミュニティに勝利することが困難になるからだ。

なんせ、瑛唄は2000京のギフトと3兆年を生きた化け物。普段はふざけているが、本気を出した時の被害は甚大以上に膨大極まりないだろう。

「なるほど、この俺を隷属させようって事かい？ えーっと、ペストちゃん」

「ええ、そういうことね。貴方はどうやらまだまだ底を見せていない様だし、勘だけどこ
の場にいる全員で掛かっても勝てない位強いでしょう？」

「まあそうだな……片手を使わないといけない位には苦戦するかな」

「……そういうことよ」

瑛唄はペストの言葉にふざけた雰囲気を含め、すつと瞳を細めてペストを見た。

「っ!？」

「へえ……随分と偉くなったもんだなお嬢ちゃん。今ここで人格改変してやろうか」

瑛唄は珍しく真面目に殺気を放った。向けられたのはペスト、だがその場にいる全員が戦闘態勢に入る程に、それは濃かった。

非戦闘員であるジンは意識が途切れそうになりながらも汗を流しながら机に寄り掛かった。

「っ……あ……!？」

「俺としてはお前が俺の物になってさっさとアイドルデビューして俺に印税を貢げば文

句はないんだよ。結果としてアイドルデビュー出来なくてもユニット組ませて俺の前で150時間ぶっ通しでライブさせてやるから覚悟しとけよ。俺はやると言ったら、やる」

言ってる事は最低なのに、その場の雰囲気で冗談とも取れない瑛嘎の言葉。威圧感と殺気その言葉を何処かカッコ良さげに聞こえさせた。

「俺をお前の玩具にしたいなら、それ相応の面白い事をして見せろ。ノーネームとサラマンドラの両コミュニティを屈服させ、俺の前に差しだしてみろ。そうしたら、少しだけ考えてやるよ」

瑛嘎はそう言って、冷や汗を流すペストを見下す。

それに対して、魔王であるペストは無理に笑みを作って精一杯の意地を持って言い返す。

「そう……ならここに宣言するわ……私は、必ず貴方を玩具にしてみせる……!」

ギフト選択

さて、あの会談が終わってみれば、案外あつけなくルールの改定は終了した。

結果から言えばゲーム再開は一週間後、そしてゲーム終了はその24時間後となり、その終了時までにはプレイヤー側が勝利条件を達成出来なければ無条件でホスト側の勝利となる事が決定した。

また、瑛嗶とペストの一对一の対談により、プレイヤー側が勝利した場合ペストは瑛嗶の所有物となり、その逆も然りとなった。

そして最後に付け足しとして、瑛嗶はこのゲームにおいてかなりの制限を付けられる事になった。これは瑛嗶も含めて全員が承諾した。何故なら、瑛嗶はこの世界においても強すぎたのだ。七桁の外門であるこの場においてその強さは反則と言っても良い。故の枷。

まず第一に、瑛嗶のギフトの使用数制限。瑛嗶はその身に20000京のギフトを宿す人外だ。よって、そんな馬鹿げた数のギフトを全部叩き込まれればたまった物ではない。そういう事で、瑛嗶のこのゲームで使用出来るギフトの数は一つ。そしてその使用回数はたったの5回である。ギフトの選択は瑛嗶自身がやっていいが、これは普通の奴

にとつても少々キツイ制限だ。

第二に、瑛嗶はヴェーザーとラッテン、シュトロムの行なう戦闘に参加してはいけない。ギフトが一つとはいえその実力が高すぎる事は明らか、故にペストは彼の戦闘を自分との物だけにしたのだ。もしも瑛嗶がヴェーザーとラッテン達と対峙した場合、魔王側の敗北は必至だ。これも瑛嗶自身が承諾した事で約束された。

瑛嗶に掛けられた制限はこの二つだ。明らかに瑛嗶に対する制限が過ぎるとサンドラや黒ウサギ、十六夜が反抗したのだが、魔王は断固としてそれを受け付けず、この制限は実行されることとなった。

そして現在。その会談から三日後、瑛嗶は自分がどのギフトを使うかを選んでいた。

「うーん、どれがいいかね？　なあ十六夜ちゃん」

「とびきり強い奴使えば良いじゃねえか」

「まあそうだね。なんせ、5回も使つて良いんだから」

そう、瑛嗶のギフトは言つてしまえば何でも出来る。なんせ、『視線を合わせただけで相手が死ぬギフト』や『神になるギフト』や『使えば勝利が確定するギフト』や『無敵になるギフト』や『世界を崩壊させるギフト』や『星を消滅させるギフト』等々、規格外には程がある物が大量に存在している。そんな物を、なんと『5回』も使つて良いのだ。

つまり、5回も相手を殺しても良い。5回も神になつても良い。5回も勝つて良い。5回も無敵になつていい。5回も世界を崩壊させていい。5回も星を消滅させていい。そう、選んだギフトによつては一度でも使つて欲しくない物があるのだ。魔王陣営は瓊瓊に對する制限を少し甘くしすぎた。

「じゃあさ、今から挙げるギフトから一個選んでみてくれ」

「ん、ああ」

「じゃあいくよ——」

瓊瓊の挙げたギフトを下記に述べる。

- ・ギフトを無効化するギフト【偽恩恵】オノマトピックシステム
- ・視線を合わせた相手を殺すギフト【即視】テストモーメント
- ・意図を外させるギフト【予想害】アネクスベクトルド
- ・ギフトを奪うギフト【お前の物は俺の物】ギフトジャイアニズム
- ・巨人になるギフト【個大妄想】メグロマニア
- ・一回前の攻撃をキャンセルするギフト【私だけは待ったあり】アイキャンキャンセル
- ・起こつた事象の反対の事象を起こすギフト【反対制力】ネボットフォースコントロール
- ・眼鏡を掛けさせるギフト【眼鏡フェチ】グラスラブ
- ・戦意を失くさせるギフト【抱いた怠惰】レズイネスハグ

- ・ 肉体を改造するギフト【改臓体】
リモーディリングボディ
アイルメントデザスター
- ・ 病を処方するギフト【病は気から】
ファーストステップパフォーマー
- ・ 盟を落とすギフト【芸人の第一歩】
ドラゴンチェンジ
- ・ 龍になるギフト【落化龍遂】
- ・ 足を引つ張るギフト【引つ張り足】
オクトパス
- ・ 不幸を振りまくギフト【運が悪かった】
アンハッピーエクスプレッション
- ・ 対戦相手の技を使うギフト【真似つ子】
イミテイト
- ・ ダメージを倍加するギフト【重傷化】
シリアスインジユリー
- ・ 好きな場所に移動するギフト【腑罪証明】
アライブフロック
アンスキルド
- ・ ギフトを使わないギフト【実力勝負】
アンスキルド
- ・ 文字数稼ぎのギフト【読者よ悪かった】
アイムソーリー

以上、200個だ。2000京分の20個。随分と少ないが、これだけでも国の一つや二つ簡単に落とせるだろう。

「いや覚えらんねえよ。書いて寄越せ」

「仕方ないな。その残念な脳みそでも分かる様に紙に書いて見せてやるよ」

青筋を浮かべる十六夜を放つて、書面で渡した。そしてそれを見た十六夜はそこに書かれたギフトの数の見て引き攣った笑みを浮かべた。

「おいおい、どれもこれもおもしろーじゃねーか！ でもよ、最後の奴とか眼鏡の奴とか
ネタだろオイ」

「悪いか」

「ネタ系で勝てんのかよ」

「そこに書いてあるギフトならどれを使っても勝てるけど？」

十六夜は眼鏡を掛けるだけでどうやって勝つんだよと呟きながら、ギフトに目を通して考える。どれを使えば尤も効率的に勝つ事が出来るのかを考える。

正直言えば、ギフトの無効化や奪取はかなり良いし、巨人になるのも良い。大きさはそのまま強さになる。また戦意をなくさせるのなんて勝利するには持つてこいだ。

そして、起こった事象の反対の事象を起こすギフト、なんてのは最終的に自分達が負けた際に使えば反対の事象として自分達に勝利が舞い込んでくる。なんともまあ規格外。

「……視線………巨人………無効化………5回………」

ブツブツとつぶやく十六夜を見て、瑛嗶はゆらりと笑いながら

(とりあえず、ネタ系ギフトで攻めて行くのかな……)

と、考えているのだった。

アイドルにはリアクションも大事

それから四日。会談からは一週間後、つまりゲーム当日という訳だ。

この一週間。魔王であるペストの振りまいた疫病、黒死病は多くの者達を床に伏せた。これはサラマンドラやノーネームだけに留まらない。今回の火龍誕生祭に参加した全コミュニティに及ぶ影響だ。

また、この中には当然サラマンドラのメンバーもいるし、ノーネームからは春日部耀がその病に侵された。戦力的に言えば瑛嗶の制限も有ってそこそこ削られた状況ではある。が、特に気にするまでもなかった。少なくとも、瑛嗶から見れば自分が負けることなど一切考えていない。

さて、ゲーム開始まで残り数分。瑛嗶達はペスト達と対峙し、その時を待っている。

「待ち侘びたわ、この時を」

「本当にね。今日からお前はアイドルだ」

「そうね、今日から貴方は私の玩具よ」

瑛嗶はゆらゆら笑って、ペストは見下すような笑みを浮かべた。そしてそのまま睨み合う。

「定刻になりました！」

「それじゃあ、ゲームを再開するわ！」

かくして、黒ウサギの報告とペストのゲーム開始宣言により、ゲームは再開された。此度のゲームはプレイヤー側の勝利条件がとても複雑だ。偽りの伝承を砕き、真実の伝承を掲げよ。これは砕く事が出来て、掲げる事が出来る物が無いといけない。この答えは、既に十六夜が出している。

ハーメルンのステンドグラス。この火龍誕生祭には100枚近くのステンドグラスが持ち込まれており、その絵はそれぞれ違う。そしてそれはハーメルンの伝承がテーマになっている物なのだ。故に、偽りの伝承である絵のグラスを砕き、真実の伝承の絵のグラスを掲げる。これが今回の勝利条件だ。

そして、今回のプレイヤー側の作戦として、その役目はジン達が率いるサラマンドラとノーネームの非戦闘員が担当している。ペスト達と戦うのはあくまで戦闘員だけで良いのだから。

戦力的にはプレイヤー側の不利なのだが、勝利条件を見ると中々ホスト側に不利に出来ている。何故なら、ホスト側は24時間の経過以外に勝利する事が出来ないのだから。

「さて……戦闘は任せて俺はちよくちよく手を出すとしようかな」

ゲームが始まり、早々に戦闘は開始された。ラッテンとシユトロムはステンドガラスを掲げる役目をしているジン達の邪魔へ、ヴェーザーはノーネーム側の頭脳とも言える十六夜の打倒、そしてペストは黒ウサギとサンドラを相手に圧倒的な実力を見せつけていた。

そんな中、瑛嗶はゲーム開始宣言で一斉に動き出した面々とは違って対峙していた場所から一切動いていなかった。使って良いギフトは一つだけ、使用回数は5回、これは絶対。

とはいえ、瑛嗶にはギフトを使わなくても良い身体能力と、スタイルがある。正直スタイルはギフトでは無くコミュニケーション故に制限が掛かっていない。使い放題である。

「それで俺が今回選んだギフトは……」

瑛嗶が選んだギフト、それは十六夜がああの20個の中から選んだ物とは別の物だった。

十六夜の選んだギフトは、ギフトを無効化するギフトオノマトレツクシステム【偽恩恵】である。ギフトの無効化、これは十六夜の恩恵を砕く力と似通った点があるが、完全な無効化だ。その効果は絶大である。

「これだな」

瑛噎はペストの方へ視線を向けた。ペストはその視線に気付き、身構える。黒ウサギとサンドラの攻撃を捌きながら、瑛噎の攻撃を警戒した。

「えい」

「ふぎゅ?!」

ガツンという嫌な音が鳴り響き、咄嗟にペストは頭上に奔った激痛に涙目になりながら頭を両手で押さえた。そしてその痛みの原因を見て眼を丸くする。

「た、たらい!!」

「盥を落とすギフト【ファーストステップパフォーマー】芸人の第一歩」

完全なネタギフトである。使用回数、残り4回。瑛噎はそんなギフトで勝とうというのだ。馬鹿にしているも程がある。

「ば、馬鹿にしているn——ごげっ!!」

「ははははははっ、良いリアクションだぞペストちゃん! ほれもういつかーい」
「このっ……みゅっ!!」

盥が落ちてくる事が分かっている故に、避けようと移動するペスト。だが、その避けた先でまた盥が落ちてきた。いい加減頭が痛い。だがこのギフトは絶対に相手に盥を落とす物なのだから。

「残り2回か……じゃあこの辺で一旦止めとこうかな」

「つゝつゝ……痛いわね……というか最初のダメージが盥つてどうなのよ……」

「よそ見するなよ」

「！——危ないわね」

瑛唄に気を取られていた傍から、黒ウサギ達の攻撃が来た。だがそれを間一髪紙一重で防ぐペスト。そして視界を広くして冷静になる、とそこに瑛唄の姿はなかった。

「どこへ……むきゅっ?!」

そこへもう馴染みの出来てきた痛みが奔った。4度目、だがこれはギフトじゃない。真上を見ると瑛唄が二つの盥を持ってゆらりと笑っていた。

「ま、まさか……」

「そう、これはさっきお前の頭を打った盥だ。拾って来たぜ」

瑛唄はペストの頭に落ちた後地面へと落下して行った盥を拾ってもう一度上から落とすのだ。これならギフトを使った訳ではないので使用回数には関与して来ない。

「さて、お前はゲームが終わるまでに何回盥を落とされるかな?」

瑛唄はそう言って、ペストの頭にまた盥をぶつけたのだった。



瑛嗶が魔王相手に遊んでいる中、十六夜はヴェーザーと一対一で激闘を繰り広げていた。ペストによって神格を与えられたヴェーザーは大幅にパワーアップしており、その力は十六夜を上回っていた。

拳と身の丈ほどの笛がぶつかりあう度に、その威力は拡散し、地面を、壁を抉った。互いに笑みを浮かべ、この戦いを楽しむ。強き者同士が戦う時、その戦いは拮抗している時ほど両者に戦うことでの悦楽を与える。それこそ、傷ついても苦しくても笑みを浮かべてしまう位に。

傷付ける事が怖い者や戦いたくもない者はそう言った気持ちは分からないが、本当の力を持った者というのはその力を振るえる相手が居る事が何より幸せなのだ。

「ははははっ!!」

「ふはははは!!」

高笑いをしながら拳と笛が激突する。お互いがその威力の高さに後ずさりする。そしてまた地面を蹴ってぶつかる。その繰り返し。

その拳の一撃が地面を抉り、その笛の一撃が木々を薙ぎ払う。当たればお互い一撃必殺の威力を持った攻撃の嵐。防御は最低限に、自分達の攻撃を相手に与える為に少しでも多く攻撃を放つ。

「おらあ!!」

「ぐっ……い！」

拳を放つ十六夜、だがそれをヴェーザーは受け止め、笛によるカウンターで十六夜を吹き飛ばした。地面にぶつかり、砂煙が撒き散らされるが、その煙を掻き消して十六夜は飛び上がった。多少かすり傷が出来ている物の、戦闘には支障ない。

「お返したヴェーザー！」

「なっ……ぐはっ……い！」

不意を打った攻撃でヴェーザーを後退させる十六夜。お互い実力はかなり拮抗していた。

「ははは、いいじゃねーか。だが、まだまだだな。これが神格を得た悪魔の力だ！」

「おわっ!？」

そのパワーアップした速度の蹴りで十六夜はまた吹っ飛ばされてしまった。

「ぐ……ははは、いいねいいね。随分と俺好きなバージョンアップしてきたじゃねーか！」

「そいつはどうも」

「楽しくなってきたぜ。ヴェーザー川の化身、いや……本物のハーメルンの笛吹き！」

十六夜はそう言って、歯を見せながら極々楽しそうに凶悪な笑みを見せたのだった。

罍×24

ハーメルンの笛吹き。それはあまり知られているかと言われれば首を傾げてしまう程度にマイナーな伝承で、内容はともかく名前位なら誰でも聞いた事があるだろう。

笛吹きハーメルンの笛の音を聞いて130人の子供達が親元を離れ、夢遊病の様に一晚の間に消えて行つたその伝承。

だが今回は少し違う。今回現れたハーメルンの笛吹きは全く別の物だ。ペスト、ヴェーザー川、ラッテンフェンガー、シュトロム、この四つの内、黒死病の繁栄によつて元々の伝承に後付けされた所謂付属品が三つ。

まず原因となつた黒死病であるペスト。そしてラッテンフェンガーはネズミを操る道化師だが、これが登場し始めたのは黒死病の最盛期の内からだ。つまり偽物。更に嵐を意味するシュトロムも本物と見せかけ偽物、130万の人間が死んだ理由として、碑文にある丘とはヴェーザー川から続く丘の事を示し、天災による被害もヴェーザー川を示している。

故に、本物のハーメルンの伝承に出てくるのはヴェーザー川。つまり、現在十六夜が戦っているヴェーザーこそが本物のハーメルンの笛吹きである。これが逆廻十六夜の

結論だった。

「なるほど、やっぱりお前はこっちに移籍したらどうだ？ お前は魔王側の方が映えるだろうぜ」

「悪いがお断りだ。魔王側も面白そうではあるが、生憎今は別の目標が有るんでね」

目標。瑛嗶がペルセウスを落とした時に、十六夜は少しだけ不満気味だったのだが、ペルセウスの旗が落ちていく光景を見た時、黒ウサギと決めたのだ。今も上空に広がる満天の大空に、自分達の旗を掲げる、と。

それが今の目標。十六夜は決めた事は貫き通す男だ。

「そうかい……じゃ、とつととくたばれクソ餓鬼!!」

ヴェーザーと十六夜は、再度ぶつかった。



時間は少し戻って、瑛嗶がペストで遊んでいる中、戦況は変わらない物の戦場には変化が起きていた。

ハーメルンの魔書

伝承にあるハーメルンの街をそのまま召喚してみせたのだ。壘に打たれながら街を

召喚する様は、中々滑稽ではあつた物の、これによつて元々設置されて場所が分かつていたステンドガラスの位置が分からなくなり、ペストの力も向上したようだった。時間稼ぎにはかなりの良策であつた。

「なるほど、だからなんだ」

「あだつ！ もうついいい加減止めなさい！」

だがそれでも瑛叟の盃攻撃は止まなかつた。瑛叟が三回ギフトを発動して生まれた三つの盃で頭を打たれた回数、現在23回。芸人にしてもやられ過ぎである。既にペストの行動は盃を避ける事に集中しており、相手を倒そうとは思つてもいない。

ここまで何度か盃をどうにかしようと色々試したのだが、全て駄目だったのだ。

まず黒い霧状の何かでサンドラの火球や黒ウサギの電撃を防いだように盾にした物の、盃はすり抜ける様にして頭を打つた。

次に手を振つて盃を叩き落そうとしたのだが、盃は異常に重く、腕毎頭を打つた。あんなに重かつたのに、頭を打たれた際にはかなり軽く感じる。これにはペストも困惑するばかり。

次にギフトの様に必ず頭を打ってくるわけでは無く、瑛叟が落としてくるのなら避けられるだろうと一度避けてみたのだが、それに不満を抱いた瑛叟は全力投球してきた。目視出来ない速度の盃が頭を打つた。

次に罍自体を破壊してしまおうと考え、罍に攻撃を試みた。が、罍はそんな物効かないといった風に攻撃を無効化し、呆気に取られたペストの頭を打った。

こんな風に何度も罍をどうにかしようとするペストだが、何度やっても最終的に頭を打つてくる罍。そして既にたんこぶまで出来た頭を押さえて涙目を隠せずに逃げる様に飛び回るしかないペスト。瑛嗶はそんな少女へ更なる追撃を加えるべく追いまわす。

完全に不審者に追われる少女の図である。

そして、肝心の仲間である黒ウサギとサンドラはその光景に動けずにいた。敵であるペストに一種の同情を抱き、攻撃できない。サンドラとしてはサラマンドラの仲間を殺されており、憎しみの対象故にかなり複雑な心境だった。

黒ウサギはおろおろするばかりで瑛嗶にやり過ぎだろと言って見た物の、瑛嗶が一時罍落としを止めたら嬉々として襲い掛かってくるペスト。再開したら青褪めた顔で逃走を開始する様になった。止めたくても止められない状況とはこの事だ。

「もういや……痛いっ!」

「ん? 痛い?」

「さっきからそう言ってるじゃない」

「ん……止めて欲しい?」

「止めてくれるの?」

「まあいいだろう」

瑛叻の言葉にはあつと表情を明るくさせるペスト。最早最初のクールキャラが形無しだ。

「んんっ……それじゃあ続けましょう? さっきまでの借りを返してあげる」

ペストは盥を盾の様にして構える瑛叻にそう言つて笑みを浮かべ、黒い霧を放つてきた。

だが、それは盥にぶつかった瞬間に消滅した。驚愕するペスト。瑛叻はそんなペストの顔を見てゆらりと笑い、盥から顔を出して口を開いた。

「驚いた? どういう事か知りたい? 知りたいよね。じゃあ教えてやろう。俺が今回

選んだギフトは盥を落とすギフト「アーティストステップパフォーマー」。そう、盥を落とすだけのギフトだ」

「最初は馬鹿にしているのかと思つたけど馬鹿に出来ないギフトね」

「で、このギフトで生み出される盥にはある程度性質を持たせる事が出来る」

「性質?」

「そう、例えば大きさ。この盥は最小で手の平サイズ、最大でこの街を潰せる位には大きく出来る。例えば能力。生み出す盥にはどういう盥かを指定出来るんだよ。例えば、触

れば能力を無効化出来る鹽とか相手の頭以外すり抜ける鹽、とかさ」

つまり、先程攻撃を無効化したのはギフトを無効化出来る鹽。叩き落そうとしたペストの手をすり抜けたのは、相手の頭以外すり抜ける鹽という訳だ。

案外、使って見ると馬鹿に出来ないギフトである。

「……そんなに凄いギフトなのに、鹽を落とすだけの恩恵って言うのが……なんというか、残念ね」

「その残念な恩恵にお前は23回も頭を打たれた挙句涙目になってたんこぶ作った訳だけどな」

「うるさいっ」

「全く、困ったお子様だ」

瑛嗶はそう言っただけ首を振って肩をすくめた。完全にペストは瑛嗶の手の上で転がされてる。手玉に取られるとはこの事だろう。

「それにしても、まだ諦めないのかお前。そろそろ俺のアイドルになっちゃえよ」

「嫌よ。私にはまだやってない事があるもの」

「なんだよ」

「……そうね、時間稼ぎに教えてあげる。私はハーメルンの笛吹きではなく、14世紀に蔓延した疫病である黒死病で死んだ8000万の死者の群像であり、死の恩恵を黒い風

に乗せて運ぶ神霊よ」

ペストは語る。自身の事を。

「そうなんだ」

瑛嗶は聞く。アイドル面接試験の様な気分で。

「太陽が寒冷期に入って蔓延した黒死病で8000万もの人間が死んだ。私には権限がある、怠惰な太陽に復讐する権限が！」

「なるほど、合格」

「……なにがよ」

「アイドル試験」

「いつ始まったのよー！」

ペストは黒い風を憤慨しながら瑛嗶に叩き付けてくるが、やはり盥で防がれた。

「つーか太陽に復讐か。それくらいアイドルになった後満足するまでやらせてやるっつの」

「+c+」

「つまりあれだろ。白夜叉ちゃんって太陽の主権を持つてるらしいから、このゲームに勝った後で色々痛めつけてやろうとかそんな事を考えてんだろ？ 大丈夫、お前に入る

ユニットには白夜叉ちゃんも入ってるから」

「馬鹿なの？ いえ馬鹿！ あの吸血鬼の苦勞が理解出来たわ。貴方、とてもムカつくわね」

ペストはレテイシアに少しだけ同情しつつ、瑛唄に突っ込みを入れた。このゲームの参加者の中でおそらく唯一人、奇行をしているのが瑛唄だ。一番遊んでいるといってもいい。

「まあ俺の目的と他の目的は違ってるからね。そういう意味ではお前は俺とノーネーム達の二つの勢力を一齐に相手している様なもんだ」

「二対一つのこと……卑怯なのね」

「代わりに人質をくれてやってんだからお互い様だぜ」

「……………」

瑛唄の言葉にペストは黙ってしまった。この雰囲気、最早雑談と同等ではないだろうか？

「それじゃ始めようか。お前の望む、真面目で真面目なちゃんとしたバトルをさ」

瑛唄はそう言って、罍を落としたのだった。

赤くなつたおでこ

さて、覚えているだろうか？ 久遠飛鳥の出会った群体精霊の一匹を。ラッテンフェンガーのコミュニケーションを名乗り、その事で今回の魔王一派の一人、ラッテンの操るネズミに飛鳥每襲われた件を。

あれはラッテンフェンガーを名乗った事への怒りでラッテンが襲撃したのが原因なのだが、現在その群体精霊は何処に行ったのか？

答えは簡単。久遠飛鳥と共に、コミュニケーションラッテンフェンガーの下にいたのだ。

あの最初の魔王襲撃の際、飛鳥はラッテンにより気絶させられ、最終的にラッテンフェンガーに匿われた。そしてそこで見つけたのが、赤い巨兵。ディーンと呼ばれる巨大な鉄の戦士だった。

飛鳥はそこにいたラッテンフェンガーの者達にギフトゲームを仕掛けられた。威光のギフトで、そのディーンを服従してみせると。さすれば、そのディーンによつて飛鳥に勝利を齎すと。

飛鳥はそのゲームに乗り、そして勝った。ディーンを見事服従してみせたのだ。

ディーンのパフォーマンスは凄かった。拳の一発で壁を砕き、その歩みで地を鳴り響かせる。ま

だが、ラッテンはデイーンの性能を侮っていた。その巨体故にそこまでの速度は出せないと思っていたのだ。それは思い違い、デイーンは素早く振り返り、その振り返り様にラッテンをその手を使って掴み上げ、締めつけたのだ。

「がつ……!?!」

「もう良いわ、デイーン」

デイーンは飛鳥の指示に手を緩め、ラッテンを開放する。咳き込むラッテンとは対象的に、飛鳥は仁王立ちでラッテンを見下した。

「これで蹴りあげられた借りは返したわよ? でも、此処で終わりというのは詰まらないでしょう?」

「……………」

「貴方に一曲分の演奏時間をあげる。その笛の音で私に服従しているデイーンを服従してみせなさい」

絶体絶命のラッテンに、飛鳥は強者の台詞でチャンスを与えた。それが出来れば、貴方にも勝利の可能性はあるぞ、と。

「……………いいでしょう。それでは一曲、奏でさせて貰いましょう……………ラッテンフェンガーのハーメルンの笛吹き、とくと御鑑賞あれ」

ラッテンと久遠飛鳥の決着は近い――



また、その頃十六夜とヴェーザーの方はというと

「ぐっ——！」

「どうしたどうしたあ！ 急に大人しくなっちゃまったじゃねえか」

十六夜がもう何度目になるか吹き飛ばされ、地面に叩き付けられていた。大したダメージは無い物の、十六夜はいつしか言葉数も少なくなり、その拳も何処か力が無い。ヴェーザーはそんな十六夜に少し眉を潜めた物の、十六夜は戦意が無くなった訳じゃない。

「気にいらねえな」

「あ？」

気に入らないのだ。戦っている相手、ヴェーザーの行動が

「持ってんだろ？ 俺が懐に入る度に狙ってた隠し玉、これが決まれば俺に勝てるって
いうその気概が、ああ気にいらねえ!!」

「……ちっ……ああ、いいよ。死ね、このクソ餓鬼！」

互いにもう拳と笛の叩きあいもう飽きた。ここからは、一撃必殺。当たれば相手を

砕ける力のぶつかり合いだ。拳を握り、笛を回す。力の余波が互いを包み、風が頬を吹き抜けた。

「おおおおお!!!」

「らああああ!!!」

動きだしは同時。お互いの距離の中心で衝突し、拳と笛は互いの肉体へとその刃を届かせた。

そして、勝利は――

「ちっ……安い挑発なんかに乗るんじゃないぞ……」

十六夜が上がった。

今の一撃で、ヴェーザーの召喚の触媒である身の丈ほどの笛が壊れたのだ。それはヴェーザーがこの箱庭に存在するために必要な媒体。それが破壊されれば、当然、その身は消え失せる。

「そう言うなよ。俺は結構楽しかったぜ？」

「はっ……ま、達者でな」

十六夜の言葉に笑って、短く告げた後ヴェーザーは消えて行った。

十六夜VSヴェーザー 勝者：逆廻十六夜



ラッテンのピンチとヴェーザーの敗北が進んでいた頃、瑛嗶と魔王ペストはとうとう「頑張れ頑張れ」

「」のっ……！」

盪落としては一旦なりを潜め、真面目に戦闘が行なわれていた。だが、その戦闘に黒ウサギとサンドラは参加出来ずにいた。

何故なら、瑛嗶と魔王の間には圧倒的なまでの実力差があったから。

「えいつ」

「あうっ！」

瑛嗶は盪を24回落とした後、激昂したペストに黒い風の攻撃を全て軽々と躲していた。しかも、瑛嗶とペストの距離は1m程しか離れていない。攻撃が全て読まれているのだ、ペストは。

しかも、瑛嗶は攻撃の合間合間にペストの額にデコピンを打ってくる。現在、ペストの額は少し赤くなっていた。

「いい加減にしなさい！」

「おっと」

ペストはその両手を薙ぎ払う様に振って瑛喰の頭を狙うも、瑛喰は上体を反らすことでそれを避ける。瑛喰はスタイルを使える。スタイルとは相手の気持ちを理解し、言葉をお届け、現実的なコミュニケーションを図り、言葉を現実にする技術であり、次元を超えた力だ。故に、言葉の通じる相手には通じるし、言葉の通じない相手には通じない。そして、このスタイルの基礎の基礎。相手の気持ちを理解する部分は、気持ち的理解出来る故に相手の動きが予測出来るという先読みを可能にしていた。

ここで攻撃しよう、という気持ちを読める。ここは一旦下がろう、という気持ちを読める。逃げよう、という気持ちを読める。必殺技を出そう、という気持ちを読める。

全部読めてしまうから、確実に先手が取れるし、動きだす前に止める事も出来る。現在の瑛喰の様に、攻撃を全部躲すことも出来るのだ。

「どうしたペストちゃん。盥も使っていないのに随分と梃子摺ってる様だけどー？」

「うるさい！」

「わー怖い顔。アイドルは笑顔が大事だぜ？」

「ひゃっ………ちよ、やめ………な、さい！」

「っと………少しくすぐったただけじゃないか」

「このセクハラ野郎！」

「いつつ」

ペストとじやれていた瑛喰の頭を背後から誰かが叩いた。いや、瑛喰が敢えて避けなかつたのだ。

そして叩いた相手は、ヴェーザーとの戦いを終えてやってきた十六夜。黒ウサギとサンドラが一件の屋根の上で観戦しているのと、瑛喰の魔王が遊んでいるのを見て頭を抱えたのだが、そうも言つてられないと介入してきたのだ。

「なんだ、十六夜ちゃんじゃないか。終わったの？」

「ああ終わったよ。てかテメエギフトの無効化はどうしたんだよ。なんで盥持つてんだコラ」

「馬鹿かお前は。俺がお前の選んだギフトを素直に使うと思つたか。最初に言つただろう、天邪鬼なんだぜ俺は」

瑛喰と十六夜のやり取りを見て、少しだけ呆気にとられていたペストだが直ぐに気を取りもどして後退した。そして瑛喰の相手が十六夜に変わったのを見て少しだけ安堵した。

「ヴェーザーは負けたのね……ラッテンももうじき消えちゃう、か……もう良いわ。此処で全員、皆殺しにしてあげる」

ペストは先程までのギャグっぽい雰囲気を払拭し、その袖から大量の黒い霧を生み出した。それは、死の風。触れただけで死を運ぶ最悪の力。

「おいおい、殺す程度かよ。俺は殺された程度じゃ死なねえぞ?」

だが、瑛嗶はそんな大量の死の恩恵を見てもゆらりと笑うばかり。十六夜や黒ウサギ、サンドラが驚愕しているなか、瑛嗶だけは余裕淡々とそう言った。

「どうするつもり?」

「どうもしないけど?」

「……ふーん。なら、これで終わりよ!」

ペストはそう言って、街へと死の風を叩き付けた——

魔王系アイドル

黒い風、死を運ぶ風、黒死病を乗せた風、不幸の塊、触れただけで死んでしまうその最悪の恩恵。それは、ペストの袖の中から放たれ街へと降り注がれた。

人々が逃げる。黒い風が迫る。逃げ遅れた者が黒い風に触れる。黒い風が通り過ぎる。後に残るのは傷も無くただ死んでしまった人の残骸。死体が残り、悲しみが生まれる。退避を完了させた者は窓の外で死に絶えた者の死体を見て、その胸の内に不安と恐怖を抱く。そしてその中で少しだけ、自分がああならなくて良かったと安堵を抱き、そんな自分に罪悪感を抱く。

そしてその負の連鎖は続き、最終的に自己嫌悪となり、纏う空気をマイナス面へと変化させる。一人一人がそうなれば、街の中はすぐに暗い雰囲気になる。

また一人、また一人と黒い風に吞まれ、死んでいく。そしてまた自己嫌悪が生まれる。だがそんな中、希望はやってきた。

地を振動させ、その赤い巨体をその二本の足で支えて黒い風を喰いとめた。その行動はその先にいる人々の退避を成功させ、多くの命を救った。

デイン。久遠飛鳥の従える赤い巨兵である。彼女が此処にいますと言う事は、ラッテ

ンは負けたのだ。その笛が奏でる演奏は、久遠飛鳥を魅了したが、デイーンを従える事は出来なかったのだ。

そして敗北したラッテンは自分の身を保つ事が出来ずに消えて行つた。故に、飛鳥は此処にいる。赤い巨兵は此処にいるのだ。

だが、それだけでは駄目だ。この黒い風の原因である黒死斑の魔王はブラックパーチャーまだ存在している。罎で幾ら打たれようと、デコピンで幾ら打たれようと、まだ存在しているのだ。

故に、この黒い風はまだ放たれる可能性がある。根源を断たない限り、その脅威は過ぎ去らないのだ。

流石の赤い巨兵もずっとその死の脅威を押し留めていられるわけではない。久遠飛鳥もそれは理解している。だから飛鳥は期待するしかないのだ。あの人外が魔王を打倒してくれるのを。空に浮かぶ魔王を倒すには地上戦専用とも言えるデイーンでは力不足なのだ。

飛鳥は空を見上げる。そこには空に浮かぶ魔王ベストと屋根の上に立って見上げている瑛喰がいる。他の面々は観戦しているのか参戦しているのか周囲にいるが、対峙している二人は最早一対一。誰にも手出しが出来なかった。

「頼んだわよ……瑛喰」



そしてそんな期待を余所に、やってきたディーンに視線を向けて面白そうにゆらゆらと笑う瑛唄。黒い風によって死んでしまった者にはもう興味が無い様だ。その様子にペストは怪訝な顔をするが、考えてみれば瑛唄と死んだサラマンドラの人材は赤の他人。悲しむ訳もない。

「どう？ 貴方がもたもたと遊んでいるせいで多くの人が死んだわけだけど」

「だからなんだ。俺はこのゲーム中は盥のギフトしか使えないけど終わったら蘇生のギフトでもなんでも使えるんだから関係無いぜ」

「……………蘇生のギフト？」

「Yes、蘇生のギフト。死者を生者に変える恩恵、どうだ驚いたか」

「…………それはもう神の領域よ？ そんな事が出来るとでも思っているの？」

「出来るさ。俺は出来ない事は言わないさ」

瑛唄の言葉は、説得力と真実味を帯びていて、『命の蘇生』なんて馬鹿げた幻想を、現実に変えてしまえると思えてしまう。

目の前にいるのはなんだ、目の前にいるこの男はなんだ、魔王以上に魔王らしく、人間以上に人間らしい。化け物以上に化け物染みていて、弱者以上に弱者の心を知り得て

いる。そんな人間が、存在しても良いのか？ 余りにも存在の次元が違う。神の領域を軽く超えてしまっているじゃないか。

「貴方は……何？」

ペストの問いに、瑛嗶はゆらりと笑う。その吊り上がって弧を描く口元は、背筋を凍らせる。圧倒的な存在を前に、震えが止まらない。

「俺の名前は泉ヶ仙瑛嗶、面白い事が大好きな——唯の人外だよ」

瑛嗶の言葉だけが、静寂の中瑛嗶の言葉だけが響いた。

「さて、なんだかシリアスな雰囲気になったね……それじゃあとりあえず、ほい」
「ほぎゅ!？」

このゲームが始まってからは馴染み深い、盥の音。ペストは降ってきた盥に頭を打たれ、目をチカチカさせながらふらふらとした挙動で頭を押さえた。

「な、な、な……!？」

「さて、そろそろギャラリーも増えてきた事だし……真面目にやろうか——な!？」
「つ——がふつ……!？」

瑛嗶は屋根を蹴って一瞬の内にペストに肉薄した。ペストはそれに対し、揺れる頭で反応し、なんとか防御をと身構えるが、瑛嗶はそんなのお構いなしにペストの細い腹にその拳を叩き付けた。

だが、彼女が後方へ吹き飛ばす事はない。瑛嗶の拳による衝撃は正確に腹を貫き背中から抜けて行った。

衝撃と言う物は基本的に分散する。空中であろうが、拳で殴られた場合後方へ吹き飛ばす事で身体は多少衝撃を分散させるのだ。だが今回は違う。瑛嗶は衝撃によつて後方へ吹き飛ばすのではなく、体内で正確に爆発させたのだ。故に吹き飛ばす、その場で100%のダメージを受けたのだ。

「げほっ……げほっ……！」

「もう一丁！」

「ガッ！」

瑛嗶は咳き込むペストの頭上へその足を上げ、前屈みになったペストの後頭部に踵落としを決めた。今度は地面へと叩き落され、地面に小さなクレーターを作った。

「ぐ……うう……がはっ……！」

ペストはそのクレーターの中心で蹲りながら血を吐く。その身体には今までにない程の激痛と立ち上がれない程のダメージが通っていた。

足に力が入らず、ただ這い蹲るのみ。ペストはたったの二撃で完全に満身創痍になってしまった。

「さーて、どうするかな？」

「うぐつ……!」

そんなペストの前に、瑛嗶が下りてきた。最早ペストにとって瑛嗶のゆらりと笑う表情は恐怖の対象でしかない。盥でふざけてくれた方がまだマシだ。

「あ……あ……ひ……!」

「おやおや、どうしたんだペストちゃん……そんなに怯えた顔をして。ああ、そうか盥を落とされないか不安なんだね? 大丈夫、俺はもう盥は落とさないよ!」

「……や、やめ……こ、こないで……!」

「おいおい、言っただろう。俺はお前をアイドルにするつて」

「なる、なるから……アイドルでも何でもなるから……殺さないで……許して……!」

ペストはまだ死ぬわけにはいかない。太陽に復讐もしていないのに死ぬわけにはいかないのだ。だが、この状況は下手を打てば瑛嗶の気まぐれで死んでしまうだろう。生殺与奪を完全に瑛嗶が握っている。

「そうかそうか! なってくれるか、いやー良かった」

「……………つ」

瑛嗶の裏表のない純粋な笑みにペストは殺されないで済む、と口元を少しだけ緩ませた。これでゲームは完全に敗北だろう。だが先程の瑛嗶の言葉を顧みてみれば、白夜叉への復讐の機会はあるだろう。ならば、此処は負けを認めて生き延びよう。生きていれ

ば幾らでも取り返しは付くのだ。

「でも、許さない」

「ふぎゅ!?!」

ペストは頭上からの衝撃に悲鳴を上げる。その原因は最早見なれた金属の物体、盥。彼女はその衝撃に意識が闇に沈んで行く。薄れゆく意識の中、聞こえてきたのは

「魔王系アイドル、ゲットだぜ（笑）」

そんな瑛嗶の言葉だった。

後は和服ロリのみ

「はい、ということとで晴れて俺の所有物となりました。ペストちゃんです。愛称は、ねこちゃんです。よろしくね！」

「……………」

その後、というかペストとの勝負はかなり呆気なく、味気なく琒嗶達の勝利で終わった。原作では消滅したペストだが、琒嗶によって生かされたので今では仏頂面のまま琒嗶に付き従っている。負けた方が勝った方の所有物、というルールは守らなければならぬ。ギフトゲームにおける魔王だからこそ、ルールは誰よりも厳格であらねばならぬのだから。

また、今回のゲームの中で黒い風の被害者となったサラマンドラの死者は未だ死んだままだ。何故なら、琒嗶自身が蘇生のギフトを使っていないから。死んだ奴を生き返らすかどうかを決めるのも勝者である琒嗶だ。

それに、今回の魔王の一件はサンドラを除くサラマンドラのメンバーが仕組んだ事だったのだ。ルーキー魔王とルーキーフロアマスターの勝負となれば、名を売る為にはもってこいであり、その為ならば多少の死者は覚悟の上だというサンドラ達の意志だっ

たのだ。つまり、死んだのは自業自得、魔王と戦う事になったのも自業自得、その為にサウザンドアイズを利用したのも、ノーネームが危険に晒されたのも、全てサラマンドラの負うべき責任なのだ。

「つーかそいつ自由にしといて大丈夫なのかよ。隙を見て俺らを殺すかもしれねえじゃねえか」

「大丈夫だよ十六夜ちゃん。な？ ペストちゃん」

「……ええ、私は貴方達に危害を加えないわ」

「……信用ならねえが、瑛唄が管理するならまあ大丈夫……か？」

十六夜は頬杖を着きながらペストの言葉をとりあえず納得した。そして瑛唄の隣にはレティシアがおり、ペストと並んで立たされている。アイドルユニット結成までは近い。残るは白夜叉唯一人、補欠でサンドラと言ったところか。

「さて、それじゃあ練習を始めるよ。ほら、いくぞダブルロリ」

「その呼び名止めて」

「そうだマスター。止めて」

「やなこった」

瑛唄は笑う。冗談半分で面白半分で始めたアイドル育成計画だが、此処まで来ると笑えて来る。

「とういか、瑛嗶つてロリコン？ 今思えば少女を二人所有物にしてるけど……」

「俺からしたら皆ガキだよ。年の差を考えろよ耀ちゃん」

「……それもそうだね」

「まあそこからいつても何故平均的に幼い子を起用するかというと、そっちの方が需要があるからだよ。考えてもみろ、高校生位の年齢をアイドルとして育てていく場合、ブレイクするまでの期間で確実に高校生では無くなってる。その点幼女でやればブレイクまでの時間が掛かっても最悪中高生で収まるだろう？ それに、大人よりもやや純粹な少女を押し込んだ方が人気が出やすいんだよ。この二人はその点永遠にロリ容姿のままだし」

「な、なるほど……瑛嗶、後ろ後ろ」

「えっ？」

瑛嗶は耀に言われて後ろを振り向く。そこには青筋を立てて明らかに怒っているレディシアとペストのダブルロリコンビ。

「どうした二人とも」

「私は本来の姿になれば胸も大きくなるし背も高い！ ロリじゃない！」

「私だつて将来的に見れば成長するわ。永遠のロリとかお断りよ！」

「永遠の幼女つて奴か……過去に一人だけあった事があるよ。将来的にも成長の余地が

無い彼女は……いつまでも少女のまままでその生涯を終えた……」

瑛嗶の言葉で二人は固まった。

(ぜ、前例がある、だど!?)

二人は案外、仲が良い様だ。

◇ ◇ ◇

さて、その後の事。瑛嗶はサラマンドラのサンドラより頼みごとをされていた。勿論その頼みとは今回の死者を出来る事なら生き返らせて欲しいということ。

サンドラは瑛嗶が蘇生のギフトを持っていると言っているのを聞いていたのだ。故に、その力に望みを託したいのだ。

「どうでしょうか……?」

「えー……」

この場にいるのはサンドラとマンドラと瑛嗶のみ。瑛嗶はマンドラを見て少し考えた。

マンドラはそんな瑛嗶に少し申し訳なさそうに顔を俯かせた。

「うーん……あ」

瑛嗶は面白い物を見つけた様に口元をゆらりと吊りあげた。

「いいよ。条件付きでやってあげよう」

「条件……とはなんでしようか？」

「お前、俺の作るアイドルユニットに入れ」

瑛嗶の言葉にサンドラは唾然とし、マンドラは絶句した。フロアマスターがアイドルになる。前代未聞だ。

「き、貴様！ そ、そんなこと許されると思って……」

「おいおいシスコン。200人以上の命と引き換えだぜ？ それくらやって見せろよフロアマスター」

「……わ、分かりました……ただ私もフロアマスターとしての業務もありますので、その合間でいいのなら」

「オツケー、それで行こう。それじゃあ生き返らせとくから後で確認しとけ。ちゃんと生き返ってたら、その時は約束を守れよ？」

「御旗に誓って」

「ん、ならいいんだ」

瑛嗶はそう言って、部屋を出て行った。

こうして瑛嗶は、アイドルユニットをほぼ完成間近まで作りあげたのだった。

あれ?・神様どしたの?

さて、前書きの通り瑛嗶弱体化の話だぜ。一人称は俺こと神様だ。

え? 誰だお前つて? 俺は神界の偶然で死んでしまった瑛嗶を転生させた神様だよ。ハンターハンターに転生させてからというもの、ずっと瑛嗶の姿を見て楽しんでたんだけどね、リリカルなのは、めだかボックスと転生させて唐突に瑛嗶が姿を消したもんだから随分と焦ったよ。また変な偶然が起こって瑛嗶が地獄巡りでもしてるんじゃないかと思っちゃったぜ。

さすがの瑛嗶も地獄に行けばちよつと危ういからねえ。あそこの閻魔とか悪魔とか色々規格外だから。一般兵ですら瑛嗶を殺しかねないし……まあ神である俺から力を与えられてるし300回くらい殺される頃にはもつと強くなってるだろうし、問題はなにか。

でだよ。問題は瑛嗶がめだかボックスの世界から俺の干渉も無しに別世界に移動したことだ。正直、そんなことされちやあこつちも困るんだよ。なんせ、瑛嗶の魂は神の世界の犯した罪で俺が永遠に管理しないとイケないことになってるんだ。消滅させず、自由に生きさせ、そして満足の行くまでずっと、俺と瑛嗶は一蓮托生。瑛嗶が満足した

その時は、その魂を輪廻の輪に組み込んで記憶も力もなくもう一度まともな世界で生まれ変わらせる。その時が俺と瑛嗶の関係の終わりだ。

さて、それじゃあ今回は瑛嗶が別世界に移ってしまった訳だし、遅ればせながらちゃんとした形式を取ろう。

「瑛嗶、久しぶりだね」

「ああ、神様……どうしたよ。あの世界はまだ終わってない筈だけど？」

そんなわけで瑛嗶を呼び出した。世界を移動するのは良いけど俺に断りも無しってのは頂けない。

「俺に断りも無く転生すんなし。めだかボックスから別の物語に移るのはいいけど、その前に持つてる力の整理をしないと」

「あー……そういえばリリカルなのはからめだかボックスに移った時は魔法を回収したっけ？」

「ハンターハンターの時も念能力を回収しただろ？」

「なるほど、ってことは……」

「ああ、スキルとスタイル……めだかボックスで手に入れた力は回収させてもらう」

そう、世界Aの力は世界Bでは使えない。これまで使えていたのは単にあの転移に使った手紙が簡単な最適化を行なったただけだ。故に、瑛嗶のスキルはギフトとして使え

た。

だがこれから時間が経てばボロが出る。瑛嗶の力はギフトとして使うには大きすぎたんだよ。なんせ、スキルは恩恵じゃねえし。

「おっけー。あーあ、それじゃあ2000京のスキルやスタイルともおさらばか」

「まあそういうなよ。身体能力はそのままだし、ちゃんとあの世界の力であるギフトもやるから」

そう、瑛嗶が移った世界もまたアニメ・漫画の世界。ならばその世界に合った力を与えないとね。幸いなことにあの世界は修羅神仏によつて恩恵を与えられる事で力を持つているようだし、腕が鳴るぜ。

「さんくー」

「じゃ、スキルやスタイルは回収つと………で、ギフトは戻ってから確認しな。とびっきりの恩恵をやるよ」

瑛嗶はいつもみたいにゆらりと笑つて消えて行つた。最適化もちやんとやつてやつたし……ギフトを考えようか。俺は神様だ、一蓮托生の関係な内は瑛嗶をとびきり鼻負してやるよ。



「ふむ……盥遊びも出来なくなるかあ……ま、このギフトも中々おもしろいじゃないか」
ひらひらと着物の裾を揺らして、目の前で驚異のシンクロ率で踊るレイシアとペストを見ながら瑛嗶はゆらりと笑った。

「ほらほら、そこもつと手を伸ばしてー」

「はいっ」

とんでもなく凄い光景である。純血の吸血鬼と黒死斑の魔王が瑛嗶手製のトレーニングウェアを着用して踊っている。その頬を汗が伝い、息も少し荒いとその眼は輝いていた。

（あれ？）

（なんだか……）

（少しだけ……）

（楽しい……かも）

瑛嗶のレッスンは初期段階では強制的だったものの、時間が経つにつれてペストもレイシアもサンドラも中々楽しむようになってきた。やはり汗を掻くのはどの時代どの種族でも良い物らしい。

「はい、ちよつと休憩。ほら差し入れのスポーツドリンクだ。休憩終わったら次は発声

練習だ」

「はいー!」

「こんにちは、瑛嗶さん!」

「おーサンドラちゃん。仕事は終わったのか?」

「はい! マンドラ兄様の協力も有って最近は落ちついて来ました」

「そうか。それじゃあ少し準備体操をしてくれ。二人の休憩が終わったら発声練習だから」

「わかりました」

瑛嗶のレッスンは三人をアイドルとして確実に育成している。まだまだ最初の段階だがそれぞれのスペックがかなり高い上に呑みこみも早いので随分と成長が早い。この分ならお披露目も早そうだ。

「さて、これからどうなるかな?」

瑛嗶の新しいギフトのお披露目も、近いだろう。

原作入手までの時間稼ぎ アイドルへの道

アイドルとは、基本的に民衆の憧れであり輝きを持つ素材の事を言う。元々は偶像という意味を持つ言葉だったのだが、今では変わって若者の人気者というのが一般的な解釈だ。

昨今、このアイドルという物は基本的に若い少女達なる傾向にある。勿論男性アイドルというものもあるし、彼らも一部の一般女性から人気を得ている。だが基本的に現代に存在するアイドルは比較的女性が多いのだ。

今でいうA○B48やモ○クロなんかがそれに当たる。彼女達は今や現実世界での大人気アイドルであり、そのメンバーの中からは女優やソロデビューを達成した者もいる。

さて、そんな現実世界でも普及しているアイドルという存在。嗚呼はそれを二次元世界のキャラクターで作ろうとしていた。メンバーはどれをとつても美少女である四人。黒死斑の魔王を始め、純血の吸血鬼、白夜の精霊、火龍の主権者と選り取り見取りな有名名揃いである。彼女達のどれもが格ある実力者であり、その力は箱庭の中でも上から

数えた方が早い方だろう。

そしてその四人をまとめ、育成していくのはこの物語の主人公。もはや語るまでもない人外の泉ヶ仙瑗である。かつては2000京のスキルや言葉によるスタイルという凄まじいまでのチートを持つていたのだが、今ではそれらは神によつて回収され、別のギフトを与えられている。とはいえチートには変わりないのだが。

そんな瑗のプロデュースする四人の少女達は今日も懸命にレッスンしていた。

「とは言つても、白夜叉ちゃんはまだなんだけどねえ」

「はっ……はっ……はっ……」

「ふっ……ふっ……」

「はあ……はあ……はあ……」

瑗の目の前で色違いながらお揃いのトレーニングウェアを着て汗を流しながらダンスレッスンに励むのは、白夜の精霊白夜叉を除く、黒死斑の魔王ペスト、純血の吸血鬼レティシア、火龍の主権者サンドラの三人だ。かなり疲弊しているようだが、流石の高スペックの様で、まだ余裕がありそうだ。

膝に手を着いて汗を拭うペストやトレーニングウェアの胸の部分をつ張つて汗を拭うレティシア、タオルを使って汗を拭うサンドラの瞳は輝いており、レッスンをかなり楽しんでるようだった。

「はいはい、それじゃあ少し休憩な。サンドラちゃんはその戻らないといけないんじゃないか？」

「はあ……はあ……あ、はい。それでは私はそろそろ戻りますね。お疲れ様です」

「お疲れ、フロアマスター」

「お疲れ様だ、サンドラ」

「うん！ 二人共頑張ってるね！」

サンドラはそう言って帰って行った。彼女は琺瑯の所有物という訳ではないので、こうして時間の合間合間でレッスンに参加しているのだ。最近では十六夜達が火龍誕生祭の後仲間となったラツテンフェンガーの群体精霊、飛鳥命名メルンの力で土地の命を復活させようと畑を耕したり肥料を集めたりと頑張っている中、そのアイドルとしての実力を伸ばしていた。

「最近では大分動けるようになってきたねえ」

「く……く……ふう……そう？」

「うむ……ぷはっ……私もそう思う。マスターの思い付きから始まったけれど、これは中々楽しい物がある」

「それには同意するわね。結構楽しいじゃない、アイドルも」

琺瑯は二人の言葉、特にペストの言葉にクスツと笑った。疫病の魔王であるペストが

健康的なアイドル活動をしているというのは中々に滑稽だった。

「それにしても、白夜叉ちゃんをどうやって引き込むかねえ……」

「白夜叉を仲間に引き込むのは難しいわよ？」

「マスターなら強引にやり遂げてしまうのだろうけど」

レティシアの言葉にペストが苦笑する。瑛嗶は何処吹く風で口笛を吹いた。

「それに、いざとなれば2000京のギフトでどうにでも出来るだろう？」

「初耳なんだけどそれ、ねえ2000京ってなに？ 私はそんな化け物相手に玩具にするとか言ったの？ ねえねえ」

「今更何言ってるんだペスト。マスターは最初から言ってたじゃないか、人外だつて」

「なんで貴方はそんなこれくらい常識でしょ？ みたいな反応するの？ 私がおかしいの？」

「2000京のギフトなんて序の口だぞ。なんとこのマスターは3兆歳を超えた爺なんだ」

「3兆歳？ どんだけ生きてるのよ。とっととくたばりなさいよ」

「ははは、言ってくれるなダブルロリ」

「その呼び方は止めろ！」

瑛嗶の人外性を知って更にキャラクターを崩壊させるペストだが、レティシアはその

上を行つた。いや下に行つたのか。

「とはいえ、俺はもう2000京のギフトは持つてないけどな」

「え？ どういう事だ？」

「いやー、俺のギフトは元々スキルつて言つてね、神様がくれたもんなんだけど……回収されちゃつたんだよ。今俺の持つてるギフトは一つだよ」

瑛嗶はギフトカードを2本の指で挟んでそう言つた。ゆらゆら笑いながら見せるそのギフトカードの中心に書かれたギフトネームは二人には見えなかつた。だが瑛嗶はそのギフトネームを見て心底面白そうに笑う。早速使つて見たいと思うが、別に実験しようとは思わなかつた。

「でも3兆歳つていうのは本当なんでしょう？」

「本当だよ。少しばかり生き過ぎた気もするけど」

「いや生き過ぎでしょう。精々1億年辺りで死んでおけば良かったのに」

「ほお、生意気言うじやないかシングルロリ。今じゃそんな爺の所有物の癖に」

「貴方に対して奴隷の様に振る舞つても貴方は面白くないでしょう？ レテイシアに聞いたわ」

「良く分かつてるじやないか」

どうやらレテイシアとペストは名前呼び合う位には親睦を深めている様だ。瑛嗶

もメンバー同士の交流が深まった事に関しては良い事だと頷いた。

「ふう、さて休憩は此処までだ。さあ続きを始めよう。Bメロの部分とサビの部分、少し動きが合っていないから練習しようか。ほれ、ポジション付いて」

「ええ」

「分かった」

「サンドラちゃんと白夜叉ちゃんも一緒に踊る事になるんだから、ある程度考えて動く事、いいな？」

「分かった」

「じゃ、スタート」

瑛夏の合図と共に、二人は同時に動き出した。

十六夜とレティシア

瑛嘎のアイドル教育は日々行なわれている物の、24時間365日ずっと行なわれるわけでは、勿論ない。行なわれる時間は決められており、レッスンの時間はサンドラのスケジュールも見て3，4時間程だ。

つまり、アイドル候補としての時間はその3，4時間程であり、その他は瑛嘎もあまり命令をしたりしないので自由時間はかなり多かった。

そんな中、瑛嘎の所有物たるレティシアやペストの生活とえば、かなり自由気ままなものだった。

基本的にペストは瑛嘎と一緒にいるようにしているらしく、最早十六夜達の認識としては瑛嘎とペストのペアはセットと考えられている。

そしてレティシアの方はかなり真面目な性格故か、仕事が無いと落ちつかないのか、それは分からないが瑛嘎という時間よりは黒ウサギ達と居る方が遥かに多かった。

今回はそんなレティシアの日常に視点を当てて行こうと思う。



「は？ 瑛夏の奴ギフト失っちゃったのか？」

「正確にはマスターの了承の下本来の持ち主に返上したようだ」

「おいおい瑛夏はそれで良いのかよ」

「マスターはいつも通り笑ってたよ。元々マスターにとって2000京のギフトなど手品の様な物だったようだ。特に大事でもないらしい」

「ほお……」

「ということでもマスターの保有するギフトは一つになった」

現在、レティシアは十六夜と共に談話室でそんな会話をしていた。

ああちなみにこの日常編は時系列が関係していない。あくまで番外編の様な物で、本編には関与しないのでその所宜しく。

「成程。つてことはかなり弱くなったって事か？」

「いや……案外そうでもなさそうだ。私もそう思つてペストと一緒にマスターに組み手を挑んでみたのだが……」

「どうだったんだ？」

「二対一にも関わらず瞬殺されてしまった。両手を使わせる事も出来なかつたよ」

その言葉に十六夜は眼を丸くした。両手を使わずに魔王と吸血鬼のコンビを瞬殺。

そんな縛りプレイが自分にも可能かと問われれば、無理だ。むしろ負ける可能性もある。琰嗶によってその脅威は去ったとはいえ、ペストのギフトにはなんら支障がない上に、レティシアも自分より遙かに長い年月の中で魔王と呼ばれた吸血鬼だ。そんな二人が組んだ時の実力は、計り知れない。

「つてことはこの先も琰嗶に頼つて良さそうだな。つつても、最近はヴェーザーと戦つたりして楽しませてもらったけどな。ヤハハっ」

十六夜はそう言つて歯を見せて笑う。その表情は純粹に快樂を貪っている様な快樂主義者に相応しい純粹な笑みだった。

十六夜もまた高い実力と大きな力を持つ少年。琰嗶曰く、主人公と呼ばれる存在のことだ。

「ははは、それは良かった。元箱庭の騎士として、この世界を楽しんでもらっているのなら重畳だな」

「ああ。つとそうだ、今琰嗶の奴はどうしてんだ？」

「ペストと一緒に風呂場にカメラを仕掛けに行つたが」

「そうなのk……止めろよ！」

「え？ いやそれくらい別に……」

「お前大分琰嗶に毒されてんなあオイ！」

十六夜はそう言ってレティシアに驚愕する。最初に出会った頃のレティシアは結構まともな性格をしていた筈なのだが、この数日ですっかり絜に汚染させてしまっている。故に、風呂場にカメラという犯罪に寛容になっている事が驚きだった。

「いや女子風呂では無く男子風呂の方を……」

「何故敢えてそっちに行つたんだよ!?!」

「十六夜の裸を取つて将来的に始めるアイドルグッズ販売店に置くらしい。三枚買うと私達のプレミアム水着プロマイドがランダムで貰えるように設定するのだと」

「確かお前とサンドラとペストと白夜又だったよな……つてことはコンプリートするつもりなら最低でも十二枚買わないと行けねーのかよ！ 俺の裸を何に転用してんだコラ！」

「この世界は地球とは違うから肖像権とか言えねーだろわはは、と言つてた」

レティシアの言葉に十六夜は走りだす。向かった先は風呂場、狙いは絜とペストの仕掛けるカメラの回収だ。アイドルデビューした場合、四人の容姿は十六夜主観で見てもかなり整っているのだから、多くのファンがつくだろう。その内、コアなファンが自分の裸体映像を買つて行く。最悪、ホモやゲイと呼ばれる人種が買つていくかもしれない。背筋が凍る話だ。

「おおおおおおおううかあああああああ……!!!」

ドップラー効果を巻き起こしながら駆けて行く十六夜の後ろ姿を見ながら、レティシアは一人、ぼりぼりと頬を掻きながら呟く。

「……本当はもう撮影済みというのは……言わない方が良さそうだ」

懐からレティシアが取り出したのは、十六夜の裸体が瑛叟の編集で美化された表紙のDVD。タイトルは『異世界美少年お風呂日記〜俺の裸に……酔いしれな！〜』だった。

黒ウサギのちよつと恥ずかしい夢

時刻は深夜。地球では殆どの人々が就寝し、明日の為に活力を充電する時間である。そしてそれは箱庭でも変わらず、ノーネームのメンバーはそれぞれの寝場所で睡眠を取っていた。

その中で起きているのは人間を止めて最早睡眠を必要としなくなった瑛喰と夜型の生物である吸血鬼のレティシアの二人だけだ。その二人も夜は別段何かしなければならぬ事がある訳でも無いので談話室でテーブルを挟み、箱庭だけにカードゲームやボードゲームを雑談を交えてやっていた。

「ふむ、チェックメイト……か。これで私の38戦38敗だな」

「俺に勝つならもう少し意外性のある打ち方をするんだな」

「はあ……箱庭の騎士もこの化け物には勝てないか……全く黒ウサギも面倒な奴を呼び出したものだ」

「そのおかげでお前も此処に戻ってこれたんだけどな」

「違うない」

レティシアは先程までやっていたチェスの駒を片付けながらジト目で瑛喰を見てそ

んな会話をする。そして最後には嘲笑して片付けたチェスのボードと駒をふつと消した。

瑛嗶はそんなレティシアに意地悪そうに笑ってソファの背もたれに身を任せた。

「それにしても、こういう風に夜を過ごして数日。そろそろやる事も尽きてきたな」

「夜を過ごすってなんだかエロい響きだよな」

「マスターはこんな幼い私とそういう意味で夜を過ごしたのか？」

「まさか。この作品内でそんな生々しい展開がある訳ないだろ」

「まあそのつもりだったら私はマスターとの距離をどう測って良いか分からないからな」

若干のメタ発言があった物の、そんな会話をする二人は中々に気があっているようだ。

「さて……それじゃあゲームをしよう。この箱庭らしく、人外と吸血鬼のギフトゲームを」

「どんな？」

「ん、こんな」

瑛嗶がそう言うと、ギアスロールが生み出された――



場面変わってここは黒ウサギの寝室。月のウサギであり箱庭の貴族である黒ウサギにも、睡眠は必要で、ベッドに入ってすやすやと寝息を立てていた。

「う〜ん……」

「おい、ウサギちゃん。起きろ」

「はえ？ うう……ん……どうしたんれすか……瑛唄さん」

黒ウサギは眠気眼を擦りながら上体を起こし、若干舌が回っていない声を上げた。そんな黒ウサギの隣には瑛唄が立っていて、いつも見たいな笑みが無い事に少しだけ首を傾げる。何か起きたのかと寝起きながら心配になる辺り、黒ウサギの人格が分かるだろう。

「どうした、じゃないだろ？」

「え……んなつ!? おおおおお、お、瑛唄さん!? 一体何を!」

瑛唄はベッドの上で上体を起こした黒ウサギを押し倒してその上に乗った。黒ウサギはこの急展開に付いていけずに慌てふためく。寝起きだから体温が高いのか顔も髪も赤くして瑛唄の身体を押し返そうとする。だが全然押し返せていない。瑛唄との力の差が顕著に出ている。

「いやいや、考えてもみるよ。お前みたいなたイルの良い美人がいるのに、なにもしないなんてそれこそ失礼だろう」

「いや、あの、美人だなんてその、えええええ……!」

「ほら、こんなに顔を赤くして……可愛い奴だなあ」

「おおお、瑛唄しゃん! おち、おち、落ちついてくだ……あのその……!」

「慌てる様も、可愛らしい」

瑛唄がそう言つて黒ウサギの顎に手を添える。そしてそのまま黒ウサギの寝間着のボタンを上から外して行く。

第一ボタンを外せばその綺麗な鎖骨が見え、第二ボタンを外せば胸元が覗く。第三ボタンを外せば黒い下着と共に胸が全開に、第四ボタンを外せばおへそが現れ、第五ボタンを外せば上半身が全て露わになる。

瑛唄は前が開いた寝間着を広げ、その白い肌におへそ辺りから触れるか触れないかの様な微妙なタッチですーっと胸の下まで指を這わせた。

「ひやつ……う、ん……や、やめ……」

「可愛い声だ」

瑛唄は黒ウサギの耳元に口を近づけて息を吹きかける様にそう言う。そして黒ウサギはそんな瑛唄の攻めに甘美な喘ぎ声を上げるしかなかった。

瑛嗶の為すがまま、その抵抗は次第に微かな物へと変わっていく。

「は……………あ……………はあ……………はあ……………く……………ん……………!」

羞恥心と瑛嗶の攻めに頬を紅潮させ、若干汗ばむ黒ウサギ。瑛嗶はそんな黒ウサギの頬に手を当てて髪をすつと掻き上げた。

「ウサギちゃん。愛してるよ」

「瑛嗶……………さん」

そして瑛嗶の唇が黒ウサギの唇に、そつと触れた——

「はっ!?!」

——ところで黒ウサギは目が覚めた。

「はっ……………はっ……………はっ……………はっ……………ゆ、夢でございませうか……………私つたらなんて夢を……………」

夢才チ。最初に瑛嗶が言っている通り、そんな生々しい展開がこの作品にある訳が無い。

「はあ……………まだこんな時間ですか……………でもすつかり目が覚めてしまいました……………うう、瑛嗶さんにどんな顔をして会えば良いのやら」

黒ウサギはそう言って汗ばんだ身体を拭く為にタオルを出し、寝間着を脱いで拭いて

いく。そして何時もの様に露出の高い衣装を着て部屋を出た。

向かう先は談話室。まだ空は明るくなっていないが紅茶でも入れて飲もうと思ったのだ。それに、今ならレティシアが起きているだろうと考えたのだ。

「はあ……」

黒ウサギは溜め息をついて談話室の扉を開け、中に入った。そこには瑛嗶とレティシアが向かい合って座っており、その視線は此方へと向いていた。

「ほら、俺の勝ちだ」

「ふむ、黒ウサギが起きてくるとは予想外だったな……まあ仕方ない。黒ウサギも座ると良い、紅茶を淹れてくる」

「あ、はい。ありがとうございます」

黒ウサギは二人の会話がどんなものか分からないが、言われるままに瑛嗶の対面座った。そしてレティシアが紅茶を入れるべく部屋を出て行くと、瑛嗶と二人きりである事に気付いた。

「……………」

「……………」

「どうしたよウサギちゃん」

「ひゃいつ!? い、いえなんでもありません!」

気まずかった。少なくとも黒ウサギにとってはこの瑛嗶と二人きりという状況が先程の夢と相まってかなり気まずかった。眼を合わせる事も出来ず、黒ウサギは視線を下に落としてばかりだ。

「あ、あの！ さっきのレティシア様との会話はど、どういう……？」

それでも勇気を振り絞って瑛嗶に話題を振った。瑛嗶とレティシアは勝負をしていたようで、黒ウサギが来た事で瑛嗶が勝ったようだが、どういう内容なのかは分からなかった。

「ん、ああ。簡単なギフトゲームだよ。俺とレティシアちゃんで賭けをしたんだよ。朝までにこの談話室に誰かが起きてきたら俺の勝ち、起きて来なかったらレティシアちゃんの勝ちっていうね。だからウサギちゃんが起きてきたから俺の勝ちで、レティシアちゃんは負けた代償として紅茶を淹れに行ったのさ」

「な、なるほど……」

とすると、自分が起きたのはまんざら瑛嗶と関わりの無い事では無かったらしい。黒ウサギは先程の夢も瑛嗶が見せたのではないかと少し疑いの眼を向けた。

「ん？」

「あ、あの……先程私が見た夢は瑛嗶さんが見せたんですか？ 私を起こす為に……」

「ははは、なんの夢を見たのかはさておき俺はそんな事はしてないぜ。大体、今の俺には

そんな事出来ないし」

「え？」

「2000京のギフトは神様に返上したからね。今の俺にあるギフトは一つだけだ」
「そうなんですか？ あれ？ ってことは……!?!」

黒ウサギは瑛嗶のギフトが消えた事には驚きだが、それ以上に羞恥心が湧きあがってきた。先程の夢は瑛嗶が何もしていないのなら自分自身が見せた事になる。

夢は現実で体験した事と自分の妄想や願いが混ざり、無意識下で望んでいる展開を見せたりする。それくらいは黒ウサギも知っている。が、それが本当なら黒ウサギは瑛嗶あに襲なわれる展開なを無意識に望んでいるという事になる。

「あ、あう……」

黒ウサギはレイシアが紅茶を持って来た後も、しばらく顔と髪を赤くして沈黙していたのだが、瑛嗶とレイシアは敢えてそれには触れなかったのだった。

修行という名の虐め

ギフトを使うのはどのギフトゲームでも普通な事で、むしろ以前の瑛嗶に課せられたギフトを制限するようなルールは普通はない。ギフトはあくまでその人物の力であり、それを縛るなど対等ではないからだ。

ゲームを行なう側として、ゲームを開催する側として、どちらの側であろうと全力を出せない相手を倒して楽しいだろうか。

例えばわざと負けて貰って嬉しいだろうか？ 例えばじゃんけんで自分は二つの手を封じてグーだけを出すから勝っても良いぜと言われて嬉しいだろうか？ つまり、そういうこと。瑛嗶がギフトを制限させられた際は、あくまで実力差が圧倒的だったからだ。

でも、今の瑛嗶はギフトを一つしか持つてないのでギフトを縛られる事はない。これを縛れば最悪後味の悪い勝負になるのだ。

「つまり、今なら勝てるかもよ？ そのデインでもなんでも使えばさ」
「……」

対峙しているのは瑛嗶と飛鳥。デインを従えたとはいえ飛鳥自身が弱いことには

変わらない。故に瑛嗶との修行は不定期ながら続いているのだ。

最近ではお互いギフトを使っても良いという条件で模擬戦をするばかりだったのだが、瑛嗶のギフトが一つになってからは初めてなのだ。そして飛鳥がディーンを従えてからも初めての修行。

瑛嗶は戦闘を手段を幾つも失い、逆に飛鳥はディーンという最高の武器を手に入れた。確かにこれなら飛鳥にも分がある様に見える。

「……そう、ね。いいわ、それならこの世界に来てからというもの、貴方に対してたまりにたまった鬱憤を晴らしてあげる。貴方に最初に敗北を送るのはこの私とディーンよ！」

「いいね、出来るもんならやってみろよ。お前程度、ギフトを使わなくても倒せるぞ。お嬢ちゃん」

飛鳥は傲慢に笑い、瑛嗶はゆらりと笑った。ディーンに乗っているせいで瑛嗶が飛鳥を見上げる形になるが、飛鳥は瑛嗶が自分よりも高みから見下ろしている様な錯覚を得た。

「さあ始めようか。扱きの時間だ」

瑛嗶のその言葉と同時に、飛鳥はディーンを動かし、瑛嗶はそれに対して迎え撃った。



ペストとレティシアは瑛唄による指導でアイドルを目指す少女達であり、それ以前に瑛唄の所有物だ。隸属させられた魔王と吸血鬼。瑛唄がこの世界で行なった真面目なギフトゲームはルイオスの時とペストの時の二回。他はかなり簡単なお互いに不利益にならない程度のギフトゲームだ。

そして瑛唄はその二回でとんでもなく大きな物を手に入れている。箱庭に来てからまだ数週、とんでもない順応性だ。

「マスターはどこだろうか？」

「知らないけど、どうせ何処かで遊んでるんでしょ」

「ふむ……案外飛鳥や黒ウサギなんかと一緒にいるかもしれないな」

「あの金髪の男とかは候補に入らないの？」

「十六夜はマスターに入浴シーン撮られてからデータを虎視眈々と狙っているからない」

「成程ね」

二人の幼女がきよろきよろと周りを見渡して話す。その様子は中々微笑ましい物があつたのだが、その中身は吸血鬼と魔王だ。下手に関われば命はない。

「あ、リリ。瑛嗶を見なかったか？」

「レティシア様！ 瑛嗶さんですか？ 確か飛鳥さんと修行に行くつて中庭の方へ行き
ましたよ」

「ありがとう」

きつねの獣人娘であるリリに瑛嗶の行先を聞いて二人の幼女は動きだす。瑛嗶は目
を放すと何をするか分からないのだ。

「修行か……飛鳥も強くなろうと頑張ってるのだな」

「強くなって魔王を倒す、立派な目標なこと」

「だが現にペストは倒された。案外、実現出来るやもしれない」

「……まあ、マスターの気まぐれで掻き乱されないと良いけど」

「それはそうだ」

最近ではペストもレティシアを習つて瑛嗶をマスターと呼ぶ。自身が消えて行つた
ラッテンとヴェーザーにそう呼ばれていたから少し違和感が残る物の、悪くはない響き
だった。

そして二人がしばらく歩いて、辿り着いた中庭。デイーンの赤い装甲が見えた時、あ
あ見つけたと思つただけだったのだが、二人の表情は一気に驚愕に染まった。

倒れたのだ。デイーンが。あの赤い巨兵が轟音と共に崩れた。デイーンが呻き声を

上げて背を地面に付け、立ち上がろうとしたところでまた轟音が鳴り響き、強制的にその身体を地面に倒された。巨体が地面に勢いよく叩きつけられた事で巻き起こった強風が二人の身体を吹き抜ける。

「こんなもんか」

瑛嗶のそんな声が聞こえて、二人はその声の方へ視線を向ける。そこにはデイーンの腹の上に乗った瑛嗶が飛鳥の首を掴んでいる光景があった。

別に首を絞めている訳では無く、首をただ掴んでいるだけの様で飛鳥の顔に苦悶の表情はない。そこにあつたのはただ瑛嗶が勝ち、飛鳥が負けた、という結果だけだった。

「ん、おお二人とも。どうした」

「ま、マスター。今の轟音はマスターのギフトか？」

「んにゃ、違うよ。ただちよつと蹴っただけだ」

「……」

二回の轟音、それは瑛嗶がデイーンの腹を凄まじい速度と威力で蹴り飛ばした音だった。

「つと、それじゃあ今日の修行は終わりだ。今度はもうちつとデイーンの使い方考えるんだな」

瑛嗶はデイーンから飛び降り、二人の前に着地する。そしてデイーンの上に残った飛

鳥にそう言って笑い、その場を後にする。

二人はアイコンタクトで即座に判断し、レティシアが飛鳥の下へ、ペストが瑛叟の方へと付いていった。



「少しは手加減すれば良いのに」

「ははは、してるよ。デインを壊さない様にするのは骨が折れたぜ」

「……マスターはあの子をどうしたいの？」

ペストは瑛叟の隣でそう言った。瑛叟はペストの問いに対してゆらゆらと面白そうに笑いながら、当然の様に答える。

「アレは強くなるよ。これからもっとずっとね。ああ、楽しみだ」

白夜叉へのアプローチ

瑛唄とペストとレティシア、サンドラの四人は白夜叉をアイドルユニットに道連れにする、もとい勧誘すべく意気揚々とサウザンドアイズの支店へとやって来ていた。

開店早々に入店し、白夜叉の居る座敷へと問答無しに足を踏み入れた。この四人の實力と瑛唄の強引性が加われば最早止めることなど不可能で、白夜叉も吃驚するほどの速度で彼らは侵入を成功させた。

なんせ、今日の前に戸を蹴破って入った後流れる様な動きで音も無く四人ともぴしつと並んで座って見せたのだ。その連携というかシンクロ率は最早100%以上、満点を上げて良い程だ。白夜叉もその動きの滑らかさ、速さ、唐突さに言葉を失い、戸を蹴破ってから1秒も無くこの状況を作りあげた彼らに賞賛を与えたい程だった。

「さて白夜叉ちゃん。交渉を、始めよう」

四人の真ん中に座る瑛唄がそう言って、ゆらりと笑う。その纏う空気はまさしく重要会議の交渉の場そのもの。白夜叉は一気にその雰囲気呑まれ、ごくりと唾を飲んだ。

「いやいやいやいや！ ちがうじゃろう！ おんしらいきなり過ぎて付いていけないぞ！？」

そして此処に来てはつと気づく。瑛嗶もそりやそうだと舌を出した。ペスト達も同じ様にそつぽを向いた。

「おんしらちよつとシンクロー率高過ぎやせんか？ どう考えてもおかしいじやろ」

「これが練習の成果だ。最早お前なんて足元にも及ばない程にこいつらは輝きだしたのさ。アイドルとしてな」

「アイドルとして魔王と吸血鬼と東のフロアマスターを起用したのかおんしは!? 魔王を俺に服従させろとか意味深に言うからどんな事かと思えば!」

「だがそれを言うのはもう遅い」

「ホントじゃよ! 何故そんな面白そうな事に私を呼ばんのだ!」

白夜叉はそう言ってキラキラした眼を瑛嗶に向けた。瑛嗶はその言葉に悪戯っ子の様な眼を白夜叉に返した。

白夜叉の表情が固まった。

「言つたな?」

瑛嗶の言葉が異様に良く響く。そして、瑛嗶に並んで座っていた魔王達が同情と嘲笑の笑みを浮かべた。白夜叉はどういう事かは分からないが自分が失言してしまった事

に気付いた。

だが、瑛嗶にとつてはもう此方の物とばかりに白夜叉の様子はどうでもよかつた。

「お前、俺のアイドル計画が面白そうと言つたな？」

「あ、ああ」

「協力してくれと言えば協力してくれると見て良いんだな？」

「まあ……そうなるかの」

「よし」

瑛嗶はそう言うと言ち上がる。そしてそれに続く様にペスト達も立ち上がった。瑛嗶が蹴り破つた戸から出て行くと、ペスト達は白夜叉に迫っていく。

白夜叉は迫ってくる彼女達に青褪めた顔をして若干後ろに下がつた。

「お、おんしら何を……」

「今日から貴方も私達の仲間だ」

「ようこそ私達のユニットへ」

「さあさあ行きましょう白夜叉様？」

「ま、まさか！」

白夜叉は戸を出たところで此方を向いている瑛嗶に視線を向けた。そしてその眼が合う。瑛嗶の眼は語つていた。『諦めろ』と。

そしてその視線の意味を理解した時、白夜又はその細腕や足を少女達に掴まれ、ぞんざいに持ち上げられる。

「ま、待て！ 私は衣装とかそういう事に協力しよう！」

「はいはい、行きますよー」

「話を聞け！」

「貴方の意見は聞いていない」

「魔王！ おんし若干私怨が入つとるじゃろ！」

「マスターに目を付けられたらもう諦めるんだな」

「レティシアアアア!! おんしルイオスの件で私がしてやった恩を忘れたかあああああ
あ!!」

かくして白夜又は強制連行される。瑛嗶の横を抱えられた白夜又が通って行く。そして向かうのは何時もの練習場。

瑛嗶は連れ去られる白夜又を見て、ぽつりとつぶやいた。
「白夜又ゲット。愛称はワンちゃんです」



「何故私がこんなことを……」

「案外楽しい物だぞ」

白夜叉は何時サイズを知られたのかピッタリなトレーニングウェアを着用して気だるそうに練習場にいた。目の前ではペストとサンドラが協力してストレッチをしている。その光景はお互い美少女故に扇情的に見える物の、その中身は火龍と疫病の魔王だ。違和感しかなかった。

「というかこのメンツで本当にアイドルをするのか？　ちと豪華すぎやせんか」

「魔王がいる時点で諦めてる」

「おんしも中々あ奴の影響を受け取る様じゃな……」

「そんなつもりは無いのだが……」

本人からすればそんなつもりはないのだが、実際の所所有物として存在する彼女達はかなり瑛腹に影響を受けている。あの強引さと人の話を聞かない所などそっくりだ。

「それで、その本人はどこだ？」

「マスターは後から来る。先に私達で練習をしよう。白夜叉は音楽を聞きながら踊りの振り付けを覚えてくれ。私達が踊るから」

「……ふむ……それじゃあ見せて貰おうかの」

そう言つてレティシアが指示を出す。どうやらまとめ役はレティシアが一番向いて

いるようだ。

白夜叉がヘッドホンを付けて三人の前に座る。三人はお互いの立ち位置を確認して立ち、曲が再生されると踊りだした。

「一」

白夜叉は三人の踊りに目を奪われた。その流れる様に次へ次へと繋ぐ動きの綺麗さ、お互いにお互いが何処にいるかをしっかりと把握している協調性、そして曲の迫力に負けない力強い動きが一つになって目が放せない。三人の頬から流れ落ちる汗すらも、激しい動きに乱れる髪すらも、全てが彼女達を飾っていた。綺麗、以上に美麗。そのステップ一つ取っても真似出来るか分からない完成度。そして何より、彼女達の瞳の輝きが、自分の心を掴んで放さない。

何時しか見ている内に白夜叉には彼女達が本当のステージで踊っているかのような錯覚を覚えた。周囲の光景すらも引きこむそのダンスと輝きは、まさしくアイドル。

若者達の憧れ、偶像とも言われる輝く星。

そしてその踊りが曲の終わりと共に終了すると、もつと続いて欲しいと思いつながら感動を抑えられず、何時の間にかその眼からは涙が、その小さな両手からは惜しみない拍手が、その心からは溢れんばかりの賞賛があった。

白夜叉のそんな様子に三人は照れ臭そうに笑みを浮かべた。

「どうだった？」

「凄かった……何と言うか……凄いとしか言いようがない！」

「でも白夜叉様もここに混ざるんですよ？」

「……そういえば……でも、出来るかの？」

「出来る。そう信じて私達はやってきた」

三人から伸ばされた手に、白夜叉は少し躊躇う。この手を取って自分も輝けるかと少し不安に思った。だが、そんな白夜叉の背後から言葉が掛かる。

「俺が認めたんだ。自分を信じろよ白夜叉ちゃん。お前は、そいつらと一緒に輝くんだ」
振り向けば自分をアイドルにすると豪語した男、瑛嗶が立っている。その笑みは自信に満ち溢れており、白夜叉が輝けると信じて疑わないと目が語っていた。

「……分かった。私もその言葉を信じよう」

白夜叉はそう言って、口端を吊り上げ三人の手を取った。

本格的な売り出し

「いらっしやい。本日開店、美少女アイドル四人組の初回売り出しグッズ販売！ どうぞ見てって下さいなー！」

「こ、これ！ このキーホルダー一種類ずつ下さい！」

「この異世界少年温泉日記買います！ プロマイドを!!」

「うへへへへ、幼女萌えええ……はあはあ……！」

さて、アイドルユニットが正式に結成されてから数日。瑛唄はその類稀な技術と器用さを利用して四人の美少女達のグッズを一人で大量に生産し、遂に売店を開いた。サウザンドアイズの協力の下店を開く場所や宣伝は万全で、事前に握手会や本人達による挨拶も行なった故に、売店は開店前から大量の行列を作り、開店直後から売り上げは鰻登り。

その勢いは留まる事を知らず、店の在庫を食いつくす程だ。そして非常に意外な事だが、一番の人気商品は十六夜のお風呂シーンの入ったDVDだった。プロマイド欲しさに何度も何度も買いに来る客が居て、更にこのDVDを捨てるとプロマイドが手元から焼失するという事もあって、ちゃんと家に持って帰るシステムになっていた。

また、このDVDを捨てるには10回以上早送り無しで一から最後まで繰り返し見る事が条件になっており、それはちやんとDVDの裏面に表記されている。現在、プロマイドをコンプリートした物はいない。

「ふう……随分とまあロリコンの多い世界と予想していたが、予想以上だ」

そんな売店を一人で切り盛りしているのは勿論瑛嗶だ。プロデューサーとして、こういうアイドルの売り出しは彼の仕事だ。現在も四人一緒にレッスンを続けているのだから、お披露目の時に備えて知名度を上げておかねばならない。

また、この売店に来るのは男性ばかりではない。十六夜のDVDを求めてやってくるゲイやおネエ、そして腐のつく女性達もまた、客の中にいるのだ。

「さて、随分客足も落ち付いて来たし、一息つけるな」

瑛嗶はそう言って椅子に座る。店自体は瑛嗶が即席で作った木造建築だが、そのクオリティは流石と言うか、かなり高い。それなりに広いのでかなり多くのグッズが店先に並んでいる。

「あの一」

「ん？」

そこへ話し掛けてきたのは一人の男。全体的に黄色でまとめられたファッションで、チョーカーを付けていた。

「なんだ？」

「このグッズなんですけど、いくらですかね？」

「ああ、それか……それは」

男が持つてきたのはあまり人気が無かった商品。とはいえ、他の商品と比べて、だからそこそこ売れてはいるのだが。

それはレティシア大人バージョンの水着をカードにした物で、中々セクシーな仕上がりになっている。

「それは——円だ」

「ん、じゃあこれ」

「毎度。それにしてもルイオス君、君も好きだねえ」

「なっ!？」

瑛叟の言葉に男は一步下がって驚いた顔をした。その視線が瑛叟と合った時、顔色を青褪めさせる。そして瑛叟が代金と引き換えに渡したカードをひらりとレジに落とすた。

「ば、化け物!」

「誰が化け物だコラ」

「い、いや……悪い。で、でもなんでお前がこんな店を!？」

「お前から貰い受けたレティシアを含め、白夜叉や魔王、北のフロアマスターを起用してアイドルにしたんだよ。で、これはその売店」

「な、なるほど……ん？ ってことはこのカードは!？」

「レティシアちゃんだぜ?」

「嘘だろ、アイツはこんなに色気は無かった筈だ!」

男の正体は元ペルセウスのリーダー、ルイオスだった。どうやらふと寄った店先に並んでいたレティシアのカードに興味を示したようだ。この男は色欲だけは高いのだ。

「ま、リボンを外せばこんな姿に大変身ってわけだよ」

「マジかよクソ……ちよつと惜しかったな」

「ははは、今更何言ってるんだよ。アイツはもう俺の物だ」

「分かってるよ」

ルイオスは瑛唄の目の前に落ちたカードを拾い上げ、胸ポケットに入れて店の出口へと歩く。瑛唄はそんなルイオスの背を面白そうに見ながら笑った。

「またのご利用をお待ちしております」

ルイオスは背中から降りかかった言葉に対し、少しだけ動きを止め、無言で出て行った。



「いらっしやい」

「おい瑛喰。お前マジでこれ売ってんのかよ」

「マジだよ。一番人気の目玉商品だ」

次やって来たのは十六夜だった。入ってすぐの所に置いてある自分がパッケージの表紙になっているDVDを取ってレジに座る瑛喰を睨みつけ、そう言った。

瑛喰の返しに肩を落とすが、気を取り直して瑛喰に歩み寄る。

「お前俺の事を無断で利用して金を稼いだんだから売上少し寄越せよ」

「まあ最初からそのつもりだったから別に良いけど。そのDVDの売上の半分でいいか？」

「ん、じゃあそれで」

「まあ閉店時間まで後少し、まだまだ客足が途絶えた訳でもないからそのDVDももう少し売れるだろ。そしたらその売り上げをお前に渡すさ」

「おう」

十六夜はそう返事をして店を回り始めた。周囲にはグッズを見ている客がちらほらと見え、DVDに近づく客を見ると少し鼓動が勢いづくが、止める事はしない。もはや

大量に売り払われた後、止めた所で意味は無い。

「にしても……このキーホルダーとかカードとかよくもまあ作つたもんだぜ……」

「俺のギフトがまだ2000京有った時に作つたんだよ。大量生産は楽だつたぜまだまだ一杯ある」

「まったく無駄な事にギフトを無駄使いするな本当」

「それが俺だぜ」

瑛嗶はそう言つてゆらりと笑う。

そしてその後、しばらく客の相手をしつつ十六夜と雑談をしていると閉店時間はすぐによつてきた。瑛嗶と十六夜は早々に店仕舞いを終え、帰路に付くのだつた。

レティシアグッズ作りの件

瑛叟が店を開店してグッズを売りだす前の話。グッズを作る段階の時の事。

瑛叟はその時点でまだユニットに白夜叉が入っていない故に、レティシアとペストとサンドラの三人に協力してもらってグッズを作る事にした。

まずはそれぞれのプレミアムプロマイド、紹介カード、キーホルダー、うちわ、ポスターの作成。中には中々色気のあるセクシーな物やファン層が限られてきそうなマニアックな物まであるので、三人にはかなり拒絶されそうだが。

「という訳で、まずはレティシアちゃん。お前だ」

「嫌だ!」

「やれ」

「む……………!」

こうして言い合いの出来る関係と言えど、この二人はあくまで所有者と所有物。所有者の命令は、嫌でも聞いて貰わなければ困る。これは、絶対的服従関係なのだから。

「……………」

「……………分かりました、マスター」

「よーし、それじゃあまずは——」

瑛唄はレティシアの返事になっと笑って顔を悪戯つ子の様に歪めた。レティシアにとつては今この状況下で一番恐怖の対象になる笑顔。身構える物の、そんなのは無駄だと知っている。

故に、瑛唄はその恐怖にたいして想像以上の要求をレティシアにした。

「——服を脱げ」

◇ ◇ ◇

金色の光を反射する、絹糸の様に揺れる黄金の長髪。少しの動作で絹糸はその白い肌を流れる様にさらりと動く。そしてその動いた絹糸を視線で追えば、羞恥で少し紅潮した頬、細い首筋、綺麗な鎖骨と目が釘付けになり、更にその下へゆつくりと視線を下ろして行けば、付くと跳ね返る様な瑞々しい柔肌と少し膨らんだ発展途上の小さな胸。桜色の先端は一切の穢れが無く、更に下へ視線を下ろせば思わず食べたくなる様なお腹が鮮やかな曲線を描き、腰から細すぎず、太くも無いすらつとした脚へと繋がる。足先まで全てが見る物を魅了する様な少女の肉体美は、お世辞でもなくお人形の様、という表

現がこれ以上なく似合っていた。

「……………ま、ますたあ……………これは異常に恥ずかしいのだが……………」

「ん？ いや俺は別に全裸になれとは言って無いんだけど……………」

現在のレティシアの姿は全裸であり、股間や胸元を隠す様に白い毛布を使っている。絵画の一枚の様だ。

「な……………っ……………」

レティシアは瑛嘎のその言葉にはつとなり、羞恥で顔を真っ赤にする。そしてぶるぶると震えながら涙目で毛布にくるまる。それでもぞと毛布の芋虫は畳まれた自分の服の下へと這って移動し始めた。

瑛嘎はそれをじっと見ながら頬を掻く。そして芋虫は自分の服を毛布の中へ回収すると、さらにもぞもぞと動き、その中から中身を現した。

レティシアは下着を身に付けた状態で未だ羞恥に染まった表情を隠す様な堂々とした態度で瑛嘎に向かい合う。

「こ、これでいいのだから……………」

「まあ、実際にはこの水着を着用して貰うんだけどね」

「マスターの馬鹿あああああ!!」

レティシアは瑛嘎の取り出した黄色い水着を凄まじい速さで奪い取り、着替える為に

部屋を出て行った。

「…………え、これ俺が悪いの？ 説明聞いてなかったアイツが悪くね？」

瑛噎はそんなレティシアを見送った後、ぽつりとそう呟いた。

◇ ◇ ◇

しばらくして、レティシアは黄色い水着を着用して戻ってきた。ペストに手を引かれた状態で。

ぐしぐしと涙を手で拭いながら、同情と困惑の表情を浮かべるペストに手を引かれるレティシアは、その容姿と同じで本物の幼女そのものだった。

「マスター…………何をしたのよ」

「いや今回は俺悪くない。レティシアちゃんが勝手に自爆したただけだ」

「…………そう。ほら、レティシアも泣いてないで」

「…………うん」

ペストに慰められて幾分落ちついたレティシアは未だに恥ずかしそうな表情で瑛噎の前に立った。

「んじゃ、始めるか」

「ああ」

瑛唄は大量のカメラをギフトで精製。この時点ではまだ2000京のギフトがあったから出来た事だ。そしてその全てでレティシアの全方位に配置、瑛唄はレティシアに指定のポーズを取らせ、全てのカメラを一斉に起動させた。パシャパシャパシャパシャその光に少し眩しそうにしたが、それ以上にこの撮影法に驚愕していた。

「はい次」

次のポーズを取らせてまた連写、次のポーズを取らせてまた連写、と何度も繰り返す。そしてたまに衣装を変えてまた別のポーズで連写したりして素材となる写真を製造していく。

ペストが視線をふと別に向けてると、撮った写真が既に続々と現像されて行っている。このギフトの無駄使いはある意味清々しい物があった。

「はい、じゃあ終わり」

「ふう……………ん……………」

少し撮られる事に快感を感じていたのか紅潮した肌と残念そうな溜め息を吐いたレティシア。だが瑛唄はそれを気に掛けずに敢えてスルーした。

「さて、それじゃあ次行こうか」

瑛嗶はそう言って、ペストの方へと振り向いたのだった。

ペストグッズ作りの件

さて、レティシアが被写体的撮られ嗜好快感に軽く目覚めた所で、次に瑛嗶のカメラの餌食になったのはペストだ。レティシアは着替えても良いと言っているのに水着のまま恍惚とした表情を俯かせたまま椅子でじっとしている。ペストはそれを見て内心焦る物の、アレはちよつと自爆してしまつたからという理由で自己完結した。

そして今度は自爆せずに瑛嗶の用意した斑模様の水着を着用して写真に撮られる。レティシアの撮影シーンを見ていたからか、その撮影自体は恙無く終了した。

「ふう、案外疲れるものね」

「まあ材料は十分かね。とはいえ、まだやつてもらふ事は有るんだけど」

「?」

「全裸」

「は?」

「全裸」

「……」ここで全裸になれって事かしら」

瑛嗶はその言葉に一つ、頷いた。ペストはその頷きに対して軽蔑と失意の念を込めて

ジト目を送った。その意味は、絶対嫌だ。

だが瑛嗶はそんな視線を気にせずにギフトを使って自分とペストを風呂場へと移動させた。

「……は……お風呂？」

「そう。作るのはお風呂ポスター。風呂場に貼ってあたかも一緒に入浴をしている様に自己満足するグッズだ」

「それはつまり全裸を購入者全員に公開する、ということかしら？」

「！」

ペストの言葉にレティシアがまんざらでも無い様な表情でぴくりと反応した。だがペストはそれに気付いた上でスルー。もう手遅れだ。

「いや、一応大事な部分は編集で霽が掛かる事になる。一応そこらへんのモラルは守らないとね？」

「そう……それはどの程度の霽なのかしら」

「水着並の露出度になるね」

「……………ならいいわ」

ペストは瑛嗶の言葉を信用した訳ではないが、もしも全裸公開でばら撒かれた場合は購入全員漏れなく疫病で殺してやれば良いと結論づけた様だ。

「で、どうすればいいの？」

「とりあえずその岩に腰掛けて脚をお湯に入れてくれ。ああ、必要ならタオル使っても良いよ」

「あら、そうなの……じゃあ使う」

「つまらん奴め」

タオルを巻いて言われたとおりにするペストだが、瑛暎はそんなペストの巻いたタオルという無粋な物に唇を尖らせた。使っても良いとは言った物の、本当に使われると少し残念な事をしたと思う物だ。何処に自宅の風呂でタオルを巻いて入る奴がいると云うのか。

「いいじゃない。一緒にお風呂に入った気分を味あわせてあげるんだから」

「傲慢不遜。お前にそこまでの魅力は無い」

「あら、私は需要があるんでしよう？」

「ほんの指先程度の微かにね」

「それはそれでムカつくわね……」

「悔しかつたらもつといるんな部分で成長するんだな。ペドロリ」

「私の名前はペストだ!!」

瑛暎とのやりとりを一通り終えて、最終的にタオルは巻かずに手で持つだけにした。

手を放せばすぐにでもタオルはひらりと落ち、その身体を露わにするだろう。

「さ、撮るよー」

「今思ったけれど、私もレティシアもなんでこうも簡単に裸になるのかしら……?」

今更何を、と思う程今更な疑問を抱くペストだが、その答えを用意するのなら、やはり『瑛嗶に影響されたんだよ。』としか言いようがない。

「はあ……でもこんな生活も悪くないって思う私もどうかしてるのかしら……」
ペストは自嘲気味に笑って、またポーズをとるのだった。

——次はサンドラである。

サンドラグッズ作りの件

さて、レティシア、ペストとグッズの為の写真を撮った瑒瓊はそれを元に様々なグッズを作りあげた。妙に艶かしく編集されたお風呂ボスター、水着の際どいポーズや幼女という属性を利用したちよつと背伸びしましたという感じの可愛いカード、二人それぞれが普段良く取るポーズを元にしたフィギュアとキーホルダー、そしてついだとばかりに録られた『純潔の吸血姫レティシアちゃんの！ドキドキ添い寝ボイスCD』と『黒死斑の魔王ペストたんを妹に！ 甘えん坊の妹ボイスCD』を作りあげた。

CDの件は本当についてだが、十六夜のDVDを作った際にちよつとハマった様だ。また、少し録音時に照れていた二人も後半ノツてきたのか録り終えた後にまだやりたいと言う始末。結果的に二つのCDはあたかも映画の同時上映の様に、レティシアの方には本人からの罵倒ボイスが、ペストの方にはツンデレでの告白ボイスがそれぞれ同時収録された。

ちなみにCDとフィギュアに関しては未だに発売日が未定である。作者は聞いたぞ
(▽、*)

「さって、そういう訳で今度はサンドラちゃんの番だ」

「あ、そうなんですか……」

「止めるサンドラああ!! お兄ちゃんお前の裸を撮らせるなんて許さんぞおお!!」

「暴れないでくださいマンドラ様! サンドラ様のアイドルグッズを待ち望んでるファンは大勢いるんです!!」

「煩い! 何処にいるのか言ってみろ! 懲らしめてやる!」

「此処にいます!」

「そうかお前か! 二度とサンドラに近づくな! そして死ねえええ!!」

瑛嗶とサンドラの会話の外で煩いガヤが入ったが、どうやらファンは此方の味方の様だ。何故ならサラマンドラのメンバーは全員サンドラの為に命を差し出せる猛者達だ。そのサンドラのグッズが出るとなれば、狂喜狂乱だろう。

「それじゃあ仕事の方も一区切り付きましたし、ささつと終わらせましょうか。まずは何を?」

「ああ、まずは——」

既視感。デジャヴとも呼べるその現象は、一度見たことあるな? といった感じの事が起こる現象である。そして、此処から放たれる瑛嗶の言葉は勿論、

「服を脱げ」

これだった。



「貴様あああああ!!!」

「はいはい、邪魔だから消えてねー」

「甘いわア!!」

「嘘っ!?!」

サンドラが一通りレティシアと同じ自爆をした後、赤い水着を持って顔を真っ赤にしたまま部屋を出て行ったのだが、サンドラの姿が消えたと同時にマンドラが襲い掛かって来たのだ。

瑛嗶はそのマンドラを軽く掴んで投げようとしたのだが、なんと普段の実力からは想像も出来ない程の身軽さでマンドラは瑛嗶の腕を躲し、空中でぐるりと回ったかと思えばその剣を抜いてきた。

「おおおおおおお!!!」

「シスコンの力つてのは恐ろしいね——つとー!」

「ぐおっ!!?」

だが、結局は瑛喰の敵では無かった。剣に手を添えてその軌道を変えながらマンドラの勢いを利用してそのまま投げ飛ばした。

「ぐ……………ここで負けるわけには……………行かないのだ……………!」

「マンドラ様! 何故分かってくれないのですか! サンドラ様ファンクラブ会長の座に就いておきながら何故!」

「……………いいか、私はアイツのファンである前に……………アイツの兄なのだ!! 兄として、妹の裸体を公衆の面前に晒すなど、許してはならん!!」

「!?!」

なにやらカツコイイ事を言っているマンドラ。だが、そこへ現れたのは赤い水着と来て下半身にはセパレートを着用したサンドラ。挙句の果てには浮輪装備という完全なまでの幼女押しだ。

「に、似合ってます……………か?」

その言葉に空間は静寂に包まれた。そして、その数秒後――

「がはっ……………!!!」

——マンンドラは血を吐いて倒れた。

「マンンドラ様アアアアア!!!」

「ふ……我が生涯に……一片の……く……い……な……s」

「とつととくたばれや」

「ぐふっ!!」

瑛嗶は最後まで言い切る前にマンンドラの鳩尾にその足を落とした。そしてマンンドラは沈黙した。

「さて、始めようか」

「はい♪」

「マンンドラが見向きもしない……兄様ちよつと寂しいな」

「サンンドラ様もアイドルとして、成長なさっているのです。見守りましょう」

「……ああ」

マンンドラは目尻に涙を浮かべて、妹の成長が嬉しいやら離れて行って寂しいやら複雑な表情を浮かべながらも、そう言ったのだった。

その後、お風呂撮影時にマンンドラが鼻血を吹いて倒れたり、CD録音時にそのシチュエーションの妄想に耽ってしばらく戻って来なかったりしたのだが、最終的になんとか

完成を見たのだった。

結果、サンドラの水着カード、プレミアムブロマイド、お風呂ポスター、キーホルダーにファイギユア、そして『フロアマスターサンドラちゃんの！ ラブラブ甘々純愛ボイスCD』が完成し、同じく同時収録として世話焼きお姉ちゃんボイスが録られる事となったのだった。

勿論作者は全部聞いたよ！（*、▽、*）カワイカッター……！

白夜又グッズ作りの件

「さて、皆さん良く集まってくれた。本日集まって貰ったのは他でも無い。召集の際伝えたとおり、全員であるのサウザンドアイドル幹部の白夜又を囲い、あらゆる手段を使ってあの幼女のアイドルグッズを作製する手伝いをしていただきたい」

さて、ここはノーネームの中庭。昔の名残故に多くの領地を残したこの広い場所に、総勢800人以上のメンバーが揃っていた。

まずはその戦力の紹介から始めよう。まずは瓊瓊を含めるノーネームの黒ウサギ、春日部耀、久遠飛鳥、逆廻十六夜、ジン・ラッセル、レテイシア、ペスト、メルン、そしてリリを筆頭とした子供達の全40名。

次にサラマンドラのサンドラを筆頭とした全250名、次にルイオスの敗北により解散したペルセウスの元メンバー達全60名、ちなみにルイオスはこの場にはいない。そして最後に白夜又を除いたサウザンドアイドルの白夜又好きが集まった白夜又ファンクラブ（仮）の総員540名

計890人の総戦力。たかが白夜又のアイドルグッズを作る為だけに、これだけの総勢が集まったのだ。

「おい瑛唄、お前これだけのメンツを揃えるなんてどんな手を使ったんだ？ 元ペルセウスの奴らもいるみたいだしよ」

「良い質問だね十六夜ちゃん。だがその問いは簡単だ、俺のプロデュースしているアイドルはサラマンドラのトップだぜ？ つまり、サラマンドラの総力を得るのは簡単だつてことだ。んで、ノーネームについては言うまでも無い。そしてペルセウスに関しては俺が潰したんだから散り散りになった輩が何処へ行つたかの情報位は掴んだ。それに、サウザンドアイズのメンバーに白夜又のファンは居ると踏んで声かけたらこの通りだ」

「うーんまあアレだ。皆馬鹿なんだな」

「まあこの世界にはロリコンが権力を持ってたりするからね」

瑛唄の言葉に十六夜は肩を落とす。そしてそのまま黒ウサギ達の下へ戻って行った。「さて、それじゃあ話を元に戻そう。今日この時から白夜又を24時間監視し、配布するカメラで撮りまくれ。いくら撮ってもらっても構わないぜ、なんせ俺特製の無限メモリー無限バッテリーの高性能カメラだ。ブレ補正も完璧だから猛スピードで動きながら撮ってもはつきりくつきり写るぜ」

「なんてチートカメラよソレ」

「そう言うなよ飛鳥ちゃん。ちゃんとそれぞれの手に合う様にサイズも調整してあるん

だぜ？ ほら、ディーン用の巨大カメラもホラ」

「なんで既に持つてるのよディーン！」

—— ディイイイイイ!!

瑛嗶と飛鳥のやり取りを傍目に全員手元に現れたカメラを弄りだした。使い方は触れたら頭に流れ込んで来たので、全員もれなく把握することが出来た。

「でだ、大事なのは此処からで、今回に関してはどんな状況下でも撮影しても良い事とする」

『!?!』

「そう、つまりモラルは大事だろうか甘っちょろいこと考えてる奴ら、その常識を今回ばかりは捨てて貰うぜ。風呂場だろうが寝室だろうがどこでもバレなければ撮影してオーケー。ペルセウスのメンバーは透明化のギフトを持つてるから期待してるぜ？」

瑛嗶の言葉に全員が動揺し始めた。そりやそうだ、こんな大勢に24時間撮影される言うだけでも少し思う所があるというのに、プライバシーを完全に無視した行動。あまり気の進む事では無い。

「と、思う奴もいるだろう。だが、無理矢理でもやってもらう。もはや降りる事は出来ないだよ馬鹿め。今から24時間後、そのカメラは自動的に俺の下へ集まる事になっている。その時、そのカメラに白夜叉の写真が300枚以上収まっていな奴には俺直々

に罰を与える。とりあえず黒歴史公開な」

「つしやああああ!! やるぞお前らああああ!!」

『おおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!』

瑛叻の言葉に全員の心が一致した。あの公正な審判である黒崎サギですら諸手を上げてやる気を出している。

「それじゃあ始めようか。この場にいる全員で行なうギフトゲームを」

ギフトゲーム『夜又の愛情』

ゲームマスター：泉ヶ仙瑛叻

プレイヤー：この場にいる全員

プレイヤー側勝利条件：配布されたカメラで白夜又の写真を300枚以上撮影すること

ゲームマスター側勝利条件：無し

プレイヤー側が全員条件を達成した場合、ゲームマスター側は報酬を支払う事を誓います。

これは、プレイヤーの勝利しかないギフトゲーム。そして、瑛叻にとってはその勝利

が得になるギフトゲームだ。白夜叉の全てをそのカメラに写し、献上する、瑛嘎のアイドルになるということは、こういう事なのだ。

そして、言っておこう。この時、白夜叉はまだアイドルにはなっていないのだ――

白夜又グッズ作りの件第二部

さて、始まったこの白夜又盗撮作戦は始まって4時間でその参加者の半数が白夜又本人によって撃墜された。つまり、バレたのだ。白夜又を盗撮している事が。

そして800人以上の盗撮者の半数、つまり400人の盗撮者が居た事を知れば、当然白夜又も何処かの組織が企てて撮りに来ていると理解するだろう。その結果、白夜又は一層警戒心を高めてしまった。

白夜又は普段残念な程お茶らけた変態だが、その実サウザンドアイズという大きなコミュニティの幹部にして白夜の精霊なのだ。実力はペストの何倍にも上る。魔王の一人や二人、軽く圧倒して見せるだろう。

そんな彼女が本気で警戒しているのだ。そこからは数時間で残りの半数もかなり減らされてしまったのだ。

「うーん……残り60名、か」

瑛嗶は呟く。数を数えるギフト【カウントライフ数え唄】を使って残り人数を確認していると、800名以上いたメンバーはその数を16分の1程に減らされていた。これは少々心許無い。

「残りは――」

そして残りの人材を数えた。

ノーネーム：ペスト、レティシア、リリ、春日部耀の4名。サラマンドラ：サンドラ、マンドラ、隊員11名の計13名。元ペルセウス：20名。白夜叉ファンクラブ（仮）：23名。これが今残っている人材だ。

ちなみに、十六夜や黒ウサギ、久遠飛鳥、ジン・ラッセルが何故やられたのかを簡単に語ろう。

十六夜↓尾行が下手クソで白夜叉に速攻でバレた。天地は砕けてもストーキングした経験は無い様だ。

飛鳥↓デイーンがバカデカ過ぎて速攻でバレた。頭を使え天然お嬢様。

黒ウサギ↓白夜叉が変態性を発揮して何故か居場所がバレ、後にもみくちやにされた。

ジン↓カメラを持って白夜叉の真正面から突っ込み、馬鹿みたいに簡単に終わった。

この通り、ストーキングにまったく経験が無かったので、戦闘においては異様に高い戦績を誇る十六夜も、支配のギフトで赤い巨兵を従えた飛鳥も、箱庭の貴族である黒ウサギも、それをまとめるジンも、白夜叉という格上の変態の前に敗北したのだ。

また、この他に撃墜された元ペルセウスのメンバーやファンクラブのメンバーも見つ

かった理由としては、その部分が一番大きい。

「うーん、戦闘しか能が無いのかアイツらは……全く」

瑛嘎の呟きは的を得ていて、殆どの猛者がストーキングの技術を持っていなかった。今残っているのは元々追跡の技術を持っていた輩とその才能を今回目覚めさせた者達だ。それと、元々持っているギフトで身を隠せる実力者と言ったところか。

「さて、どうなるかな」

瑛嘎はそう言つて、ゆらりと笑つた。



「くっ……中々手ごわいな……！」

「レティシア、貴方は何枚撮つた？」

「ペストか、今の所248枚だ。だが、此処に来て白夜又の警戒心が高まっている。下手にカメラのシャッターを押そう物なら速攻でバレルぞ」

「困つたものね……私は今257枚……影からこの疫病の黒い風で身を隠して撮つてたんだけど……この手ももう通用しないかも」

レティシアとペストは今回のイベントで尤も撮影に成功している二人だ。300枚

に一番近いのだが、まだまだ遠い。

「！ 隠れて」

「……また一人、捕まったか……」

そういう二人の目の前ではサラマンドラの隊員が一人、白夜叉に捕まっていた。そして捕まった瞬間白夜叉によって気絶させられる。あの分では一日起きてはこないだろう。つまり、事実上このイベント失格だ。

白夜叉は捕まえた全員をこの様に処置しているのだ。

「っー 今ー」

レティシアとペストは白夜叉の意識が別に向いた瞬間、同時にシャッターを切った。そしてすぐさま場所を移動する。シャッター音で白夜叉の意識が此方に向くのですぐに場所を変えなければならないのだ。

ちなみに、シャッター音は琺瑯が敢えて消さなかった。

「……ふむ、どうやらレティシアやペストも参加しておる様じゃの……十六夜や黒ウサギ、飛鳥もおったし、サラマンドラのメンバーもちらほらと……それにあのルイオスの小僧の部下もおったの。あと、良く分からんがサウザンドアイズの下っ端もいた……ということは計画したのは……やはりあ奴か」

白夜叉はシャッター音の方へ振り向き、その気配からレティシアとペストの存在に気

が付き、今までの盗撮者のメンツから瑛嗶の企画だと気付いた。

何の目的でやっているのかは知らないが、こちらとしてもただ盗撮され続けてやる訳にもいかない。理由も知らずに写真を撮られるなど気分的にも良いとは言えないのだ。

「面白い。ここは元凶を叩くとするかの」

白夜叉はそう呟いて、扇子を口元に持っていく。そして愉快そうに眼を細めた後、その足を瑛嗶の下へと進めて行った。



「！ おっと、白夜叉ちゃんがこっちに気付いたか。さて、どうしたものかねえ……あ、そうだ」

瑛嗶は意識下で会話するギフトメンタルコネクト「念頭念受」を発動させ、レティシアとペストに連絡を取った。

「おーい、二人とも」

『！ マスターか』

『何よ』

二人はいきなりの事で少し吃驚した物の、瑛嗶に対して返事を返す。

「あのな、二人とももう240枚以上撮ったみたいだし、一回戻って来てくれ。んで、頼みを一つやってくれれば条件クリアにするよ」

『直ぐ行く』

『直行ね』

「じゃあよろしく」

瑛暁はゆらゆら笑って楽しげに眼を細めた。そして此処へ向かってくるレティシア達の気配と、ゆっくり近づいてくる白夜叉の気配を感じながら、その場を動かさずにただ、待つのだった。

白夜又グッズ作りの件第三部

「まさかおんしが私の事をここまで好いておるとは思わなんだ」

「ははは、随分と自意識過剰な態度だな真つ白チビスケ。お前を盗撮する理由は他にある」

「ふ、まあそう言う事にしておいてやろう」

「勘違いも此処まで来るといつそ清々しいね」

さて、それからしばらくして、白夜又は瑛嗶の下へとやってきた。場所はノーネーム本抛の中庭。白夜又はとても満足気な笑みを浮かべて仁王立ち、瑛嗶はそれをスルーしつつ普段通りの立ち振る舞いを見せいる。

「でもまあ何の理由も無く盗撮されるのは私としてもあまり面白くない。故に止めさせてもらいに来たぞ」

「へえ、どうやって?」

「力づくでも、じゃ」

今この時、この時系列ではまだ瑛嗶はギフトが2000京丸々存在しているのだ。何せ、神様に返上する以前のグッズ作りの話だ。ちなみに今日はギフトを返上した前日

だったりする。

故に、白夜叉といえど瑛叟のギフト量に対して勝利をもぎ取れるとは到底思えない。

「なるほど……」

瑛叟はちらりと視線を別方向へと向けた。白夜叉はその瑛叟の視線の先を見るが、そこには何も無い。そしてそれを確認して視線を瑛叟に戻すと、瑛叟の姿はそこには無く

「——っ!？」

——自分の下から自分を見上げる瑛叟が、そこまで踏み込んで来ていた。

一步、下がる。だがもはや間に合わない。白夜叉はここで咄嗟に、迫りくる瑛叟の掌底に対して左手を掌底の通り道に入れた。

そしてそれが自分の左手に触れた瞬間、全力でその左手を引き、自分の身体の位置を瑛叟の力を利用してずらした。そして頬が抉られたかと思う位の力が白夜叉の左頬を掠めたが、なんとか直撃を避ける事が出来た。そのまま転がる様にして距離を取り、咄嗟にまだ痛みの残る頬に手をやる。

「お、恐ろしい速さじゃな……!？」

血は出ていない。怪我も無い。だが、漠然と切り裂かれたと勘違いする程の激痛のみを感じる。掠っただけでこの結果。凡人ならば直撃し、痛みも感じる間もなく、ただただ何をされたかも分からない内に死んでいるだろう。

そして、これが本気では無いというのだから更に恐ろしい。白夜叉は、なにが力づくだと自身の台詞を一瞬で後悔した。

「ん、まあこの程度は避けられるか……うん、でも確認する場所が違うぜ」
「え？」

白夜叉は頬を咄嗟に確認して、瑛嗶への恐怖に感覚が麻痺していたのだ。そして瑛嗶の軽い口調に幾許か余裕が戻ったのか、身体にすーっと風が通り抜ける感覚を感じ、自分の身体を見た。

「え!？」

「さて、それじゃあ——」

瑛嗶はその手に持った自分のとは違う、随分と小さい着物をひらひらとさせながら上半身が裸の白夜叉にゆらりと笑ってこう言った。

「——撮影を、始めよう」



「私達つて本当に何をやってるのかしらね」

「撮影だろう。ほら、マスターが強引に剥ぎ取るでさいあくなしゅだん白夜叉を上半身裸にしたぞ。撮らな
いと」

「なんで私復讐の相手の痴態を撮ってるのかしら……」

さて、瑛嗶が白夜叉の衣服を次々と剥ぎ取つていく中、呼び戻されたレティシアとペ
ストはその光景を動画と写真に納めていた。

レティシアはカメラのシャッターを軽快に切つて、ペストはビデオを回す。先程瑛嗶
がちらりと見た先にはこの二人が居たのだ。尤も、瑛嗶の隠蔽ギフトのせいだ。白夜叉か
らはバレなかったが。

「さて、マスターから貰つたこの参加者残機計測機を見る所によれば、白夜叉は此処に來
るまでに全員見つけて來たようだ。流石と言うか、同類……ましてにわかの変態達のや
る事は簡単に分かるといふことか」

「寧ろあの白夜叉を子供扱いしてるマスターの方が化け物染みてない？」

「仕方ないだろう。あのマスターは私達の常識の範疇を超えている。故に、人外なんだ」
「まあ分かるけど……はあ、私も面倒な人の所有物になったものね……いや、面倒な人外、かしら。人を外れているのだから」

ペストとレティシアは深く長い溜め息をついた。

「でも、あんなマスターで良かったと思うのだ。今がこんなにも楽しい」

「……………そんなの、分かりきった事じゃない」

レティシアとペスト、この二人は恐らく今後とも瑛唄と共に馬鹿をやっていくのだろう。そう考えるだけで二人は頬を緩ませ、ふしぎと笑みを浮かべてしまうのだった。

そしてこの後、白夜又は瑛唄によつて散々弄ばれた挙句、風呂場に投げ込まれたり水着を何時の間にか着せられたりした後、日が変わった頃、解放された。

その後、瑛唄がギフトを神様に返上した後、白夜又のグッズは完成した。他三人と同様、水着カード、お風呂ポスター、プレミアムブロマイド、フィギュアを作成し、白夜又がこのユニットに入った後、ボイスCD『白夜の精霊白夜又ちゃんの！ ご奉仕メイドボイスCD』が録られ、同時収録は泣き虫妹ボイスとなった。

第三部
完!!

レティシアドキドキ添い寝ボイス小説

「あの、少しいいだろうか？」

夜も更けてきた中、そろそろ寝ようと思った自分の寝室の扉がノックされ、その奥からは聞き覚えのある少女の声が聞こえてきた。そして、起きていると短く告げた後、扉を開けるとそこには、いつもの服では無く身軽な寝間着を身に纏ったレティシアが枕を持って佇んでいた。

「どうした……と言われると、少し返答に困るのだが……その、だな……主殿はこの箱庭に来てまだ日も浅い……だからっ！ ちょっと物寂しいのではないか、と思つて……」
顔を俯きがちにしていて、月明かりくらいしか明りになる物が無い部屋ではその紅潮した顔はあまり見えなかった。

レティシアの言葉が建前の様に聞こえて、本当の理由は別の所にあるんじゃないかと思えてくる。が、それでもそれを聞かせないだけの迫力が今のレティシアにはあつたので、自分には聞けない。

「だから、添い寝を……だな。他人の温もりというのは、中々馬鹿に出来ない安らぎがあるんだ……だから、私が……」

俺が不安だろうと思つて、こうして来てくれたのか。そう思うと、心がじんわりと暖かくなつてくる。この箱庭に来たからには、両親も友人もなんもかも捨てる覚悟をしてきた筈だったのだが、どうやら自分は覚悟が足りなかったようだ。

「ありがとう……つて……ああ、主殿が喜んでくれたのなら……私も勇気を出した甲斐があつた」

そう言うレティシアを部屋に招き入れ、自分は布団に入つて横になる。すると、レティシアの顔を見上げる事が出来る。見れば、レティシアは持つて来ていた枕に顔を半分埋めて、少し恥ずかしそうにおおずと枕を自分の枕の隣にぼすつと置いた。枕に付いたレティシアの甘い匂いが、少しだけ鼻孔をくすぐる。

「そ、それじゃあ……失礼するぞ、主殿……恥ずかしいから、背を向けてくれ……」

自分が背を向けると、意を決した様に自分の隣にゆつくりと横になるレティシア。これから寝るといふのに、緊張しているのかりボンも取らずに腕にすつぽり収まる少女の姿のままだ。

でも、その小さな身体が近くになると金色の長髪が揺れて、微かに香つて来た枕の匂いがぐつと強くなる。そして、レティシアに対して背を向けているので、背中から伝わる温もりが、なんとも心地良かった。

「ど、どうだろうか……? あ、主殿?」

少し不安なのか自分の反応を待つレティシア。

「そ、そうか……気持ちいい、か……えへへ、良かった。それにしても、主殿の身体は温かいな……それに、私とは違ってなんだか……男の身体という感じがする……」

男の身体、と言われても少し微妙だが、喜んでもらえたのなら自分としても嬉しい物がある。

「主殿……この箱庭は、きつと主殿もきつと楽しんででもらえる世界だ。それに、黒ウサギや十六夜達も居る……なにも不安になる事は無い」

ああ、確かに黒ウサギも十六夜達も少し癖のある物の、基本的に良い奴らだ。きつとこの世界において、自分を助けてくれるだろう。でも……

「え、私か？ ……ああ、私もいるよ。主殿達が救ってくれたこの命……主殿が必要としてくれるのなら……」

そうじゃない。主とか恩人とか自分には関係ないのだ。

「そんなの関係無い……つて、え？ レティシアだから傍にいて欲しい……つて……えええつ?! いや、その、だな……そんなことを正面から言うなんて……その……!」

きつと振り向けばレティシアの可愛い赤面顔が見れるんだろう。あわあわと背中越しに伝わる動揺が、悪戯心をくすぐってくる。思わず意地悪したくなる。

「あ、主殿……こつちを向いてはっ……あう……!」

自分は身体の向きを変えてレティシアの顔を覗き込んだ。思った通り、顔を真っ赤にしている。それに、少しだけ嬉しそうでもあった。

「わ、私……やっぱり自分の部屋で——ひあ!?! あ、主殿！ 抱き締めるなんて……その……」

逃げようとしたレティシアを、抱きしめて逃がさない。しばらく弱々しい抵抗をするレティシアだが、少しずつ抵抗しなくなってきた。

「全く……主殿は子供みたいだな……甘えん坊というか……ふふ」

くすくすと笑うレティシア。その自然な笑みが凄く可愛くて、愛おしい。抱きしめる腕に自然と力が入る。

「んっ……主殿、少し苦しい……」

その言葉が無ければ、自分は今もっと力強く抱きしめていただろう。はっとなつて少し力を緩めた。

「ふふふ、主殿の身体はたくましいな。男性特有の固さがあるし、柔らかい肌の下にちゃんと筋肉がある。布と羽毛の枕とは違うが、腕枕というのは中々……悪くない」

どうやら随分と緊張はほぐれたのか、レティシアは自分の腕をさらさらとした髪を付けて枕にして、その感触を確かめていた。この腕に乗った重さが、レティシアの存在感をより強く感じさせた。

「主殿……人と人が近づけば……こんなにも、温かいものだな」

その言葉に、レティシアが自分の身体を更に近づかせてきた。自分の腰に手を回し、もつととばかりにぎゅつと抱きしめてくる。触れる場所が増えると、その体温と香りに瞼が重くなってくる。

「ん……主殿、眠いのか？ ふふふ、もう夜も遅いんだ。そろそろ寝よう……おやすみ」

その言葉を最後に、自分の意識は闇に沈んで行く。心地いい眠りの世界に、身体が溶けて行く。そんな中でも、レティシアの温もりと甘い香りだけは、いつまでも自分の心に安らぎと癒しを運んできてくれたのだった。

「……眠ってしまったな……案外、可愛い寝顔をしている……なあ主殿……主殿が私の為にルイオスに啖呵を切った時、私は石になってしまっていたけど、言葉は届いていたんだ……あの時の主殿は、弱々しくて、戦う力は持たない脆弱な存在だったけれど、とても……格好良かったぞ」

「そうそう、私はこれを言いに来たんだ——」

——ありがとう。私の主殿……。

サンドラの純愛甘々ボイスCD

「あのー、お待たせしましたー」

俺は現在、火龍誕生祭で知り合った北のフロアマスターのサンドラと待ち合わせをしていた。ぱたぱたと燃える様な赤い髪をたなびかせて駆け寄ってくる姿は、随分と微笑ましい物がある。

これはデートだ。だがこの光景において俺と彼女はきつと恋人に見えない事だろう。だが、いかんせん彼女と俺の容姿と背丈は違い過ぎて、恋人に見えるかどうかは微妙だ。「はあっ……はあっ……あの、すみません。待たせちゃいました？」

俺の目の前で膝に手を着いて息を整えながら上目遣いでそう言う彼女は、紅潮した頬と少し申し訳なさそうな瞳も相まって、とても可愛らしい。そんなに待つていないと告げると、ホツとした様な表情を浮かべて微笑んだ。

「えーと、貴方と初めてデー……お、お出掛けするって思ったら……どんな服を着て行くか迷ってしまいました……えへへ……に、似合ってますか？」

サンドラの言葉に、彼女の服装を見る。いつものお腹が見える民族衣装の様な服装では無く、現実世界で良く見た洋服を着ている。鎖骨と肩が見える薄黄色のワンピースの

上に、ブラウンのカーディガンを羽織っている。靴は少し上げ底のサンダルで、いつもとは違って髪には新しい髪留め、薄くだが化粧もしているようだ。結論を言うと、とても可愛い。

「か、可愛い、ですかっ……えへへ、そんなにストレートに言われると恥ずかしいです！」
そう言つてプイツとそっぽを向くサンドラだが、その表情は笑っている。感情を隠せないタイプだ。少しくスツと笑ってしまう。

「あ、笑いましたね？ もうっ、貴方のそういう所は好きじゃありませんっ！」
苦笑しつつ謝る。

「はい、許してあげますっ！ それでは早く行きましょう！ 時間が経つのは早いんですから！」

サンドラに手を引かれ、俺は少し足をもつれさせたが、自然に笑みを浮かべてサンドラに付いていった。



「わあっ、凄いです！」

サンドラが目の前の方の光景に目をキラキラさせて歓声を上げた。容姿相応年相応の反

応に微笑ましくなる。

俺達が来たのは『虹色折り紙』^{ハッピーピエロ}というコミュニティが開催しているイベントの会場。現実世界の遊園地と同じ様な物だ。所々でギフトゲームが行なわれているのが違いと言えば違いだ。

「ほら、行きましょう！ 私はフロアマスターですから、このゲームの全体は把握してるんですよ、だから最適な巡回ルートはばっちりですっ！」

ぐいぐいと引つ張るサンドラの楽しそうな顔を見て、こつちも楽しくなる。

「え、楽しそう、ですか？ それはそうですよ、だって……あ、貴方と……一緒、ですか……うう……」

後半語尾が聞こえない程小さくなっていくサンドラの言葉に、恥ずかしいなら無理して言わなければ良いのと思った。

「だ、だって！ 私と貴方は……その……恋人、ですから……えへへ」

照れ臭そうにそう言うサンドラ。可愛い。

「も、もう！ まだ遊んでもないのにこんなこと言わせないでくださいー！」

そつちが勝手に言ったのに。

「いいんです！ ほら、行きますよー！」

俺はずんずん進んで行くサンドラに少し早足で追い付き、隣に並ぶ。そして手を自然

に握った。

「あ……手を……あはは、これも思い出……ですなっ」

にこつと太陽の様な笑顔を浮かべるサンドラ。そしてふと何か思いついたかのよう
に手を放して、意を決した様に俺の腕に自分の腕を絡めてきた。

「手を繋ぐより、こつちの方が……恋人っぽいですね……えへへ」

幸せそうにぎゅつと腕を抱き締めるサンドラ。柔らかな感触とサンドラの匂いが感
じられて、こつちとしても嬉しい。

「最初はあの出し物で——」

サンドラの案内で、俺達の遊園地（仮）周りは始まった。



「ふふふ……あー楽しかったです！」

時刻は既に夕刻。日はもう少しすれば沈み、暗くなってくるだろう。

「まさかあんなギフトを使ってくるなんて吃驚びっくりしましたね」

今はベンチで休んでいる。暗くなってきたからか乗り物や出し物はイルミネーション
が光輝き、とても綺麗だった。

「え、私の方が凄かった？ ……褒めても何も出ませんからねっ」

にまにまと笑いながらそう言うサンドラ。可愛い。

「あ、そうそう。知ってますか？ このイベントではこの時間帯に開始される乗り物があるんです。一緒に乗ってくれないませんか？」

断る理由は無かった。前の世界の遊園地を思いだして随分と楽しませてもらったのだ。もう少し位付き合うさ。

「あはっ、それじゃあ行きましょう！ なんでも、ゆっくりと円を描く様に回るゴンドラらしいですよ」

それは観覧車では？

「かんらんしゃ……ですか？ さあ、それは分かりませんが……恋人二人で乗ると……その、もっと親密になれるそうです……」

少し恥ずかしそうにワンピースの裾を握るサンドラ。俺はそんな彼女の手を掴み、見える観覧車モドキの方へと引つ張った。

「あわわっ……！ ははっ……あははっ！ そんなに慌てなくてもちゃんと乗れますよ！」

少し吃驚した後、俺が観覧車に乗る事に賛成な事を察して笑った。そして笑いながら駆け足になる俺の後ろをそう言いながら付いてくる。

こういう風にコロコロと表情を変える彼女が、やはり愛おしい。

「わぁー……大きいですね……」

しばらく走れば、すぐに辿り着いた。目の前に佇む巨大な観覧車モドキ。幸い並ぶ人は少なく、すぐに乗る事が出来た。

「あははっ！ 昇ってます、昇ってますよ！」

はしゃぐサンドラが遠ざかる下を見ている。沈みかけている夕陽が彼女の顔を照らした。それはあまりにも綺麗で、余りにも可愛らしい。俺はそんな彼女の事を、一人占めしたくて、感情が膨らみ、抑えきれなくなった。

「? どうしました? わひやっ……ななな、な、なにを!」

気付いたら肩を掴んで、サンドラの眼を見つめていた。きつと、俺の顔は今赤いだらう。サンドラの素っ頓狂な声を上げて俺の行動に目を丸くしている。

「……………」

俺の真剣な表情を見て、彼女は俺の眼を見つめ返した。そして、顔を真っ赤にして少し迷った後、その大きな瞳をすつと閉じた。

「ん……」

俺と彼女の距離が少しづつ近づき、やがて零になる。伝わる鼻息と唇から感じるのはお互いの感情。

「——はあ……えへへ、ファーストキス……ですな」

恥ずかしそうにそう言うサンドラは、本当に嬉しそうに笑っていた。夕日が沈み切り、暗くなつた中でイルミネーションの光が代わりに彼女を照らした。

「今まで、なんとなく付き合ってきたんですが……改めて、私の気持ちを受け取ってください」

サンドラは俺の首に手を回して鼻と鼻がくつつく程顔を近づけて、にこつと笑いながら続けた。

「好きです……大好きです……私はまだ小さいですけど、この身体に収まりきれないくらい、たまらなく好きなんです」

サンドラの気持ちは、小さな子が抱く恋愛と間違えた親愛ではない。れっきとした恋愛感情だ。それは、誰がどう言おうと確かなのだ。

だから俺も、素直な気持ちで返そう。

「んむっ……はあ……えへへ、良かったです。これからずつとずつと……一緒にいてくださいね！ 私の恋人さん……」

観覧車モドキはもう回りきつていて、下に辿り着く。だが、店員は俺達の姿を見ると、扉を開けずに見逃した。その際、俺に向かってウインクをした。

サンドラもそれに気付いたようで、少し照れくさそうにしながら

「もう一周、ですね」

そう言ったのだった。

白夜叉ちゃんの御奉仕メイド小説

「失礼するのじゃ」

そんな言葉と同時に入って来たのは、友人である白夜叉。だが、ちよつとした貸しの解消の為に彼女は今、メイド服を来て一日御奉仕をしてくれることになっている。とはいえ、流石は白夜の星霊にしてサウザンドアイズの幹部、羞恥心を感じるどころか寧ろノリノリのようだ。

その手に持っているのはメイドらしく掃除用具。どうやら掃除にきたらしい。

「お掃除させて頂くぞ」

敬語であつて敬語でない様なそんな言葉使い。メイドではあるものの、白夜叉としての権威というか立ち場的なものがあるのだろう。

だが、今は俺のメイド。俺だけのメイドだ。此処は譲れない。

「え？　メイドならメイドらしい言葉使いを……つて……ん、ま、まあ確かに、そうじゃな……ごほん！　え、と……お掃除させて頂きます……ご、ご主人様？」

おお、少し恥ずかしがっている。これはまたレアな物を見た。今日一日この表情が俺だけのものとなれば、テンションもおのずと上がって来る。ここはご主人様として何か

命令をするべきかな？

「え、命令……ですか？」

ですか、の所に若干間があつたな。まだ慣れてないから許すとしよう。

「メイドならご主人様の性欲処理も……へ、変態！」

普段のお前を見てる者からしたら、つくづく心外な罵倒だな。変態はお前だ。とはいえ、それは冗談。そんなことやらせるなんて、何処のエロ漫画だ。とはいえ、白夜叉に命令出来るこの絶好の機会、逃すわけにはいかないだろう。

というわけで、俺を楽しませろと命令してみた。

「楽しませるって……えーと……ハッ……」

すると、白夜叉は持っていたモツプに跨り、少し屈んだ状態で此方を見る。

「魔法の○急便！」

アホか。一体どこからそんな知識を仕入れて来たのか本当に気になる所ではあるが、自信たっぷりなキラキラした瞳で此方を見られると酷く滑稽だ。結果的にだが、確かに面白い物ではあつた。

俺がクスクスと笑っていると、白夜叉は味を占めたのか更に何かしようと考え出した。いや、もういいよ。

「そ、それじゃあこれならばどうじ……ですか」

すると、今度はその状態のままバケツをモップの先に掛けた。

「ジ〇のぬいぐるみを届ける魔女の宅〇便！」

コイツは頭がおかしいのだろうか。二度目のネタは面白くなかった。というか、ジ〇りに手を出すな、危ないから。あの有名なテーマパークのハハツ☆と笑うネズミに手を出す位ヤバいから。

「むう……これはだめk……ですか」

とりあえずこれまま行くとやばそうだから、もういいよと告げた。すると、白夜又はしぶしぶといった様子で掃除を始めた。その手際はたどたどしく、おそらく掃除自体あの女性店員に任せているのだろうと思わせるものだった。

結果的に、掃除を終わらせたのは始めてから2時間後だった。その間俺が何をしていたのかと言えば、それを眺めていただけだ。ちよいちよいかいを出す面白い様に反応してくれるので、退屈しなかった。

「ふう……主人様のせいで少しばかり時間を食ってしまった……です」

いや、たしかに俺のせいもあるんだろうけど、大半以上は君の手際の悪さが原因だと思う。とは言わなかった。俺は大人なのだ。

「なんj……ですか、その不満そうな眼は」

まあそれを差し引いても不満になるだろう。部屋を掃除していた筈なのに、何故か散

らかっているのだから。それは指摘せずにはいられなかった。

「部屋が汚い……う……あ、え、いやそれはその………すみません………でしたです」

しゅんと肩を落としながら、それでも言い訳せずに謝るという所は、彼女の美点だろう。だが、それで許してしまえば主人としての威厳に関わる。というわけで、お仕置きはさせて貰うことにした。

「えと……お仕置き？」

何が良いだろうか？ 性欲処理とかさつき言っただけど、これは今後の関係に関わるな。幾ら白夜叉に俺が変態だと思われているからといって、なんでもやっていいわけではない。

ということ、白夜叉も良くやってそうなことをやってみることにした。パンツ見せろ、たくしあげで。

「ば、ぱんつ!? 私のか!？」

敬語を忘れていた。だが、そんな事を気に出来る様な事態では無いのだろう。白夜叉は自分が今まで黒ウサギにコスプレを強要したりしたことも考えて、断れないのだろう。うんうんと唸っている。

そして、意を決したのかメイド服の裾をぎゅつと握りしめ、真っ赤な顔を更に真っ赤に染めながら、スカートをたくしあげた。

「こ、……これで、いい、ですか？ ご主人、様」

そこで、俺の思考は停止した。何故なら、白夜叉のスカートの下にはあるべきものがなかったのだ。そう、パンツが無かった。丸出しだった。何故だ。

「ど、どうした……御主人……ん？ ……あ?」

白夜叉は勢いよくスカートを抑えつけ、あわあわと慌てながら口を大きく開ける。パンツを履いてなかったことに気が付いたらしい。そして、ぐ、つと力を溜めると、

「履き忘れたのじゃあああああああ!!!」

そう叫びながら部屋を飛び出して行った。履き忘れた、成程それならばパンツを履いていなくても仕方がない。うん、うん………とりあえずは

御馳走様でした。

◇ ◇ ◇

その夜、ぎくしゃくした様子ではあるものの、一日メイドを務め、白夜叉は自分の抛

点に帰ることになった。

俺の拠点の玄関口で、俺と白夜叉は向かい合う。

「え、えと……今日のあのことは忘れて欲しいのじゃ……如何に私といえど、恥ずかしいのでな」

忘れる気は無いけど、ウンワカッタと答えておいた。

「むう……忘れる気が無いな？ 全く……でもまあ、今日は楽しかったぞ。メイドというのも悪くない」

そういう白夜叉の表情は中々満足気だった。どうやらメイド業務に楽しさを見出し
たらしい。ならもう一回やってくれないかなあ、と考える。

というわけで、正直にそう頼んでみた。すると、白夜叉はきよとんとした後大きく笑
う。そして、悪戯っ子の様なニヒルな笑みを浮かべて月明かりを浴びながらこう言っ
た。

「この変態主人様が♪」

白夜の星霊、白夜叉。月夜の光を浴びて輝くその白い髪と、金色の瞳、思わずドキッ
としてしまうほど美しかった。

嘔吐きは泥棒の始まり

戦果つて単語が多いね！

さて、ようやく原作も入ってきた所で、現在瓊瓊は問題児三人が居ないノーネーム本拠の談話室でペストとレティシアと共に寛いでいた。

テーブルの上には最近瓊瓊のアイドルグッズ店の売上で購入してきたみかんっぽい果実が置いてある。というかまんまみかんなのだが、黒ウサギ曰く、みかんではないらしい。食べ方はみかんと同じでみかんと同じ容姿をしているのにみかんではないとはこれ如何に。

そしてそのみかんを手にとって皮を剥き、食べているのはペスト。どうやら甘酸っぱい味に味を占めた様だ。

「それにしても、まさかゲーム参加を断られるなんてね」

「全くだ、負けるからといって最初から勝負を放棄するなど、情けないにも程がある」

ペストの言葉にレティシアは少し不機嫌な様子だった。

それもそのはず、瓊瓊は現在様々な主権者達によってゲームへの参加を拒絶されているのだ。理由はただ一つ、強過ぎるから。

これまで瑛嘎達を取り入れてからのノーネームの戦績と言ったら規格外過ぎて眼を剥く程なのだ。まずはフォレス・ガロを潰し、打倒魔王を宣言。そしてその後レティシアを掛けてペルセウスがたった一人の前に全滅、拳句の果てに打倒魔王宣言を全うするかのようにペスト、黒死斑の魔王を打倒してみせた。もつと前から言えば、十六夜なんかは蛇神に喧嘩を売って結果的に水樹を手に入れた。それも、この世界に瑛嘎達がやってきてたつたの2カ月の間でだ。

快進撃を見せるノーネーム、ひいてはその戦闘員である瑛嘎や十六夜は圧倒的な実力故に主権者から恐れられ、ゲームの参加を断られているのだ。

「つつてもこのまんまじゃなあ……俺さんの戦果もなく終わるぞコレ」

「そうだ、マスターの2000京……のギフトはもうないのだったな」

「というか、今あるギフトって何なのよ」

「んー……コレ?」

瑛嘎はギフトカードを二人に見せた。そこには以前の様に真っ白に染まったカードは無く、ちゃんと中央にギフトネームが表示されていた。

——ギフトネーム【オーバリーグア嘘吐天邪鬼】

「……どういふギフトなのよ」

「天邪鬼が、嘘を吐く……いや元々天邪鬼って嘘を吐いているし……それが嘘……は？」
ペストとレティシアは困惑した。瑛嗶のギフトの内容が掴めない。ギフトネームはそのギフトを体言する名前故に、その名前が分かっただけでギフトの内容を大抵想像することができる。

だが、瑛嗶のは分からなかった。いや、大体方向性は分かるのだが内容が掴めないのだ。

「ま、後々のお楽しみみて事で」

瑛嗶はゆらりと笑って、二人の頭を撫でた。

「むう……」

「……頭を撫でないでっ！」

レティシアはされるがままになっていたが、ペストは若干頬を紅潮させて恥ずかしそうに瑛嗶の手を自分の手で払った。

「ふむ、まあ俺のギフトは後々もつと盛り上がる時に使おうぜ。それに、ギフトでなんでも解決したら皆駄目になる」

「ということはそのギフトはこの状況を打破することが出来るってことね？」

「まあ使い様によっては」

元々、神から渡されたこのギフト。以前のギフトを作るギフト【嗜考品】プレフェレンス程全能性は無いが、それでもチートはチート。強くなるこそすれ、弱体化などあり得ない。

また、この状況下で瑛嗶がギフトゲームに必ず参加しなければならない理由は無いのだ。

「とはいえ、十六夜ちゃん達がどんな戦果を上げてくるか、見物だね」

「全く、マスターはもつとやる気を出した方が良くと思うのだが……」

「いいじゃない。主がやらないなら、私達が騒いでも意味は無いわ……もきゆもきゆ……」

「おいしい?」

「っ………不味くは無いわ」

瑛嗶の問いにみかんモドキをもう一つ取ろうとしていたペストの手が止まったが、ペストはぷいっとそっぽを向きながらみかんモドキを取ってそう言った。どうやら好物になったようだ。

さて、ここまでで彼らがギフトゲームに参加出来ない事を話し合っていた理由を話そう。

それは、数日前に遡る。



ペストとの対戦後から一カ月。この一カ月は瑛嗶やペスト達にとつてはそこそこ忙しい物だった。サンドラや白夜叉をアイドルに勧誘し、ユニットを結成。グッズを作製して販売。レッスンや体力作り、曲作りをこなし、来るお披露目に備える日々。また、瑛嗶のギフトが一つになったり、とんがり帽子の地精メルンとデイーンの活躍で土地の4分の1がまた使えるようになったりとかかなり忙しなくノーネームは活動していたのだ。

そして、そんな日々を送るノーネームは先程挙げた様にかんがりの戦果を上げてきた。その成果は順調に出て来ていた。

まず、土地が使えるようになってきた事。メルンの加入により、土地は今までの比じゃない程使えるようになってきた。これは十六夜の持つてきた水樹と飛鳥の連れてきたメルンとデイーンの働きによる物だろう。あとはそこへ植える苗などがあれば直ぐにでも畑や野菜を作る事が出来るだろう。

次に、ギフトゲームへの招待状。瑛嗶達はノーネームの一員であり、その責任者はジン・ラツセルだ。それはつまり、瑛嗶達の上げてきた戦果は全てジンの名の下に行なわれた事であり、その戦果は全てノーネームの戦果になる。故に、その実力を認めた他のコミュニティからギフトゲームへの招待状がジンの名前宛てに送られてくるように

なったのだ。これはまぎれも無く、ちゃんとした成果である。

「そこで今回の本題。復興が進んだ農園区に特殊栽培の特区を設けようと思うのです！」

「特区ねえ……」

「YES！ 有り体に言えば霊草や霊樹を栽培する土地ですね」

ここからが本題。今回、瑛噺がギフトゲームに参加しようとして話しあっている理由はこの話にある。

発端は黒ウサギ。先程からの話の通り、戦果をあげたノーネームの土地は着々と復興作業が進んでいる。だから、その復興出来た土地に苗や牧畜を手に入れて栽培したいという事だ。

とどのつまり、土地が出来ても作る物が無いから取って来いということ。

「ふーん……霊草って言ったなら、マンドラゴラとか？」

「マンドレイクとか？」

「マンイーターとか？」

「ああ、これだね」

黒ウサギの言葉に瑛噺達は反応する。その中でも瑛噺は何故かその手に実物を持っていた。一つは縛られ、口にガムテープを貼られたマンドラゴラ。一つは青紫の小さな

花を咲かせたマンドレイク。そして一つは今にも咬みついて来そうな凶暴性を持った人食い花だ。

「どっから取り出したんですかそんなの!？」

「いやー、神様に返上したギフトの中に空間倉庫を作ってた奴があっただけど、中身は俺の物だからってことで返してくれたんだよ。で、オマケで倉庫自体は残してくれた訳。その中であっただ」

「というかマンドラゴラとマンドレイクは違うの?」

「マンドラゴラとマンドレイクは基本同じ物だ。空想上に出てきたのは叫び声を上げて聞いた者を死なせる植物だが、現実じゃその花がマンドレイクと呼ばれてる」

耀の疑問に十六夜が答えた。いつも思うがその無駄な知識は何故取り入れたのだろうか。

「まあそれは良いとしよう」

瑛瓊は三つの植物を後方へ放り投げた。すると、空間が歪み、中へ吸い込まれて行った。

「で、続きは?」

「ああ、はい。えーと、そんなわけで苗や牧畜が欲しい訳です。都合良く、南側の『龍角を持つ鷲獅子連盟』から収穫祭の招待状が届いていますし、連盟主催と言う事も

あつて収穫物の持ち寄りやギフトゲームも多く開かれます。そのその賞品として種牛や希少種の苗なんかも手に入るかもしれないですね！ コミュニティの力を上げるにはもってこいです！」

黒ウサギが興奮を隠しきれない様子でそう熱弁する。瑛嗶はそんな黒ウサギを見てあまり興味もなさそうに眼を細めたが、十六夜達は少し面白そうだと若干身を乗り出していた。

「それで、話はそれだけじゃないだろ？」

十六夜達が口を開こうとした時、瑛嗶は先んじて話を進めさせる。いつもどおり、こういう話し合いはあまり好まないの、早く終わらせようとしているのだ。

「……ええ、それで少し問題がありました」

「問題？」

「この収穫祭は二十日間という長期間に渡って行なわれるイベントで、前夜祭を入れれば二十五日。約一カ月にも及ぶのです。この規模のゲームはそうないので最後まで参加したいのですが……コミュニティに主力が長期間いないのは少し不味いのでレティシアさんと誰か二人ほど残って欲しいのですが……」

「嫌だ！」

やはりというか、十六夜達は拒否った。まあお祭り好きなのは子供の特権だが、それは組織的にみるとただの我儘。ここは楽しむのもいいが、計画的に行きたい。

「まあ、俺としては別に残っても良いが……あと一人、ねえ……」

瑛嗶は別に残っても良かった。苗とか興味なかったし、何より火龍誕生祭では全部持っていったので、十六夜達にもこの世界を楽しんでもらわないという今更ながら大人な思考をしたのだ。

「じゃあとりあえず日数を絞ろう。前夜祭に二人、オープニングセレモニーから一週間に三人、そこから最後までに二人。このプランでどうですか？」

「……そのプランだとこの中で二人だけ全部楽しめるようになるじゃない」

「んなのゲームで決めろや。箱庭はそういう場所だろう？」

「瑛嗶さん……ではどんなゲームにするの？」

「ん、今からその祭までに一番戦果をあげた奴が祭を総取りだよ」

これが、瑛嗶がギフトゲームを探している理由。つまり、各自でギフトゲームに参加し、コミュニティにとって一番戦果を上げてきた物が祭を総取り出来るという仕組み。

これなら別に三人とも異論は無かったのだ。寧ろ、全員やる気満々でそのゲームに挑む意思を見せたのだった。



「お祭りなんてね、皆楽しめればいいんだよ。大事なものは、その祭りですれだけの事をしたかだ。時間はさして意味を持たない」

「なるほどね……」

「でだ、今回レティシアちゃんは残るらしいけど、ペストちゃんは行って来ても良いんだぜ？」

「ふん……別に良いわよ。レティシアや貴方が残るなら私も残るわ………一緒にいきたいし」

最後の方はぼそつと言ったペストだが、瑛嗶とレティシアにははっきり聞きこえていた。聞こえた上で聞かなかったふりをしたのだった。

神キヤラ登場詳細不明

さて、その後結局瑛嗶はなんの成果を上げる事は無く、ギフトゲームに参加する事は無かった。つまり瑛嗶は今回の勝負の結果がどうであろうと祭の最初から最後までずっと居られ無い訳だ。そして、そんな瑛嗶とは違って、十六夜達は確固とした戦果を上げて帰って来た。

現在、瑛嗶達は十六夜の戦果を貰うべくサウザンドアイズの支店に向かっていた。ちなみに、飛鳥の戦果は乳牛を10頭だ。そして耀の戦果は火龍誕生祭で参加したギフトゲームの決勝戦で相手だった『ウィル・オ・ウィスプ』のメンバー、ゴスロリの地精アームに勝利したことで手に入れた、『炎を蓄積出来る巨大キャンドルホルダー』だ。

この二人の成果を顧みるに、十六夜の成果次第だが耀が一步抜き出ているだろう。そのせいか、瑛嗶の横で三毛猫を抱き抱えている彼女の表情は若干誇らしげだった。

「そういえば、十六夜の戦果はこれから取りに行くらしいけど……瑛嗶さんの戦果はなんなの？」

「私も気になるわね。瑛嗶さんの事だから凄いや物が出てきそうだけど」

「ヤハハ、俺も結構自信があるが……予想以上の物が出てきそうだなあオイ」

サウザンドアイズの支店が目前に見えてきた頃、三人は瑛嗶にそう言った。確かに今まで瑛嗶は化け物染みた方法で様々な戦果を上げてきた。故に、三人にとつて瑛嗶はやはり自分達以上に問題児なんだろう。兎、というには幾分年齢に矛盾があるが。

「わはは、いやいや……残念なことに俺はなんの成果も上げてないんだ。ギフトゲームには何処も参加させてもらえないし、なにより面倒臭くなつたから談話室ですつと寛いでたよ」

「え？」

そんな期待を寄せる三人に対し、瑛嗶はそう言つて苦笑した。期待されても戦果は無いのだ。

「へえ、瑛嗶にしちゃあ予想外だな。正直元ノーネームのメンバーを数人連れ戻してくるとか魔王を数人潰してくるとかやりそうだと思つてたんだが」

「まあ出来なくはないんだけど、ほら俺つて大人じゃん？ 祭は子供が楽しむものだよ」
「……確かに私達よりは大人よね。年齢もずっと上だし」

「実力も上だし、なんだかんだで思考も大人びてるもんね。行動は子供っぽいけど」

瑛嗶の言葉に、飛鳥と耀は頷く。十六夜もその点は認めているのか異論は無いようだった。

「ま、そんなわけで俺の戦果は0だ。十六夜ちゃんの戦果に期待しよう」
「ちゃん付け止めろ」

そう言っている間に、3人はサウザンドアイズの支店に辿り着いたのだった。



「また貴方達ですか……」

そう言ったのは支店の前を掃除していた青い髪の女性。この支店を任されている女性だ。実はカットされた物の、瑛嗶達が最初にサウザンドアイズにやってきた際に、閉店だから帰れとか言ってきたいざこざになったりしているのだが、瑛嗶が上手い事丸め込んで強引に入った覚えがある。

「まあまあ、俺達は一応白夜叉ちゃんに呼ばれてきたんだぜ？ ほら、これあげるから」

「なんですかコレ……って白夜叉様のプレミアムプロマイド!? いりませんよ別に!」

「マニアに売ればそこそこ高く付くぜ?」

「どうぞどうぞ、入ってくださいいな!」

「どうも」

またも瑛嗶に丸め込まれた女性は大事そうにプロマイドを懐に仕舞った後、瑛嗶達を

中へと入れた。そのやり取りを見ていた十六夜達は、苦笑気味にぞろぞろと瑛唄に付いていく。

「うーい、白夜叉ちゃん。来たぜ」

「お、瑛唄殿ではないか。小僧達もいるな」

「し、白夜叉様！ 箱庭の貴族の沽券にかけて黒ウサギはこれ以上際どい服はちよつと……！」

「この白雪も神格の端くれ、これ以上は……！」

「……なにやってんの？」

「ふふふ、見よこの二人を！ こんなにエロい身体をしているのだからエロい服装を着せようというエロい欲求が爆発したエロい暴徒がエロエロにしようとするのだ。そう、この私の様に!!」

「黙れこの駄神ツ!!」

瑛唄達が入ってきた時、白夜叉は自分のプロデュースをしている瑛唄を殿付けで呼んだ。そしてその事に対して少し驚く十六夜達だった物の、それ以上に中に居た黒ウサギと見知らぬ白雪と名乗った女性が際どい浴衣を着て涙目になっている光景に更に驚いたようだ。全員唾然としている。

「へー……つしよつと……どれどれ？」

「……はっ、なにを自然な流れで黒ウサギのスカートをめくろうとしてるんですか瑛唄さん！ ミニスカ浴衣なんですから少しめくっただけで下着が!!」

「あ、やっぱり?」

「やっぱりってなんですか!」

「じゃあそつちの子ならオツケー?」

「馬鹿かお前は! そもそも女性の下着を堂々と覗こうとするその思考に脱帽だわ!」

瑛唄は極々自然な動きでセクハラを行なうが、それを当然の様に止める黒ウサギと女性。だがこれはただの囮。本命は——

パシヤツ

十六夜だ。

「へ?」

「つしや撮ったぜ!」

十六夜は瑛唄から渡されたカメラを構えて黒ウサギと隣の女性を撮影していた。しかも二人とも座っているのがハイアングルからの撮影だ。それはつまり、出ている胸元がしっかりと写されているという事だ。

「どうよコレ」

「うーん、まあ以前のギフト製カメラよりは機能性は劣るものの、中々だね。及第点だ」
「ただこの辺りに白夜叉の足が写ってただけど……」

「編集でどうにかするか……」

瑛嗶と十六夜はまるで打ち合わせでもしていたかのように、エロ本を隠れてみる男子
中学生の様に「こそこそ」と話し始めた。

「このお馬鹿様!!」

そしてそんな事をしている二人は結局、いつもどおり黒ウサギによつて突っ込まれた
のだった。

春日部耀。 空気脱却

さて、そんなやり取りの後、十六夜の戦果を受け取る話になった。そして今回十六夜が上げてきた戦果は、外門の利権書である。

外門の利権書。それは、その地域で尤も力のあるコミュニティが持つ権利である。箱庭に存在する外門の一つを管理し、外門同士を繋げる境界門の管理などを任される一種の契約書であり、ノーネームが以前失った物の一つでもある。十六夜はそれを白夜叉との契約を果たすことで取り戻したのだ。元々はフォレス・ガロの持ってた物だったのだが、これもノーネームによって解体済み。白夜叉の管理下に置いてあった物だ。

そこで、十六夜はその地域のコミュニティが外門の利権書をノーネームが持つても文句を言わないだけの戦果を立てつつ、実力を認められる行動を取ることでそれを手に入れた。その行動とは、水源の確保。十六夜がこの世界に来てから初めて戦ったあの蛇神ともう一度対峙し、蛇神の出すギフトゲームをクリアすることで十六夜は蛇神を隷属させてきたのだ。

湖を自分の領地にしていた蛇神を隷属させた事で、彼女の持つ水源を確保できるギフトを地域の全コミュニティに提供するのだ。そうすることで実力を認められつつ、利権

書を持つ事を認めさせる事が出来る。

とまあ長々と説明した物の、とどのつまり一番戦果をあげたという事で、ノーネーム内の私的な勝負は十六夜の勝利である。瑛嗶が何もしてこなかったの、なんとなく勝利を譲られた感も否めないが、これで祭を全て楽しめる二人は十六夜と次点の耀になった。瑛嗶と飛鳥はそれで納得している。

「……ふむ」

そんな瑛嗶は十六夜中心に喜ぶ黒ウサギ達から少し離れた所で、なにか会話をしている飛鳥と耀を見ながらなんとなく合点がいったかのように頷く。

「わはは、若いねえ……」

瑛嗶は呟き、ゆらゆらと笑った。

◇ ◇ ◇

それから時間が経って、夜。外門の利権書を手に入れたノーネームでは宴が開催され、十六夜が空気を読まなかったりペスト達アイドルユニットがミニライブを行なって全員を魅了したりした。その際、流星は瑛嗶プロデュースのアイドルと言うべきか、あの十六夜すらも魅了し自分達のファンにしてしまった。恐るべき実力だ。

だが、楽しい宴の裏で、悩んでいる者が居るのも事実。それは、問題児三人の内の人……春日部耀である。

「……はあ、ねえ三毛猫。私は全日参加になったよ」

『そら良かったなお嬢！』

「でもね……瑛嬢さんが本気を出して勝負してきたら私はやっぱり勝てなかっただろうし、飛鳥に協力してもらったからあまりいい気はしないんだ」

『お嬢……』

耀は膝の上に乗っている三毛猫に向かって話している。彼女は今まで取り立ててノーネーム復興に手柄を立てて来た訳ではない。寧ろ、まだ小さな事しか手伝えてないのだ。

「十六夜達は本当に凄いいよね。飛鳥はディーンやメルンを連れて来たし、十六夜は今回みたいにいつも規格外な方法で良い結果を持ってくるし、瑛嬢さんは……自由だよ。私と一緒にこれといってノーネームに何か得を持ってきた訳でもないけど、私みたいに悩んでない。本気でこの箱庭を楽しんでる。最近なんかグッズ販売の売り上げで好き勝手やってるんだって」

勝ったのに腑に落ちない表情で俯きがちに呟く耀は、三毛猫から見ても悲しそうだった。

「あのね、三毛猫。あの土地は飛鳥が土壌を整えて、十六夜が水源を確保してきたんだよ。だから私が最後に苗を植えればこの農園は皆で作ったんだって胸を張れると思っただ。だからこの収穫祭に出来るだけ長く参加したかったの……結果的に参加出来る様になったけど……卑怯な手で勝っても嬉しくないや」

『お嬢、元氣出してや』

現在、このノーネームの中でただ一人耀だけが取り残されている。魔王打倒を掲げても、ペスト戦では戦う前にダウンしたし、フォレス・ガロとの勝負も結局怪我を負って帰って来たし、ルイオス戦では瑛嗶の一人勝ちだ。全く何も出来てない。この小説の中でもはや空気と化し始めていたし。

「……瑛嗶さん達は凄いやね」

『……せやな』

「でも、私はあんまり凄くないね」

『……』

三毛猫はその言葉に返答を出せない。慰めも、励ましも送れない事に、悔しさが込み上げてくる。否定したいが、その言葉を否定出来るだけの要素がない。その無言の状況が、耀の言葉を言外に肯定していた。

「……やっぱり、流される感じでコミュニティに入ったのが駄目だったんだよ。偶然素

敵な友達が出来ただけで、私にはその関係を維持するだけの力が……無い」
『お嬢……』

言葉にすればするほどネガティブになる思考に、嫌気がさす。俯きがちな表情は、三毛猫からはよく見えた。辛そうで泣きそうで悔しそうで、どうにもならない事に逃げ出した表情。眼も当てられない。だがそこに一つの声が掛かった。

「わはは、随分とネガティブ思考だね。どうしたよ、耀ちゃん」

バツと顔を上げる。その声は、聞き覚えのある声だった。視線の先には窓枠に腰掛けた瑛嗶が、ゆらりと笑って居た。

「瑛嗶、さん」

「そんなに手柄が欲しいか？」

「……」

「そんなにしてまで関係を維持したいのか？」

「……うん」

「へえ、君の中の友達ってお互いに得が無いと関係が維持できないんだね。わはは、随分とユニークな友達を作ろうとしてるじゃないか。ふう、それじゃあホラ」

瑛嗶は耀に封筒を差し出した。耀は首を傾げながらそれを受け取る。

「っ!? これ、お金……しかもこんな大金……!?!」

耀は封筒を開けて中身を出す。それはグッズ販売で手に入れた売り上げの一部。日本円で、約500万円。瑛嗶にどういふつもりだと眼を向ける、が……そこから言葉は出なかった。瑛嗶の表情が笑っているのに冷たかったからだ。

「あ……」

「これやるよ」

「………な、なんで……」

「これやるからさ——」

瑛嗶はにたりと寒気がする程の笑みを浮かべて、言った。

「俺と『お友達』になつてくれよ」

怖かった。瑛嗶の言葉は、耀の心にグサグサと刃を突き立てる。

「お前の言う友達つてつまりこういう事だろ?」

それは違う

「これから定期的に同額の金を渡すからさ」

そんなのいらぬ

「俺とずつと仲の良い友達で居続けてくれよ」

耀はその言葉に、目を見開く。先程までの自分の言っていたことを思い出した。三毛猫に向かって大層な事をペラペラと喋って、最後の最後には何と言った？

『偶然素敵な友達が出来ただけで、私にはその関係を維持するだけの力が……無い』

なんともまあ友達という言葉を履きちがえた傲慢な言葉だ。そんな損得勘定でしか続かない関係を友達と呼ぶ。馬鹿馬鹿しいにも程がある。

瑛嗶が言ってるのはそういうこと。一緒なのだ。金を渡すから友達でいてくれ、コミュニケーションに利益を持つてくるから友達でいてくれ、そんな関係などクソ喰らえだ。

「……ごめん、瑛嗶さん」

「え、なにが？」

何時の間にか、手元からお金の入った封筒は消えていた。見れば瑛嗶の手に握られていた。金の無刀取り、スリに使いそうだ。

「私、少し思い違いをしてたかも」

「ふーん、まあ知らないけど。正せたなら良かったね。じゃ、頑張つて」

瑛嗶はそう言つて窓から飛び降り、姿を消した。何をしに来たのか、と考えれば答えは三毛猫でも分かる。

「……………はあ……………ねえ三毛猫」

『なんやお嬢』

「瑛嗶さんって……………自由奔放で唯我独尊な人だけどさ」

『……………おう』

「きつと誰よりも……………大人だよね」

『……………せやな。なんせ3兆年も生きとる爺さんやからな』

三毛猫の言葉に耀はクスツと笑う。あれだけ若いのに年だけは爺さん以上。中々笑いを誘う矛盾だ。

「私も、あんな風な事が出来る大人になりたいな」

耀は瑛嗶のいた窓に近寄って空を見上げ、そう言った。それに対し、三毛猫はただ同じ様に空を見ながら、短く

『頑張りや、お嬢』

そう言ったのだった。

気付かぬ間の悪い予感

「……うん、まあ大丈夫そうかね」

「ねえ、私結構驚いてるんだけど。マスターがまともな事をしたわよ」

「私も驚愕を隠せないよ。見てくれ、この鳥肌」

「見事に健康的な白い肌ね。見せつけてるの?」

「ペストは髪がさらさらなんだからいいじゃないか。私は髪長いから手入れが大変で

……」

「おい、話題がずれてるけど?」

さて、瑛嗶は春日部耀に少し発破をかけた後、窓から飛び降りた先でペスト達と合流した。さきほどのやり取りを見ていたようで、瑛嗶らしからぬ行動に少し驚いていた。

「お前ら俺をどんな眼で見てんだよ。俺だっけいつも滅茶苦茶やつてる訳じゃないんだぜ?」

「……まあそれもそうか」

「と言っても、だ。俺としては今回そこまで干渉しようとは思ってないんだよ。火龍誕生祭じゃあ俺が殆ど持ってたからあの三人もちよつと不満足だった様だし、この収穫

祭りや楽しんでもらおうとね。ついでだし、お前らもお小遣いでもやろうか？」

瑛唄の台詞にレティシアやペストが苦笑する。流石に最近では瑛唄の子供扱いにも慣れてきた。見た目は20歳程に見える物の、実年齢は3兆歳……子供扱いでも仕方ないと思えて来たのだ。

それに、瑛唄は瑛唄で考えがある。友人関係、というより人間関係やコミュニケーションについては転生してきた世界で多く学んできた。リリカルなのはじや人とぶつかる勇氣と友情を、めだかボックスでは思いを伝える言葉と愛情を学んだ。ハンター・ハントナーは戦いの世界だったので例外だが、多くの人間と世界中を回って知り合った。それだけ学べば十分だ。

「それに——」

瑛唄は振り向き、窓際で空を見上げている耀と三毛猫を見た。そして一旦途切れた言葉に首を傾げるレティシアとペストに視線を戻して言葉を紡ぐ。

「——友達は大切にしないと、ね」

そんな事欠片も思っていないだろうと思わせる程薄っぺらい笑みを浮かべて、瑛唄は言う。ペストとレティシアは、そんな瑛唄の言葉に

「いつも通り、ってことか」

「相変わらず、手の平の上で転がされる感が少し気に障るけどね」

苦笑してそう言ったのだった。



さて、綺麗に終わったかと思えば、実はこの件はそうでも無く続いた。発端は春日部耀の弱音を聞いた三毛猫。彼は耀をお嬢と慕い、彼女を支えるべく彼女のそばにいるのだ。故に、彼女が弱音を吐いた事で、彼は彼女の本音を知ってしまった。そしてその本音を知った所で、どうにか出来る行動を起こせるわけでもない、故にその翌日、彼は私的に意趣返しをする事を決めた。

『つても、あの瑛唄ゆう男は見上げたもんや。お嬢もなんや尊敬しとるようやし、俺も骨のある奴やと思う。やから意趣返しの手はあの十六夜ゆう奴や』

三毛猫は心の中でそう決めて行動する。傍に耀の姿は無い。トコトコと歩き、十六夜達の居る場所へやってくる。やって来た場所は、風呂場だ。現在十六夜はリリやレティシアと共に入浴中だ。なんでもレティシアの髪が濡れると劇的に印象が変わるとの事で、一目見ようという話になったらしい。

『ケツ、オス一匹にメス二匹か、ええ御身分やの……さて』

三毛猫は音を立てない様に十六夜の脱衣籠を漁る。そして見つけた。

『小僧がいつも頭に付け取る奴か……これでええやろ』

加えたのは、十六夜のヘッドホン。十六夜の過去がどうであるかは知らないが、このヘッドホンは元の世界で親身な関係だった人物から貰った物だ。ある意味で、愛着が湧いていたのだが……三毛猫は事もあるうにそれを奪ったのだ。意趣返しにしては少し事情を知らない事がより悪い方向に展開を進めていた。

『……さ、バレへん内に退散や』

三毛猫はヘッドホンを引き摺りながら風呂場を出て行く。十六夜がヘッドホンが無くなった事に気付いたのはその数分後。

そして、全てを知っているのは

「——本当、皆若いねえ」

十六夜のDVD第二弾を撮影しようとして偶然居合わせていた、瑛嗶だけ。

「さて、十分撮影出来たし……リリとの洗いつことかレティシアとの入浴とかだから、きつと十六夜ちゃんは大勢のロリコン達から敵意を向けられるだろうね。わはは、まあ十六夜ちゃんにとっては望む所かな？」

瑛嗶はそう言つて、ビデオの電源を切った。

出発

さて、結局の所。その後瑛嗶が何かしてくる事も無く、収穫祭出発日になった。十六夜は未だ出発時間にやってきていない。怪訝な表情で十六夜を待つ黒ウサギ達だが、まもなくして十六夜は姿を現した。違うのはヘッドホンでは無くヘアバンドを頭に付けている事くらいか。三毛猫の行なった意趣返しは十六夜の行動からして中々の影響を与えた様だ。

また、この事に関して瑛嗶が何かしらの干渉、例えば犯人を十六夜に告げる、と言った事をすればどうにでもなったのだろうが、瑛嗶は動かなかった。実際の所、面倒だったのだ。いくら娯楽主義とは言っても面白いと感じるのは瑛嗶自身、面白くないと感じればとことん興味が無いのだ。

「十六夜さん、そのヘアバンドは……？」

「ああ、頭に何か無いと落ちつかねえんだよ。ヘッドホンの代わりだ……つと、瑛嗶」

「なんだ」

「俺はゲームに勝って祭を最初っから最後まで遊べる筈だったが……ヘッドホン探すから残るわ」

十六夜は瑛唄にそう言う。

これでこれから行く収穫祭のメンバーが変更になる。十六夜は瑛唄に祭を最初から最後まで楽しめる権利を譲ったのだ。故に、前夜祭は瑛唄と耀と飛鳥が、オープニングセレモニーからの一週間は瑛唄と耀と飛鳥と十六夜が、そこから最後までを瑛唄と耀と十六夜が楽しむ事になる。瑛唄と耀が全日参加になるのだ。十六夜はレティシアと後から参加することになった。

「ふーん……まあいいけど。君のヘッドホンが何処にあるのかは知らないけど、君が此処に残って探すのなら口出しはしないよ。精々頑張ってくれ」

「……………ああ」

瑛唄はヘッドホンの場所を知っている。知っていて、言わない。ここで色々といざこざが起こつても面倒なのだ。ならば、追々十六夜に渡るのを待つ方が楽だろう。

「さて、それじゃ行くかうか」

瑛唄の言葉を皮切りに、十六夜の事が少し気になりつつ全員出発した。黒ウサギ、ジン、耀、飛鳥、瑛唄、ペストと三毛猫の五人と一匹がノーネーム本拠から姿を消す。残ったのは十六夜とレティシア、リリ達子供陣のだ。見送る十六夜は、瑛唄の薄ら笑いを見て舌打ちする。

「どうした、十六夜」

「……いや、瑛嗶が……な」

「マスターがヘッドホンを盗ったと？」

「いや、違う。アイツは俺のヘッドホンの居所を知ってるんだと思う」

「何？」

「知つてて尚、俺に教えなかつた……となると、ノーネームの本拠にはヘッドホンは無いかもな。状況的に見ればお嬢様か瑛嗶辺りがやりそうなもんだが……プライドの高いお嬢様は論外だし、瑛嗶は最初に残ると挙手したからな……多分違うだろ」

十六夜はレティシアに自分の推察をつらつらと述べる。レティシアとしてもその推察はなんとなく的を得ていると思つた。何故なら主である瑛嗶は疑うまでも無く、飛鳥もあの性格故にそんな行動をとるとは思えないからだ。となると、残るは春日部耀なのだが、彼女はそんな行動をとる理由が無い。もう全日参加は決まっているのだから。

「まあ瑛嗶の奴が何のヒントも残さなかつたのなら、多分盗んだ犯人は大した理由も無く盗んだんだと思う。んで、いずれ戻ってくんだろ」

「……ふいふ」

「んだよ」

レティシアは十六夜の言葉に微笑を洩らす。十六夜はそんなレティシアの様子に仏頂面でその理由を聞いたです。

「いやなに……随分とマスターを信用しているのだなと思つてな」

「……別に。瑛嗶は自由奔放で俺以上に唯我独尊な娯楽主義者だが……ノーネームだけに留まらず大人だ」

「……なるほど、確かにな」

十六夜も耀も、そしておそらく飛鳥も理解している。瑛嗶という人物の自由気ままな性格と規格外な実力の裏に隠れた成熟した精神を。自分達の様な十代そこそこの子供とは違う経験豊かな大人という事を。

レティシアは十六夜の言葉にふと笑い、自分のマスターがそんな人物である事に少しだけ誇らしくなった。

「マスターの尤も最たる部分は、その人外性よりも先に自身の内側を魅せる所にあるのかも知れないな」

「ま、俺は別に魅せられてねえけどな」

十六夜はそう言つて踵を返し、拠点内に戻つていく。レティシアはそんな十六夜の言葉にクスリと笑つた。

「やはり、子供だな。十六夜も、私も」

そう呟いて、レティシアは十六夜の跡を付いていったのだった。

特に進展が無いね

さて、瑛嗶達は十六夜とレティシアを置いて収穫祭の会場へとやってきていた。アンダーウッドの大瀑布が轟音たる水音を立ててその迫力を惜しみなく見るもの全てに与える中、飛鳥と耀はやや興奮気味だ。ノーネームの水源である水樹の苗は、この滝の水を生み出している水樹の太木から生まれているのだが、それを知った飛鳥達は更に高揚し、その瞳にキラキラと純粋な光を宿している。瑛嗶はそんな二人の後ろに立つてその無邪気さに苦笑し、黒ウサギは一度見た事があるのか、はたまた箱庭出身故に慣れているのか同じ様に笑みを浮かべていた。

今回の収穫祭の主催者のコミュニティは、『龍角ドラゴを持つ鷲獅子リオン』とその連盟であり、これも大きな力を持つコミュニティの一つである。瑛嗶としても、そのコミュニティの実力者がどれ程の物か、十六夜ではないが気になっている。神様に返上した事で、ギフトによる全能性を失い、代わりにギフトによる特化性を手に入れたが、それを大々的に使った事は一度も無いのだ。一応簡単な手ごたえを掴むために一人の時に軽く使ってみたりもしているのだが、やはり使いこなせるかと言えばそうでもない。未だ何が出来て、何処まで出来るかは不明なのだ。

とはいっても、瑛噺はギフトを使わずともその身体能力だけで十分強過ぎるのだが。
「ん」

瑛噺はふと視線を斜め上の方へと向けた。その先からやって来たのは白夜叉と最初にあつた際に会つた幻獣、グリフォンだ。どうやら瑛噺達を迎えに来たようで、段々と速度を落として瑛噺達の前に降り立つとその口を殆ど動かさずに話し始めた。だがまあその言葉が分かるのは動物と話せる耀や黒ウサギ位で、瑛噺と飛鳥、ジンは全く分からない。かといってそれで困る訳でもないのだが。

「さて、話はウサギちゃん達に任せよう。面倒だし」

『久しいな、箱庭の友よ』

「YES！ お久しぶりです！」

「此処が故郷なんだ」

『ああ、サウザンドアイズも参加する様だな。戦チャリオット車を引いてきたのだ』

瑛噺達を余所に話す黒ウサギと耀は、久々に友人と会つた事で嬉しそうだ。だが話の内容が分からない瑛噺達からすれば、つまらないにも程がある。

「ふむ……こうかな？」

『む？』

「やあ鳥類」

『ああ、久しいな。我が友の知人よ』

「酷いな。俺とは友達になつてくれないのかい？ 全く、幻獣も心が狭い」

瑛嗶とグリフォンが会話しているのを見て、耀達は驚愕に眼を見開く。

「瑛嗶さん、言葉が分かるのですか!？」

「今覚えた。一応、前の世界で妙な言語を喋る奴は腐るほど居たから、言語習得は得意なんだ」

具体的に言えば数字で喋る鉄球少女とかだが、あれは規則性があつたから解読出来ただけで、そもそも種族の違う幻獣の言葉を理解するなど不可能に近いのだが、瑛嗶は今まで使用していた言葉の力であるスタイルの基礎を使つてそれを補つているのだ。神様に返上したとはいえ、相手の気持ちを理解するスタイルの基礎位ならまだ使える。故に、その読心術とも呼べるスタイルの一端と、類稀な言語習得能力を利用して、なんとなく会話を成立させているのだ。実際の所、瑛嗶はグリフォンの言っている事は分かつていない。こんなことが言いたいんだらうなどと先読みして、それに対する答えを言っているのだ。

「得意つて……種族が違うのに……流石人外」

「褒めるなよ」

『だがなんのギフトも無く、種族の壁を乗り越えて会話して来たのはお前が初めてだ』

「そいつは重畳。さて、それじゃ案内してもらおうか」

『ああ、それでは私の背に乗ってくれ』

グリフォンの言葉に黒ウサギとジン、飛鳥はその背に飛び乗った。そしてグリフォンがゆっくりと浮上すると、耀もグリフォンの空を蹴る力を借りて同じ様に飛び上がる。

「瑛嗶さんは乗らないの?」

「わはは、大丈夫大丈夫。俺はお前らに後れを取るほど鈍くない」

「……ふーん、それじゃあどれ程の物か見せて貰うね」

「期待しとけ」

瑛嗶の言葉を聞いて、グリフォンと耀はその翼と足に力を込めて飛ぶ。瑛嗶はその速度に少し感心するも、一息吐いてトントんと足を地面にぶつける。

「さて、俺も行くか。まあどれ程のもんかと思っただけど……大した事は無かったな」

瑛嗶はそう言って、その場からふっと姿を消した。瑛嗶が立っていた場所に残されたのは、地面に深々と残った足跡と、それを中心にした小さなひび割れだった。

瑛嗶の身体能力

さて、グリフォンと耀達が空を踏んで駆けて行く速度はやはり群を抜いていた。一歩踏み込むごとにその身体は空気を切り裂いて前へ前へと進んで行く。グリフォンは全力の半分ほどでしかないが、その速度にギフトで付いてくる耀も速い事には変わりない。グリフォンの背にしがみ付いている黒ウサギや飛鳥、ジンらはその速度の空気抵抗に重圧に顔を歪めていた。

そしてそんな二人の走者はふと背後を振り向き残してきた瑛嗶を心配する。瑛嗶はあの膨大な量のギフトを失っているのは周知の事で、耀も知っている。それ故に瑛嗶はこの速度に付いてこれず、置いてけぼりになったのではないかと少し不安なのだ。だがここで、耀達問題児が共通して勘違いしている事がある。それは、瑛嗶の馬鹿げた身体能力が、ギフトによる物だと思っている所だ。

元々、瑛嗶の身体能力は素であり、ギフトの関わる点は一切ない。故に、人外なのだ。「うーん……瑛嗶さん大丈夫かな」

『大丈夫だろう。自分で付いて来れると豪語したのだ、何かしらの考えは有る筈だ』
耀の言葉にグリフォンはそう答える。が、それでも耀は少し心配だった。

「……そうかな。まあ瑛嗶さんの事だから心配はしてないけど……」

「そうそう、心配いらないうって」

「……うん」

耀の不安そうな表情にゆらゆらと笑いながら瑛嗶は言う。そしてその言葉に耀は視線を前へ向けた。

そしてそこで異変に気付く。

「つて瑛嗶さん!?!」

「そうだよ。瑛嗶さんだよ」

耀の隣を並走する瑛嗶。耀やグリフォンと同じ様に空を蹴り、空を駆けていた。その速度にはまだまだ余裕があるようで、おそらく現在全速力の耀では追い付けそうにはなかった。

「瑛嗶さん……なんで」

「ん、それ聞くことかな。お前と同じ事をしてるんだけど」

「……瑛嗶さんのギフト?」

「ギフトは使つてねえよ。これは素だ」

瑛嗶の言葉に耀とグリフォンは眼を丸くした。瑛嗶はギフトを使っていない。いないのにもかかわらずこの速度で、しかもまだ余裕があると来た。驚愕するのも当然だ。

「元々俺の身体能力は人間の限界をとうに超えてんだよ。悪いけど、ギフトを持つてるだけの人間には負ける気がしないね」

「な、なるほど………凄いな」

『ふ、ここまで驚かされた人間は初めてだぞ。瑛嗶だったか、私は私の騎手よりグリーンと呼ばれている。よろしく頼む』

「これで俺も立派な友人かい？」

『ああ、以後お見知りおきを。我が友よ』

瑛嗶とグリフォンのグリーの友情は、こうして結ばれた。耀はその姿をふっと微笑みながら眺めているのだった。

『お嬢おとおおおおおおおおおお!!! この旦那にも少し速度を落とすって伝えてえええ!!』

とはいえ、グリフォンの背に乗るメンバーはそんな会話に参加する余裕も無く迫る重圧に耐え続けているのだった。



その後、グリフォンは別の用事で別離。そして逆に火龍誕生祭の時に出会ったウィル・オ・ウイスプのアーシャ・イグニファトウスとジャック・オー・ランタンの二人と再会した。彼女達もこの収穫祭に参加するべくやって来ていたのだ。この収穫祭は中々大規模なイベント、当然火龍誕生祭に参加してきたコミユニティの一部は同様に参加してくるだろう。

そして、彼女と面識のある耀は彼女と仲良く会話し、ライバルとして同じギフトゲームで勝負しようとする週刊少年ジャンプにでもありそうなライバル同士のやり取りを繰り広げたりしていた。だが、そこから彼女が瑛嗶を見つけた時の反応は、実に楽しかった。「お、お前誰だよ!? 耀みたい在空中を走ってるし……どういうことだ!? ギフトか?」「違うよ。瑛嗶さんは素で空を走ってるんだよ」

「そうだよ、分かったかゴスロリツインテール」
「ぐっ……う、うつせえな……お、お前なんなんだよ!」

アーシャはそう言うって瑛嗶に若干気圧されながら強きに返した。何か瑛嗶に感じる所でもあるのか、少し恐怖心を抱いているのか、はたまたただ単にあまりの貫録と自分以上の実力を感じ取った故に気後れしてるのかは知らないが、瑛嗶とアーシャは少しばかり気が合わないようだ。

「ただの人外だよ。なんなら勝負でもする？　今なら特別サービスで瞬殺してやるけど」

「い、いいよ別に。幾らなんでも勝てねえ事が分からないくらい実力が低い訳じゃねえし」

「懸命な判断だね」

瑛嗶とアーシヤはそんな話をしつつ進む。その後、瑛嗶は会話すること無く収穫祭の会場へと辿り着いたのだった。

収穫祭

更新再開。

これまでのあらすじ

火龍誕生祭にて黒死斑の魔王であるペストを打倒し、そこで出会ったサンドラを加えた、レティシア、白夜叉、サンドラ、ペストの四人組のアイドルグループを作りあげた瑛嗶は、しばらく土地を耕す飛鳥達の作業を余所に、商売を勤しんでいた。

飛鳥達によって耕された農園区は、死んでいた土を蘇らせ、後は苗や植物があれば良いという所までできていた。

そしてそこへ都合よくやってきた『龍角を持つ鷲獅子連盟』から収穫祭の招待状。25日間に及ぶ長い期間での収穫祭に参加することにした瑛嗶達は、その会場である『アンダーウッドの大瀑布』へとやって来ていた。

◇ ◇ ◇

さて、空中での移動を終え、瑛嗶達は収穫祭の会場へとやってきた。アンダーウッド

の地下都市、前夜祭ということでギフトゲームが行われる事はまだ無いが、出店や展示物は既に数多く出展していた。地下故に天然の自然から生み出される光とは違い、様々なギフトで生み出された人工の光がキラキラと地下を明るく照らしていた。

螺旋状に形作られた地下都市、その深さは20m程であるが、壁沿いに造られている都市の広さで言えば、地下とは思えないほど広がった。

この収穫祭の主催者は、『龍角ドラコックを持つ鷲獅子連盟』。六つのコミュニティが連盟を掲げ、一つの連盟旗を立てた組織だ。

《一本角》

《二翼》

《三本の尾》

《四本足》

《五爪》

《六本傷》

各コミュニティにはそれぞれの役割があり、それぞれがそれぞれの役割を担って補いつ合っている組織。この六つのコミュニティを総称して、『龍角ドラコックを持つ鷲獅子』と呼ぶの

だ。

さて、このアンダーウッドの水樹の高さはおおよそ500m。瑛嗶達はこの中腹部分、250m地点を目指していた。

地下都市の壁沿いに造られた螺旋階段を登って、水樹の麓にある巨大な根の部分へと辿り着けば、上へ昇るエレベーターがあるので無駄に労力は使わなくて済むようになっている。

「めんどくせ、俺帰って良い?」

「此処まで来ておいて!」

だが、瑛嗶はこの時点でもう飽きていた。実際、アンダーウッドの大瀑布を目の前にした時は確かに凄いとも思ったし、地下に広げられていた広大な都市もワクワクする様な光景ではあった。が、瑛嗶にとってはそれまでだ。光景は光景でしかなく、瑛嗶が求める変化と展開がある訳ではないのだ。

しかも、今日から数日はギフトゲームも無く、商業コミュニティが商売をしたり、展示物を展示したりする予定になっている。もっと血沸き肉躍るような展開はなさそう
だ。

「もつと面白い展示物とかない?」

「……例えばどの様な物でございますか?」

「魔王とか？」

「どんな展示物でございますか!!」

「おいペストちゃん、ちよつとお前展示されてこいよ。魔王だろ」

「嫌よ!」

瑛嗶の無茶苦茶な言葉に黒ウサギとペストが悲鳴を上げた。

ちなみに今この場にいるのは、ノーネームの黒ウサギ、瑛嗶、春日部、飛鳥、ペスト、ジンと、ウイル・オ・ウイスプのアーシヤとジャックだ。

あれ? ペストいたつけ? と思った読者は、今まで空気だったということ勘弁していただこう。一応ペストもやって来ていたのだ。

「ま、どうでもいいんだけどさ……つまんね……」

瑛嗶がそう呟くと、全員が最後の階段を上りきった。辿り着いた水樹の麓、そこから更に上へ昇るエレベーターに乗り込んだ。備え付けのベルを二度ほど鳴らすと、水樹からエレベーターを引き上げる為に水が注がれ、その重さに比例して瑛嗶達を乗せたエレベーターが上へと昇って行った。



さて、エレベーターはものの数分で本陣へ辿り着き、瑛嗶達は受付を済ませて入場する。ところで一人の女性と対面していた。頭には二本の立派な龍角、どこかサンドラに似た赤い髪を靡かせ、大胆に露出させた褐色の肌が、妖艶に彼女を飾っている。

彼女の名前は、サラードルトレイク。瑛嗶の作ったアイドルグループに所属しているサンドラの、姉である。彼女は受付に座っていた少女を出店が数多く拵げられているエリアへと向かわせると、瑛嗶達に向かつて一つ礼をした。

「ようこそ。『ノーネーム』と『ウィル・オ・ウィスプ』の両コミニティの方々。下層でも有名な両コミニティを招くことが出来たことは、私も鼻高々だ」

「誰だよお前。通行の邪魔だ、どけ」

「あ、はい……す、すいません」

「全く……こちとら露出魔に構ってらんねえっつーの」

「ってちよつと待ってくれ!」

「なんだよ」

瑛嗶がサラを押しつけて押し通ろうとすると、サラは勢いよく顔を上げて瑛嗶を止めた。瑛嗶はそれに対して面倒そうに振り返る。どうやらサラは瑛嗶の興味をひけなかつたようだ。まあ、赤髪はサンドラと被っているし、褐色肌もサンドラと被っている。興味を引けるかと言えば無理なのだろう。

「分かったぞ……さては貴方が瑛嗶だな？ 妹のサンドラのプロデューサーをしているという……」

「そうだけど？ あ、すみませんね、サンドラは内のアイドルなんで、ストーカーはお断りです」

「実の姉なのだが!？」

「ああ……いますよね、あの子は俺の妹！ とかいうコアなファン。そういうのもお断りなんですよ。現実見て下さいね」

「あ、そういう対応？ 本当サンドラに聞いていた通りの男だな……」

瑛嗶のマイペースすぎる対応に、サラは肩を落とした。おそらく、どう言っても瑛嗶には話が通じないだろうと諦めたのだ。

「で、そのお姉ちゃんがなにか用？」

「あーれー？ さつきと言ってること違くないか？」

「サラ様、瑛嗶さんはこういう人です」

「……………黒ウサギも大変だな……………」

「いえ、もう慣れました……………」

黒ウサギはそう言って、とほほと肩を落とした。

嵐の前のなんとやら

それから瑛嗶達はサラに連れられて、貴賓室へと連れて来られていた。

「えー……まずは自己紹介といこうか。私はサラ∥ドルトレイク、『一本角』の頭首をやっている。サラマンドラのサンドラとは姉妹の関係になるな」

「結構なシスコンと見えるな……」

「!? ……何故そう思う?」

「ふ、腰布のトコにサンドラのブロマイドが見えているぞ」

「こ、これは……違う!」

どうやらサンドラの兄、マンドラと同じ様に、姉のサラも重度のシスコンの様だ。というか、東側の下層で始めたアイドル活動がこんな所まで浸透しているのは、やはり瑛嗶の手腕だろうか。

まあ兄のマンドラからサラに伝わった可能性もあるが、この分だと結構広範囲でこのアイドルグループの名は広まっていると見てよさそうだ。

「こほん……まあ、それはいいとして……両コミニュニテイの代表者にも挨拶願いたいのだが……やはり彼女はいないのか?」

「ええ、まあ……ウイラは滅多なことでは領地から離れないので。此処は参謀である私から御挨拶を」

サラの言う『彼女』とは、アーシャやジャックが所属するコミュニテイ『ウィル・オ・ウィスプ』のリーダー、ウイラ・ザ・イグニファトウスのことだ。他からは『蒼炎の悪魔』と呼ばれている。

生死の狭間を行き来し、外界の扉にも干渉出来るという大悪魔。このコミュニテイがある北側の下層では、最強のプレイヤーと噂されている人物だ。なんでも、『マクスウエルの魔王』を封印したとかで、五桁の領域でも最上位の実力を持っていると言っても過言ではないらしい。

とはいえ、それはあくまで噂であり、実態はどうなのかは分からない。それに、例えば彼女が五桁最上位の実力を持つていたとしても、『ウィル・オ・ウィスプ』が五桁のコミュニテイになるわけでもない。

五桁からはコミュニテイの組織力が重要視されてくるからだ。何故なら、単騎で高い実力を持つている者が一人コミュニテイにいたとして、五桁に上がってその一人が打倒されれば、直ぐにコミュニテイが崩壊するからだ。

これは、瑛腹にも言える事実である。言ってしまったら、瑛腹の実力は五桁どころでは無い。それなのに五桁のコミュニテイに『ノーネーム』が上がれないのは、それだけの

戦果と成果、そして旗を取り戻していかないからだ。例えそれが揃って五桁へ上がったとしても、瑛唄が倒される事で戦力が崩壊するのなら意味は無い。

「まあいいだろう。そうそう、そちらの噂も耳にしているぞ、ジン」

「え？」

「なんでも五桁のコミユニティ『ペルセウス』をノーネームが潰したとか。それに、あの
ブラックパーチャイ『黒死斑の魔王』を倒したのも貴殿らなのだろう？」

「……というか、瑛唄さんですね」

「は？」

「そうだ。確かにそれはノーネームの戦果として方々に知れ渡ってはいるが、実際それを行なったのは瑛唄一人である。

ペルセウスの件は瑛唄が一人で暇潰しにやったことだし、ペストを倒した件に至っては遊び半分で瑛唄が倒してしまっただけだ。しかも、隷属させてアイドルになってしまうという突拍子もない行動付きである。

「……………それが本当なら、この男の実力は……………」

「まだ瑛唄さんの底を見た訳ではないですが……………僕の見立てでは……………三桁あたりまでなら戦つていけると思つてます」

「……………なんでノーネームに？」

「宝くじ当てた感じですか……」

「ランダムに召喚したら当たった的な？」

瑛嗶がそう言うのと、ジンとサラは揃ってため息を吐いた。ジンとしては、確かにコミュニケーションの復興に使える有能な人材が欲しかったのだが、瑛嗶という人材は有能過ぎるに逆いらなかった。

「ま、まあなにはともあれ……サラマンドラを助けてくれた事には感謝している。礼を言わせてくれ」

「わはは、大丈夫大丈夫。代わりにサンドラちゃんのおんな所やこんな所をじっくりと見させてもらってるから」

「貴様あああああ!!! サンドラに何をしたあああああ!!!」

「ハッ、お前の持つてるプロマイド……サンドラはどんな格好をしているかな？」

「……み、水着……!?!」

「それを撮影したのは俺だ。しかも、シチュエーションは風呂場だ……此処まで言えば、分かるな？」

「つまりお前はサンドラと一緒に風呂に入ったというのか!?!」

「その結論は色々すっ飛び過ぎでございます!!」

サラはわなわなとしながら戦慄し、黒ウサギがいい加減突っ込んだ。久々に出て来た

ハリセンが、中々良い音を響かせて活躍したのだった。



その後、瑛嗶はサラとノーネーム、ウィル・オ・ウイスプの話し合いの中、気配を消して抜け出していた。

「前夜祭つてことで色々展示されてはいるけれど、面白そうなのはなさそうだなあ……」
地下都市を歩く瑛嗶の傍には、ペストがいた。ペストとしても別段話し合いに興味ないようであったし、彼女は瑛嗶に隷属している魔王だ。瑛嗶のいる場所にいるのが彼女の立ち場だろう。

「ギフトゲームは三日目以降みたいだし、マスターも少しは大人しくしていたらどう？」
「まあ何かイベントを起こしてみるのも一向に構わないんだけど……めんどろだからいいか」

「そういうえば、十六夜のヘッドホンは見つかったのかしら？ あの快樂主義者が収穫祭参加を退いてまで探すと云ったものだし、大事なモノなんじゃないの？」

「ああ、あれか……いや見つかってないだろうな。だってヘッドホンは耀ちゃんのカバンの中にあるんだから」

瑛嗶の言葉に、ペストは眼を丸くした。それはどういふことだと思つたのだ。普通に考えれば春日部耀が十六夜のヘッドホンを盗つて、カバンに入れたということだが、彼女にそれをやる理由も動機もない。

とすると、誰かが耀を嵌める為に耀のカバンへ入れたということになるが……

「まさか……マスター」

「いや俺は入れてねえよ。確かに十六夜が俺に此処へ行く権利を譲つたけど、それだつたら戦果を競うゲームで本気出してたわ」

「……まあそうね」

「それに、十六夜ちゃんも大体想像付いてるさ」

疑問の表情を浮かべるペストに、瑛嗶はゆらりと笑つてそう言う。

「わはは——ああ、暇だ」

巨人族一掃

瑛嗶が笑った。

アンダーウッドの地下都市、陽の光ではなく人工の光に満ちた広大な空間で、楽しく、騒がしく、嬉々として、開催された収穫祭。この収穫祭の初日、一カ月にも及ぶ祭の一番最初に起こったイベント。本来ならば、ギフトゲームの一つですら開かれなかった筈の時間で、誰も予想し得なかったこの事件。

だがそれ故に、瑛嗶は楽しく笑う。

面白い面白い。やっぱり箱庭はこうでなくてはならない。珍しいモノの商売や、綺麗に造られた造形物、希少な作品の展示、そんなありきたりで外の世界でも体験した様なイベントなど必要ない。欲しいのはただ一つ、

—— 楽しめる娯楽のみ 面白いこと

さあ始めよう。次のイベントの相手は誰だ？

普通の人間よりも、ずっと大きく巨大な人間。不気味な仮面を顔面に、握る拳は破壊

の為に、収穫祭を混乱に陥れ、馬鹿正直な悪行を。

やってきたのは、巨人の大軍。

迎え撃つのは、笑う人外。

笑って笑って、最後に笑う。楽しく踊る、人外と巨人の戦演舞たたかをご覧あれ。

◇ ◇ ◇

「——面白くなってきた」

瑛嗶はそう言って、ゆらりと笑った。そして、街の一角で建物や人を襲う巨人の大軍を見下ろす様に『宙に立つ』。そして、瑛嗶は普通のトーン、声量で、淡々と言った。

「こつちを向けよ」

その言葉だけで、巨人達は瑛嗶へ視線を向けた。そして、そのまま動きを停止する。

瑛嘎の見下ろす視線に、強大な威圧感を感じた。それだけで、動けなくなった。

「やあ巨人達、泉ヶ仙瑛嘎だ——」

瑛嘎はそう挨拶して、片手を上げた。そして、この状況を一瞬で解決出来る最悪のギフトを今ここで発動させる。

—— 『オーバードリヴァー嘘吐天邪鬼』

嘘は反対。反転させて、天邪鬼。正直者の、裏返し。嘘を吐いて、真実を。真実の様な嘘、反転する現実、幻想を現実へ、現実を幻想に。嘘から出た真も、身から出た錆も、全て一気にひっくり返す。

嘘も、真も、正義も、悪も、感情も、理性も、性格も、目的も、意見も、状態も、過去も、未来も、空も、大地も、上下も、左右も、強さも、弱さも、威力も、硬さも、生も、死も、何もかもを反転させて、しつちやかめつちやに掻き回す。気まぐれ故の、嘘遊びごらくびん。それが『対』を統べるこのギフト。

その効果は、事象の反転

「——よろしく、は出来そうにないな」

瑛嗶のその言葉と同時に、目の前に立っていた全ての巨人が、糸が切れた様に倒れ出す。その活力溢れる巨大な身体からは一切の生気を感じられず、目の前の全ての巨人が『生を反転した結果』死んだ。死因など無い。ただただ生きていたのと同じ様に、死んだのだ。

「まあ冥土の土産に名前位は覚えてけ」

そう言って瑛嗶は、圧倒的なギフトを行使して、人間の幻獣——巨人を指先一本触れずに一掃した。



「何これ？ え？ 何コレ？」

ペストは目の前の光景に呆然としていた。

事の始まりは、急だった。前夜祭ということで、地下都市を歩いて回っていた瑛嗶達の前に、いきなり巨人の大軍が襲撃を仕掛けて来たのだ。だが、瑛嗶とペストの行動は早かった。

ペストに住民の避難を指示した瑛嗶は、巨人の足止めをしようと云って向かっていった筈だ。なのに、避難を促し始めてもものの数分で巨人が一掃された。避難の意味が無い。

「おーすペストちゃん。もういいよ」

「……どういうこと？ マスターは何をしたの？」

「事象を反転させるギフトを使った」

「あーなるほど、そういうこと——つてなるか!! 反則よ反則! どんなギフトよ!」

「神様がくれたギフトだ」

「馬鹿なの!」

瑛嗶の言葉に、ペストは叫んだ。事象を反転させるギフトなんて、聞いた事もない。なにをどうしたらそんなギフトが生まれるというのか。

だが、目の前にいる男は3兆もの年月を生きた人外。神話級の因果を一人で背負っていてもおかしくは無い。故に、こんなギフトを保有していてもおかしくはないかもしれない。

「ところでペストちゃん」

「……何？」

「倒れた巨人がさ」

「……うん」

「倒れた拍子に結構建物壊したんだけどさ」

「まあそうね」

「あの建物つて俺らの借りた部屋がある奴じゃね？」

「……………そうね」

瑛嗶が指差した先そこには……瑛嗶達の為に用意された個室がある建物があった。その一角に、倒れた巨人の拳が突き刺さっている。

「……知らんぷりで行けるか？」

「私がチクるわ」

「やったら全裸写真公開な」

「私は何も見なかった」

「よし」

瑛嗶とペストは、とりあえず何が起こったのかを知らんぷりで通すことに決めた。

そして、まだ他の場所でも暴れている巨人を一瞥して、とりあえず黒ウサギたちが来るまで大人しくしていようと決めたのだった。

巨人族の襲撃理由

さて、何故此処で巨人が襲撃して来たかだが、元々この収穫祭で『龍角ドラコックを持つ鷲獅子ライオン』のコミュニティはこれを予期していた。

十年前、このアンダーウッドを襲撃した魔王がいた。そして、壮絶な戦いの後、その魔王は滅ぼされたのだが、その残党がいたのだ。それが今回の巨人の軍勢。しかも、調べによればこの巨人族だけではなく、殺人種とも呼ばれる幻獣すら集まり始めているとのこと。

これはアンダーウッドへの復讐と見ているが、彼らの上には更に巨人や幻獣達を操る何者かが居てもおかしくは無い。それらを踏まえて、彼らの目的は一つ。

紀元前五世紀にまで遡って語られるケルト神話の中に記述された巨人の物語。その中で語られる巨人の王、バロールの所持していたという神眼。一度睨を開けば、太陽の如き光と共に、死の恩恵を強制する最悪の恩恵。

——バロールの死眼

現在は石化しており、使い物にはならないが、適性のある物が使えばそれこそ、全ての生物に死を与える恩恵となるだろう。

この収穫祭でノーネームやウィル・オ・ウイスプが直々に招待状がやってきたのは、功績を認められたこととは他に、この魔王の残党による襲撃に対応してほしいという考えもあつたのだ。事実、それは瑛嗶とペストによって一度阻止されたし、今後の対策も立てやすくなるだろう。

だが、ウィル・オ・ウイスプもノーネームも、この話に無条件で首を縦に振った訳ではない。疑問点が多かったからだ。魔王の残党が何を目的に襲撃してくるのかは理解出来た。が、それがそのまま二つのコミュニティが協力する理由にはならない。

まず、こういう事態に陥つたならば、『階層支配者』^{フロアマスター}に相談すべきなのだ。こういったルールを無視して暴れる無法者を取り締まり、裁くのが『階層支配者』^{フロアマスター}なのだから。下層で燻っているコミュニティが協力して解決するような事態では無いのだ。

しかし、そんなことはサラも分かっていた。ならどうしてそうしないのかというと、南の階層支配者がペストが現れた同時期に討たれたのだ。

新たに現れた別の魔王によって

故に、現在の南側に階層支配者はいない。

そこで階層支配者がいなくなった南側が取ったのは、『ドラゴン・コック・ライオン』の中の一つ、『一本角』のトップであるサラッドルトレイクを『階層支配者』へ就かせ、『ドラゴン・コック・ライオン』を五桁のコミュニティへ昇格させること。

その為の収穫祭。この収穫祭の成功は、サラを『階層支配者』にすることと、『ドラゴン・コック・ライオン』を五桁へ昇格させるかどうかも掛かっているのだ。

「今は手段を選んでいる場合では無い……どうか、南側の安寧の為に……協力してください
さらないだろうか」

言え、南側のピンチ。階層支配者を失い、その後継を立てる為の収穫祭での襲撃。これが失敗すれば、アンダーウッドは無法者によって支配されるだろう。それは、絶対に阻止しなければならない。

「わはは、それは良いとして……これからどうするんだ？」

「!? 瑛嗶さん!」

貴賓室でそう会議をしている重い雰囲気の中、今までいかなかった瑛嗶が入口に立っていた。ペストがない所を見ると、巨人族の掃討に置いてきたようだ。五桁相当の実力を持つ魔王であり、巨人族の伝承において巨人族を滅ぼした、『治療法の確立していない病』である黒死病を操る彼女は、巨人に対して抜群の相性を持つ。一人だろうと、その

死の風の一振りでも数百の巨人を薙ぎ払えるだろう。

「巨人を駆逐して、その後どうするんだ？」

「……おそらくはまた襲撃があるだろう……その黒幕を打倒することが出来れば……！」

「黒幕つて誰だよ」

「分からない……が、その為の手段として『バロールの死眼』を両コミュニティのどちらかに譲渡しようと思う」

サラは、そう言う。バロールの死眼は、適性のある者でないと使いこなせない。この場合で言えば、生と死の境界を行き来出来る大悪魔、『ウィル・オ・ウィスプ』のリーダー、ウィラザイグニファトウスや、8000万の死霊を背負い、黒死病による死の恩恵を持つペストがそうだ。

だが、ここで瑛喰に適性が無いかと言われれば否だ。何故なら、瑛喰はその力の一端で『生と死の反転』が実行出来る人外だ。言ってしまうえば『見れば殺せるバロールの死眼』よりも、『その気になれば殺せる嘔吐天邪鬼』の方がよっぽど強力である。

ぶつちやけ、『未解決』を『解決』に反転させたらこの事態は終結するのだが。

「いらね、豚にでも食わせな」

「いや……一応強力な死の恩恵なのだが……」

「ていうかさ、ソレが目的って分かってんだつたら破壊すればよくね？」

「いや……破壊出来なかったから封印しているのだが……」

「貸せ、ぶっ壊す」

「待て待て待て待て、一応強力なギフトなんだから壊されるのは困る！」

「譲渡するんだろ？ 寄越せ、壊す」

「君は人の話を聞かない奴だな!？」

瑛嗶が手を伸ばすが、サラはバロールの死眼を護る様に両手に握り締め、後ろに隠した。

瑛嗶はそんなサラの行動にため息を吐くと、そこら辺に会った椅子に座った。

「なあウサギちゃん」

「は、はい？ なんでございましょうか？」

「これ全部十六夜ちゃんに投げない？」

「面倒事は全部丸投げでございますか!?! 幾ら十六夜さんでも酷いですヨ!?!」

瑛嗶のボケは、今日もなげやりに好調だった。

最早秒読みの展開

ほどなくして、もう一度巨人達の大軍が襲撃を仕掛けて来た。それも、今度は最初とはケタ違いの数で、だ。何をしたいのか、目的は判明しているとはいえ、今度は前回とは状況が違っていた。巨人達だけではなく、此方の動きを悪くする策略なのか——濃い霧が辺り一帯を覆い、包みこんでいた。

そしてなにより、巨人族を率いているのかは分からないが、黄金の豎琴を奏でるフーアの人物が一人。その音色はこちらの動きをさらに妨害する効果を持つ。聴覚、視覚、嗅覚を惑わせ、奇襲を仕掛けられた『龍角ドラコックを持つ驚獅子ライフ』側は、即時戦闘に移るもの

戦闘員である『一本角』と『五爪』のコミュニティが壊滅状態に追い詰められた。

しかも、これは襲撃され始め、警鐘が鳴るまでの間、ほんの僅かな時間の中での出来事である。黒ウサギは即座にその場にはいない耀と飛鳥の下へ駆けていき、ジン達はその場で作戦会議を行なうことになった。非戦闘員の一般人は既に、『龍角ドラコックを持つ驚獅子ライフ』で

壊滅状態の二つのコミュニティ以外が総動員で避難させ始めている。

「瑛嗶さん、とりあえず貴方とペストには巨人達の足止めをお願いしてもいいですか？
出来れば掃討して貰いたいですけど」

「あいよー、リーダーの仰せのままに」

そして、瑛嗶はジンの指示で巨人の相手を務めることになった。まあ、作戦云々を考えるのなら、瑛嗶が掃討しなくても、足止めだけでなんとかしてくるのだろう。さしあたってはしばし足止めを徹してみるとしよう。ジンも瑛嗶が素直に掃討してくれるとは思っていないようであることだし。

「ん……………おお、面白そうな奴がいるじゃないか」

瑛嗶は巨人の大軍の奥、濃霧の中でもはつきり気配を察知していた。嗅覚と視覚、聴覚を乱されたからと言って、瑛嗶の気配察知能力にはなんの支障もない。瑛嗶は所謂直感——第六感的な超感覚を用いて気配を察知している。それは、殺意、戦意、悪意、といった人間が誰しも持っている感情を感じ取ること、相手の気配を察知しているの、ぶつちやけこの妨害程度意味を持たない。もしこれが瑛嗶にとって妨害に成りえるものだったとしても——反転してしまえばいいのだ。

「視界良好、邪魔する者は無し。うんうん、良い感じじゃないか」

瑛嗶は額に手を当て、遠くを見る様にして笑う。そして、瑛嗶の視線にフードの人物

も気が付いたようだ。まあ、視線を隠す事無く気配も寧ろバラすつもりで見っていたのだ。気が付かないようなら、瑛嗶も興味を示さないだろう。

「さて……巨人はペストちゃんに任せるとして……あそこのフードちゃんの持つてる玩具を取りあげるとしよう」

瑛嗶はそう言つて、ギフトを発動させる。まだまだ可能性の秘められたこのギフト、使い様は工夫次第。

例えば、空間と距離の操作。瑛嗶は自分のいる位置と、フードの人物のいる位置の座標を頭の中で計算する。そして、その点と点を線で繋げて、自分と相手の位置関係を対極と位置付けた。そして、対極ならば『反転』出来る。瑛嗶は自分の位置を反転させる。

「———!?!」

「やあ」

瑛嗶は一瞬にしてフードの人物の位置まで移動した。瞬間移動といつて差し支えない、このギフトによる転移。フードの人物は驚いて堅琴を弾く手を止めた。その隙を、瑛嗶は見逃さない。

「せーのっ」

「っー」

琰嗶は堅琴を取りあげる。フードの人物は取り返そうと手を伸ばしたが、琰嗶に対して近接戦闘を挑むのは、愚策中の愚策。愚の骨頂、無意味極まりない。

伸ばした手は手刀によって叩き落され、琰嗶の蹴りによってフードの人物は吹き飛んで行った。

「……ふむ、これならまだ自分の足で移動しても変わらないか……長距離移動の時だけ使うとしよう。座標計算が面倒だけどね」

琰嗶はそう言って、その手で黄金の堅琴を弄んだ。



ペストは、琰嗶が来ないので、巨人退治は自分の仕事なのだろうと判断し、その黒い死の風を存分に振るって巨人を掃討していた。濃霧による影響は多少あるものの、死の風で吹き飛ばせば全く問題ない。

それに、ペストの存在自体が巨人に対して絶大な力を持つのは実証済みだ。

「全く……マスターに負けてから……歌って、踊って、そしてこうして戦って、ほんと……飽きないわね」

ペストはそう言うが、表情は楽しそうだった。隷属してからまだ時間はそう経っていない。言ってしまうえば火龍誕生祭から収穫祭までの短い間だ。だがそれでも、瑛嘎のめちやくちやさにつき合っていれば……そんな短い期間もずっと長く感じた。

「グオオオオオオオオオ!!」

「うるさいわよ」

襲い掛かってくる巨人を、その手の一振りで薙ぎ払う。一払いの死の風が、数百の巨人を有象無象の如く、平等に、死を与えて潰して行く。

「全く、大変ったらありやしないわ」

ペストはそう言っ、愉快に笑みを浮かべる。その建前の裏、気分で言えば、清々しい気分だった。

合流だけ

瑛嗶達が巨人を虐げた——否、退けた後。瑛嗶とペストは巨人達の屍の上でのんきに談笑していた。話の話題は様々、アイドル活動の事だったり、巨人達の手ごたえだったり、奪った黄金の豎琴のことだったりだ。

とはいえ、未だ作戦会議をしているのかは分からないが、ジン達の動きがあるまではこうしていようと判断したらしい。

「そういえばさー、この豎琴さっきのフードマンから奪ったんだけど、」
「ええ」

「ファの音だけなんかヴァー！ って感じだったんだよねー」

「あはは、それ面白いわ！ あははははっ」

「だよなー、わはははは」

ほのぼのした空気。だが巨人の屍の中だ。

のんきな会話。だが巨人の屍の中だ。

どうでもいい雰囲気。だが巨人の屍の中だ。

結局の所、殺伐とした場所で如何にほのぼのとした会話をしようが、結局なんとなく

ぶち壊しなのであった。

「とうか、その琴壊れてるんじゃないの？」

「じゃ、『壊れてる』をはんてーん」

「なんとそこには『直っている』豎琴が！」

「いえーい！」

なにげなくハイタッチをする二人。普段と違って本当にのんびりした空気だ。まあ一仕事した後の達成感的な物だろう。

とそこに、二人を見つめる影が一つあった。仮面を付けた女性だ。瑛嗶もペストも、彼女の存在には気が付いているが、無視していた。敵意はないし、特に敵対勢力というわけでもなさそうだったからだ。彼女はしばらく二人を見つめていた後、踵を返してその場から消えた。

「誰？」

「知らね。仮面付けた変人ちゃんでしょ」

「そうね、気にせず行きましょう」

「あ、そうそう。さっきどさくさ交じりに耀ちゃんのお部屋に行って、これを拾って来たよ」

「壊れたヘッドホン？」

瑛唄が懐から取り出したのは、十六夜が頭に掛けていたヘッドホンの残骸だ。どうやら、最初の襲撃の際に死んだ、巨人の拳が貫いたのは耀の部屋だった様だ。そして、ピンポイントで十六夜のヘッドホンを打ち砕いたらしい。なんというか、どんまいである。

「でもそれ直せるんじゃないの?」

「反転させれば簡単だね」

「直さないの?」

「敢えて直さずに持つてようぜ。ここで壊れたつて事は、別にこの先いらなくてことだよ」

「成程ね。それは言えてるわね」

瑛唄とペストは、結局終始そんな会話で巨人の上を楽しんだ様だった。



さて、どうやら耀達はヘッドホン云々、巨人云々で話し合いがあった様だが、まあそんな事はすでに解決済みな訳で、早々に時間は経った。

という訳で、十六夜とレティシアの合流である。二人はとても気分良く、高らかに笑

いながらアンダーウッドの大瀑布へとやってきていた。勿論ヘッドホンは頭に乗っていないが、それでも十六夜はいつもどおり、ヤハハと楽しげに笑っていた。

「なあレティシア、こりゃあ絶景じゃねえか！ 抱きしめたい位だぜ！」

「それは良かった。私としては十六夜が楽しそうでなによりだ」

「抱きしめたいからさっそく抱きしめてくるぜ！ ひゃっはー！」

「……………ふふふ、何故だろう。ここは慌てて止めるべきなのだろうが……………マスターといると十六夜が可愛く見えてくるな」

アンダーウッドの大瀑布へと飛び出して行った十六夜を、レティシアはそう言いながら遠い目で見送った。最早止めようとも思わない些細な行為だったのだ。レティシアにとつて十六夜の行動は。

と、レティシアの下へ瓊瓊とペストがやってきた。もうジン達が苦勞している中で自由に行動しまくりである。

「やあレティシアちゃん」

「マスター……………少し見ない内に色々やらかしたみたいだな」

「あ、分かる？」

「マスターが数日放っておいて何もしてないとは思えないのでな」

「聞いてよレティシア。マスターったら事象の反転なんてチートギフトを手に入れたら

しいのよ。もう呆れちやうわ」

「……………事象の反転か……………また……………規格外なのきたな……………」

レティシアは頭を抱えた。2000京のギフト量、と言われても困ったのだが、こうも馬鹿みたいに2000京のギフトと吊り合う質のギフトを持ってこられても困る。

「……………マスター。くれぐれも悪用しないでくれ？」

「さあどうかな！」

「しないでくれ！」

「さあどうかな!!」

「レティシア、諦めた方が良いわよ。人の言う事を素直に聞くマスターじゃないのだし」

「天邪鬼だけにね」

「うるさい」

瑛夏の言葉に、二人は仲良く突っ込んだのだった。

龍の純血種

それはずっと昔の話。それこそ、神話上の神々が時に争い、時に酒を酌み交わし、時に恋をし、時に悲しみ、時に死にゆき、幾星霜の時を己の逸話と神の力を持って生き抜いていた、神々しい神話の時代。

強靱な牙と、鋭い爪、そして三つの頭を持ち、その巨大な身体を人々の前に現し、恐怖と絶望を振りまいた魔獣がいた。現代では冥界の番犬とも呼ばれる地獄の門番。

その名を、ケルベロスといった

その災厄とも呼べる最強の魔獣に対して、一人の少年が対峙した。目的は、冥界へと旅立ってしまった、己の想い人を連れ戻す為。彼の名前は、オルフェウス。華麗な歌声を持ち、太陽神アポロから黄金の豎琴を授かった美しい青年である。

彼を見たケルベロスは、門番として彼を噛み殺そうとする。だが、オルフェウスはその豎琴を鳴らし、その自慢の歌声でケルベロスを魅了した。故に、彼は誰も罷り通れなかった地獄の門を潜って見せたのだ。

そして、その先で待つていた冥界の神——ハデスと出会う。

私の想い人を蘇らせたい。オルフェウスはそう言った。だが、無情にもハデスの答えは否だった。死んだ者は蘇らせられない。それが掟だからだ。

だが、オルフェウスの黄金の豎琴での演奏を献上することで、彼は想い人を蘇らせられるチャンスを獲得した。ハデスは言う。冥界から陽の光が当たる場所まで出るまで、決して後ろを振り向いてはいけない。振り向けば、想い人は戻つて来ないだろう、と。

彼は嬉々としてそれを受け入れ、冥界から出るまでの間満面の笑みで歩いた。勿論、後ろは振り向かなかつた。だが、彼は疑つてしまった。最後の最後、陽の光が当たる場所まで目前にして、後ろを歩いていく筈の想い人が、返事を返してくれないことで、疑つてしまった。そしてその疑惑は彼の顔を後ろへと誘う。

そうして、彼は想い人を取り返すことが出来なかつた。悲しみにくれた彼は、彼が見向きもしなかつた彼を慕うバツコスの信女達の怒りによって八つ裂きにされ、死んだ。

そしてそれを哀れに思ったアポロンの神々によって、オルフェウスは黄金の豎琴と共に空に輝く星座になった。

「まあなんの関係も無いんだけどね！」

現在、瑛夏の手の中にある黄金の豎琴だが、別にこれはオルフェウスの持つていたケ

ルベロスが無力化した逸話を持つ伝説の楽器では無い。

これはケルト神話に出てくるトゥアハ・デ・ダナンの神格武器だ。トゥアハ・デ・ダナンとは、ダーナ神族の事で、オルフェウスとは違う全く別の黄金の豎琴を持つていたと言われているのは、そのダーナ神族の一人、オエングス。彼もまた、オルフェウスと同様想い人の為に人としての人生を捨てた少年だ。ちなみに、彼は本当の父、ダグザではなく、養父のミデイルに育てられたらしい。

その際の養子に当たるのが、皆様ご存知イケメンランサーこと『ディルムット・オディナ』だったりする。

それはそれとして
閑話休題

「どうしたものかなあ……」

瑛嗶は少しだけ、困っていた。何せ、その黄金の豎琴が独りでに演奏を始めたのだ。瑛嗶はその音色で五感が少しだけ鈍っている。なにせ間近での演奏だ、その効果は人一倍影響を齎しているだろう。

「まあ反転しちゃえば意味ないんだけどさあ……」

瑛嗶はその『効果がある』を『効果が無い』に反転する事で、自分に対する黄金の豎

琴の影響力を無力化した。もう二度目なのだから、さして面白くは無い。

——目覚めよ、林檎の如き黄金の輝きよ

と、そこへそんな歌——否、詩が聞こえた。瑛噎はその詩の意味を知らないが、何かが起こっている事だけは分かった。その証拠に、三度現れた巨人の大軍が姿を見せる。これまでの二度の襲撃とは桁違いに強力な規模の大軍。瑛噎はその巨人をため息をつきながら見る、そしてまた対処しようと立ち上がった——とここで、

——目覚めよ、四つの角のある予定の調和の粹よ

更なる詩が紡がれる。

——豎琴よりは夏も冬も聞こえ来たる

そして、その詩が呼び覚ますのは、巨人族など陳腐なものだと思わせてしまう最大最強の種族の一角。

——笛の音色よ疾く目覚めよ、黄金の竖琴よ——！

神話上においても、箱庭の世界においても、最強を誇る種の頂点。最強種——『龍』

『G Y a a a a a A A A A A a a a a E E E E e e e e y a a a A A A A A A!!』

叫び声上がる。空を覆い尽くす程巨大な、龍の純血種。瑛嗶はそれを見上げて、目を見開いて驚いた。これまで様々な体験をしてきた瑛嗶だが、こんなでかい生物は、見たことが無い。興奮と湧き上がる好奇心が、身体を震わせた。久々に胸中に渦巻く楽しい感情が、瑛嗶の身体を満たした。

ゆらり、と口端が吊り上がる。拳に力が漲る。なんと楽しく、面白いイベントだろうか。

「いいじゃないか、面白い面白い——面白い！」

瑛嗶はそう言つて、歯を剥いて笑みを浮かべる。その湧き上がる感情が地面を揺らし、瑛嗶の戦闘意欲が重圧となつて大気を震わせた。ただ立っているだけなのに、足元

から地面が割れ、空気と空気が摩擦を起こし、バチバチと火花を生んだ。

「だが——俺のモノに手を出したのは、頂けないぜ？」

瑛嗶は見つけた、この状況の黒幕を。

自身のモノである、レティシア・ドラクレアを連れ去っていく——フードの人物を。

よろ、取り敢えず捕獲で。おk？

降り注ぐ雨。しかしそれは、真つ黒だった。その正体は黒い契約書類^{ギアスロール}である。魔王ドラキュラの起こしたギフトゲーム。その内容は以下の通り。

ギフトゲーム名：SUN SYNCHRONOUS ORBIT in VAMPI
RE KING

・プレイヤー一覧

獣の帯に巻かれた全ての生命体

・プレイヤー側敗北条件

なし（死亡も敗北と認めず）

・プレイヤー側禁止事項

なし

・プレイヤー側ペナルティ事項

ゲームマスターと交戦した全てのプレイヤーは時間制限を設ける。

時間制限は十日毎にリセットされ、繰り返される。

ペナルティは『串刺し刑』『磔刑』『焚刑』のいずれかからランダムに選択される。

解除方法はゲームクリア及び中断された際のみ適用

・ホストマスター側勝利条件

なし

・プレイヤー側勝利条件

①魔王ドラキュラの殺害

②レティシアⅡドラクレアの殺害

③砕かれた星空を集め、獣の帯を玉座に捧げよ

④玉座に示された獣の帯を導に、鎖に繋がれた革命主義者の心臓を撃て

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開始します。

以上、黒いギアスロールの記載事項。これが今回の魔王、ひいては吸血鬼の純血であるレティシアのギフトゲームだった。

敵はレティシアが昔魔王だった頃に持っていた『主催者権限』の封印を解いたのだ。故に、これは正式な権限の下、正しい手順で行われるギフトゲームとなるのだ。

「なるほどなるほど、レティシアちゃんをぶつ殺せばクリアなのか……面白くないからやらないけどね」

瑛嗶は片手で黒いギアスロールを持ち、なんなら鼻歌でも歌いそうな軽快さでそう呟く。

——もう一方の手で龍の動きを止めながら

瑛嗶はその右手で持って、龍の頭を地面に縫いつけていた。具体的に言えば、通常では考えられない程の威力で空を舞う龍の頭を地面に向かって殴り飛ばし、そのまま凄まじい腕力で頭を地面に押さえ付けているのだ。周囲も唾然とするしかない光景だ。

何せ、幻獣であり、最強種の一角を担う龍の純血種を、人間が腕力だけで捻子伏せているのだから。巨躯が暴れるが、頭を見えない力で抑えられているかのように動けない。しかも、本来なら巨大な龍が、幾ら凄まじい腕力で抑えられていようと、たかが人間程度の重量で動けなくなる筈が無いにも拘らずだ。

だが、それもその筈だ。瑛嗶の身体能力は、瑛嗶の神様によって創られた肉体だからこそ発揮出来る代物であり、その肉体には神の力が宿っている。しかも、通常の間身と人間とは中身の質が一つ一つ違う。

筋肉の筋の一本一本が強靱な耐久力とそれ相応の重量を持っている。通常の人間の筋肉の筋をタコ糸と例えるのなら、瑛嗶の筋肉の筋は金属で作られた糸、と言ったところだろうか。ゆえに、その一本一本の重さは桁違いだ。その筋肉繊維もまた同じ。

更に言えば、その回復能力も通常の人間より桁違いに高い。そして、損傷した筋肉は、超回復によってより強靱に成長する。3兆もの年数の中で、そうした超回復を何度繰り返しただろうか。計り知れない。

そんな瑛嗶の体重は、およそ1000t

普通なら歩く事も出来ず、逆に身体が重さに耐え切れずに死んでしまう重量だが、瑛嗶の肉体は神様製。更に筋肉の筋の一本一本がそれぞれ3tもの重量を支えられる強靱さと柔軟さを持っている。1000tなど、容易に機動させることが出来る。成長すれば更に強靱になるのだから、その限界は無いだろう。

え？ 瑛嗶が何度か吹き飛ばされたシーンがあるけどあれはなんだって？ 3兆年以上も前の事なんだから、その頃の瑛嗶の体重は普通位だろうから大丈夫。あくまで約3兆年の人生のせいだ。

「ま、ゲームは十六夜ちゃん達がクリアしてくれるだろ」

瑛嗶はそう言って、巨竜を抑えつけながら笑う。

それまでは、巨竜でも使って遊ぶとしよう。遊びたがりなのは、3兆年の年月でも変えられない。瑛嗶の最初の本質なのだから。



十六夜達は、とりあえず巨人達の対処をしながら巨竜を抑えつけている瑛嗶に驚愕——を通り越して呆然としていた。あー、やっぱりカー的な胸中だった。

ペストの死の風や、瑛嗶には負けるが高位の実力者である十六夜が暴れば、巨人やその他の幻獣など大した相手では無い。とりあえず黒ウサギの持つ『審判権限』ジャッジメントを発動させ、このゲームを中断させるまでは、総動員で巨人達の掃討に務めることにしたらしい。まずは一度体勢を立て直すべきなのだ。

「さーて……お前らーとりあえずさくくつと巨人倒すぞー」

「「「りようかい」」」

瑛嗶の規格外っぷりを見せつけられると、もはやどんなに手を抜いても負けなさそう、という結論に達した十六夜達は、少しやる気を削がれていた。とはいえ、瑛嗶が巨竜を倒してしまわないで抑えつけるに留まっているのを見ると、ゲームのクリアは十六

夜達に任せているのだろう。それが理解出来ない十六夜達ではない。

「……ま、瑛唄ばかり目立ってんのも癪だ……楽しんで行こうぜ、木偶の坊共!!」

十六夜はそう言って、齒を向いて笑う。そして、巨人を一体その星を砕く一撃で薙ぎ払った。

審議決議

さて、瑛嗶は龍を抑えつけながら自身のギフトカードの変化に気が付いた。ギフトネーム以外に、妙なマークが付いている。どうやら、ルールにあったペナルティを課せられた印という奴らしい。このままでは瑛嗶は『串刺し刑』『磔刑』『焚刑』のいずれかを課せられることになる。いくら反転のおかげで死なずに済むとは言っても、この状態のままにしておくのは瑛嗶的にもちよつと面白くない。下手すれば十日後に瑛嗶は串刺しにされるか、磔にされるか、火炙りにされるのだから。

「これはルールだからなあ……反転しても意味ないか」

瑛嗶は以前、2000京のギフトで黒ウサギの体験版ギフトゲームでルールを改竄したことがある。そこで、黒ウサギと約束しているのだ、『ルールの改変は今後一切しない』と。

故に、ここで瑛嗶が自身に課せられたペナルティを『ペナルティが課せられる』を反転させて『ペナルティが課せられない』に変えたのなら、それは反転した通りにルールの方が勝手に変わるだろう。ペナルティが存在しないゲームへと。

瑛嗶のギフトは、神から直接与えられているが故に、神格すら宿っている。それに加

えて3兆年もの年月で培われた瑛嘎の靈格が加われれば、それこそ、あらゆる相手に通用する程に。故に、瑛嘎はそのペナルティを放置しておくことにした。放置して尚、何もしないでおくことも決めた。ゲームはゲーム、反則なんてつまらない真似はしない。

ここは十六夜達に任せてみるのも面白い。きつと勝てるさ、あの3人の問題児は、人類史上最も強力なギフトを持ってやってきたのだから。

「ま、レティシアちゃん位は助けておこうかな？ どうせ、時が来れば姿を見せるだろうし……ウサギちゃんも直に『審判権限』でゲームを中断させるだろうしね」

黒ウサギの『審判権限』ジャッジマスターの権限を使えば、こんな状況下であつても最低一週間の中断時間を獲得出来るだろう。その間に体勢を立て直せばいいし、どのような敵が来ようが大抵の敵なら十六夜の敵では無い。

「ヤル」

『GUUUU………！』

巨龍は未だ、その巨大な口を地面に縫いつけられたままだ。

身体が暴れるので、周囲の建造物なんかはかなり崩壊していたが、不思議なことに死傷者はいない。というか、実際には逃げる途中で龍に押し潰されて死んだ者や怪我をしたものもいるのだが、そういった人々を瑛嘎は死んだ端から、怪我を負った端から、全て反転させて治した。よって、死んだ者は死んだと思う暇もなく蘇り、怪我を負った者

は痛いと感じる暇もなく完治するという状態のまま、龍の被害領域から避難することに成功した。

故に、死傷者はいない。巨龍と戦った訳ではないので、避難した者はペナルティには課せられない。

ああ、そうだ。瑛嗶がペナルティを課せられた理由を話していなかった。

つまり、このゲームにおいてゲームマスターであるレティシアと交戦した者は、例外なくペナルティを負うことになる訳だ。しかし、瑛嗶がこのゲーム開始から戦闘を行ったと言える相手は、目の前でその口を塞がれている巨龍だけである。

故に、瑛嗶がペナルティを負った。ということは、瑛嗶はレティシアと戦ったということ。しかして、瑛嗶が交戦した相手は巨龍のみ、なのにペナルティを負った。

イコール

||

巨龍はレティシア、ということになるので、瑛嗶はペナルティを負ったのだ。

瑛嗶は笑う。自分はここ3兆年程、傷らしい傷を負っていない。戦闘も一方的で、つまらない人間ばかり。人生を、物語を、アニメの世界を楽しむには、瑛嗶は少しばかり強くなり過ぎた。

なのに、今現在においては久方ぶりに楽しい思いをしている。会った事もない巨大な龍に会った。見た事もないものが腐るほどある世界に來た。そしてなにより、時間制限有りではあるものの、自分にダメージとも言える呪いベナルテイを課せる事態に直面した。

——
 恐悦おそえついで至極さいごく

「全く、飽きないね。この人生は」

瑛嗶はそう言つて、ゆらりと笑つた。

◇ ◇ ◇

それからしばらくして、黒ウサギによる『審判権限』ジャッジメントが発動された。ゲームは中断、ともかく巨人の大軍は十六夜とペストによる無双で掃討され、瑛嗶が抑えていた巨龍に關しても、現在はお空を悠々と飛翔している。ゲーム中断と共に瑛嗶は巨龍を開放したのだ。

そこで、だ。十六夜達と合流した瑛嗶は、巨龍以外の敵性存在を知つた。

それは、巨龍と同時に出現したという吸血鬼の城。それは今現在も上空で浮遊してい

るとのことだ。

そして、このゲームで言うゲームマスター……つまりはレティシアの他にも、黄金の豎琴を持っていたフードの女性他数名の敵がいるようだ。そして、ここからが本番。レティシアⅡドラクレア、箱庭の騎士と呼ばれた純血の吸血鬼が作り出したこのギフトゲームが、どのようなものなのか、どう攻略するのかを話し合う会議が始まる。

「まず始めに、言っておきたい事がある」

切りだしたのは、ドラコ・グライフ『一本角』の頭首。サラだ。

現在自分達が直面している相手、魔王だが、現在進行形で北、南も別の魔王によって襲撃を受けているらしい。東の階層支配者である白夜叉や、北の階層支配者である『サラマンドラ』『鬼姫』連盟が、対処に当たっているとのこと。

そしてもう一つ、瑛嗶の持っている黄金の豎琴は無事だが……サラ達が管理している『バロールの死眼』が盗まれたとのこと。死の恩恵を振りまく最悪の瞳が敵の手に渡ったのだ。これは、由々しき事態である。

「だから言ったのに、破壊しとけばいいのにつて」

「む……それはまあ……返す言葉もないが……」

「そんなことは良い、それよりもっと大きな問題があるだろ。此処と南と北……三カ所同時に魔王が襲撃するなんて普通じゃねえんだろ？ なら、この三カ所に出現した魔王

を統率するもつと強大な魔王がバックについていると考えられる」

「その通りだ。我々もその可能性が高いと考えている」

十六夜の指摘は御尤も、サラもそれに同意し、他のメンバーも緊張に表情を強張らせた。

過去、魔王同士で徒党を組んだなど、そうそうある事例ではない。しかも、現状突き当たっている自分達の敵、魔王ドラキュラのゲームは壮大かつ強力なスケールだ。なにせ最強種、龍の純血を使ってくるくらいなのだから。

他二カ所で同等の魔王が暴れていることだけでも驚愕する事態なのに、さらにこのスケールの魔王を三人も従える強力な魔王が動きだしているというのだから、ぞつとしな

い。「つってもまあ……瑛嗶が三人で暴れるのを想像すればまだ冷静になれるけどな……」

『あー……』

「なんだ、やってやろうか？ ん？ 大暴れしちゃうよ俺」

「止めてくださいい！」

十六夜の言葉に全員の緊張が若干緩んだ。十六夜なりに緊張をほぐそうと気を使っただろう。すると、それに対して瑛嗶が不服そうにそう言ったが、黒ウサギが全力で止めに入った。

瑛嗶という強い味方がいる事は、少なからず……いやかなり全員の士気を高めることになった。考えてみれば、巨人族に対して絶大な強さを誇るペストや、そうでなくとも瑛嗶に次ぐ実力を持つ十六夜がいるのだ。まだ諦めるには早過ぎる。

「ま、他の魔王はその奴らがどうかすればいいさ。白夜叉ちゃんやサンドラちゃん達がいるんだ、なんとかなるさ。俺プロデュースのアイドルは、そう簡単に負けはしないよ」

瑛嗶はそう言つて、心配ないと笑う。魔王程度に負ける、アイドルではないのだから。「……まあ、こっちはこっちの問題を解決しないことには始まらないのは確かだね」
「そうだね」

こうして少しは空気も雰囲気も柔らかくなった所で、飛鳥の言葉を皮切りに会議が再開される。どうやら少しはクリアな思考に切り替えることが出来たようだ。

神出鬼没

このゲームの攻略会議は、中々有意義に勧められていた。というより、頭も切れて実力もある十六夜がこれに加わったことで殆ど方向性は決まった様に動いているのだ。故に、瑛嗶はここに参加するつもりはなく、この場に瑛嗶の姿は無かった。元々、ゲーム攻略に瑛嗶は興味が無い。

「……瑛嗶はどこにいった？」

「あれ？ そういえば姿が見られませんか……？」

「マスターなら世界の果てを見に行つてくるとか言つて出て行つたわよ？」

「なんかデジャヴ!!」

ペストの言葉は本当だ。瑛嗶はそう言いながら吸血鬼の古城へと向かつて行つた。

黒ウサギはその言葉にツツコミを入れ、十六夜をじろりと睨みつける。十六夜は苦笑交じりに眼を逸らした。とはいえ、瑛嗶の力が借りられないというのは少し心細いが、瑛嗶がいなければ何も出来ない。というのも情けない話である。

十六夜は気を取り直して話を進める。

「とりあえず情報が少ない。そこで提案なんだが……巨人達を撃退する部隊と古城に乗

り込んでゲームクリアを目指す部隊を作ろう。龍角ドラコ・グを持つ驚獅子ライフなら空飛ぶ幻獣くらい用意出来るだろう?」

「……ふむ、確かにな。攫われた者達の同行も気になる……二日で精鋭を募った部隊を編成しよう」

「それじゃ……次に——」

十六夜は既にこの会議による主導権を握った感触を感じていた。



吸血鬼の古城では、王間とでもいえる空間に設置された椅子に気絶したレティシアが座らされていた。彼女はその昔、秩序の乱れた箱庭にやってきた吸血鬼達の一人だ。そして、その中でも最も権力を持っていたのも彼女。吸血鬼の中の頂点、それが彼女だった。

彼女らは、好き好きに色々暴れ回る箱庭の無秩序な状態を変えようとして、新しい制度を設けた。それが、『階層支配者』制度。それぞれの方角にその場を統治する支配者を設置する制度だ。結果的にそれは今も残っており、ある程度の秩序と安寧を齎した。

そして、その時更にその上の統治者としてレティシアが就いたのが、

『アンダーエリアアマスタ全権階層支配者』。現代から考えて、白夜又とレティシアしかなかった前例のない最高権力位である。

詳しいことは分からないが、その後のレティシア以外の吸血鬼達は、修羅神仏のいる上位階層へと戦争をしかけ、『同胞達の手によつて』滅んだらしい。

「殿下？ どこいったんですかー？」

黒髪の少女がそう言つて、玉座の空間へと歩いてきた。探している人物は現れない。そもそも無人の筈のこの空間にいる筈もなかった。いるのはただ一人、レティシアだけだ。

「殿下殿下でーんーかー？」

「製品？」

「違うよ!？」

後ろから聞こえて来た言葉に、少女はツツコミと同時に振り返つた。そこにいたのは、会議を抜け出して一足早く吸血鬼の古城へと乗り込んできた瑛嗶。神出鬼没とはこのことだろう。

「だ、誰!？」

「瑛嗶さんですよー」

「つ!?! いやいやいやいや、訳が分からないです! 何しに来たんですか!?!」

「いやね、これをお届けに」

瑛嗶が取り出したのは、黄金の豎琴。元々はフードの女性が持ちこんできた神格武器である。黒髪の少女はそれを見てあつと声を上げた。

そして、その背後——玉座の間から当人であるフードの女性が出て来た。

「リン？ 何を騒いで……………え!?!」

「あ、お久しぶりだねフードちゃん。これを返しに来たよ」

「え、あ！ つとと……………!」

瑛嗶は黄金の豎琴を投げ渡す。フードの女性はそれを慌てて両手でキャッチした。落したりしたら大変だ。だが、それは全く心配いらなかった。既に黄金の豎琴は致命的なまでに壊れていたからだ。外装には罅が入り、弦は二三本切れているし、残りの弦も擦り切れていた。

「……………何をどうしたらこうなるの?」

「いやね、それでギターソロライブでも出来ないかと思つて歯ギターっぽいことやってたらさ……………噛みちぎっちゃつた。外装の罅はあれだ、龍とやりあつた時に落としちゃつて……………」

「後半は良いけど前半がおかしいわね。なにしてるのよ貴方……………」

「悪かつたね。まあ直しておくから許して」

「なにを……!？」

女性は手元の豎琴が無傷の状態に直っていることに気がついた。いつのまに、とフールド越しにも分かる様に驚いている。何をしたのかも分からなかったが、とりあえず豎琴が直ったのならいいとしよう。問題は此処に敵である琰嗶がいる事だ。

「それで……貴方は何をしにきたのかしら？」

「それを返しに来たんだ。あれ？　そこにいるのはレティシアちゃん？　じゃあその豎琴とトレードしようぜ」

「子供のカードゲームみたいに言わないでくれない？」

琰嗶の場違いな言動に、二人は疲れた風に肩を落とす。戦意も湧かない。

「……じゃあ、まあ……帰るか」

「え、帰るの？」

「おう。ゲーム自体は俺の仲間がクリアするだろうし……わざわざ俺が出ていくこともないだろう」

琰嗶はそう言って踵を返す。そして、黒髪の少女……リンと呼ばれた少女の頭をぼふつと叩いてから出口を潜り、暗闇の中に紛れてその姿を消して行った。

「なんだったんでしょか……」

「さあね……でも、豎琴が戻ってきたのは行幸と言えるわ……パロールの死眼もある事

だしね」

「あ、そうだ！ アウラさん、殿下は？」

「おじさまと一緒に出かけたわ。貴方は私とお留守番」

アウラと呼ばれたフードの女性は、一応『殿下』に瑛嗶のことを報告しておこうと考
えつつ、黄金の豎琴を一度だけ引いた。

ポロロお^ろ ロロン……♪

「……ファの音がおかしい」

飛鳥、再修行

吸血鬼の古城攻略の為の準備は、着々と進められていた。

まず、十六夜の指示でサラは『巨人達の相手をする部隊』と『ゲームをクリアするための部隊』の二部隊を編成し始めている。これはおそらく順調にいけば直ぐに終わるだろう。

次に、十六夜達は十六夜達でゲームクリアの為の戦力分けをしていた。

黒ウサギは審判故にゲームに参加出来ない。ので、巨人達の相手をする事になった。ジンとペストもその補助にあたる。そして、十六夜は勿論古城の攻略へと空へ。残る飛鳥は――

「此処に残れ」

十六夜の冷たい言葉によって待機を命じられた。勿論、そんな指示を飛鳥が享受する訳もなく、十六夜と飛鳥は口論をすることになる。

元々、飛鳥は戦闘を行う人員としては、ギフトが戦闘向けでは無い。『威光』というギフトは、あくまで他に対する干渉のギフトであって、自分にはなんの効果も持たない。故に、例えばデインという脅威のギフトが付いていようと、飛鳥自身が貧弱な人間であ

る以上それは強さに繋がらない。

十六夜はそれを察している。飛鳥もそれを分かっている。いや、分かっている。飛鳥は分かっている、自分がどれだけ弱いのか。忘れている、瑛叟の言葉を。単身ではあのガルド・ガスパーにすら勝てはしないという現実を。

「無理だろ、なあ飛鳥ちゃん」

「!?」

「……瑛叟」

「久しぶりだね十六夜ちゃん。ゲームクリアは順調かな?」

「……まあな、今回はお前の助力はいらなそうだぜ?」

十六夜は瑛叟の言葉にやりと笑いながらそう言った。瑛叟は十六夜のそんな態度に、そいつは重畳と笑って返す。そして、その視線を十六夜からそのまま飛鳥に戻した。

飛鳥は瑛叟の視線にぐ、と息を呑む。十六夜は飛鳥を瑛叟に任せて、そのまま去って行った。同じ様に、黒ウサギやジンも空気を呼んで部屋を出て行った。唯一人、ペストを残して。

部屋の中で、飛鳥を見つめる瑛叟とペスト。そこには沈黙しかなかった。誰も言葉を発さず、瑛叟とペストの視線に、飛鳥はしばらく耐えていたのだが、俯いてしまった。

そして、そのまま俯いていたのだが……ふと漏らし始めた。

「……分かつているつもりよ」

「何が？」

「私が……弱いつて事くらい」

飛鳥は言った。自分が弱いと。だが、瑛嗶は返した。以前と同じように。

「いや、分かつてない。お前はお前がどれ程弱いのか全く分かつていない」

「っ!？」

「一回、お前に稽古を付けたことがあつたよな。まさかあれだけで少しは強くなつたと

でも思つてんのか？」

「それは……」

「違うな……それに、お前は自分の持つてる力の事さえも、分かつてない」

瑛嗶の言葉に、飛鳥は眼を丸くして顔を上げた。自分の力が分かつていない、というのはどういふことだ？ 自分の力は、自分が一番知つていふ。この力と一番一緒にいたのは、自分なのだから。

しかし

しかしだ。目の前にいる瑛嗶は、かつて2000京ものギフトを使いこなしたギフトのスペシャリストでもある。その中には、『威光』の上位互換のギフトもあつたとも聞いている。それならば、自分以上に自分の力を知つていてもおかしくはない。

「お前の力は、ただ命令して従わせるだけの支配者みたいなギフトじゃない」
「？」

「この世界に来て、俺らは幾つかのギフトを見て来た筈だ。その中には、あのペルセウスが保有していた石化の悪魔、『ゴーゴンの威光の恩恵』^{ギフト}や、今回見た『バロールの威光の恩恵』^{ギフト}があつただろう」

「……うん」

「お前のギフトも『威光』という名のギフトだ。つまり、お前のギフトは『威光』ってギフトのジャンルに分類される訳だよ」

だが、瑛嗶の言っていることは少し違う。彼女のギフトは、『威光』のジャンルに含まれるのではなく——

——威光というジャンルそのもの

石化を相手の霊格に与える威光、死を相手の霊格に与える威光。それは様々ではあるが、彼女の威光もまた、相手の霊格に何かを与える威光なのだ。そして、彼女が今までにその力でやってきたことを考える。

靈格が劣る者を従わせる。靈格を他人に上乘せする。靈格でギフトの力を底上げする。等々やってきたが、つまり彼女のギフトは、『恩恵の極大化』が出来るのだ。凡百なギフト一つでも、飛鳥が使えば天下無双の無敵なギフトと変化する。

「お前の力は、俺の力と同等の価値を持つ」

瑛嗶は言った。飛鳥は訳が分からなかった。

「ま、それでもお前が強い訳じゃない」

「……意味が分からない」

飛鳥はまだ理解していない。自分の力の凄まじさを。

「まあいいだろう。さしあたり——鍛え直してやるよ、小娘」

瑛嗶はそう言って、ゆらりと笑った。飛鳥はそんな瑛嗶の表情を見て、少し前の鬼畜な修行を思い出す。自然と引き攣った笑みが浮かんだ。

そして、すぐさま部屋の出口へと駆け出す。いや、逃げ出した。だが、

「ぎゃふん！」

「逃げちゃ駄目よ」

それはペストによって阻止された。脚をひっかけられてこけたのだ。

その数分後、別の場所へ移動した十六夜達の耳に、飛鳥の悲鳴が聞こえたのだった。

魔改造開始

瑛嗶と飛鳥はアンダーウツドの地下にて対峙していた。そこにはペストもおり、一触即発な雰囲気が空間を包んでいた。デインは出していない上に、十字剣も構えていない。正真正銘、丸腰だ。

「さて、とりあえずお前みたいな貧弱もやし娘には長時間戦えるだけの体力は期待出来ないの、短時間ではばつと勝ちに行く戦い方を叩き込もうと思います。感謝しろ小娘」

「偉そうね……」

「実際偉いからな。その貧相な頭によく叩きこんで、弱肉強食って言葉をな」

「あの、瑛嗶さん？　なんかいつもより言動が辛辣なんですけど……？」

「黙れ！　俺の事は教官、もしくはは先生、もしくはは師匠、もしくはは親方、もしくはは指令、もしくははリーダー——」

「選択肢多過ぎよ！　いいわよもう！　瑛嗶先生、これでいいでしょ！」

「——と呼ぶな!!」

「呼ばせない選択肢かよ!!」

飛鳥は赤いドレスを翻しながら勢いよく突っ込んだ。瑛嗶とペストはそんな飛鳥に對して見下す様な視線を送る。荒い息をしながら、飛鳥は瑛嗶達に視線を返した。ともかく、修行自体は早々に始めなければならぬだろう。ゲーム開始まで時間は限られている。

「……それで、私は何をすればいいのかしら?」

「お前にはまず、何回か死んでもらおうと思う」

「……………は?」

「ペストの黒死病で死に、俺の反転で蘇生、それを10回位繰り返します。結果、生死を行き来した存在として、霊格がなんとなく向上する気がします。ギフトがパワーアップする気がします」

「気がするだけ!?!」

瑛嗶は自信満々にそう言った。そして飛鳥はそれに間髪入れずにツツコミを入れた。とはいえ、元々霊格というものは、存在そのものの格を表すものだ。神話に出てくるような幻獣であれば、その格は勿論高くなってくるし、普通に生まれた普通の人間であればその格は当然低いものになる。飛鳥の様にギフトを持って生まれていようと、ただ人間には変わらない飛鳥の霊格は高くない。

人間の中で霊格が高い者と言えば、それこそ瑛嗶の様に3兆年もの長い時間を生き抜

いた人外のような存在だ。謂わば、神仏に關わるといったような、人間という枠組を超えた者にならなければならない。ちなみに、靈格とは世界から与えられた恩恵であり、靈格を得る方法は主に2通りある。

先祖が神仏である等、出自に特殊な事情がある。もしくは世界に功績・代償を与えるか、である。

瑛嘎の場合は、出自が世界を管理する神であることや、3兆年もの年月の中で少なくとも、3つの世界で偉業を成し遂げて来たこともあり、靈格が高いのだ。

「良く漫画とかであるでしょ？ 死の淵から蘇った者は何かしらのパワーアップを果たして戻ってくるって」

「漫画の話でしょ！」

というわけで、生死の境界を行き来した所で靈格が上がる訳は無い。瑛嘎もそれを分かっているのでぶっちゃけこれはお約束のボケとツッコミだ。というより、後天的に靈格を引き上げるなど容易くは無い。

「とまあ冗談はここまでにして……真面目に行こうか」

「……」

「飛鳥ちゃんには以前、少なくとも多少の対人格闘が出来る程度まで稽古を付けた。だから今回は少なくとも十六夜ちゃんと5分間全力で戦っても善戦出来るまで成長して

貰う」

「なっ!?」 十六夜君と全力で戦えば、私は一分も持たないわ!」

「だから、出来る様になって貰うって言ってんだよ」

瑛嗶は至って真面目だ。これから一週間のゲーム中断期間の中で、十六夜とやりあえる位まで成長させるつもりなのだ。

だが、飛鳥には運動神経がない。運動能力もない。格闘術の才能など一切ない。精々護身術程度くらいが関の山だ。

しかし、瑛嗶はそんな状況をひっくり返す。

「運動神経皆無な飛鳥ちゃんを、運動神経抜群な飛鳥ちゃんへ反転させる。そして、格闘術の才能が無い飛鳥ちゃんを、格闘術の才能を秘めた飛鳥ちゃんに反転させる。これで下準備は完了だ」

才能が無いなら、反転させればいい。才能がある、という風に。そうすれば瑛嗶の修行次第で高い成長をする事が出来る。神格すらも秘めた反転のギフトは、それを可能にしているのだ。

「貴方のギフトって何なの? 私、良く分かってないのだけど……」

「謂わば、全ての事象を反転させるギフトだ。名前は『オーバーリッツアー嘘吐天邪鬼』だ」

「何それ、勝てる気がしない」

「まあ俺以上の霊格を持つものは反転させられないんだけどね」
「あ、詰みね」

飛鳥は瑛嗶の霊格が高いことを知っている。3兆年の人生の時点でそれは理解できているし、瑛嗶の言葉を信じるのなら、そのギフトには神から与えられたことによる、神格付与がされている筈ということも理解している。故に、瑛嗶以上の霊格・神格を持つ者などそうはいないだろうということも、理解している。少なくとも、この下層には存在しないだろう。ジンの言う様に、三桁以上の階層ならば分らないが。

「とりあえず、長々と話していても仕方ない。お前が習得すべき技術はたった一つだけだ」

瑛嗶は空気を切り替えて、そう言う。元々時間の少ない中で飛鳥がいくつも何かを覚えられるとは思っていない。故に、まずは一つの技術を特化させて覚えこませた方がいいのだ。才能や運動神経は準備出来る、後は努力次第である。

飛鳥もそれを理解し、瑛嗶の視線をまっすぐに見返した。そして問う。その覚えるべきだった一つの技術を。

「……何かしら？」

『返し技』
カウンター

瑛嗶はそう答えた。飛鳥の覚えるべきだった一つの技を。相手の攻撃を受け流し、自

分の攻撃だけをぶつける返し技。後の先を取る、極めることが出来れば最強の最高戦術の一つ。

ごくくりと息を呑んだ飛鳥は、それでも無理矢理笑って見せた。

飛鳥の修行、第一段階

それから数時間。瑗嗶と飛鳥はただひたすらスパarringを繰り広げていた。飛鳥が瑗嗶と戦う際に使わせて貰えたのは、十字剣のみ。疲労すれば反転で全快にさせられ、怪我をすれば反転で治され、一撃死したら反転で蘇生させられ、休憩無しにひたすら戦い続けさせられている。

現状、飛鳥は死に物狂いで瑗嗶の攻撃を受け続けている。幾ら治して貰っても、幾ら蘇生して貰っても、その時の痛みや恐怖、死の感覚は精神に叩き込まれ、蓄積させられる。ガリガリと削られる心に、飛鳥の心は折れる寸前だった。

止まない攻撃の嵐、その中心で十字剣をひたすら振るう。顔はぐしゃぐしゃに歪み、涙は止まらず溢れ、喉が枯れる程に叫び声を上げていた。

逃げ出したい。もう嫌だ。この地獄から逃げ出せるのなら何をしたらって構わない。誰か助けて。そんな思いが頭を飛び交い、それでも自分が望んで受けているという事実が逃がしてくれない。

「ああああああああ!!!」

瑗嗶の速度は、飛鳥にも見える。それほどまでに遅く、手加減をされているのだ。攻

撃は全て拳や蹴りによるもの。故に、近づかれればカウンターのチャンスは少ないのだ。しかし、飛鳥の剣は瑛唄によって弾かれ、逆にカウンターを喰らう。それで怪我を負えば反転で治るが、残った痛みが身体を硬直させ、次の瞬間には次の攻撃がその細く弱い身体に叩き込まれている。

痛く、苦しい。

だが、飛鳥は気が付いていない。

手加減しているとはいえず、『十六夜の全力と同等の速度で』動く瑛唄に対して、『カウンターを合わせられている』事実だ。

瑛唄の反転によって飛鳥の運動神経は圧倒的に向上していた。それこそ、超一流のプレイヤーと同等と言えるほどに。更に、瑛唄の反転により飛鳥は『格闘術の才能』を手に入れている。それこそ、鍛えれば一流に達せる才能だ。

謂わば、飛鳥はこの時点で『全く使われて来なかつた運動神経と格闘術の才能』を手に入れたことになる。10代女子の身体に生まれただけのそれが宿ったということだ。

RPG風に分かりやすく言えば、現在の飛鳥の経験値を持ったレベル1の初期プレイヤーになるのだ。そしてそれは、そのレベルの低さから鍛えれば直ぐに自分の身体に見合ったレベルに成長させることが出来るということになる。

そこに瑛嘎の地獄のような修行が加われれば――

――たった数時間でも飛鳥の近接格闘スキルは一気にレベルアップする。

まあ反転した結果ということは、飛鳥の運動神経や格闘術の才能がそれほどまでにカスで皆無であったということになるのだが。

瑛嘎は笑う。ぐんぐんと成長していく飛鳥は、十六夜の速度に付いてこれている。後は気が付けばいい。自分がこの速度に付いていけており、それに対応出来る反応速度を身に付けていることを。

◇ ◇ ◇

かくして、それは訪れた。

叫び声を上げられていた頃は、まだ良かった方だと思う。飛鳥は心底それを思い知っ

ていた。以前受けた稽古など、足元にも及ばないほど辛く、鬼畜な修行。修行を始めて既に12時間程が経っている。飛鳥は全身に走る痛みの残響と、死の感覚にかなり参っていた。

「くっ……あ……！」

意識が薄れ、叫び声さえも上げられなくなった飛鳥は、それでも攻撃を止めない瓔瓊の姿を視界に捉え、剣を振るう。身体自体は反転による回復で万全に動く。疲労もない、傷もない、ただ精神だけが折れていた。

既に飛鳥は限界だった。もはや無意識で剣を振るっていた。だがしかし、それが決めた手だった。

無意識という人間でいう最速の演算領域での反応が

意識的に戦っていた状態で反応出来ていた十六夜の全速力を

—— 僅かに追い抜いた

「！」

瑛叟の拳を飛鳥は無意識に躲した。そして、迫る瑛叟の胴体にその十字剣を振るう。それは、紛れもなくカウンター技。十六夜の全速力と同等で動いていた瑛叟の攻撃をいなし、己の攻撃だけを叩き込もうとする飛鳥の反応速度は、瞬間的に十六夜の速度を追い抜いたのだ。

瑛叟はそれを見て少し驚いたものの、少し速度を上げて躲した。しかし、十字剣の先端が瑛叟の服を掠った。

そこで、飛鳥の眼が見開かれる。

（——掠った？ 気のせいじゃない、少しだけど……当たった——）

少しだけ、希望が湧いた。そして冷静になった頭は『十六夜の全速力』に自分が追いつけていることに気が付いた。眼で追えて、身体で反応する事が出来ているということは、今までに飛鳥が出来なかったことだ。

自分は確実に今、強くなっている。砕かれた自信が立ちあがる。掲げたプライドが燃え上がる。そして、折れた心は闘志を胸に立ち直った。

（なら——私なら出来る！）

今度はしつかりと瑛叟の攻撃を見る。そして、近づいてきた瑛叟に即座に対峙し、迫りくる拳を最小限の動作で躲す。そして、カウンターで飛鳥の十字剣が瑛叟の胴体を狙った。だが、瑛叟はそれを跳んで躲し、今度は飛び蹴りに繋げてくる。今まではカウ

ンターを避けられれば二撃目でやられていたが、

(今度は違う!!)

飛鳥はその飛び蹴りを、十字剣の薙ぎの勢いを利用し、体勢を低くしながら身体を回転させ、躲す。

「——つあああああああああ!!!」

そして、一回転した飛鳥は十字剣を宙に浮いた瑛嗶の身体に向かって、切り上げた。その刃は瑛嗶の首に迫り——

——瑛嗶の人差し指と親指に挟まれて止まった。

「わはは、合格だ」

飛鳥は首筋に衝撃を感じて、意識を闇に落とした。そして、気を失う寸前に、瑛嗶の

そんな言葉が聞こえて来た。その意味を理解し、無意識か意識的か、笑みを浮かべたのだった。

飛鳥の修行、第二段階

さて、翌日の昼。といつても、昨日の昼前からずつと修行尽くしだったから、実質睡眠時間は皆無といつていい。飛鳥を気絶させてからまだ一時間程度しか経っていないのだから。

目覚めた、というか瑛嗶に叩き起こされた飛鳥は、昨日と同様に瑛嗶といた。十字剣は既に装備済み、アツプも済んでおり、いつでも身体は動かせる状態だ。疲労は反転によつて消されている。

と、そこで瑛嗶はまず、事前に手に取つておいた小石を飛鳥に投げ付けてみた。速度的には、十六夜がペルセウスの一件でやったのをならつて、第三宇宙速度程度。ピシツと弾かれた小石は、飛鳥の下へ正確に飛んで行き、

十字剣によつて弾かれた。

「何するのよ」

「いや、昨日の経験を試しただけさ。忘れていないようだなにより」

どうやら、死に掛けた——否、死んで尚その先にあつた限界を乗り越えた成果は、十分出ているようだ。飛鳥は確実に強くなつている。その証拠に、まず反応出来ないであ

ろう速度に対応してみせたし、たかが小石であろうと飛鳥の十字剣程度、粉碎出来る威力を持つていたものを完璧に受け流し、弾いて見せた。

今の飛鳥ならば、『受け流す』ことにおいて右に出る者はそういないだろう。まあ瑛喰が飛鳥に求めているのは、その先の『返し技』^{カウンター}なので、此処で満足してもらっては困るが。

「当たり前よ。私だって、あんな目に合つて成果無しじゃ困るわ」

「ま、今日は昨日以上に頑張ってもらうけど」

「ちよつとトイレ」

「待て」

「離して！ 漏れちゃうわ!!!」

「漏らしたら漏らしたで反転してやるから大丈夫」

「そのギフトの便利さが憎い!!」

飛鳥は昨日以上の辛さが待っていると知つて普通に逃げようとした。やはりあの修行は一種のトラウマになつたようだ。

踵を返して去ろうとした飛鳥の頭を、瑛喰はがしつと掴んで逃がさない。ちなみに此処にペストはいない。昨日は夜だったからいたのだが、やはり攻略会議は行なわれるので、瑛喰に情報を伝える役目は必要だろう。

「さて、それじゃあまずは今日何をやるのかを説明しようか」

「むう………お願いします」

「うむ。まず、昨日の事だけど……飛鳥ちゃんは昨日自分がどんな領域に足を踏み入れたか、正しく認識しているか？」

「………なんとなく。無意識に近い状態だったから、はつきりと覚えてはいないけど……」

飛鳥はなんとなく、覚えている限りで語った。

序盤では全く目視出来なかつた琰嗶の動きが、終盤………完全に捉えられた。そして、最後の一撃の時、なんだか琰嗶の攻撃がスローモーションになったような感覚になつて、その攻撃に対して身体が勝手に動いたのだ、と。

実際、飛鳥はその通りに戦つて見せた。最後の最後で、12時間もの長い時間の中で、琰嗶が飛鳥に放つた攻撃の回数は、43万3189回。擦れ違い様に一撃、振り返り様に一撃、倒れ様に一撃、全ての動作の節々で攻撃を入れ続けた。

結果、飛鳥はどんな体勢でも、攻撃された経験がある。おそらく、攻撃された事のない体勢は一度もないだろう。だからこそ、どんな体勢であつても反撃出来る様に身体が覚えてしまっている。

例えば、死角からの攻撃だけとつても数千回行なわれている訳だが、故にこそ彼女は死角からの攻撃にどう対応すればいいのかを、昨日の修行の中で掴んでいる。それと同

じことを、全ての体勢で掴んでいるのだ。

まあ手つ取り早く言うのなら、彼女は今、あの地獄を乗り越えて——全方向、どのような姿勢であつても迅速に反撃出来るのだ。それはまさしく、縦横無尽、変幻自在に戦う瑛唄と同じ戦い方である。彼女は、これを『返し技』限定で習得したのだ。

勿論、『返し技』限定な故に自分から攻撃する術は持ち得ていないのだが。

「だが、飛鳥ちゃんはまだそこまでしか来ていない」

「どういうこと?」

「『出来た』と『出来る様になった』は違うってことさ」

そう、飛鳥はまだ『その領域に立ったことがある』というだけで、『その領域に立ち続けている』わけではない。あの一撃を、何時でも繰り出せなければ意味は無いのだ。

「だから、飛鳥ちゃんには今日中にあの一撃をぼんぼん出せるようになって貰う」

「……………どうやって?」

「だからほら、昨日と同じことをずっとやる。出来るまでやる。出来なかつたらずっとそのままだ。終わらせない。終わらせる条件は、あの最後の1撃を連続で50回打ち出すこと」

「無理」

「じゃ、始めよう」

「いやああああああああああ!!!」

瓊瓊は問答無用で、攻撃を始めた。逃げ道は無い、飛鳥は十字剣を構え、悲鳴を上げながらそれに立ち向かっていく。最早、ヤケクソ気味な気分だった。



一方その頃、春日部耀はというと、吸血鬼の古城の中で『六本傷』の頭領、ガロロ・ガントックらと共に、事態の解決に務めていた。

彼女はこのゲームが中断された際、多くの仲間達と一緒に吸血鬼の古城に攫われてしまったのだ。故に、どうすればいいのかを話し合い、最終的にゲームクリアを目指すことにしていた。

このゲームが審議決議ジャッジマスター権限によって中断されている今ならば、敵と戦うことはない。故に、今ならば敵の本拠地を安全に散策出来るのだ。そこで、この吸血鬼の古城を散策し、ゲームの謎を解くことにしたのだ。ゲームクリアを目指さなくても、ゲーム再開時になんらかのアドバンテージが得られるかもしれない。

状況確認として、ここにいるのは春日部耀、六本傷のガロロ・ガントックや子供達、そして手助けでやってきたジャック・オー・ランタン、そしてアーシャ・イグニファトウ

スだ。謎解きをするのであれば、十分切れる人材が揃っているだろう。

「……まず、私が知りたいのは……十六夜のヘッドホンが何処に行ったのかです……」

「いやいや、ゲームクリアの為の情報だろ？」

「そうでした……」

さて、忘れられているかも知分らないが、最初に巨人族が襲撃を仕掛けて来た時、瑛嗶にやられた巨人の死体が耀の部屋を破壊し、ピンポイントで十六夜のヘッドホンを破壊した。何故耀がヘッドホンを持っていたかと言えば、三毛猫が盗んで入れたからである。巨人の死体が部屋を破壊した時、彼女はヘッドホンの存在に気が付いた。

最初はそれを見て青褪めたのだが、悲惨だったのはその後。巨人の拳が第二波として突っ込んで来て、ヘッドホンを壊した。最早絶望しかない事態。耀は泣きたくなかった。しかも、修理すれば直るかもしれないと探したにも拘らず、瑛嗶が持つていつてしまったから見つからなかったのだ。結果、耀は誰にも見られない壊れた部屋の中で、静かに泣いた。

「いやね、ヘッドホンが壊れちゃったわけですよ……しかもそのまま失くなったんです……どうすればいいんでしょうか……」

虚ろな目で虚空を見ながらうふふ、と笑う耀は、どう見ても手遅れだ。アーシャもジャックもそんな耀に対して困った様に頭を掻いた。

「なあジャックさん、どうすればいいかな？」

「ヤホホ……どうしようもないでしょう。どうやらあの少年のヘッドホンを紛失してしまったことによる罪悪感でこうなっているようですが……そうなるとう人同士の問題ですからね」

「そっか……」

「私達は私達で今出来ることに、最善を尽くしましょう」

「うん」

ジャックとアーシャはそう言つて、耀をとりあえず放つておく。どうしようもないのだ。

そんな二人には、ゲームクリアの為に、最善を尽くすしか出来ることは無かった。

飛鳥の修行、最終段階

その日の午後、瑛嗶と飛鳥が修行を開始した早朝から半日が経った。アンダーウツドの巨大な水樹が生み出した水で出来た、浅くも広い水路に飛鳥は倒れていた。最早指先一本も動かせないようだった。だが、それでも十字剣を手放していない所を見ると、昨晚と違って心は折れていないらしい。

そして、そんな状態の飛鳥なわけだが、倒れていられているということは、瑛嗶の出した条件を達成したということに他ならない。つまり、今の飛鳥は——

「50回連続、達成……！」

ごろん、と仰向けになる様に身体を転がし、彼女は晴々とした笑みを浮かべて拳を天に掲げた。彼女は達成したのだ、習得したのだ、身に付けたのだ、足を踏み入れたのだ、そこに立ったのだ。自身の限界の向こう側——『化け物の領域』に。

「ようこそ——化^俺け物^達の世界へ」

瑛嗶はそんな彼女に、両手を広げてそう言った。ゆらりと口端を吊り上げて、自分の

家に友人が来たのを歓迎する様に、心の底から彼女を祝福する。彼女はようやく、彼らと同じ舞台上に立ったのだ。まだまだその舞台の脇役でしかないが、まだまだ入り口に立っただけでしかないが、確かに彼女は強くなれた。

「あまり嬉しくは無い世界だけど……ありがとう、瑛唄さん」

「何言ってるんだ、まだ修行は終わってないぞ」

「え」

瑛唄の言葉に、寝転がったままの飛鳥は表情をぴしつと固めた。

そう、この修行はまだ終わっていない。飛鳥はその領域を体感する第一段階を経て、その領域をものにする第二段階を終えただけに過ぎない。まだ、最後の第三段階が残っているのだ。最後の仕上げと言っても良い。

「まあ最後はただの実践だ。最初に言っただろう？ 最終的には十六夜ちゃんと5分は戦えるようになって貰うって」

「……………実際にやれと？」

「やれ、寧ろ十六夜ちゃんを叩き潰してしまえ」

「……………分かったわよ」

飛鳥はいつもみたいに逃げなかった。というより、逃げてても無駄だと悟っているようだ。寧ろ、十六夜と戦うことはそんなに辛くないな、と思う位に第一、第二段階の修行

が辛かったから、逃げる程でも無いと思ったのかもしれない。

「ということ、十六夜ちゃんにはスタンバイして貰ってました」

「おう」

「……………いつから？」

「修行を開始した頃から」

「早朝じゃない！　つてことは半日近くもずっと待機させてたの!？」

十六夜は少しやつれたような表情で登場した。一応待機はしていたらしいが、修行風景は秘密ということで見えていないとのこと。だが、ようやくの出番ということで、やる気は十分みたいだ。拳をぱしつと合わせて、ヤハハと笑う。

修行を終えて、戦う者として成長した今の飛鳥なら分かる。立ち上がり、剣を握り締めて見据えた。ド素人だった頃には分からなかったし、感じ取ることすら出来なかった、十六夜の強者としての威圧感と雰囲気。

これが、これが逆廻十六夜か——！

そして、十六夜もまた、目の前に立っている久遠飛鳥がまるで、別人のように見えていた。今から約24時間程前に『弱いから足手まといだ』と吐き捨てた猫が、百獣の王

——獅子となつて目の前に現れた気分だった。佇まいにブレは無く、隙だらけに見えて下手に攻撃出来ない危険な匂い。

間違いない。今日の前に立っている久遠飛鳥は、一日という時間を跨ぐ前の弱かった久遠飛鳥とは違つてしまつている。圧倒的な強者の領域の入り口に立つていた。

「随分とイイ感じにレベルアップしてみたみてーじゃねえか、お嬢様——いや、久遠飛鳥」
「あら、それはどうも。今なら貴方だつて華麗に返り討ちにしてあげてよ？ 逆廻十六夜」

一触即発。瑛夏の指示など必要ないとばかりに、十六夜と飛鳥は距離を取つた。そんな二人を交互に見て、瑛夏はゆらりと笑いながらその場を離れる。最早戦いを始める合図など必要ない、もう戦いは始まつているのだから。

飛鳥は構えない、ただ十字剣を下に向けて弄んでいる様にも見える位、自然体で立つていた。対して十六夜は、両の拳を握つて若干腰を落とした。所謂ファイティングポーズだが、十六夜としてはこれが最も動きだしやすい体勢だった。

発する雰囲気は、両者とも強者のソレ。いつ動きだしてもおかしくはない張り詰めた緊張感が、二人の間を交差していた。視線は相手の一挙手一投足を見据え、隙を探り合う。

（全く……瑛夏の奴何をしたんだ？ あのお嬢様が——こうも化けるとはな……）

十六夜は頭の中でそう考え、苦笑した。隙だらけな佇まいなのに、全く隙が見当たらない。どこをどう打つてもあの十字剣で両断されるイメージしか湧かなかつた。頬を一筋、冷や汗が流れおちた。

対して飛鳥は、とてもリラックスしていた。視界がクリアに広がっており、十六夜は勿論その周囲の空間の一つ一つですらはつきりと把握出来る位だ。空気の流れが、身体に絡みついて、するりと抜けていく。水の音や、そこから発せられた冷気が肌を刺激した。

瑛嗶との第二段階で、飛鳥が習得した『無意識の領域』。それを自分のものにした飛鳥は、意図的にその領域に入ることが出来る。集中力を極限まで高め、無駄な思考を切り捨てる。頭にあるのは、近づいてきた敵を、この刃で切り裂くことのみ。

飛鳥の青い瞳が、すつと光った気がした。

「——うおおおおおおおおおおお!!」

それが合図だった。十六夜は飛鳥に向かって一直線に飛び出した。どんな修行をしたのか、予想は付かない。まして瑛嗶が行ったことなのだから、人外の思考など分かる

筈もない。

ならば

余計な小細工は無駄だ。まっすぐいつも通り、近づいて——殴るだけ。如何なギフトも、この拳で打ち砕こう。星を砕く一撃は、自分を支える最強の拳だ。

「いくぜお嬢様ア!!」

十六夜の拳が、飛鳥の顔面に向かって放たれた。第三宇宙速度で接近したのだ、地を蹴って肉薄するまでは一瞬。そして、その拳も空気の壁を食い破って迫ってきた。

これまでの敵も、この拳一つで粉碎した。

だが、瓊瓖以外では初めてだった。この拳が、届かないかもしれないと思える相手は。

「——遅い」

刹那、鈴の鳴る様な声が、短くそう紡がれた。銀の刃が、十字の剣が、水の表面に光を反射させ、煌めいた。そして、十六夜の脅威的な動体視力を超えて——その刃を消した。

「——っ!?!」

気が付けば、十六夜の拳は空を切っていた。先程まで飛鳥がいた場所に、十六夜は拳を振り抜いた状態で立っており、その後ろに飛鳥はいた。

十六夜と背中合わせにその深紅のドレスを揺らして、その背後に位置する十六夜の首に、十字剣を添えていた。

一瞬の事過ぎて、十六夜は何が起きたのかを起こつた後に理解した。

飛鳥は十六夜の拳を必要最低限の動き、紙一重で躲し、背後へ抜けた。そして、背後に抜ける最中に十字剣を逆手に持ち直し、十六夜の首にその冷たい刃を突き付けたのだ。その気になれば、十六夜の喉を背後から貫く事も出来ただろう。

華麗に、流麗に、美麗に、無駄なく放たれる『返し技』カウンター

初見であれば、ほぼ確実に後の先を取る技術。そして、それを察知させない殺気を隠す強かさは、明らかに常人の域を大きく逸脱していた。

「——私の勝ちね、十六夜君」

「……ヤハハッ、やるじゃねーかお嬢様」

飛鳥の勝ち。それを認めない訳にはいかなかった。プライドの高い俺様主義な十六夜も、素直に敗北を認めてしまう程に完全な敗北だった。首筋から刃が離れ、戦いは終わった。

「これなら文句ないでしょう?」

「ああ、頼れるお嬢様になったじゃねーか。デインもいる事だし……お嬢様には巨人掃討の最前線を任せても良いか?」

「勿論よ、なんならあのバカでかい『トカゲ』だつて切り刻んでやるわ」

二人はそう言って、にっと笑みを浮かべたのだった。



「それはそうと、もう一回やろうぜお嬢様。今度は俺が勝つ」

「返り討ちよ、掛かって来なさい」

その後、飛鳥と十六夜は勝ったり負けたり勝負を、飛鳥が疲れて倒れるまでやり続けたのだった。

変化と圧倒

吸血鬼の古城攻略は始まる。

十六夜達は瓊瓊と飛鳥の修行が終わった翌日、全ての準備を整え終えたのだ。吸血鬼の古城を攻略する幻獣部隊と、襲い来る巨人らを迎え撃つ迎撃部隊を編成し、尚且つそれらをどのよう動かししていくかを考え、そして主力メンバーをどう振り分けるかを試行錯誤した。

結果、十六夜やサラらが主力として率いる攻略部隊と、飛鳥が主力として率いる迎撃部隊となった。

飛鳥としては攻略部隊に参加したかったのだが、それでは修行した成果を披露する機会が失われてしまう。折角巨人という最高の的が大軍を率いてやって来てくれるのだから、自分なりの修行の仕上げをしてみたいと思うのは当然のことだろう。まして、普段から強いと思っていた十六夜に、曲りなりにも勝利を得られる実力を得たのだから、それを存分に振るってみたいと思ってしまうのは、まだ思春期で青春を楽しむ年頃の飛鳥なら尚更だ。

ということで、現在は攻略部隊が古城に飛び発つために一カ所に集まっていた。そこ

には十六夜やサラの姿もあり、見送りの為に飛鳥達も同様にそこにいた。ちなみにこの場に瑛唄はいない。ペストはいるが、彼女も瑛唄の行方は知らないようだった。

元より自由奔放でマイペースに、自分勝手に動く人外故に、その行動を予測する等不可能に近い。

「じゃ、行くかー」

十六夜のそんな言葉と共に、幻獣部隊はその翼をはためかせ、空へと飛翔する。風を切り、目指す先は吸血鬼の古城。ゲーム開始から3日という時間が空き、アンダーウッドを護る為の戦いが、再開された。



その時、瑛唄はというと、アンダーウッドにはいなかった。その表情はいつもと違って違和感を感じているような怪訝なもの。

その居場所は、東のノーネーム拠点だった。相も変わらず、水樹によって出来た水路や耕された土地以外は廃れてしまっているこの拠点に、瑛唄は怪訝な表情で立っていた。

アンダーウッドは大丈夫だろう。あの十六夜に鍛えに鍛えた飛鳥がいるのだから、

よっぽどの敵が現れない限りは大丈夫だ。

ちなみに瑛喰がどうやって遠く離れた拠点にやってきたのかといえば、フードの女性との戦いで使った座標反転だ。流石に数時間やそこらで来れない所に拠点はあるので、脅威的な身体能力を持つ瑛喰でも反転を使つたのだ。大体の距離は分かっていたので、東のどこかしかに反転した後は、走って移動したのだが。

「……なんだろうなあ……この違和感というか、妙な予感というか……」

違和感、それは別に嫌な予感というわけではない。何というか、本当に妙なことが起こりそうな予感だ。別にイベント発生フラグを建てた覚えはないので、更に首を傾げてしまう。

「この奇妙な気配………んー、どっかで……」

そして、何者かの気配を感じた。どこから、というわけではない。この箱庭の世界から一枚壁を隔てた向こうから感じる、という感じなのだ。それはどんどん近付いて来ている。この箱庭の世界への扉を、力づくでこじ開けようとする様な勢いで。

瑛喰は眉を潜めて身構える。とりあえず何が来ても良い様に警戒だけはしておいた。

——ズザザザズズズズアッザアソツソソソソソソソオソソソソソソオツ
ザザザザゾゾゾ!!!

何かが取束されるような音がその場に響く。そして、瑛嗶の背後、その空間がぐにやりと歪み、曲がりくねってひび割れる。その気配を感じて瑛嗶は咄嗟に振り返った、だがあらゆる意味で遅かった。その気配は既に瑛嗶の目の前まで迫っていた。ひび割れた空間は大きな穴を開け、その中から一つの存在が飛びだしてきた。容姿は人間と同じだった、だが、その強大な力を感じさせる気配は、瑛嗶にその両手を付きだし、襲い掛かった。

そのあまりの勢いに、瑛嗶は対応出来ず——その存在の放つ気配に包みこまれた。



その頃、アンダーウッドは混乱の海に巻き込まれていた。

空を飛んで行った十六夜達を見送った後、しばらくして巨人達が大軍を引き連れて突然現れたのだ。そして、驚愕で動けなかったアンダーウッド側の巨人撃退部隊を余所に、巨人達は先制攻撃としてその巨大な拳を振るった。

建物は破壊され、仲間が吹き飛んだ。そうしてやっと我に帰る。

だが、一人だけ——飛鳥だけは動いていた。

巨人が視界に入ったと同時に、動いていた。ギフトカードからデイーンを召喚し、即座に命令を下す。その内容は、『巨人達を掃討せよ』。赤い巨兵はその命令に従順に従い、目の前にいる巨人へ攻撃を開始する。

そして、飛鳥はデイーンの肩から跳躍し、手近な巨人の首を切り付けた。切断しなくてもいい、彼らは人間の幻想種であつて、その身体の造りは人間と同じなのだ。つまり、首にある頸動脈を断ち切つてしまえば簡単に殺せるのだ。

死んだ巨人の肩から別の巨人の下へ跳躍し、迫りくる巨人を普通の人間とイメージする。飛鳥のスタイルは『返し技』^{カウンター}、攻撃されなければ反撃出来ない。しかし、巨人というバカでかいのであるのなら、切り付けるだけでどこかしらには当たるのだ。

「遅い！ 遅いぞ有象無象の肉塊共!!」

飛鳥の口調がどこか皇帝っぽくなつていた。どうやら巨人を圧倒している自分に酔っているようだ。力を手にした物は、図らずして強気になるものなのだ。

例外は、それを長い時間を掛けた努力で手に入れた者や、その力の危険性を理解して

『おおおおおおおおおおおおおおおおおお
!!!!!!
』

巨人達を恐れない。希望は目の前で光り輝いていた。

愛ある再会

地上、巨人掃討戦の好調具合に対して、十六夜達が向かった『空』ではそうもいかなかった。

幻獣に騎乗し、風吹き荒ぶ空へと飛翔した十六夜達は、吸血鬼の古城を間近にした所で――

――金色の吸血鬼に襲撃を受けた。

浮かぶ雲は雷雲となり、幾多数多の轟雷を響かせ、人々の不安を煽る色を醸し出す。その手を伸ばせば届きそうな程、古城は目の前だった。だが、届かなかつた。

その金色の吸血鬼――魔王ドラキュラ、純血の吸血姫……レティシア・ドラクレアが行く手を遮ったから。

その手より伸ばされた長槍は、正確無比にただ一人……サラードルトレイクの胸にそ

の刃を突き立てる。突き刺されればその刃は誰もが思う結末通りに、サラの命を抉っただけだろう。

しかし、それは十六夜によつて阻止される。彼は長槍とサラの間にその左腕を滑り込ませ、長槍からサラを護る為に、その左手を吸血鬼の牙へと差し出したのだ。

「あぐつ……うう……!!」

左手を貫通する痛みに、顔を歪めて呻き声をあげる十六夜。サラは自らの顔に飛んできた十六夜の血に眼を見開く。そして、そこでようやく彼が自分を庇ってくれたことを理解した。

「さっさと部隊を後退させろ！ 此処は危険だ！」

本来の物語ならば、十六夜は左の肩をその槍で破壊され、左腕そのものを使い物にならなくされていた。しかし、今回は左手の掌でその槍を受け入れ、そして掴む事で槍からサラを守った。つまり、左手はまだ使えるということだ。拳を握ることは出来ないだろうが、それでも本来よりは少ない被害。

言つてしまえば、これは飛鳥の成長が原因だ。十六夜は飛鳥との戦いで、自分に匹敵する実力者は少なくなかった。故に、彼も飛鳥との戦いで学んだのだ。刃との戦い方を。

「つ……すまない、全員逃げええええええ!!」

「チツ……つたく面倒臭え……だが、お嬢様の方が速くて鋭かったぜレティシアもどきが！」

十六夜の左手を貫いていた槍は影となり、消えた。そして、後退していく全隊を見たレティシアは、殲滅するべく数百もの影で同じ槍を精製する。

しかし、十六夜はそれを食い止めるべく動きだす。自分に乗せているグリフォン、耀の友人でもあるグリーの手綱をその左手で握る。痛みが走ったが、堪えた。

「何か長い獲物は無いか!？」

「あ、ああー！」

後退を指示するサラに十六夜は怒鳴る様にそう言った。最早数百の槍が放たれるまで時間の猶予は無い。サラは己がギフトカードを取り出し、そこから三叉の槍を引き出し十六夜に手渡した。

「悪いなグリー、無茶言うがああのレティシアの所まで飛んでくれ、出来る限り速攻でだー！」

『承知した——行くぞー！』

十六夜はくるつと槍を回して、右手で握る。数百の影の槍は今にも放たれようとしている。風を踏んで、駆ける。偽物の吸血鬼の影を、倒す為に——



東の下層——ノースームの拠点の土地、仲間達によつて命を吹き返し、耕された領土の上で、瑛嗶は仰向けに倒れていた。いや、倒れていたというよりは倒されていたというのが正しいだろう。

恐らく、瑛嗶という人外の背中を地に付けられる者など、この世界においては一人もない。にも拘らず、彼はたった一人の襲撃者によつてその背中を土で汚していた。これがどういふことを意味するのか、それはつまり——瑛嗶以上の実力者か、瑛嗶の信頼を得ている者でなければならぬということだ。

「——はあ……」

瑛嗶は目の前に広がる青い空を見ながら、重く想い溜め息を吐いた。その原因は、瑛嗶の上に跨るようにして座るその存在にあった。その存在は、強大で静かな全知全能の威圧感を放つており、そして何より……可憐で美しい容姿をしていた。

長い艶のあるブラウンの髪は、使い込まれたことが一目で分かる山吹色のリボンによつて括られていた。深く紅い瞳は色つぼく潤んでおり、紅潮した頬は白い肌を際立たせている。そして、薄い桃色の唇は優しく、それでいて怖いくらいに笑みを浮かべている。その表情はどこまでも、恋する乙女のようなようだった。

服装は瑛噎と似て和服。所謂巫女服と呼ばれるもので、垢抜けて魅力的な少女をお淑やかに着飾っていた。

「重いぞ、降りろ」

「重いだなんて、女の子に対して失礼だよ？　瑛噎」

「人一人の体重は十分重いさ」

「君の身体能力は知ってる。僕程度の重量なら、羽より軽いだろう？」

少女は瑛噎の上に座りながら、にこやかに笑う。今現在において、瑛噎よりも強い実力を持っているだろう少女が、狂やかに笑う。瑛噎はそんな少女の笑顔を見て、少しだけ冷や汗を掻いた。

「君がいきなり消えちゃったから、ずうっと探していたんだよ？　無限よりも広大な

真つ暗い宇宙の中を、ずうっと」

「そいつはお疲れさん」

「でも見つからなかった……宇宙の端から端まで、本当に隅々まで限なく、隙間なく、躊躇なく探し抜いたっていうのに、見つからなかった」

「だろうね」

「だから、今度は世界を探した。瑛噎が存在する世界を探した。無限よりも数多く存在する世界を一つ一つ調べ抜いたよ」

少女は語る。

世界を探したと。時には英霊同士が凌ぎを削る聖杯の世界を、時には魔法少女が希望と絶望の中を進んでいく世界を、時にはキセキの世代と呼ばれる天才が戦うバスケの世界を、時には宇宙人や未来人や超能力者、そして一人の一般人と共に遊ぶ、神と呼ばれる少女のいる世界を、時には巨人が人類を絶望に追いやった残酷な世界を、時には死神達が悪霊と戦う剣戟の世界を、時にはマフィアの十代目が望まぬ世界で成長していく世界を、時には少女達が麻雀で全国を目指す世界を、時にはテストと召喚獣で学園生活を過ごす馬鹿達の世界を、挙げれば切りがない程に数多くの世界を見て回った。

そして、とうとう見つけた。瑛嗶が存在するこの世界を。見つけた時には動きだしていた。時空を駆け抜け、空間を破壊し、世界の壁をも突破して、こうして会いに来た。愛に来た。

「やっと見つけた、やっと触れられた、やっと話が出来た。大好きだよ、瑛嗶」
全ては3兆もの年月を共に過ごした想いの力。愛し、愛された人外達の間にあつた鎖よりも硬い絆が引き起こした結果だ。

瑛嗶はそんな少女の星よりも重い愛を見せつけられて、ゆらりと笑う。そして、上体を起こし、少女の頬にその手を添えた。

「全く、お前はこれだから嫌なんだ」

「僕の愛は君が思っているよりも重いぜ？」

「知ってるよ」

「そして君の愛は君が思っているより分かりにくい」

「知ってるだろう？」

「勿論」

瑛嗶と少女はにっこりと笑いあう。見つめた先にはお互いの視線のみ。

「さて、立てるかな？ 瑛嗶」

「誰に言ってるんだよ」

瑛嗶の上から立ち上がった少女は、瑛嗶に手を伸ばしながらそう言い、瑛嗶はその手を掴んで立ち上がる。

そして、瑛嗶を見つめる少女は次の瞬間冷酷な瞳で瑛嗶を睨む。

「さあ、覚悟は良いかい？」

「はいはい……いつでもどうぞっ」

瑛嗶は両手を後ろに回して溜め息を吐いた。そして、少女は瑛嗶に向かってにっこりと笑った直後——

「寂しかったぜこの大馬鹿野郎！」

——その綺麗な平手を瑛嗶の頬へと叩き込んだ。高く鋭い音が空気を震わせた。そして、そのまま瑛嗶の身体に腕を回して抱きしめた。

「愛してるよ、瑛嗶」

「わはは……俺もだよ——」

そして、瑛嗶はその少女の名前を、愛を囁きながら溢した。紡ぐ音色は三つのみ、
「なじみ」

こうして、人外の少女——安心院なじみと同じく人外、泉ヶ仙瑛嗶は再会したの
だった。

一時休止

「それで？ 瑛嗶はなんでこの世界に？」

しばらく抱き合っていた後、なじみは瑛嗶にそう聞いた。

何故かと問われれば、異世界からの手紙が来たからだが、そういえばあの手紙の送り主が誰だったのかを瑛嗶は知らない。どうやら、黒ウサギ達の意向で呼びだされた様なのだ、黒ウサギ達自身にはあの手紙を送る力はなさそうだった訳だし、正直言えば、誰にこの世界に呼ばれたのかは謎のままだ。

なので、とりあえず見知らぬ手紙によって呼び出されたということだけを、瑛嗶は伝えた。

「変な手紙が来て、開封したらこっち来てた」

「ふーん……まあ地球が太陽に呑みこまれてからは、スキル無効化スキルは発動する意味なくなつたからね。手紙に付与された移動スキルが発動しても抵抗出来なかつたのかな……？」

顎に手をやって、訝しげにそう呟くなじみだが、瑛嗶はどうもその姿に懐かしさを感じていた。やはり、瑛嗶だって、瑛嗶といえど、瑛嗶にしても、好きな女性と離れてい

れば、その時間は体感的に長く感じてしまうのだろうか。

とはいえ、今こうして再会し、同じ時間を同じ場所で過ごせている事実には、少しばかり頬が緩んでしまうのは、二人の人外にとっても恋愛という観点から見れば、普通の人間と同じ、普通の反応だった。

現在の仲間達の現状を知っている瑛嗶と、知らないなじみ。現状把握が出来ていようがいまいが、お互いの心境は等しく『余裕がある』といえる状態。これからどうするか、それを考え数百近くの考えを出せる位には落ちついていた。

「とりあえず、この世界がどんな世界なのかを教えてくださいませんか？」 瑛嗶

「修羅神仏ばやっぱー」

「随分と面白そうな世界なんだね、僕達のいたシニールギャグなバトルとは無縁そうだな、え、伝わったの？」

「そんな訳無いじゃないか」

「だろ。というか、スキルで知ればいいじゃないか」

ここにこうして自分の力でやって来れたということは、安心院なじみは瑛嗶と違ってスキルを保有したままここへやってきてきているということだ。元々、瑛嗶のように神様がその世界でのみ使える制限を掛けた力を持っていた訳ではなく、れっきとした自分の力として自由の利く力をなじみ達スキル保有者達は持っていた。故に、別世界にやってき

た所でそれが失われることはない。

「んー、まあそうなんだけどさ……うん、そうしようかな。僕的にはあまり気が進まないけれど、緊急事態だしね」

そう言うと、なじみは情報収集スキルを発動させ、この世界がどういうものなのかという情報だけを収集した。傍目では眼を閉じて立っているだけに見えるが、その実はとても凄まじい力が働いているのだ。

とはいえ、彼女は平等を売りにしている存在。世界の情報だけで、主要人物や存在しているコミュニティの詳細等々は意図的に拒否していた。

「……なるほど、ギフト、修羅神仏、コミュニティ、幻獣、ギフトゲーム、魔王……うんうん、知ったかぶったけど、改めて面白そうだね。瑛嗶はこのコミュニティに入ってるの?」

「ノーネーム」

「……ノーネームってアレだよな? 旗印を持たない最弱のコミュニティだよな?」

なじみはどんなコミュニティがあるのかは知らないが、コミュニティというものの自体の常識や知識は先の情報収集で知っている。だからこそ、ノーネームという旗を持たない最弱無名の雑魚コミュニティに瑛嗶が所属しているというのが信じられなかった。

何故なら、瑛嗶はかつて彼女が生まれた世界で無敵を誇った世界最強の男なのだ。そ

それは彼女にとって絶対で、なにより信じられた常識であり、概念であり、一種の決定事項だ。それが、この世界ではそうではない。最強は、認められていないのだ。

「そうだ、最弱で無名で雑魚な、いてもいなくても同じ様な極矮小な、有象無象の中に、俺はいる」

「……………瑛嗶はそれでいいのかい？ 無名で、唾棄される様な、ゴミ捨て場みたいな扱いの中に混じって、偽りの最強を振りかざす奴らから馬鹿にされるんだぜ？ 瑛嗶は、それでもいいのかい？」

瑛嗶の言葉に、なじみは疑問を問いかける。それでいいのかと。だが、瑛嗶はゆらりと笑って即答する。

「——だからこそ、面白い」

頂点に立った世界から、そこで得た全てを捨ててやってきた。この一番下にいるという立場は、下剋上するには丁度良い。

「知ってる筈だぜなじみ、お前が好きになったのは、こういう男だ」

「……………全く、探していた時間が随分と長く感じたからかな？ 懐かしい気分だよ。そうだったそうだった、変わらない様でなによりだぜ。惚れ直しちゃったぜこの野郎」

瑛唄はそんな彼女の言葉にふと笑った。相変わらず、傍目では分からないいちやラブを繰り広げる二人だ。行き過ぎた愛は、触れ合いなど無くても伝わってしまうのだ。恐らく、浮気した場合、どんなに離れていても即刻バレるだろう。最早直感レベルだ。

「で、瑛唄は今何しちゃってるの？」

「魔王と戦ってる仲間を応援してる」

「あ、瑛唄は戦わないんだ!？」

「まあ一回魔王と戦って隷属させちゃったからさー、二度目は飽きちゃって」

「……………魔王の隷属ってそう簡単に出来るものじゃないと思うんだけど」

「テヘペロリシヤス」

「始めて聞いたよそんな言葉!」

瑛唄となじみは、そんな感じでほのぼのと、別れていた時間を埋める様に話し続けた。

十三番目の太陽

さて、ここらへんでそろそろ、このアンダーウッドという場所で繰り広げられているギフトゲームの、勝利条件達成の為の攻略についてを語ろう。

まず最初の前提条件として知っておいてもらいたいのは、吸血鬼という種族の事についてだ。

彼ら、彼女らが日光を苦手としているのはご存じだろう。多くの伝承、多くのフィクションの中でも、吸血鬼というのは大体、日光によって死滅する。この、箱庭を除いては。

彼らが箱庭にやってきた、その昔の時代。以前も言ったかもしれないが、箱庭の治安は全くと云っていいほど良くなかった。秩序は乱れ、独裁はそこかしこに存在し、好き勝手に暴れる荒くれ者達に満ち満ちていた。

吸血鬼達の箱庭における偉業は、今でも残っている。乱れに乱れた秩序を但し、階層支配者制度を立ち上げ、その偉業として吸血鬼のトップ——レティシア・ドラクレアが全権階層支配者の地位を獲得した。

ここまででは前提話の大前提の設定話。本番はこの後だ。

レティシアⅡドラクレアが全権階層支配者となった暁には、太陽の主権が与えられることになっていった。『黄道十二宮』と『赤道の十二辰』、合わせて二十四の太陽の主権の内、一つを。だがここで大問題が発生する。

—— 吸血鬼に取って太陽の光は天敵である

これはレティシア達吸血鬼の王族であっても例外ではない。まして、王族に従う普通の吸血鬼達はその太陽を『憎く思う』のは仕方が無いだろう。それこそ、太陽を支配出来る権限が手に入るとすれば、行動を起こしてしまおう程なのだから。

吸血鬼の民衆は太陽の主権を奪うために、王族に牙を向いた。クーデターを起こした中でも、最も強いとされたレティシアⅡドラクレアが魔王討伐の為に領地を離れている隙を狙って。彼らはその隙を狙って太陽の主権を使い、箱庭の大天幕を開いた……つまり箱庭に『本物の太陽の光』を呼びこんだのだ。目的は一つ、強力な力を持った吸血鬼の王族を殺すだけだ。その結果、王族は死んだ。レティシアの家族も例外なく、磔刑の上に焚刑に処され、後に串刺しにされ、抜かりなく太陽の光で地面の染みにされ、殺された。レティシア以外

は、殺された。

勿論、太陽の光に弱いのは反逆者も、そうでない一般吸血鬼も同じ。クーデターを起こされた王族が日光で死んだのに、一般の、無関係の、なんの罪もない、普通の吸血鬼が無事で済む筈が無い。

つまり、王族と共に普通の吸血鬼達も死んだ。完膚なきまでに死滅させられた。

残ったのは、魔王討伐の為に出ていたレティシアと反逆の吸血鬼達。

帰って来たレティシアは、その光景を見て絶望した。未だ降り注がれる日光に蝕まれる身体を放置して、絶望した。

まあその後、何者かの介入があつたものの、一悶着あつたものの、それが原因でとあるギフトゲームが始められた。レティシアードラクレアが、同族殺しの魔王となつたギフトゲームが。その結果、反逆者は全員レティシアという魔王に殺された。終わりに残つたのは、魔王となつた最後の吸血鬼、

レティシアードラクレアだけだった。



さてさて、この話を経て、このゲームの様々な要素を挙げてみるとしよう。
まず、吸血鬼の古城。この建物がなんであるのか、ということだ。

吸血鬼とは、元々箱庭の外からやってきた外来種である。その時に一緒にやってきたのがこの吸血鬼の古城である。そこで、このギフトゲームの名前『SUN SYNCHRONOUS ORBIT in VAMPIRE KING』を直訳してみる。すると、太陽の同期軌道、イコール太陽と特定の角度を保って飛行する、人工衛星の軌道を指す言葉となる。

つまり、この吸血鬼の古城というのは言ってしまうえば人工衛星というものになるのだ。

ここから察せられるのは、このゲームが『太陽』とその『軌道』に関係しているゲームだということだ。

勝利条件その三、砕かれた星座を集め、獣の帯を玉座に掲げよ。この中にある獣の帯というのが、『太陽』と『軌道』に関係しているとすれば、『獣^{ソディアック}帯』……つまり、星座占い等でも見られる十二の星座を示す、黄道十二宮の別称であるソレを指し示すのだ。

此処まで来ると、最早知識の問題だが、もう少しお付き合ひ頂こう。

黄道十二宮の十二の星座は、太陽の軌道線上を三十度ずつずらして星座の領域を分ける天体分割法で用いられる。そう、『分割』するのだ。

これが、勝利条件にもある『砕かれた星座』を読み解く鍵となる。さて、これまでの情報を組み合わせて見よう。

—— 『獣の帯』は、黄道十二宮、十二の星座を示す『ソディアック獣帯』に

—— 『砕かれた星座』は、『ソディアック獣帯』によつて分割される『天体分割法』に

—— 勝利条件『砕かれた星座を集め、獣の帯を玉座に捧げよ』は『獣帯によつて分割された十二の星座を集め、玉座に捧げよ』へと変換される。

そして、この勝利条件を読み解いた上で、吸血鬼の古城……人工衛星なら神造衛星の構造を見てみる。この古城には、十二分割された城下街がある。そしてその一つ一つの区域ごと、その外郭の壁に十二宮を示す記号があった。

更に、この古城には十二の星座が刻まれた欠片と、その他にある十四の星座の欠片が

ある。

すると、ここで一つの間違いが出てくる。砕かれた星座を天体分割法と読み解いたところが、正しくも間違いになるのだ。何故なら、玉座に掲げなければならぬのだから、それはれっきとした『物』でなければならぬ。

そして、このゲームにおける正答。砕かれた星座というのは、『天球儀』を指し示す。砕き、捧げることが出来る『形ある物』、天球儀に。

故に、この欠片を玉座の仕掛けに正しく嵌めこむことで、ゲームはクリアとなる。そう、本当に正しく、誤りなく、嵌めこまなければならぬ。

十三番目の太陽を、見落としてはならない。



瑛唄となじみは、なじみの転移スキルによつてアンダーウッドへとやって来ていた。安心院なじみは以前の瑛唄に数で劣るものの、質は負けずとも劣らないスキル——ギフトを一京保有している人外だ。以前の世界では、実質出来ないことなど一つもない、文字通り全知全能の存在だったのだ。

言ってしまうえば、箱庭という世界を滅亡させることくらいは普通に出来る。

「あれだけあったスキルを全部失ったって……随分と弱体化したんだね、瑛嗶」

「球磨川君だって言ってただろう。スキルなんてただの手品みたいなものだ、無くても困らない」

「でも今の瑛嗶なら僕に勝てないと思うけど？」

「わはは、お前に勝てようが勝てなからうが困らない。負けるつもりもさらさらないしね」

「負けず嫌い」

「生憎と、俺は我儘なんでね」

瑛嗶はまだ、なじみに『嘘吐天邪鬼』オーバードリヴァーのことを言っていない。故に、なじみは瑛嗶がギフトの一切を失っていると思っている。とはいえ、ギフトを持たない者が箱庭にいる筈が無いので、なんらかのギフトは持っているのだろうとは考えているのだが。

話されないのなら、聞く必要はない。瑛嗶はなじみが聞けばきつと教えるだろうが、二人の信頼は固い。故に、お互いの何でもを知る必要はないのだ。

愛し、愛されているのなら、それでいい。

「それで、どうするのか？ 僕はこのゲームの参加資格が無いから手出し出来ないけど」

「あれ？　なんで？」

「だってこのゲームの参加資格は『獣の帯に巻かれた全ての生命体』、僕は星座なんて概念が存在しない無から生まれたから、獣の帯なんて言われてもねえ」

「成程」

安心院なじみにはそういう理由でこのゲームに参加する資格がない。太陽暦もない、星座もない、寧ろ太陽自体が存在しない、無の中から生まれた存在故に、その身に巻かれた獣の帯なんて存在しない。

「んー、それじゃあしばらく見てようかな。巨龍が下りてきたら次は殺そう。龍って美味いかな？」

「料理してみようか。瑛嗶を探してる間、何もして無かった訳じゃないんだぜ？　花嫁修業は3000回ほど修了してきたんだ」

「それだけ聞くと結婚出来ない奴みたいだな」

瑛嗶となじみは、アンダーウッドで暴れる巨人達や飛鳥達、そして空で戦う十六夜達を地面に座って眺める。どう見てもこの惨状を眺めるにはおかしい穏やかな表情で、瑛嗶となじみは楽しそうに笑みを浮かべた。

謎解き失敗

瑛唄となじみが眺めている光景の中で、吸血鬼の古城内にいる春日部耀らは、前話で語った勝利条件の謎を解いた。黄道十二宮の欠片を集め、その他十四の星座の欠片を集め、そして本物のレティシア・ドドラクレアが眠る玉座の間へとやって来たのだ。

謎を解いたのはヘッドホンを紛失して軽く鬱だった春日部耀。ヘッドホンの件の罪滅ぼしという訳ではないけれど、仲間であるレティシアを取り戻すことは、ノーネームにとって重要事項ではあるだろうと考えたのだ。それに、この状況下で共に行動しているアーシヤや六本傷の子供達が傷付くのも気が引けた。

解けたのだった、殆ど偶然みたいなものなのだから。黄道十二宮について、春日部耀が知ったのは箱庭に来てからだ。ペルセウスの一件の後、正確には瑛唄が星を消滅させた一件の後、この箱庭の旗は星座に關係している事がある、という結論から、彼女はノーネームに残った書物から星座に付いて調べたことがあるのだ。

まあ、その時点で特になにかしらの成果を上げられていなかったから、彼女としては結構切迫した様子でありとあらゆる書物に手を伸ばしたものだ。三日続かなかったけれど。

とはいえ、ペルセウスのルイオスには悪いが、瑛噺がペルセウスの星座を消滅させたことで耀は謎を解くことが出来たのだ。素直に感謝の意を示しておこう。対象は瑛噺だ。

「どちらにせよ、この状況下で謎が解けたのは行幸だよね……ゲーム再開時に何かしらのアドバンテージが得られればって事で動いてたけど……」

「でもいいじゃねえか、耀のおかげで子供達をより早く助けられるんだからさー」

「うん……ああでもヘッドホン……」

「まだ引き摺んのかよ……」

耀は黄道十二宮の欠片を片手で弄びながら、うーと唸った。すると、

「う……うあ……あつ……!」

玉座に座する魔王、レティシア・ドラクレアが眼を覚ました。

どうやら、彼女を攻撃しようとする、古城に近づく、といった行動を取るとレティシアの影……十六夜が対峙したあの偽レティシアが現れる様なのだが、こうして本物のレティシアが起きたという事は、外で戦っていた十六夜は、偽レティシアを倒したのだろう。

「レティシア、起きた？」

「……耀、か……！ 私は……魔王に戻ったのか……」

レティシアは、目覚めて直ぐに状況を把握した。そして、次の瞬間この一件が終わった後に瑛嗶から何をされるかを不安に思った。

どうやら、彼女はこのギフトゲームがクリアされることについては、何の心配もしていないらしい。というのも、瑛嗶という化け物がいるのだから、ゲームがクリアされないなんて一切思えなかったのだ。

「……マスターはどうしている？」

「え、瑛嗶さん？ 瑛嗶さんは……分からない……巨龍を捻子伏せてたから多分どこかで見てるんじゃないかな？」

「……嫌な予感がする」

「まあレティシアは瑛嗶さんプロデュースのアイドルだもんね……傷を負ったら怒られそうだね」

「頑張るとしよう……」

レティシアがそう言うのを聞いて、耀は最後の欠片を仕掛けに嵌めこんだ。

「それは——」

レティシアが何をしているのか聞こうとしたその時だった。地鳴りが響き、古城が揺れた。雷の轟音が鳴り響き、そして、最強の存在の鳴き声が聞こえて来た。

『GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA
!!!!!!!!!!!!』

腹の底を振動させる様な、重く、荒々しく、暴風の様な咆哮。そう、巨龍が再び現れたのだ。

「なんでっ……!!?」

「まさか……耀、それはゲームクリアの為のものだったのか!？」

「そう、だけど……間違っみたい……」

春日部耀はしゅんと俯いて、居心地悪そうに声を小さくした。だが、それは違う。彼女の解答は間違っていない。間違っていないが、正答ではないのだ。

十三番目の太陽を、見逃しているのだ。

彼女の用意した十二の黄道の欠片は、確かに正しい位置に嵌めこまれた。

だが、第四の勝利条件にある『玉座に正された獣の帯を導に、鎖に繋がれた革命指導者の心臓を撃て』を見てみると、『正された獣の帯』とある。これが十三番目の太陽を讀み解く鍵だ。

正された、ということとは間違えられていた、ということだ。これは第三の勝利条件にある『砕かれた獣の帯』にも掛かっている。

簡単に言えば、天体分割法を使うことは合っているが、その分割法は時代遅れなのだ。この古城は衛星の役割を持っていた。ということは、吸血鬼は天体分割法が生み出された当初よりも、遥かに近代的な天文学を学んでいたということなのだ。故に、黄道……つまり太陽の通り道にあった星座は、十二の星座だけではないということだ。

それが、十三番目の太陽……箱庭に存在はしないが、本来ならば太陽の主権に数えられてもおかしくはない、黄道に存在する十三番目の星座

この欠片が足りていない。故に、第三の勝利条件は不十分なのだ。しかし、ゲームをクリアしようとしてしまったから、強制的にゲームが再開されたのだ。巨龍が現れたのも、そのせいだ。

「くっ……私が巨龍を抑える！ その内に勝利条件を完成させろ！ おそらく、何かを見落としている！」

レティシアは、焦燥と苦々しい思いを胸に、そう叫んだ。

だが、ふと聞こえた

あの、ゆらりと響く最強の男の声

——墜ちろ

次の瞬間、抑えつけようとした巨龍が、大きな力によって捻子伏せられた。

瑛嗶の負傷

「……瑛嗶、やっぱり君は最強だよ……あんなデカブツ身体能力だけで捻子伏せるなんて、僕も出来やしないぜ……！」

安心院なじみがそう言つて見た先、そこには巨大な龍の頭があつた。但し、青黒い着物をはためかせ、腕力のみで龍を地面に縫いつけている男の姿もあつた。その光景は、なじみにとっては初の光景だったが、他の者からすれば、二度目。幻獣の最強種である純血の龍を、こうも簡単に捻子伏せてしまう存在など、だれが予想しただろうか？

「全く持つて、非現実的だ。僕が言うのもなんだけど」

安心院なじみは、隣から飛び出し消えた温もりを確かめる様に、隣の芝生を撫でた。そして、久方ぶりに楽しそうに笑う。思えば、退屈ばかりの日々だった。瑛嗶さえいればそれでいいと思つていたが、やはりそれでも退屈なことは退屈なのだった。

この世界は、面白いのか？ かつて十六夜が黒ウサギに訪ねた問いだが——それは果たして、安心院なじみも実体験で答えを得たのだった。

「応援してるよ、瑛嗶。僕達は頑張る奴を応援してきたんだから」

安心院なじみは、楽しそうな瑛嗶を久々に見る事が出来て、なんともいえない幸福

感を得ることが出来たのだった。



対して、琰嗶は龍との二度目の対面にゆらりと笑みを浮かべていた。吊り上がる口端は、見る者全てにゾツと感じさせる威圧感を持つており、目の前でその威圧を向けられている龍は、一度目とは違って声すら上げられなかった。まるで喉に大きな石でも詰まったかのような圧迫感、ともすれば吐いてしまいそうな程の気持ち悪さが龍の身体を襲っていた。

「やつぱりデカイな……美味かったら——食事に困らなそうだ」

ぺろつと舌を出してそう言う琰嗶の眼は、本気^{マジ}だった。

一応言うと、吸血鬼の歴史の中で、巨龍は『吸血鬼の世界を背負う龍』とされている。これは吸血鬼達が誇張して比喩・暗喩した宇宙論だが、とどのつまり巨龍が背負っているのは吸血鬼達がいるこの吸血鬼^{じんこうえいせい}の古城^{せい}という訳だ。よって、巨龍の背中から吸血鬼達は系統樹が乱れない様に監視をしていたということになる。

そこで、第四の勝利条件である『玉座に正された獣の帯を導に、鎖に繋がれた革命指導者の心臓を撃て』を読み解く。まあ簡単なことだが、『革命指導者』の『革命』を英語

表記にすると『revolution』になり、これには『革命』の他に『公転』という意味も含まれている。

まとめると、人工衛星から監視活動をしていた吸血鬼達をまとめて背負っていた巨龍は、様々な惑星や星座を中心に公転していた指導者ということになるのだ。つまり、第四の勝利条件は『革命』を『公転』書き換えて、『公転の指導者である巨龍の心臓を撃て』ということになるのだ。

つまり何が言いたいかというと、瑛唄がこの巨龍を殺して食べたとすると、勝利条件達成となってしまうのだ。というか、この巨龍はレティシアの分身でもあるのだから、食べるなど言いたい。

「——ん？ 待てよ……う？」

そこまで来て、瑛唄は気が付いた。第四の勝利条件の謎が、解けてしまった。今日の前で自分に怯えて大人しくしている巨龍の心臓を打ち抜けば、このゲームがクリア出来ると。なんで解けたのか、ぶつちやけると瑛唄は第三の勝利条件自体は既に解いていたのだ。解けたのは実際に『黄金の豎琴』を返しに古城へ行った時、古城の構造を見たからだ。

忘れられてはいないだろうが、良く考えてみて欲しい。

瑛唄は三兆年もの年月を、『何処で』過ごしていたのか？

——宇宙だ

如何に星と星が遠かろうと、瑛唄はスキルで瞬間移動出来たし、暇潰しで宇宙の端から端まで網羅する事など、全知全能だった瑛唄にとっては容易だった。

星座は友達、惑星は仲間、宇宙は家の庭みたいな感覚だったのだ。瑛唄やなじみ以上に、宇宙に詳しい存在はいない。故に、契約書類ギアスロールを見た瞬間、瑛唄は第三の勝利条件を読み解いていたのだ。

第四の勝利条件は宇宙の知識というより、英語の知識だった上に、読み解こうとしてもできなかったのだから分らなかったのだが、ちよつと考えてみたら普通に解けた。

「宇宙で暮らして良かったな、三兆年も宇宙で暮らすとか退屈だったけど……役に立つもんだね」

瑛唄はそう呟いて、苦笑する。だが、敢えて瑛唄はその勝利条件を達成せずにおいておく。こんなことで十六夜達の邪魔をするのも気が引けたのだ。

「ん？」

次の瞬間、とうるか……一瞬だった。瑛嗶は龍を抑えていて、さらに感慨に浸っていたことから、結構油断していた。それが『彼女』の攻撃を瑛嗶に『届かせた』。

「さっきぶりだね、お兄さん」

黒髪を靡かせて、瑛嗶の背中から腹を『貫いた』無骨なナイフを握った少女——リ
ンと呼ばれたあの少女が、少女らしい声でそう言った。

「……あれ？ お嬢ちゃん、今どうやって近づいた？」

瑛嗶は彼女が近づいてくる気配を一切感じられなかった。その場に一瞬で現れて、何
の気配も無く瑛嗶の背中にナイフを突き立てたのだ。今の瑛嗶には物理攻撃を無抵抗
で防ぐような便利な力はない。故に、彼女のナイフは瑛嗶の肉体を普通に穿ったのだ。

リンは瑛嗶の身体からナイフを引き抜き、付いた血を払う様にナイフを振った。地面
に瑛嗶の血がピピツと落ちる。それと同時に、瑛嗶の背中と腹から、勢いよく血が流れ出
た。

「……………」

「あれ？　なんか思ってた反応と違う」

「——『空間操作』」

「え？」

「『時間操作』『距離操作』『気配遮断』『感覚操作』……等々考えてみたけれど、うん……『空間操作』が一番しつくりくるな」

瑛嗶は口から零れ出た血を気にせずに、口端を更に吊り上げた。久々だったのだ、自分自身に傷を付けることが出来た相手は。だからこそ、面白い。

「良いな、お嬢ちゃん……面白い。久々に戦闘意欲が湧いてきたぞ」
「!？」

「感謝を込めて、この傷は残しておいてやろう。ハンデとしては、些か不十分かもしれないけどな」

瑛嗶の言葉が紡がれる度に、リンはその肌を突き刺す様な迫力を感じていた。片手で抑えている巨龍等足元にも及ばないほどの圧倒的強者の威圧感。

「——俺に傷を負わせた相手はそういない。だから誇って良いぜ？」

瑛嗶はそう言って、少女——リンを敵として認識した。

ゲームクリア

刺された瑛嗶が、刺したリンへと一步、また一步と歩を進める。それに応じる様に、リンは瑛嗶の放つ殺意のプレッシャーから逃れる様に一步、また一步と足を退いた。

リンのギフトは、空間・時間操作の類のギフトであり、基本的に彼女に攻撃は『届かない』。当たらないのではない、届かないのだ。当たる前に距離を操作されてしまうから。

攻略法は、ギフトを発動される前に一瞬で接近すること。瑛嗶にとっては造作もないことだが、こうして一步一步詰め寄っているのは、それ相応のプレッシャーと威圧感でリンを追い詰める為。

「う………」

「どうした?」

リンは、基本的に戦闘中でも無邪気さを忘れない可愛らしい少女だが、この時ばかりは違った。そんな暇は無い。無邪気に天真爛漫楽しんでる暇などないのだ。それほどまでに、今の瑛嗶は圧倒的に強かった。

だが、

「え？」

「やあ」

リンが後ろに下がっていると、誰かにぶつかつた。思わず後ろを振り返つてしまうリ
ン。そこには、女性がいた。見た目的には美少女といつて差し支えない容姿だが、纏つ
ている余裕淡々とした落ち付いた雰囲気、見た目より遥かに大人びた印象を与えた。

そう、安心院なじみだ。瑛嗶の恋人、現時点において6兆年の歳月を生きた本物の人
外、全知全能の悪平等である。

「貴方は……？」

「ん？ 僕かい？ 僕の名前は安心院なじみ、親しみを込めて安心院さんと呼びなさい」
「あ、どうも……？」

「それで、少し問いたいのだけけれど……瑛嗶の腹部から決して少なくない夥しい量の血
液が流れ出ているのは……なんでかな？」

「………わ、私が……刺した、から？」

「そうかい、それじゃ——」

安心院なじみは、何もしなかった。何もしなかったけど、何かをした。結果、リンは大きく仰け反り、唐突に訪れた衝撃に……吹き飛んだ。

地面を転がり、身体を土塗れにしながら、ナイフを地面に突き刺して止まる。

「——え？」

リンは呆然と表情を固める。そして、顔を上げた視線の先……安心院なじみは、とんでもない形相で怒気を放っていた。

「殺してやろうか、小娘」

安心院なじみはこうして怒りを露わにする理由。それは、瑛嗶が普通の人間と同じになつたからだ。同じ、というのは『不死身のスキル』を失つて、殺されたら本当に死ぬ存在になつたということ。

今の瑛嗶がどのようなギフトを持っているか知らない彼女からすれば、瑛嗶が死んで蘇る安心は出来ない。勿論、自分のスキルが通用するのなら幾らでも蘇生するが、ここは別世界。下手すれば、瑛嗶が死んで二度とその温もりを感じられなくなる可能性もあつたのだ。

だから怒る。自分と瑛嗶を引き裂こうとする者を、許さない。

「よーなじみ、お前ゲームには参加出来ないんじゃないやなかったっけ？」

「さてね、僕としては星の加護を得るギフト『スター星間被光』を使えばゲームの参加資格位簡単に獲得出来るんだよ」

「ふーん」

リンの心境としては、あ、これ詰んだ。といったもの。前門の人外、後門にも人外だ。まさしく四面楚歌、この二人の前では如何なる逆境をも平伏し、この二人の進む道には如何なる敵も道を開ける。絶対に勝てない相手、絶対に勝てない人外。

人の枠を外れた存在、ソレが人外。

本来ならば、敵対するべきでは無かった。

「さて……今のはアレか？ 怒りのエネルギーに比例して相手をぶっ飛ばすスキル『ストレスブレイク暴徒暴投』か？ ストレス発散系のスキルの」

「そうそう、見てたらどうやら空間操作、距離を操作する能力みたいだったからね。そんなの関係無く『ぶつとばす』結果を現実化させるスキルなら、関係無いだろう？」

そんなギフトがあつてたまるか、とリンはぶつちやけ思った。問答無用で怒りの矛先

をぶっ飛ばすギフトなど、防ぎようがないではないか。しかもそれがただのストレス発散の為の力というのだから、恐ろしい。彼女は一体どんなに凶悪なギフトを持っているというのだ。

「で、瑛嗶……その傷は大丈夫？ 治そうか？」

「ん……あー、うん……もういいや。なんか可哀想になつてきたから」

瑛嗶はそう言つて、戦意を喪失した。なじみが現れてからというものの、リンの怯えようが半端ではない。どう見ても戦意を喪失……いやぶっ壊されている。こんな状態の少女を敵として葬ることは、瑛嗶でなくとも気が引けるだろう。まして、絶対に戦わなくても良い、倒さなくても良い相手だとすれば尚更だ。

「治してくれ、なじみ」

「良いよ、ちゅーしてくれたら」

「お前、相変わらずだな……」

「僕をこんな風にしたのは瑛嗶の癖に」

安心院なじみは頬に両手を添えて頬を赤くしながらそう言つた。3兆年もあればまあ色々ヤツちやつてるのだが、なじみとしては行為よりキスの方が気に入っているようだ。

例えるのなら、全裸よりもチラリズムの方が興奮する、みたいな感じである。年中発

情しているような色魔ではないのだ。口移しでスキルを譲渡するスキルもあつたこともあつて、代わりになじみは琰嗶限定でキス魔になつちやつたようだけれど。

「時と場合は一考すべきだと思ふけど？」

「……………うん、ちゅーしよう」

「思考時間一秒にも満たなかつたな……………仕方ない」

反転すれば治る傷ではあるものの、琰嗶としても恋人であるなじみに、しばらくの間寂しい想いをさせていたことを悪く思っていないわけではない。ここは大人しく、可愛い恋人の要求を呑むとしよう。

「♪」

琰嗶は安心院なじみの前に立ち、彼女の顎をすつと少し上に上げた。なじみはそれでキスしてもらえろと思つたのか、上機嫌で目を閉じた。リンはこの隙に逃げるべきであるにも拘らず、まだ幼い少女故に大人の恋愛というモノへの好奇心から、目を離せないでいる。

そして、琰嗶の顔がゆつくりとなじみの顔に近づいて、

「んっ……………」

なじみのそんな短い嬌声と共に距離を零にした。くつついた唇と唇は啄む様な軽いキスを数秒続け、そして離れた。

「これでいいか？」

「ふあい……」

安心院なじみは、満足気にへにやつと笑みを浮かべると、瑛嗶の腹部の傷を一瞬で治してみせたのだった。

そして、それと同時に。ギアスロールが降ってくる。そこにはこうある。

——第三勝利条件が達成されました。

巨龍討伐

さて、ゲームがクリアされた。という事実はゲームに参加している全員に伝達された。

そしてその原因は十六夜だ。春日部耀らが蛇遣い座以外の全ての星座の欠片を集めて、ゲームクリアに近づいたから強制的にゲームが再開された後、十六夜は偽レティシアを倒して吸血鬼の古城に単身乗り込んだのだ。そしてその途中、なんと幸運にも蛇遣い座の欠片を拾った。

そしてその時、春日部耀は瓊瓊を襲ったリンの仲間であり、『龍角を持つ驚獅子』のトップだったドラコ||グライフの弟、グライア||グライフと戦っていた。彼の目的は、耀の持つギフト、『生命の目録』。彼の話によると、このギフトは生態兵器を製造するギフトとの事だが、耀はそれを否定した。そして、今まで出会った全ての生命の系譜を一つに集約し、覚醒させる。ペンダントは杖へと変幻し、そこから発せられた熱閃が勝負を決めた。

その後十六夜はレティシア達のいる玉座へ到着、蛇遣い座の正しい配置にその欠片を嵌めこみ、正式に第三勝利条件を達成。ゲームクリアとなった訳だ。

さて、此処で問題が発生する。このゲームの開始と同時に現れた巨龍の対処だ。この巨龍は吸血鬼の古城を支えていた者であり、ゲームで古城が出現したことで、同じく出現した訳だ。故に、この巨龍はゲームがクリアされた所で消える訳ではない。巨龍をこの場から消滅させる方法は二つある。

一つは第四勝利条件である、巨龍の心臓を撃つ事。もう一つはゲームクリア後の後始末として蛇遣い座の太陽の主権により、開かれる大天幕から注がれる、本物の太陽の光によつて宇宙の正しい軌道上へと戻すこと。

つまりは放つておいてもゲーム自体の後始末によつて巨龍は消失するわけだが、問題はそうなる本物の太陽の光は『吸血鬼』であるレティシアⅡドラクレアも同時に消滅させてしまうことだ。

故に、十六夜達はレティシアを救う為に巨龍の心臓を撃たねばならない。勿論巨龍は抵抗するだろう。大人しくしていてくれる相手では無い。大天幕が開かれるまではその時間も掛からない。レティシア自身も、最早死にゆく運命だと諦めていた。

しかし

ここで諦めるほど、ノーマム問題児達は潔くない。暴れて暴れて暴れて、その先で何もかもを

救つて見せる。それだけの力が、その身に宿っている。

故に十六夜は余裕淡淡と言つて見せた。

「自己犠牲の出来る聖者よりも、物分かりの悪い勇者になる。完膚なきまでに救つて見せる！」

故に春日部耀は決意と共に言つて見せた。

「私は友達を助けるだけだよ。一緒に居られる場所を、護りに行くんだ」

そんな無理なことを言う二人の問題児に対して、レティシアは何故だと疑問を抱く。訳が分からない。何故無理なことに、不可能に立ち向かつていくのだ。そうすれば、死んでしまうことは分かっている筈なのに。



春日部耀は、覚醒した『生命の目録』の力を『幾千万の生命の系譜の系統樹の結晶化』ととつていた。『生命の目録』の持つ、生命の系譜の中から幾つかの系譜を抽出し、合成させ、新たな生命の奇跡を顕現させる力。それが耀の考える『生命の目録』の力。

故に、彼女はレティシアを助ける為に再度その力を振るう。この力は上手く使えれば今まで出会った事のない幻獣の力も再現する事が出来るのだ。その力で耀は、空を飛翔

する幻獣……天空馬ベガサスの力を顕現させた。

ペンダントはまた杖へと変貌し、ブーツには飛行能力の付与によって白く輝く翼生えた白銀の装甲が顕現した。これで、耀は空を飛ぶことが出来る。今まで行使してきた己のギフトを、もう一段階覚醒させた結果だ。今まで以上に強力な力を発揮させるだろう。

「これで十六夜を巨龍の所まで運べるよ」

「やっべめっちゃくちやカツコいいじゃねえか！」

「そ、そう？」

「ああ、そんなにカツコイイの出されちゃ俺も負けてらんねーな」

「どうやら、耀の覚醒した力は十六夜を興奮させたようだ。勿論性的な意味では無い。

「さて、行くか！」

「うん」

十六夜は拳を。パンツと手の平に叩き付け、歯を剥いて笑う。耀も、やる気十分だ。絶対にレイシアを助ける。それだけの為に、巨龍を撃つ。仲間を護る、理由なんでそれだけで十分だろう。

文句は言わせない。何故なら自分達は、どうしようもなく

問題児なのだから



その頃、飛鳥は巨龍の前にデイーンの肩の上で佇んでいた。

目の前では、巨人や幻獣達を相手にペスト達が奮闘している。パロールの死眼を持って現れたフードの女性……アウラ。彼女の存在が此方の戦況を悪くしている。攻めあぐねる此方に対して、巨人達の勢いは衰えない。

そんな中で、飛鳥はデイーンの肩の上で十字剣を握りながらその光景を見つめていた。静かに、無表情に、何の感情も感じさせず、傍目から見れば呆然としているような様子で、見つめていた。

デイーンはそんな飛鳥を不思議に思い、巨人を相手にしながらも気に掛けていた。「DEEN?」

「———デイーン」

声を掛けると、飛鳥は小さく……しかし良く通る声でデイーンの名を呼ぶ。それは、命令を下す為の呼び掛け。デイーンはそれを理解し、次の言葉を待つ。どのような命令であろうと、主人である飛鳥の為ならば、粉骨碎身、己の身体を削つてでも果たしてみ

せよう。

さあ下せ。我が主、その口から王としての命令を

「あのフードの女の所まで、私を運べ」

——極めて了解

デインはその巨体で、駆けた。立ち塞がる巨人は全てその深紅の拳で薙ぎ払い、叩き伏せ。粉碎する。そして、足は止めず、その勢いのままに、主人を敵の下へと運ぶ。

飛鳥はそんなデインの肩の上で、ゆらゆらと十字剣の先を揺らしていた。フードの女性のもつと奥、そこには瑛嗶が抑えている巨龍の頭があった。

「搔つ捌いてやる。全て、この刃で」

飛鳥はそう呟き、上品に笑みを浮かべる。そして、デインがフードの女性に一步、近づいた所で飛鳥はデインの肩を蹴った。前に進む。デインの勢いがプラスして、飛鳥の身体が前へと投げ出される。だが、それでいい。

「——なっ……!?!」

「その眼、貰ったあ!!」

飛鳥は刃を煌めかせ、アウラへと斬り掛かる。その速度に反応しきれなかったアウラは、驚愕と共に動きが硬直し、そしてその手に持っていたバロールの死眼を腕毎斬り落とされた。

「ペスト!」

「分かつてるわよ!」

そうすると同時、ペストがバロールの死眼を奪った。元々死の概念として近しい存在同士、バロールの死眼と黒死病のペストは相性が良かった。故に、その死眼の所有権をペストは己の霊格を持つて乗っ取る。そして今まで自分達に襲い掛かっていたバロールの死眼による脅威を、今度は乗っ取ることで敵へと向けた。

「今度は貴方達がバロールの死眼に貫かれると良いわ」

ペストはそう言つてその死の力を存分に発揮する。巨人族が次々と死んでいく。アウラはその光景を見て、ギリツと歯を食いしばりながら撤退して行った。

「飛鳥——!?!」

そして、撤退したアウラを見送つたペストが見たのは、なお突撃の速度を緩めないデインが、宙に投げ出された飛鳥をキャッチして、そのまま巨龍へと向かつていく場面だった。

「まさか、巨龍を撃つつもり……？」

ペストは信じられないという表情で、そう呟いた。

三人の問題児が、総じて巨龍の下へと集まって行く。

巨龍抹殺

瑛嗶となじみは、巨龍に近づいてくる気配を察知しつつ、ほのぼのと会話をしていた。近づくと気配とは、十字剣を振るう飛鳥、ペガサスの力を十全に發揮して十六夜を運ぶ耀、そしてその拳に星を砕く力を温めている十六夜の三名。どれも箱庭屈指の問題児達である。

このゲームのゲームマスターであり、そしてノーネームの仲間であるレティシアードラクレアを救うため、瑛嗶が抑えつけている巨龍の心臓を撃つ。彼らの目的はそれだ。だが、相手は巨龍。幻獣の中でも最強種と称される純血の龍だ。その巨大さはいえ、それこそ瑛嗶の抑えている頭だけで人間数千数万を重ねても勝てない程。まあそれを下顎の皮を掴んで抑えつけることで暴れさせない瑛嗶も瑛嗶だが。

とはいえ、その大きさゆえに何処に心臓があるのかは全く分からない。口から入って心臓まで突き進むかしない限りは、まあ不可能だろう。

「さてさて……瑛嗶、あれが君の今のお気に入りかな？」

「ん？」

「見てれば分かるさ。今ここに向かってる——金髪のクソ生意気そうなクソガキと、

茶髪の貧乳と、赤いドレスのプライド高そうな小娘、この子達を見る君の視線は、かつてのめだかちゃん達を見る視線と同じだ」

「んー……まあそうだな。といつても、めだかちゃん達みたいな仲間だとか友達だとか先輩後輩だとかそういう……なんていうの？ 好意的な関係、というわけじゃない」

瑛嗶の言葉に、なじみは首を傾げる。仲間じゃない、友達じゃない、先輩後輩というわけでもない、といつても敵という訳でも無い。ならば何だというのだ？ そういう疑問を抱いた表情だった。

瑛嗶はそんななじみの表情に苦笑する。そして、その視線をもうかなり近くまでやってきている問題児達に送りながら答える。

「アレらは問題児。俺に従順でなく反抗的で、友好でなく生意気で、本能的でなく理性的で、協力的でなく打算的で、敵意でなく出し抜く意思を抱き、友情よりも目的を取り、お利口でなく無邪気で、結局個人個人の目的の為にお互いを利用し合っている。勝てないと分かっていながら強者にのみ牙を剥く。友達なんて温い温い、本当の仲間なんてとても言えやしない」

「じゃあなんなのさ、君達はこうして知り合っているし、こうして行動を共にしてる。赤の他人でなければ友達でもなく、敵でも無く、仲間でも無い関係なんて成り立たないぜ？」

「そうだな……さしずめ」

そこまでいって、十六夜と耀が巨龍へ辿り着いた。まだ大幕は開かない。送れて飛鳥も辿り着く。三人は巨龍の頭の前に瑛嗶がいることを確認した後、それぞれアイコンタクトもせずに一つの作戦を決定、即実行に移しだす。

「——一緒に問題を起こして迷惑を振りまく関係、『悪友』って所だろ」

十六夜を抱えた耀が巨龍に向かって十六夜を思いつきりに投げ落とす。

「十六夜！」

高速で巨龍に向かって落ちて落ちる十六夜が、巨龍の身体をその拳で叩く。星を砕く一撃は、巨龍の身体全てを地面に叩き落した。

「お嬢様ア!!」

そこへ飛鳥が駆けつけ、地面に落ちた巨龍の身体をディーン力で地面に押さえ付け

る。恩恵の極大化により強化されたディーンは、その圧倒的なパワーをもって巨龍を抑えて放さない。

「琰嗶さん!!」

そして、三人の視線が琰嗶に向いた。ここまでの流れを見ていた安心院なじみがハツとなつて隣の琰嗶を見る。全体を見てみれば、琰嗶の目の前に一直線に巨龍の身体が地面に着いているではないか。そして、その琰嗶はゆらりと笑いながら巨龍の目の前で拳を振りかぶっている。

「まさか——」

安心院なじみは眼を見開いた。箱庭学園でも全く見られなかった琰嗶の全力の拳、それが目の前で繰り出されようとしている。

「消えろ!! デカブツがああああツツ!!」

動かない。何故なら、自身の身体を中心、その大きな心臓が……『破裂していたから』。

瑛嗶の拳、それこそ一撃で地面を割り、空気をも寄せ付けず、音さえ置き去りにしていく最強の拳は、その衝撃を巨龍の身体全域に響かせ、そして心臓を破壊したのだ。巨龍の姿が消えていく。伝承から顕現した存在が、宇宙の正しい軌道へと戻って行った。

「……………なるほど、確かにあの子達は問題児だね……………そして君もね、瑛嗶」

「わはは、楽しいぜこの世界は。好き勝手やつても怒られない」

「今までも好き勝手やつてたくせに」

「全力で好き勝手やつても怒られない」

「それは確かみたいだね」

乾いた様な苦笑を浮かべながら、安心院なじみは言う。そして、瑛嗶はなじみに満足した様な表情を向けながら言う。

「好き勝手ついだ。なじみ、この惨状を元に戻しといてくれ」

「え」

瑛嗶が親指で指した先、そこには

巨龍の身体が地面に叩きつけられた拍子に崩壊した、アンダーウッドの惨状があった。

なじみの紹介

「安心院なじみ？」

「そうだ」

巨龍を倒し、アンダーウツドの危機を見事救った瑛嗶達ノーネームは現在、『龍角を持つ驚獅子』の用意した客室にて集合していた。無論、レティシアはその後意識を失ったのでまだ寝室に寝かせているのだが。

そういうわけで、彼女以外の面々が眼の前にはしているのは、瑛嗶が連れて来た存在。下手すれば、全力を振り絞って倒した巨龍よりも圧倒的、最強と思っていた瑛嗶よりも強大な気配を持った少女、安心院なじみだ。平等な人外である彼女を前にノーネームの面々が取った反応は、ただただ絶句するのみだった。

戦闘員であろうとなかろうと、安心院なじみという人外の凄まじさは十分に伝わっている。何故なら、彼女が何もかも平等に見ているからだ。その視線は十六夜であろうと、ジンであろうと、リリであろうと、黒ウサギであろうと、ペストであろうと、なにもかも平等。すべからく同じ価値で見ている。だからこそ、敵わないと思えた。

何もかもを平等に見る、という芸当が出来るのは、何もかもを圧倒出来る力を持って

いるからに他ならないからだ。

「よろしくね。あ、ちなみに僕琰嗶の妻だからよろしく。手え出したらぶつ殺すよ」

「まあ事実婚だけどな」

「妻は妻だ。どういう形式であれ、結婚してようがしてなからうが愛し合っていれば関係ないよ。かのアダムとイヴだって、ぶつちやけ結婚式も挙げてないし、入籍だってしてない。ほらね？」

「わはは、随分と妙な理屈を持ってきたもんだ。アダムとイヴがいたのかどうかもお前でもなければ知らないだろう」

琰嗶となじみが、きやつきやうふふと話している光景は、十六夜達にとつてどうしようもない災害と災害が楽しく歓談しているようにしか見えなかった。此処まで仲が良いと、二人同時に相手した場合を考えざるを得ない。死、以外の結末が見えなかった。

「あー……琰嗶、水を指すように悪いんだが」

「ん？」

「そいつはなんだ？」

「安心院なじみ、俺の恋人で奥さん。6兆年を生きたくソババアで、2京のギフトを持つ人外。昔の俺ならまだしも、今の俺じゃあ8割負ける。ぶつちやけ神話の時代よりもずーっと昔から生きてるよ。世界最初の生き物って言っても良いな」

「……それなんて存在？」

神話よりも前、神よりも前に生まれた原初の生物。そして、無敵の瑛叟を唯一超える存在。とはいえ、誰よりも平等であり、全知全能ながら自分自身で弱点になり得る生き方をしているので、絶対に勝てない相手かと問われればそうではない。

「瑛叟、後で話がある」

「クソババアって言ったの怒ってる？」

「分かってるみたいで良かったよ」

「じゃ許してくれ」

「そいつは出来ない相談だ」

「ケチ」

「馬鹿」

「アホ」

「間抜け」

「毛虫」

「シマウマ」

「マントヒヒ」

「膝小僧」

「兎」

「ギンヤンマ」

「マイク」

「久遠飛鳥は」

「カス」

「ちよつと待ちなさい、喧嘩からしりとりになって最終的に私の悪口になってるわよ？」
飛鳥が突つ込むと、瑛嗶となじみはこそこそと話し合いを始めた。飛鳥に隠れる様に、聞こえないようにぼそぼそと話す。そして、話がついたのか妙に改まって飛鳥に向き直る。飛鳥は少しだけ身構えたが、瑛嗶達は気にせずマイペースで進める。

「こほん、と咳払いをすると、

「えー今のツツコミを採点した結果」

「23点」

「という結果が打倒だと判断されました」

「点数が妙にリアルだから止めてくれないかしら!？」

黒ウサギはその光景にこう思った。

——最大級に面倒臭い問題児がまた増えた。泣きたい。

瑛嗶とのコンビネーションがこれ以上なく上手くいつている上に、実力も一級品、そ

してなにより瑛嘎の恋人というノーネームの中でも濃い個性を持っている人物だ。しかも、瑛嘎に似て好き勝手やることに躊躇が無い様だ。

溜め息を吐く黒ウサギの背後から、部屋の扉を開く音が聞こえた。全員の視線がそこからへ向く。

「ああ、此処に全員居たのか。先程レティシア殿が目覚められたぞ」

「サラ様、どうもありがとうございます！ 皆様！ レティシア様がお目覚めになったようでございます！ 早速見に行きましょう！」

黒ウサギの言葉に、全員が気の抜けた返事を返した。



「皆、心配を掛けた……ありがとうございます」

ノーネームの面々と対面して、レティシアが最初に言ったのはそれだった。ごめんなさいとは言わず、ありがとうと言った。ノーネームの問題児達や、黒ウサギ達の気持ちをおちゃんと理解しているからこそその台詞。十全員が、気にするなとばかりに口端を吊り上げた。

「空気を壊してしまうようで申し訳ありませんが、ノーネームの皆様……少しよろしい

でしようか？」

そこへやって来たのは、サウザンドアイズの女性店員。白夜叉の所にいたあの女性店員だ。いつもの割烹着では無く、綺麗な着物を着ている。

「今回の成果に対する——報酬の件についてのお話があります」

その言葉に、ジンと十六夜、そして黒ウサギが反応する。十六夜が瑛唄に目線を送ると、瑛唄は苦笑して手をしっしつと振った。

それを見て、ジンと十六夜、黒ウサギは女性店員と共に部屋を出ていった。真面目な話なので、ちゃんと話し合うべきだと場所を移動したのだ。

「ふむ……まあ任せておけばいいだろう。でだ、調子はどうだいレティシアちゃん」

「ああ、支障無い。なんなら今からでもレッスンを受けても良いくらいだよ。マスター」
「そうかい、ならいいんだ」

アイドルたるもの、健康状態には気を掛けなければならない。そういうものだ。安心院なじみがちよつとむつとしたが、そこまで嫉妬に狂った女ではない。それに、瑛唄と話しているのは見た目は年端もいかない少女、気に掛けるべきでもない。

「ところで……マスター、そちらの方は誰だ？」

「ああ……俺の恋人だ」

「……なるほど。マスターの恋人ならこれほどの威圧感を持っていてしかるべきか

……」

「お前本当俺の行動に驚かなくなったな」

「ああ、今の私ならマスターが箱庭をぶっ壊したと聞いても驚かずに居られる自信がある」

「育て方間違えたかな？」

「慣れだよ」

「慣れかー……」

レティシアは遠くを見て、瑛叟は苦笑する。恋人であるなじみまでとは行かないが、この二人もなんだかんだで相性がいいようだ。

収穫祭流行を作る編

人外という存在

その後、収穫祭は再度行われる事になった。しかも、巨龍が倒され、脅威が去ったその日の内にだ。平等な人外、安心院なじみの会場修復作業は凄まじく、元通り以上に派手でキラキラした会場を作りあげて見せた。しかもたったの数分でだ。故に、祭の再開は早かった。修復が終われば元通り、魔王によつて妨害されたことが無かつたようだった。

ノーネームの面々は重要な話をする面子以外、祭を楽しむ事に決めたようので、各々先程までの戦いの疲労を気にも留めず、子供らしく無邪気に飛び出して行つた。

無論瑛嗶も祭故に外へと繰り出している。隣には腕を絡めてくるなじみ、従者として一歩後ろを歩くレティシア、その隣にペストがいる。デートだ。子供連れの。

「そういうえば瑛嗶、瑛嗶つてどうしてスキル……ああ、今はギフトだっけ……を失つたんだい？ あれだけのギフトは簡単に失えるものじゃないと思うんだけど」

「んー……どうやらスキルはこの世界で使える力ではないみたいだ。だから、神様が俺の中にあつたスキルを全部持つてった。代わりにギフトを一個くれたからいいか

な—って」

「つてことは僕のスキルの数々も何れ使えなくなるって事かな？」

「ん—……俺のスキルは結構特殊なルーツだったからなあ……どうだろう。まあ多少は弊害があるんじゃないか？ でも俺と違って全部のスキルを失うことは無いと思うぜ？」

「……そっか、まあ全部消えても良いけどね。瑛嗶に言われてこの世界の事についてスキルで調べた時、どうやら僕には神格と強力な霊格が備わっている事が分かったからね。どうやら原初の生物というのは結構なレアみたいだ」

なじみはそう言つて鼻歌を歌う。瑛嗶となじみが進む道、その先を遮る者はいなかった。というか、瑛嗶達から溢れ出る圧倒的な存在感が、何者も引き寄せなかつたのだ。最早前を通り過ぎる者さえいない。モーゼのようだった。

「それに、弊害というのなら既に幾つか問題が起きてるんだよね。この世界に来た時から」

「ん？」

「まず僕の持つスキルの内、おおよそ7割が使えなくなってる。瑛嗶から貰ったスキルは勿論、ジャンル的には蘇生系、世界干渉系とか強力な奴ばかりが」

「へえ……やっぱり世界の違いか」

そう、安心院なじみは人外だ。それも2京もの数のスキルを持つ。しかしその存在は結局『めだかボックス』という世界の住人であり、この世界では本来ありえない存在。故に、世界を移動したことでかなり弊害が出ている。世界の修正力、異物を排除しようとする働きは、人外であろうと防げない。瑛嗶でも防げなかったのだから。

それが、スキルの大幅な使用不可。今の彼女には、傷の治療は出来るにしろ死者の蘇生や不死身の力はない。それに、世界を改変したり、概念に干渉したりとそういった強力な力も使用不可だ。といっても、それでも十分人外なのだから本当に規格外だ。

「この際だから使えるスキルから幾つか選んで後全部消せば？」

瑛嗶の提案。自ら弱体化したらどうかという提案。後ろで聞いていたレテイシアとペストからすれば、自分から戦力を削るということであり、それは安易に呑めるものではない。

だが、

「いいね、そうしよう。瑛嗶とおそろいだし」

安心院なじみはそれを簡単に受け入れる。力が腐るほどある者からすれば、多少削った所で問題ないのだ。何故なら、それを使う自分自身が十分強いからである。瑛嗶と3兆年過ごしたなじみは、やはり強くなっている。暇潰しに殺し合ってみたり、喧嘩してみたりしたことなんてそれこそ日常的で、ザラだったのだ。武器を持てばすべからく十

全に扱えるし、素手であれば徒手空拳で全力の瑛嗶相手に5分は戦える。瑛嗶に善戦出来る彼女からすれば、スキルが1つであろうが1京であろうか関係無いのだ。

それこそ、スキルなんて手品だと言える様な世界の人外なのだから。

「んー……それじゃあ……これと……これかな？」

結果、安心院なじみを選んだのはたった2つ。2京の内の2つのスキル。勿論、世界の修正力から逃れた、つまりはこの世界で使っても良いと認められたスキルだ。内容は、まあ何れだ、

「瑛嗶のギフトがどんなものかは知らないけど、きつと役に立つ力だよ」

「なるほど、まあ期待しとくさ」

「じゃ、後は削除つと……」

安心院なじみは、その二つ以外の全てのスキルを躊躇なく消した。レティシアとペストは、ますます二人が分からない。何故自分の力を、しかも何者をも寄せ付けない最強の力をそう簡単に捨てられるのか。自分達はもつともつと力が欲しいと渴望しているのに、目の前にいる自分達が欲しいモノを持っていてる怪物達は、こんな雑談交じりにそれを捨てていく。意味が分からない。

「マスター……何故貴方達はそんなに簡単に力を捨てられるんだ？」

「分からないか、レティシアちゃん」

「分からない……だってその力は、私達全員が必要としているモノだ」

「だろ？ なあ……でもなレティシアちゃん。俺達はそういう人種だ。望まずとも力を手に出来、あたかも全知全能の神のごとく何でも出来てしまう。出来ないことなんて何もない位にぶつとんでしまっているんだよ」

だからこそ、瑛嗶はそう語った。分からないことこそ、正解だ。全知全能の気分なんて体感したものでないと分からない。何でも出来るから、力も捨てることが出来る。力に執着しないのだ。何故なら、瑛嗶は自分に何の力が無くても面白ければ良いと思う狂った人外であるし、なじみは出来ないことがあるということが逆に嬉しかったりする。この人外達は他の者達が望むものがいらず、他の者達が直視したくない逆境や苦難を渴望する。

「力は所詮力でしかない。目的を達成するのに必要なのは心であり、それを達成しようとする強い意志だ。それを貫いた結果死んだ所で、俺達は何の後悔も無い。俺達は随分と長い時間を生きているからね、何時死んだ所で十分生きたと言えるさ」

「ぶつちやけ体験してみたい気もするんだよね……瑛嗶や僕からすれば、僕らが『誰か』に『殺される』っていう展開」

「自分から殺されたいとは思わないけど、それでも俺らからしたら『ありえない』ことが起きたら、それはそれで面白いだろう？」

レティシアとペストは思った。こいつらは自分達の理解の範疇を超えていると。力を捨てられるのは、そうしたところでなんの支障も無く、逆境や苦難が増える事を苦と思っていないから。死ぬことに無頓着なのは、それがありえないものと思っっているから。殺される事に恐怖を感じないのは、そうなったらそれはそれで面白いから。

まさしく異常にして常識外の生き方だ。

「さて……まあ俺らの事は良いとして、そろそろ何か見てみようか。折角の収穫祭だし、ゲリラライブでもやるか？」

「……………気になることは多々あるが、まあマスターがそれで良いのなら良い。とはいえ、サンドラも白夜叉もいないのにやるのか？」

「んー……ま、そりやそうか。じゃあいいや、とりあえずは何か食べるとしようかな」
瑛唄がそう言うと、4人はまた人々が避けていく道を進むのだった。

牛魔王

収穫祭再開が幾ら早かったとはいえ、その賑やかさは魔王襲撃以前とは打って変わって閑散としたものだった。魔王による襲撃を受けて、非戦闘コミユニティや商業コミユニティなどの弱小コミユニティはすぐさま逃げた。本拠地のある場所へと非難し、その場の收拾が付くまで身を潜めていた。

故に、実際本格的に収穫祭が始まった……つまり様々なギフトゲームやイベントが始まったのは瓊瓊達が一龍を倒してからおおよそ半月後である。それまでの半月は、本格的に再開される日まで資材に影響がない程度での前夜祭の様な日々だった。

そして、その半月で様々なことがお偉いさん方の方で決定された。まず巨龍を倒した功績として『龍角ドラコ・グライフを持つ鷲獅子』連盟が南側の『階層支配者フロアマスター』に着任。多くのコミユニティに歓迎された。また、それにあたって巨龍討伐に大きく貢献した『ウイル・オ・ウイスプ』と『ノーネーム』の功績も、『龍角を持つ鷲獅子』による気遣いと敬意によって社会的に認められる様になった。

具体的には、収穫祭再開に当たって再度配布された招待状に二つのコミユニティの功績をちゃんと表記したのだ。それを多くのコミユニティが読めば、ノーネームの功績は

大きく広がって認知されることだろう。

でだ、現在その収穫祭で開催されているギフトゲーム、狩猟祭。巨龍と共に襲撃してきた巨人、ひいては多くの幻獣の中にいた、殺人種の幻獣達を狩猟しその数を競うゲームに、耀と飛鳥は参加していた。といっても、それは問題では無い。耀と飛鳥が参加している中に——安心院なじみも参加しているということだ。

瑛叟との会話の中で選択した二つのスキルの内、一つを惜しみなく使って、最早一秒ごとに二、三体の殺人種を狩猟しているのだ。いざ狩猟しようと殺人種に対峙した瞬間、その殺人種が死んでいるというこの状況、どうすればいいんだと思うくらいに理不尽だった。

「ふー、ちよつとはしやぎすぎちやつた。瑛叟見てるかな？」

「あ、あの……」

「ん？ 君は確か……春日部耀とかいうぼっちだね？」

「えー……それ何処情報？」

「巨龍を消し飛ばした人」

「おうかさんかー」

なじみに話し掛けて来たのは、春日部耀。彼女もなじみの狩猟無双の中でなんとか殺人種を数多く狩猟している上位者だ。だが、なじみとの差はかなり大きい。故に、少し

話をしに来たのだ。一応顔合わせは半月の間で住んでいるので、知り合いではあるものの、基本なじみは瑛叟と行動を共にしていたので、話をしたのはこれが初めてだ。

「で、何の用かな？」

「うん……さつきから……えーと……」

「ああ、僕の名前は安心院なじみ。親しみを込めて安心院さんと呼びなさい」

「う、うん。私は春日部耀。よろしくお願いします」

顔見知りではあるが、一応自己紹介をした。なじみの貫録と大人な雰囲気と圧倒的実力から、耀は自然と下手に出た。なんとというか、敬語を使わなければならない相手と自然と思つたようだ。

「それで……さつきから安心院さんの動きが全く見えませんですけど……というか、瞬間移動みたいで……」

「ああ……まあ君達でいう所のギフトを僕も保有しているからね。それを使っているんだよ」

「どういうものか、教えて貰っても良いですか……？」

「ふむ……まあ良いけれど……ただで教えるのは面白くないよね。だからゲームをしよう、箱庭の世界はそういう場所なんだろう？」

耀の質問に、なじみはそう返す。欲しいモノは、物であろうが、質問の答えであろう

が、ゲームをして奪い取れと。その為に、強くなるうとしていたのだろうか。

「ゲーム……？」

「そう、この狩猟祭はどっちにせよ僕のぶっちぎりだし。その後で」

「……うん、分かった」

「それじゃ、今はこのゲームを楽しもうか」

そう言うと、なじみはふつと姿を消した。まさしく瞬間移動、移動による空気の揺らぎも、余波も無いことから、多分瞬間移動で合っているだろうと耀は当たりを付ける。

だが、彼女の力はそんなチャチなものではない。もつと何か恐ろしいものの片鱗であることに、耀はまだ気が付いていない。



さて、そんな狩猟祭が行なわれている最中。瑛嗶は別の所にいた。勿論なじみの狩猟祭での活躍を応援している訳ではない。なじみが勝つと分かっているゲームを応援しても意味が無いからだ。

ではどこにいるのかと言われれば、瑛嗶は白夜叉と黒ウサギと女性店員と共にとある場所へと連れられて来ていた。

「おい白夜叉ちゃん。お前何勝手にイメチェンしてんだよアイドルの癖にプロデュースの許可なく大幅イメチェンしてんじやねえよ」

「いだだだだだ!! すまんすまん! でもこうしないと対処し難い相手じゃったし! てかちよつと不味いつてこれ、結構本気で外そうとしてるのに外れない!」

白夜叉にアイアンクローを極めて不満気にそう言う瑛唄だが、その理由は白夜叉の姿が大きく変化していることにある。これまで瑛唄が見て来た彼女の姿は、幼い少女の姿だったのにも関わらず、彼女の姿は今成人女性まで成長しており、絢爛豪華な紫色の着物と長く伸びた銀色の髪が妖艶に靡いている。

成長を通り越して別人な印象しかない。

「ホント止めてくださいよそういうの……最近サンドラちゃんも魔王襲撃の後始末でもアイドル活動出来ない状況なんですよ? 解散の危機ですよこれはもう。デビューする前に解散とかマジどういうことっすか?」

「いや、それはホント、悪いとは思ってるんじやが……上に立つ者としてはやっぱり優先しなければならぬ仕事があつての……」

「はいはい、分かりましたよ。解散だ解散。やってられつかこの野郎」

瑛唄は白夜叉の頭から手を放し、ふてくされたようにそう言った。どうやら、アイドルグループは解散崖っぷちの様だ。

とはいえ、彼らがいるのはそんな話をする為ではない。

ここは箱庭四桁——六二四三外門。『平天大聖』の旗印の靡く上層階。その本拠地である大楼阁だ。四桁と言えば、白夜叉がまだ少女の姿だった頃に座していた階層。つまり、実力者揃いの紛れも無く強者の領域。無論、三桁以上になればその領域はガラッと一転し、四桁で上位の実力者であろうが全く太刀打ちできない化け物しかいなくなるのだが。

そして、この大楼阁に住まうのは、牛魔王と呼ばれた『平天大聖』の力を持つ上層の実力者である。かの有名な孫悟空とは義兄弟であり、その身一つで強大な魔王を六人も纏め上げた功績を持つ存在。

七天妖王という、西遊記にも記された七人の絶大な力を持った魔王の一人。しかも、内牛魔王を含む四人の魔王は未だに箱庭に存命しているのだ。伝説に劣らぬ実力を持ちながら。

『平天大聖』である牛魔王

『齐天大聖』である美猴王・孫悟空

『覆海大聖』である蛟魔王

『混天大聖』である鵬魔王

以上四名だ。まあ孫悟空や牛魔王以外の面々はその伝説も名前もあまり知る人はい

ないかもしれないが、西遊記の史実に確実に名前を残した伝説の妖怪たちだ。

ではそんな実力者である牛魔王に会いに来たのはなぜか？ それは白夜叉が此度の魔王襲撃の際に仏門に神格を返上し、元の力を取り戻したことによる。白夜の精である彼女は、太陽の運行に関わる絶大な霊格を持つ、太陽神に並び称される最高位の精霊なのだ。

そんな彼女が『階層支配者』として外門に干渉出来たのは、その力を仏門に下ることです。抑えていたから。その力を解放した今、彼女は自身の意思でその地位から退くつもりなのだ。

故に、その後釜——後継者が必要となった。そしてその白羽の矢が立ったのが牛魔王という訳だ。

瑛唄がそこに連れられて来たのは、黒ウサギの守護の為。詳しくは省くが、牛魔王は大層な仏門嫌い。白夜叉は仏門に神格を返上し、現在仏門に何のかかわりも持たない。だが、黒ウサギは違う。彼女は紛れも無く仏門に属する帝釈天の眷族、月の兎だ。牛魔王に攻撃されない理由は無いのだ。

ちなみに、帝釈天とは仏門の守護神である。まあ仏教の中でも幹部的なそこそこ凄い人とも思ってくれればそれで良い。

「行くならさっさと行こう。なんだっけ此処？ 焼き肉屋だっけ？ 俺牛肉結構好き

んだよねー」

「牛魔王食べるってか？ 食べるってか!？」

「馬鹿、食べる訳無いだろう」

「おんしならやりかねん……」

「クソ不味そうだし」

「待て、美味そうなら食べるのか？」

「当然だろうが！ 美味しいものなら食うだろうが！」

「おんし何言ってるか分かっておるのか!？」

大丈夫なのだろうか？ と黒ウサギと女性店員は化け物染みた二人のやり取りを眺めながら溜め息を吐く。

だが、まあこんな二人だからこそ大丈夫だろう。なんやかんやで、黒ウサギは信じているのだ。いや、信じさせられているのだ。瑛嗶がいれば、どうとでもなるのだ、と。

四人は騒がしくも、大楼阁の扉を開いた。

レズ……じゃ、ないね……うん

大樓閣の廊下を悠々と歩く瑛嗶を先陣に、黒ウサギ、白夜叉、女性店員と続いていた。何故白夜叉でなくこの大樓閣に入った事も無い瑛嗶が先を歩いているのか、それは瑛嗶の歩幅と歩く速度がこの中で一番速かったからであり、特に理由は無い。勿論道を知っている筈も無いので後ろから白夜叉が指示している。

「なあ白夜叉ちゃん。さっきから何処に向かっているのか知らないけど、牛魔王なんて大層な名前の牛の気配なんてさっぱりないんだが」

「ふむ……まあ確かにそうじゃが、気配を消せる者など幾らでもおるし、実際牛魔王もそれ位出来る実力者じゃ」

「ふーん」

「まあ、おんしは出来ておらんようじゃがの？」

白夜叉は瑛嗶に向かって得意げに、フンと鼻で笑った。瑛嗶はそんな白夜叉に対して特に何も言わなかった。

故に、白夜叉は勝ったと思った。瑛嗶と出会ってからずっと白夜叉は瑛嗶のペースに乗せられなしかった。一矢報いたなあと得意げになるのも仕方ないだろう。だが、そ

れは間違いだ。瑛嗶は本気でやれば気配を完全に消すことが出来ないわけじゃない。だが、瑛嗶の存在感や圧力というのは簡単に消せるほど小さくない。消そうとしても、溢れ出てしまうのだ。

「ん……ウサギちゃん、ちよつと俺の後ろに」

「え？ あ、はい」

ふと、何かに気が付いた瑛嗶は黒ウサギを自身の背後へ、そしてその次の瞬間だった。

自然ではありえない程、日差しが強くなった。温かな光は肌を焼く熱線となり、瑛嗶達に降り注ぐ。だが、自分達は明らかに襲撃を受けていると、四人全員が判断する前に、事は終わっていた。瑛嗶がパチン、と指を鳴らすと、熱線の向かう方向が全て『反転』した。降り注ぐ熱線を放つ敵へ、放たれた熱戦が牙を剥く。

それに気付いた敵は、攻撃を止め、炎と共に瑛嗶達の目の前に降り立った。

「随分と物騒じゃないか、誰だよお前」

「貴様こそ誰？ その帝釈天の眷族を庇う所を見ると、やはり仏門の使いか」

「生憎と無宗教だ。通行の邪魔だ、牛魔王の首を取ってから出直せ小娘」

「貴様……我が義兄を侮辱するか……！」

「悪いね、基本的に全員馬鹿にしてるんで」

「やるか？ この大楼阁から一片の塵も残さず消し飛ばしてやる」

目の前に降り立ったのは、幼さが残る顔立ちの少女だった。黒髪をたなびかせ、大層豪華な雅な服装。背中が大きく開いた格好は、幼さの中に妖艶さを見出している。しかしその表情は牛魔王を侮辱されたことによる怒りに歪み、その手に生み出した金色の炎が瑛唄に向かって揺らめいていた。

一触即発。瑛唄の様な、出会いがしらに誰でも馬鹿にする様な手合いと、常時お堅い彼女の様な手合いは相性が悪い。あまり仲良くなれる様な性格ではないだろう。

「やめておけ、鵬魔王よ。おんしがやるにはそ奴はちと強過ぎる」

「……白夜王……それはどういう意味ですか？ こんな見知らぬ礼儀知らずに負ける私だとても？」

「そうだ。正直、おんしがそ奴に一撃でも入れられたら奇跡じゃ」

「……ふん、確かめてみれば分かることです」

「わはは、血気盛んなクソガキだな。白夜叉ちゃん、俺こいつ気に入ったわ」

「じゃったら私の顔を立って見逃してくれ。おんしに暴れられたら大楼阁が崩壊してしまおう」

瑛唄は白夜叉の言葉に笑う。そして白夜叉に鵬魔王と呼ばれた少女は、なんだか戦う雰囲気でも無い相手と白夜叉の言葉から、不満気ながら炎を消した。

彼女は鵬魔王。牛魔王と並ぶ七大妖王の一人だ。その金色の炎と人の姿を取ること

から、彼女の正体は大鵬たいほうこんじちよう金翅鳥、ガルーダとも呼ばれる最高位の神鳥である。牛魔王とは義兄妹であることから勿論仏門嫌い。

「まあやり合う気は更々ないけど、ウサギちゃんを見る眼は気に入らないな」

「……」

「まさかお前……所謂レズって奴か？ ウサギちゃんの身体は確かにナイスバディだけど、あまりなりふり構わずそういう趣味を振りまくのは止めた方が」

「誰がレズだ！ 例えそうだとしても仏門の畜生にそんな感情を抱くか!!」

「まあなんだ……そういう趣味でも俺は否定しないよ。うん、世間の目は厳しいだろうけど、頑張れ」

「待って、なんで貴様の中では私がレズで確定しているの？」

「……」

「黙らないで、まだ話は終わってない！」

「本題に入っても良いかの？」

「白夜王、このまま話を変えることは私の名誉に関わるわ！」

不名誉な扱いに憤慨する鵬魔王。琰嗷はもう何も言うなとばかりに慈悲の視線で鵬魔王を見ながら首を横に振り、白夜叉はどうどうと宥めながらも話は終わったんだと言い聞かせる。

黒ウサギも女性店員も、目の前の鵬魔王の正体を察して驚愕してはいるが、それ以上にそれを子供扱い、もとい変態扱いで手の平の上に乗がしている事の方がびつくりだった。確かに白夜叉の方が鵬魔王よりも格上ではあるが、この光景の中心はやっぱ瑛叟だ。

「さて、レズ魔王——じゃなかった、鵬魔王ちゃん。本題に入ろう。牛魔王何処よ」
「貴方は後でじっくり話をする必要があるわね……それと、長兄は不在よ」
「は？」

此処まで来て、牛魔王には会えないようだ。

暴くか暴かせないか

その頃、アンダーウッドでは狩猟祭が終了し、なじみのぶつちぎり一位という結果に多くの観客が湧いていた。

そして、それが終わった後の事。なじみとゲームの約束をしていた耀は飛鳥を連れてなじみの下へとやって来ていた。なじみはまるでずつとそこに居たかのような面持ちで、待ちくたびれた様な雰囲気、アンダーウッドの一喫茶店のテーブルに着いていた。狩猟祭が終わって、直ぐに姿を消したから何処へ行ったかと思えばこんな所に居たのかと耀と飛鳥は肩を落とす。瑛嗶の恋人というだけあって、その行動の突飛さとマイペーヌな所はそっくりだ。普通マイペーヌな性格同士ではお互いの我が強過ぎて反発してしまうものなのだが、何がどうなったのかこうしてこの二人は恋人という関係を築いている。ある意味、不思議なコンビだ。

耀と飛鳥がなじみに近づくと、なじみも二人の気配に気がついたようで、手にしていたメロンソーダ入りのコップを一気に飲み干した。そして、何も言わずにいつのまにか用意されていた二つの椅子へと二人を誘った。断る理由も無いので、耀と飛鳥は黙って席に着いた。

「さて、春日部ちゃんとはさつき自己紹介したからいいとして、君は初めましてだよね。僕の名前は安心院なじみ、親しみを込めて安心院さんと呼びなさい。改めて自己紹介させて貰うよ」

「ええ、私は久遠飛鳥、よろしく安心院さん」

「うんうん、素直にそう返してくれるのは僕としても好感が持てるよ。僕が以前いた世界ではまともな自己紹介が少なかったからね。自己紹介する時に中二臭い自己紹介する奴とか、大量殺人の現場の中でへらへら自己紹介する奴とか、どいつもこいつもインパクト重視でまともな奴なんか一人もいなかったからさ」

「どんな殺伐とした世界なのよ……」

苦笑しながら言うなじみに、飛鳥は若干引き気味に弱々しく突っ込んだ。

なじみは店員に二人の分の飲みものを注文すると、テーブルの上に両肘を着き、手を組んでその上に顎を乗せた。にこりと優しく微笑むと、それは見る者全てを魅了しそうなほどに綺麗で、それ以上に可愛かった。誰がどう見ても美人と言いい、綺麗と持て囃すであろうなじみには、どこか少女の様な可愛らしさがあった。

「さて、僕のギフトについてだったね」

「あ、はい」

「春日部さんが言うには、瞬間移動の様な力らしいわね」

「厳密に言えば、そう見えているってだけで僕の力の本質は別にあるんだ」

飛鳥と耀はその言葉でまた良く分からなくなる。瞬間移動に見えて、全く別の力。それならば、どんな力だというのだ。

「まあこの力の理解は客観的に見ることにじゃ掴めないからね。基本的に使う本人からの主観でないと良く分からないんだよ」

「な、なるほど……」

「それじゃあ、僕の力のヒントは此処までだね。そろそろゲームの話をしよう」

「あ、はい」

なじみが提案したゲームは、単純で簡単なゲームだった。

飛鳥と耀の勝利条件は、なじみの力の正体を暴くこと。つまり、なじみは力の正体を暴かれなければ勝利という訳だ。そしてその対決方法は、簡単。このアンダーウツドの収穫祭が終了するまでになじみの力を暴くだけ。何かする訳でも、何か賭ける訳でも、何か条件をクリアする訳でもない。ただ単に、どんな事をしてでもなじみの力の正体さえ暴けば勝利。それだけだ。

「どうかনা?」

「……それはつまり、安心院さんを攻撃して力を使わせるのもありなのよね?」

「勿論。付け加えると、僕は君達に一切危害を加えない」

「……随分と私達に有利なゲームじゃない？」

「僕はその筋じやかなり有名な平等な人格者でね、ゲームでもなんでもフェアに行なうのが僕のやり方なんだよ。だからこのゲームもフェアにやろうぜ？　これはその為の手加減だよ」

なじみの言葉に、二人はむっとなつた。問題児でなくとも、プライドの高い二人だ、こゝも舐められ挑発されれば気に食わない部分もあるのだろう。なじみはこうも易々と挑発に乗つて来る二人に対して、まだまだ青いなあと血氣盛んな若さに苦笑した。

とはいえ、なじみとしてはこれでもハンデが足りない気がしている。大体ヒントは与えたし、どんな手段を使つても良いとし、こちらからは手を出さない、なんて色々言つては見たものの、こちらの力にはなんの伝承も逸話も歴史もありはしないし、なじみは人間が生まれる、もしくは神々が生まれるずっと以前から生きているのだ、そこらへんから遡つて調べる事も出来ない。

完全に何も無い所から、なじみの力を探らねばならないとなれば、かなりの難易度だろうと考えていた。

「やるかい？」

「やる」

「当然よ」

「だと思つたよ」

もはややる気満々の二人は、なじみの問いに即答。またもなじみから苦笑が漏れた。「それじゃ、君達のやる気に免じてこれだけは言っておこうかな」

「？」

「何？」

「僕の力は瞬間移動じゃない。というか、移動系の能力じゃあないよ。それだけは絶対だ」

なじみはそう言つて、またにっこりと誰もが身惚れる様な綺麗さで、可愛く笑つた。

蛟劉

それから、鵬魔王との邂逅からしばらく。こちらの用件であるところの、『白夜叉の後継者として牛魔王を推薦したい』という話を話した瑛叡達だが、先程の通りここに牛魔王は不在であった。だが、かの牛魔王はこのことを察知していたのか、白夜叉宛てに手紙を残していた。内容は短く、

『南の大樹にて後継の芽在り。心躍らせて参加すべし』

というもの。南の大樹、つまりはアンダーウッドの水樹のことだ。牛魔王は自分以外にも後継者足る實力を持つ存在がいると告げているのだ。白夜叉はそれを読んで、かんらんかんらんと楽しげに笑った。牛魔王はどうやら悪知恵に長けた存在であるらしく、それがまだまだ現役であることが面白かったらしい。平天大聖とは、天を平定せし者、という意味である。つまり、力によつて従わないものを圧倒して平和をもたらす者。それが牛魔王。

平和を齎す事に力を用いる、というのは些か物騒ではあるものの、この予言の様な手

紙もその力の一端であるのだろう。

とはいえ、そういう事情もあり、最早此処に用は無くなった……もつと言えばアンダーウツドに用が出来た白夜叉達は大楼閣を発つ事となった。発つ、というか瑛叟の反転の力で大楼閣とアンダーウツドの座標を演算し、反対座標と定めて瑛叟達の位置座標を反転すれば一瞬で辿り着くので、発つたと同時に到着したとも言える。

なので現在、白夜叉達はアンダーウツドに戻って来ていた。といっても、白夜叉は後継者探し及び収穫祭のギフトゲームの主催関連で業務へ、女性店員も同様に自分の仕事に戻ったので、このアンダーウツドの入り口には瑛叟と黒ウサギしか残っていない。

「やつと解放されたのですよ……」

「大分お疲れだな、ウサギちゃん」

「あ、はい。でも耀さん達と一緒に『ヒツポカンプの騎手』に出る予定ですし、まだまだへこたれては居られませんよ!」

「そいつは重畳。まあヒツプホップジャンプのお手付きだかなんだか知らないけど、負けたら拠点荒らすからね」

「ええええええ!!? それはちよつとリスク高すぎでございます!」

「知らん、死ぬ気でやれや」

「超理不尽!!」

そんな会話をしながら、瑛噺と黒ウサギは受付へと辿り着く。受け付けに座っていたのは、木霊のキリノ。彼女も黒ウサギと瑛噺の姿を見て、歓迎のスマイルを少女らしく浮かべた。

「ノーネームの「エロ」ウサギです。主賓室へ——つて誰がエロウサギですか!」

「え? 今俺何も言っていないけど」

「あれ? そうなのですか? じゃあ誰が……」

「ま、置いといて……ノーネームの瑛噺とエロウサギだ。主賓室へ通してくれるか?」

「やっぱり瑛噺さんじゃないですか!!」

キリノが苦笑いしている前で、瑛噺の後頭部を黒ウサギがハリセンで叩いた。スパーンと良い音が鳴るが、瑛噺は全く意に介していない。ノーダメージで話を続けた。

「で、このエロウサギのエロい話を聞かせてあげよう。何とこの発情兔、夢の中で俺に——」

「わああああああ!!! 何を話そうとしているのでございますか!! しかもなんで知っ

て!?!」

「え、マジで俺に色々やられた夢見たの? ちょっと引くわー」

「確信的偶然の一致!! タイミング良過ぎにも程があります!!」

「だってさ、お嬢ちゃん。このウサギ、さつき同性愛者の魔王に舌舐めずりで狙われたか

ら少女だろうと容赦なく押し倒すと思う。気を付けてくれ」

「瑛嗶さんさつきから黒ウサギの事を貶めすぎです！ このままでは私の威厳が！」

「無いに等しいだろそんなもん」

「そうですね」

「瑛嗶さんはともかくキリノさんまで?！」

黒ウサギは崩れ落ちた。瑛嗶はゆらりと笑って今度こそ真面目に受付を済ませる。キリノの話によると、どうやらノーネームのメンバーはそれぞれ思い思いに出掛けているらしい。なじみと耀、飛鳥は共に収穫祭へ、十六夜は地下書庫へ、ジンは御供をつれて『六本傷』の代表と会合へ、リリやその他年長組は開会式のお手伝い、等々様々だ。

というわけで、瑛嗶は崩れ落ちて体育座りになって落ち込む黒ウサギを体育座りまま抱えあげ、とりあえず十六夜と合流して見ることにした。一番手近であるし、巨龍討伐の際の報酬についてもまだ話を聞いていない。黒ウサギに聞いても良いのだが……

「最近の黒ウサギの権威はどこへいったのでしょうか……最近では皆様黒ウサギの身体をエロいだのなんだの言つて、いやらしいコスプレをさせようとするわ、いきなりボディタッチしてくるわ……黒ウサギの事も考えて欲しいです……そもそも白夜叉様がこんな服を着せるから十六夜さん達にもそういうイメージを植え付けてしまったのです……瑛嗶さんだって会うたび黒ウサギの事をからかって……挙句夢の中にまで出てく

る始末……本当に性質が悪いのでございます……確かに、夢の件は黒ウサギが勝手に見たことで瑛唄さんに責任は無いかも知れませんが……それでも夢に出てくるくらい日常的に黒ウサギのことを……その……下ネタでからかっているということであつて……少しは反省を……ぶつぶつ……」

凄く面倒臭いことになつてるので却下。キリノは体育座りのまま黒ウサギを担ぐという瑛唄の器用で微妙に凄い技に目を丸くしながらも、地下書庫へ案内する為の手続きを始める。

「あ」

「ん、どうした？」

「い、いえ……地下書庫に向かうには水路を通るので渡し船を使うのですが……水先案内人が必要なのです……けれど収穫祭で現在人手が……」

「なるほど……どうしたものかな」

瑛唄は黒ウサギを片手で持ちつつ、もう一方の手を顎に当てて少し考える。別に案内人がいなくても瑛唄なら勘で辿り着けそうなものの、何もヒントが無い状態で複雑な水路を進むのは少し気が引けた。時間の無駄っぽくて。

「なんや、それなら僕がやろうか？」

とそこへ、少し関西訛りな男の声が掛かった。瑛唄はその声の主の方へと視線を移動

させる。

そこにいたのは、瑛嗶と同じ位の背の高さで、顔には無骨な眼帯、瑛嗶の青黒い瞳とは違つて綺麗な青い瞳を持ち、厚手のインナーの上に着物を崩して着ている。下には白いズボンを履き、膝下ほどのブーツを履いていた。純和風な瑛嗶とは違つて、和風に洋風のアレンジを加えたハイブリッドな服装だった。

だが、それ以上に瑛嗶の眼を惹いたのは、その佇まいと雰囲気。柔らかな雰囲気と細身な身体ではあるものの、その足捌きと動作には無駄が無く、インナーの上からでも壮絶な修練の末に引き締められた肉体が垣間見えている。何より、それだけの強さを感じさせる佇まいであるのにもかかわらず、自身の覇気を自然体で完全に抑え込めていた。

「こ、蛟劉様……よろしいのですか？ 貴方は『龍角ドラコを持つ驚獅子グライフ』の賓客ですのに……無理に仕事をしなくても」

「ええよええよ、困った時はお互い様や……それに、僕としても少し興味あるんや、この男に」

困った様に言うキリノの頭を撫でながら、柔らかい雰囲気はそのままに鋭い眼光で瑛嗶を見てそう言う蛟劉と呼ばれた男。瑛嗶はその視線を意に介さず、普通に受け流した。

「どうも初めまして、ノーネームの御二方。僕は蛟劉と言います、姓は特にない風来人な

んで、お好きにお呼びください」

蛟劉という男は、胡散臭くも丁寧にお辞儀をしながらそう言った。黒ウサギはまだ回復していないが、挨拶されたとあれば返さねばなるまいと、瑛嗶もまた口を開いた。

「どうも初めまして、ノーネームの瑛嗶だ。呼び捨てで構わないよ、好きに呼んで良いならあだ名でも付けて良い？」

「お好きにどうぞ」

『りゅいりゅい☆』でいこう」

「蛟劉でよろしゅう頼むわ」

瑛嗶のあだ名のネーミングセンスはやはり認められないようだ。

瑛嗶×蛟劉

蛟劉という男は、名前だけを名乗って何者なのかを教えはしなかったが、それでも瑛嗶と黒ウサギを十六夜のいる地下書庫へと連れていく仕事を快く受け入れ、そしてそれを実行した。水路をすいすいと軽快に進む渡し船を操り、アンダーウツドの水樹の下に作られた書庫へと案内した。

地下という密閉された日の届かない空間は、紙という素材で出来た本に対して本来適切ではない処置であるが、それでも尚そこを書庫としたのは理由がある。アンダーウツドの水樹の根が大気中の水分を吸収し、乾燥した空間——ドライルーム——を作り出すのだ。だからこそ、こんな場所に書庫を作ることが出来たという訳だ。

その書庫に辿り着いた黒ウサギと瑛嗶は、その空間と書庫の関係性を理解し、少しかかり感嘆の声を上げる。ただ乾燥した空気が扉を開けた瞬間に溢れ出たことで、若干咳き込んだ。本にとつては良い環境かもしれないが、生物にとつてはあまり快適とは言えないようだ。

「それじゃウサギちゃん、十六夜ちゃんによろしく」

「え、瑛嗶さんは行かないんですか？」

「俺は十六夜ちゃんに会って話したい事もないし、正直このりゅいりゅい☆と話していた方が面白そうだ」

「蛟劉やって」

「そ、そうですか……それでは私は十六夜さんに会ってきますね」

「いつてらっしやい」

「ほなな」

黒ウサギは瑛唄と蛟劉に軽く会釈して踵を返し、書庫へと入っていった。そしてその背中が見えなくなる前に、書庫の扉が閉まる。扉が閉まる音が響いた後には、水路に流れる水の音だけが響き渡る。扉の両端、壁に寄り掛かる様にして黒ウサギ達を待つことになった瑛唄と蛟劉は無言だった。ちよつとした雑談位はしたいと思っっている二人ではあるものの、共通の話題もなく、どうしたものかと考えているのだった。

「……」

「……」

瑛唄にしては、また風来人で気さくな雰囲気、蛟劉にしては、珍しく気まずい雰囲気である。互いに高い実力を持ち、そして気楽な性分だからだろうか。

「……………なあ」

切り出したのは、瑛唄だった。短い呼び掛けに蛟劉が視線を超越す。

「お前、収穫祭には出ないのか？」

「……そやなあ……僕は風来人やから、自由気儘に箱庭を彷徨ってるだけ。今の所そんな気分では無いな」

「そうかい、まあ俺も巨龍を一人で抑え込んでいたのを見られたのか、ここでもゲーム参加拒否をくらつちやつたし……仮にお前がゲームに参加したとしても無駄か……」

瑛嗶と蛟劉、理由は違えど二人はゲームに参加しない。お互い、そのことを知って苦笑した。気まずい空気はそんな会話でどうにか払拭出来たようだ。

すると、蛟劉は胡散臭い笑みを浮かべながら、瑛嗶に更なる話題を投げかける。

「とはいえ……君、物凄く強いやろ？ それこそ、僕以上に」

「何の話だ？」

瑛嗶は分かりやすくとぼけてみせた。蛟劉はそんな瑛嗶に、くつくつと喉を鳴らす様に笑う。

「とぼけんでええよ。大方、僕の実力には大体気がついてるんやろ？ お互い、腹割って話そうやないか」

「まあ、それもそうか。秘密にしておく理由も無いし」

「せやろ？」

「だが断る」

「なんでやねん」

楽しそうに紡がれる流暢な関西弁が、瑛嗶のボケにテンポ良く挟まれる。お互いにやりやすそうな様子の瑛嗶と蛟劉は、その会話の節々で探り合いをする。

「お前が胡散臭いからだよ、りゅいりゅい☆」

「蛟劉や……まあその通り、よう言われるわ——なら、少しだけ僕の正体について教えてたる」

「へえ……」

蛟劉が思わせぶりにやりと笑う。どうやら彼の正体はこの箱庭において中々高位の存在らしい。それだけの驚愕を用意しているような表情だった。

「僕の名前は蛟劉、その正体は」

「覆海大聖の蛟魔王？」

「なんで知つとんねん」

「勘」

「勘で人のサプライズ台無しにするか普通？」

だがそのサプライズは瑛嗶の鋭すぎる勘が阻止した。

さらりと述べられた彼の正体、覆海大聖の蛟魔王——つまりは海を覆いし者。七大妖王の第三席に名前を連ねる、先の話に出て来た牛魔王と並ぶ実力の持ち主である。記

述はほとんどないが、西遊記にも出てくる伝説の妖怪の一人。強いと感じさせる訳だ、と瑛嗶は内心納得していた。

「まあそういう訳や、これで対価にならんか？」

「別にそんなネタバレしなくても教えたけどね」

「えー……僕だけ損してるやん」

「そういう性分なんだよ、俺は」

瑛嗶はクスリと笑い、それじゃあ次は此方の番、と一息置く。そして、今度は自分のことについて話し始めた。

「俺は神話とか歴史とかそういうった文献に載る様な大層な人物じゃないよ。ただ単に異世界で世界最強になったらしく、暇していた時にこの箱庭に呼ばれただけだからねえ」

「そうなんか？」

「ああ」

「ふーん……となると、前いた世界が特殊な環境やったんやな」

「ま、特殊っちゃ特殊だったな。個性的な奴らばっかいたし」

思い出す様にそう言う瑛嗶。蛟劉はそんな瑛嗶とは裏腹に、瑛嗶の前いた世界がどんなに過酷であるかを思い浮かべていた。なんとなく、二人の頭の中の空気の差が激しい。お互い会話しやすい相手ではあるものの、その会話のテンションには大きな違いが

あつた。

とそこで、書庫の扉の向こうから大きな音がした。そう、例えるのなら大きなハリセ
ンで人の頭を思いつきり叩いた様な、そんな音が。

お友達

瑛嗶と蛟劉は、書庫の中から聞こえて来た音に目を丸くしながらも次の瞬間には苦笑を浮かべた。中から黒ウサギの十六夜を糾弾する様な声が聞こえてきたからだ。大方、十六夜が黒ウサギをからかっていつも通りに騒いでいるのだろう。

そしてその声からしばらくすると、瑛嗶と蛟劉に挟まれていた扉が音を立てて開いた。そして中から出て来たのは、先程の騒ぎ声の主である黒ウサギと十六夜。二人は瑛嗶と蛟劉の姿に気が付くと、黒ウサギは普通だったが十六夜は少し驚いた様な顔を浮かべた。

「なんだ、瑛嗶も来てたのかよ」

「ああ、ウサギちゃんと一緒に居たからね。ついでだから付いてきたんだよ」

「ふーん……で、そっちの奴は誰だ？」

十六夜は納得したとばかりに興味なさげな声を上げると、視線を蛟劉に移動させてそう聞いた。

当の蛟劉にもその問いは聞こえていたようで、瑛嗶に目配せをする。そして瑛嗶が軽く頷くのを確認した後、社交辞令とばかりに軽く会釈する。

「どうも、僕は蛟劉って言います。どうぞよろしゅう」

「ふーん……胡散臭い笑顔だな」

「ハハハッ！ ……さつき瑛嘎にもそう言われたわ。まあそういう性分で、堪忍したつてや」

ケラケラと乾いた笑い声をあげて、蛟劉はそう言った。黒ウサギとしては、『ドラコングライフ龍角を持つ驚獅子』の賓客である蛟劉に対して十六夜の言葉は失礼だ、と内心穏やかでは無かったものの、蛟劉のおおらかな性格は十六夜の言葉を軽く受け流した。どうやら、自分がいない間に瑛嘎も十六夜と同じことを言ったらしい、と黒ウサギはガクツと肩を落とした。

「……お前はギフトゲームに」

「出ないってさ」

「……その実力なら」

「引く手数どころか風来人ブー太郎だよ」

「………悪いことを聞いたな」

「ちよお待つてくれる？ たったの五行で僕貶されすぎやろ」

蛟劉が手を前に出して突つ込んだ。十六夜の問いを先回りして答えつつ、蛟劉の立ち位置をどん底まで叩き落す瑛嘎の手腕に、思わず舌を巻く。蛟劉は誤解を解こうとする

でもなく、前に出した手を下ろして溜め息を吐いた。

「これはとんだ狸やなあ……」

「化かす、じゃなくて馬鹿にする、だけどな」

「違うない」

ケラケラと笑う蛟劉に、瑛嗶はゆらゆらと笑う。その二人の姿に、黒ウサギは少しだけ驚いた。いつのまにこんな軽口を言う様な関係になったのかとちよつと首を傾げる。

「さて、それじゃ十六夜ちゃんも来た事だし……行きますか」

「せやな」

瑛嗶と蛟劉が話を一区切り終えて、停めてある渡し船向かって歩き出す。十六夜はそれに一步遅れて歩きだし、黒ウサギがその後ろを慌てて付いて行つた。



一方その頃。

瑛嗶達が地下水路を移動している頃。なじみと飛鳥と耀の女性陣三人組は、自分達が賭けごとの様に始めたギフトゲームのことは一旦置いておいて、収穫祭で出展している様々な屋台や展示物を物色していた。その光景は傍目からすれば姦しく、また美少女揃

いの三人組故に、嫌でも周囲の眼を惹いた。また、三人ともそれぞれ美しいのベクトルが違う。飛鳥は気丈で高貴な印象を、耀は寡黙かつどこか温かい印象を、そしてなじみは少女というよりは女性らしさを持ちながらも、可愛らしい少女の様な印象を受けた。

そんな三人が、楽しげに歩いている。

「それにしても、この世界は面白いね。あの瑛嗶が思いつきり暴れられる世界なんて思いましなかつたよ」

「といつても、瑛嗶さんに暴れられたら困るのは変わらないけどね」

「ああ……飛鳥は瑛嗶さんに師事を受けたんだっけ？」

「ええ……死にかけたわ」

「でも死なせはしなかつたんだろう？」

「う……まあそうだけど」

「なら良かったじゃないか」

おかしそうに笑いながらそう言うなじみ。飛鳥も耀も、瑛嗶の行動にそこまで寛容でいられるのはアンタだけだと内心想った。といつても表面には出さずに愛想笑いを浮かべるのだが。

「瑛嗶は子供っぽいけど、その実結構色々考えているんだ。そういつたことをする時に無駄なことはいさ」

「そう……かしら」

「ま、大いにふぎけるのは瑛嗶の美点であり、欠点でもあるんだけどさ」

やれやれ、と首を振ってそう言うなじみ。飛鳥と耀は、彼女が瑛嗶の恋人であることを知っているが故に、これは惚気なのか？ と思った。だとすれば、随分と分かり辛い惚気だ。

「さて……そろそろ僕は瑛嗶の所へ行くとするよ」

「え？」

「それじゃ、またね」

そういうと、なじみはふつと姿を消し、その場を離れた。

気が付けば何処かへ行っているなじみのそのギフト。耀と飛鳥はまたしても垣間見たギフトをそれぞれ考える。どういう力で、どういう性質のものなのか。

「飛鳥……分かった？」

「……移動系じゃない、ってことは姿を消すギフトっていうのはどうかしら？ 確かペルセウス戦でレイオス達がそういうギフトを持っていたわよね？」

「うん……確かハデスの兜だったかな？ でも、安心院さんは何も被って無かったよ？」
「一番最初に生まれた生物って言うんだったらそれくらい生身一つでやってのけそうじゃない？」

「……………それもそうかも」

とりあえず、現段階ではその能力が一番筋が通っていると思う二人。さしあたってはこの解答で一度なじみに答え合わせを試してみようと決めたのだった。

なじみの力

書庫から出た四人は、それぞれバラバラに別れる事になった。十六夜と黒ウサギの二人と、瑛嗶と蛟劉の二人という組み分けだ。理由としては、瑛嗶と蛟劉、お互いにもう少し気ままな話をしてみたいと思ったからだ。

というわけで、現在ノーネームの面々から離れて蛟劉と共に収穫祭をのんのんぶらりと散策している瑛嗶。会話もそこそこに、収穫祭を楽しんでいた。

「そういえば、瑛嗶はノーネームの少年らと一緒に居なくてええの？」

「ん、まあ普段は結構別行動が多いんだよ。元々ノーネーム復興を頑張ってるのは十六夜ちゃん達であって俺じゃないからね」

「それでええんか、最高戦力やろ君」

「最高戦力は温存しとこう的な？」

「その割りには巨龍豪快にぶっ飛ばしとったけどな」

「テンション上がっちゃった」

「なんちゆうマイペースや……」

そんな会話をしながらも街中を歩く瑛嗶と蛟劉。その佇まいは周囲の視線を、なじみ

たちが歩いている時とは別の魅力で集めていた。

一種のカリスマ性とそれなりに整った容姿を持ち、その歩みにブレも無い。覇気の溢れ出ている瑛嗶と完全に隠している蛟劉の二人だ。ベクトルは違ってもその魅力はやはり人を惹き付けるのだろう。

「話変わるけど、やっぱり収穫祭には色んな幻獣が仰山居るなあ」

「まあ『龍角ドラコ・グを持つ驚獅子ライフ』連盟の開催する祭だしな。名前通り幻獣にも通じてるんだろ」

「せやけど、こんなに幻獣が多く見れる祭は早々拝めるものやない」

「ふーん、そんなに珍しいものか……どいつも腹に入れば一緒だと思っただけだな」

「食う気かお前!？」

瑛嗶の何気ない言葉にツッコむ蛟劉。瑛嗶にとっては幻獣も家畜もあまり差は無いのだろう。故に、幻獣が食卓に並んだとしてもなんら疑問を抱かずに食べるつもりだ。元々、なじみがぶつちぎった狩猟祭では殺人種であるペリュドン等の幻獣がゲーム感覚で狩猟されていたのだから、そう思うのも無理は無いだろう。

「それに……どうやらノーネームと幻獣は結構関わり深いみたいだし」

「? どういうことや?」

「俺は結構気配とか感情の起伏とかに鋭いんだけど……どうやらそのノーネームの少年

「たちが一悶着起こしてゐるらしい」

「分かるんか？」

蛟劉が瑛唄の言葉に周囲を見渡してみるが、そんな騒ぎはどこにも見当たらない。だが、瑛唄の表情と口調からして、嘘を衝いている様には思えなかつた。疑いの表情を浮かべながら、蛟劉は瑛唄を見る。その視線に気がついた瑛唄は、苦笑しながら、えーとと呟く。

そして、ふと何かに気がついたのか小さく言った。

「なじみー」

恐らくは名前だろう、と蛟劉がその意図を聞こうとしたその時、

「呼んだ？」

「うわつ、なんやこの嬢ちゃん」

呼んだ通りの人物が何の気配も無く、いきなり現れた。安心院なじみ、瑛唄の恋人にして原初の生物である。

「ああ、これ俺の恋人。形式的には籍入れてないけど結婚してるよ。義理だけ子供もいるよ」

「なんや妻子持ちかいな、意外やな」

「まあ、いいだろ。で、なじみ、耀ちゃん達の状況とか分かる？」

「うん、分かるよ。どうやらノーネームを馬鹿にした有翼人種のヒツポグリフとかいう器の小さい奴と喧嘩になったみたい。耀ちやんを中心に一触即発の状態だよ」
 「ヒツポグリフで……それ多分『二翼』の長やないか？ 今のアンダーウッドで旗無しを馬鹿にする奴はそいつくらいやろ」

なじみの齎した情報に、蛟劉がそう相槌を打つ。というかこの三人が話しあっている状況、全員を知っている者からすればさぞ奇妙に見えたことだろう。

とはいえ、巨龍を退けた功績を持つノーネームと『龍角ドラを持つ驚獅子ライフ』連盟の一つが騒ぎを起こすのは少し面倒なことになりそうだ。嗚、蛟劉、なじみの三人は、取り敢えずそれを止めるべく現場に向かうことにした。

「でも此処から近いんか？ 一触即発ならもう一悶着起きても仕方な——」
 刹那。

蛟劉の言葉を遮る様に、ズガンツ、という音が聞こえて来た。

その音の方へ視線を向けると、何やらヒツポグリフっぽい生物が200m位上空に吹き飛んで行くのが見えた。

「あー……もう起こってるな」

「どないすんの？」

「それじゃあ僕のギフトを使おう。それなら絶対に間に合うし」

その言葉に、蛟劉が首を傾げるが、瑛嗶が頷くのを見たなじみは躊躇なくそのギフトを発動させた。飛鳥と耀が必死になってその正体を探っている力を。指を軽く鳴らし、その音が残響を残している内に――

――世界が静止した。

人の歩みが一齐に静止した。肉が焼いて出た煙が静止した。水の流れが静止した。人の声が静止した。空を飛ぶ生物が静止した。開催中のギフトゲームが静止した。瑛嗶達三人を除いて、全ての『時間』が、静止した。

これが、最初で平等の人外……安心院なじみの選んだ二つのギフトの内の一つ

――時を止めるギフト 『マイフエイパレットタイム私 時 針』

自分と自分が選択した者以外の全ての時間を停めるギフト。それがなじみのギフトの正体。確かにこれならば、耀達の起こした騒ぎを止める為に遅れることなく現場に向かうことが出来るだろう。なにせ、事態が進まない世界で自分達だけが動くことが出来るのだから。

「こりやあ……えらいギフトやな……!」

「なんだ、このギフトにしたのか」

「うん、僕が攻撃系のギフトを持つことに必要性を感じなかったからね」

金髪君や飛鳥ちゃんに耀ちゃん、瑛唄もいるからね、と妙に納得出来ることを言っただよ。なじみはにこりと笑う。

瑛唄と蛟劉はそんななじみに対して、確かにそうかもしれないと普通に納得した。

「というか、このギフトはいつまで停めてられるんや?」

「うん? 君は誰かな?」

「ああ、自己紹介が遅れたな……僕は蛟劉と言います、どうぞよろしく」

「そうかい。僕の名前は安心院なじみ、親しみを込めて安心院さんと呼びなさい」

「そうさせてもらうわ」

「それで、質問の答えだけ……まあ試したことは無いけどずっとじゃないかな?」

予想外に規格外なギフトだった。ずっと時間を停めてられるなどどんなチートだ。

「とはいえ、時間を停めている間は僕が直接干渉しない限り、静止しているものに干渉できないからね。例えば瑛唄が全力でそこらへんの人に石を投げつけてもノーダメージだよ」

「裏を返せば静止している存在は安心院ちゃんに触れられない限り動けないっちゃうこ

とやな」

「そういうことになるね、とはいえこの世界のギフトの効果は靈格に準じるようだから、僕よりも存在としての格が上ならきつと動けると思うよ」

そうは言うものの、そんな存在がこの箱庭にどれ程いるだろうか。いるとしてもそれはきつと三桁以上の外門にしかないだろう。なじみは何かしらの偉業を立てた訳でもなく、なにかしらの伝記や資料に乗る様な事もしていないが、6兆年を生きた生物としての高い靈格を持つので実質最強とっていいだろう。

「じゃ、子供達の喧嘩を止めに行こうか」

「そういうと微笑ましいんやけどな」

「違うない」

そう言いながら、三人は止まった時間の中のんびりと動きだした。

喧嘩の仲裁

しばらく歩いていくと、幸いにもまだ全面戦闘には至っていない耀達とヒツポグリフ達の対峙している光景が、瑛嗶の前に姿を現した。だが、これはまだなじみによる時間停止が行なわれている結果であり、なじみが一度時間の流れを再開させればすぐにも耀が拳を握って殴りかかることだろう。

だが、こうして全員が全員同じ様に止まっているのを見ると、なんだが異様な面白さがある。状況的には一触即発、誰しもが敵意を持って相手を睨みつけているシーンではあるのだが、動かなければ怖くもなんともないのだ。時間を制する者の特権である。

「うーん、こうしてみると色々悪戯出来そうだよなあ……蛟劉、そのフランクフルトの屋台からマスタード取って」

「なんや、りゅいりゅい☆言うんは止めたんか——はいよ」

瑛嗶の言葉に蛟劉は色々突っ込みたくなかったが、放置して素直にマスタードを投げ渡す。

瑛嗶は投げ渡されたマスタードをキャッチすると、耀の鼻の穴に大量にマスタードをぶちこんだ。そして、ついでとばかりに耀と対峙しているヒツポグリフの大きく開いた

口に、マスタードを大量にぶち込む。結果的にマスタードが空になってしまったが、まあ仕方のないことだろうと瑛噺は元の屋台へ戻した。

「さて」

「さてやないよ、なにしてんねん」

「喧嘩を仲裁するんだよ」

「仲裁やないよ、寧ろ裁きを下してるやん」

そう言いながらも、蛟劉は蛟劉で楽しんでいるようだ。苦笑の表情の中に爛々と楽しいな雰囲気がかんがれていた。

と、そこになじみから言葉が掛かる。

「そろそろ解除してもいいかな?」

「ああ、ちよつと待ってくれ」

なじみの言葉に、瑛噺は蛟劉と共に邪魔にならない場所へと移動する。場所は、騒動を起こしている両陣営が見える位置だ。そして瑛噺がなじみに対して頷き、それを見たなじみがクスツと笑いながら再度指を鳴らす。すると、止まっていた時間が動きだす。

今にも殴り掛かりそうだった耀も、それに対して反撃をしようとしていたヒツポグリフも、力強く前へ踏み込んで――

「ぶぎゆるああああ?!?!?!」

マスタードの刺激に叫びながら倒れた。

辺りが騒然とする。それもそうだ、いきなり騒動の中心の二人が顔を真っ黄色に染めて倒れたのだ、驚愕の表情を浮かべるのは仕方のないことだろう。一緒にいた飛鳥と部下のヒツポグリフがそれぞれの味方に駆けよっていく。

「だ、大丈夫!?! 春日部さん!?!」

「うぐぐぐぐぐぐつぐううう!!?!」

「無事ですか!?! グリフィス様!!?!」

「うおおおおおうううぐぐう!?!」

悶え苦しむ両陣営の二人。瑛噎はそれを見て、爆笑する。

「あつはつはつはつは!! 見た? 傑作……くくく……耀ちゃんなんか、鼻からマスタード噴き出したぜ……ぶふつ……つははははははつ!!」

「そんなに笑ったら……ぶふつ……あかんで……くくく」

「君も笑ってるじゃないk……っっ!」

「お前もな」

そして、つられるように蛟劉もなじみも笑いを隠せずに行った。

そんな風にただでさえ目立つ三人が大爆笑していたら、嫌でもこの状況の犯人が誰かなんて子供でも分かる。その場にいた全員の視線が瑛叟達に向けられ、またその被害を受けた当事者である耀とヒツポグリフのグリフィスが恨みがましい視線を向けて来た。

「何者だ！ 貴様らッ!!」

グリフィスと呼ばれたヒツポグリフの口元に飛び散ったマスタードを拭いながら、部下であろうヒツポグリフが怒声を浴びせてくる。耀は瑛叟の仕業と知って少しは落ち着いたようだが、その怒声には賛成の様で、未だに刺激によって滲む涙を隠せずに睨みつけて来ている。

対して、瑛叟はその怒声に対してきよとんとしながら口を開いた。

「いやいや、いきなりなんだよ。俺達はここでちよつと笑ってただけじゃん。何もしてないよ」

「いやいやその良い分には無理があるでしょ」

「でもだよ飛鳥ちゃん、俺達がやった証拠がどこにある？ 寧ろマスタードを所有しているそのフランクフルトの屋台のねーちゃんの方が怪しいんじゃない？」

「えっ!」

飛鳥にじとつとした瞳を向けられたが、瑛叟の切り返しによって皆の疑いの視線がフランクフルトの屋台に立つ少女に向けられた。そして、その視線を受けた少女はいきな

り矛先が向けられたことで身体を震わせる。

そのままじーっと全員が少女を見ていたが、時間が経つに連れてぶるぶると震え始めた少女を見て、マスタードを気が付かれずに耀達にぶち込む事など出来そうにないと結論付ける。

視線が瑛嗶達に戻った。

「まああの子には無理だよねー」

「分かりきった結論をどうもありがとう」

瑛嗶がへらへら笑ってそう言っていると、飛鳥はため息交じりにそう言った。やはりやったのは瑛嗶達だろうと確信する飛鳥。そしてそれは耀もヒツポグリフ達も同じ様で、その怒りの矛先は瑛嗶へと向かった。なじみと蛟劉がその矛先から逃れたのは、単に瑛嗶が一番むかつく対応をしているからだだろう。

「ゴメン……瑛嗶さん、一回で良いから、本当に一回で良いから……殴らせて、くれない？」

ぐしゅぐしゅとマスタードの刺激によつて溢れ出る涙を拭いながら、それでもぶるぶると拳を震わせてそう言う耀。大人しく殴られてくれないとまともに直撃させることすら出来ない相手だ、やはりそう頼むしかないだろう。

だが、耀達の予想とは相反して瑛嗶の答えは、

「別に良いけど」

そんなものだった。思わず「え？」と聞き返してしまふ返答に、耀は呆然とする。

「やる？ いいよー殴ってみなよ。対して痛くないし、全力で良いよ？」

瑛嗶がゆらりと立ちあがり、口端を吊り上げながらそう言う。何とも言えない威圧感が溢れ出ている。本当に殴っても良いのかと考えてしまう程だ。少し考えた結果、耀は

「……………やめとく」

素直に危険は冒さないことにした。

「あっさり引いたわね、春日部さん……………」

「これは逃げじゃないよ、戦略的撤退……………」

自分に言い聞かせるように、耀はマスタードを拭いながら身を引いた。

だが、ヒツポグリフ達はそうではなかったようで、怒り心頭、怒髪天を衝くとばかりに顔を真っ赤にしながら瑛嗶に迫ってきた。元々は馬の身体に驚の翼と頭を持つ幻獣であるが、現在は何かしらの術で人型に変身している様だ。故にヒツポグリフでありながらも今は持っている人間の拳を、瑛嗶に向けてきていた。

「貴様あああああ!!」

「ん？ ああ、なんだ……………ただの鳥か」

「んなあああああ!!」

だが、その拳は瑛嘎に届かない。瑛嘎は片手でその拳を捉え、その力を利用してくりりと回す。ヒップグリップの視界が一回転し、気が付けば地面と空が反転し、倒れていた。「お前さんもマスタードが欲しいのか？」

「っ!？」

上から見下ろしながらそう言う瑛嘎、ヒップグリップの部下はその聞けば拍子抜けな言葉の内容に反して、瑛嘎の青黒い瞳から覗く威圧感が、二の句を出させない。

結局、喧嘩をしていた両陣営共に瑛嘎の悪戯によって止まったのだった。

この世界の幼女はなア!

瑛嗶による制裁——いや仲裁が入ってから、状況は少しだけ落ちついた。荒々しく憤慨していたヒツポグリフ達も、下手に動けば瑛嗶による肅清が入ると理解したらしく、今は耀達を睨みつけるだけにとどまっている。瑛嗶がストッパーになったことで、話し合いが出来るくらいには両陣共落ちついたようだ。

そうなれば、後は制裁でなく本当の意味で仲裁を行なえば良い。ここで前に出たのは蛟劉だ。覆海大聖である高位の魔王ならば、この状況を上手く収める事も出来るだろう。

「で、何が原因なんや?」

まず彼が聞いたのはそれだ。原因を探らねば解決のしようも無い。

そしてその問いに、お互いが牽制し合いながらも両陣営から大体の事情が説明される。瑛嗶からみて、第三者的な観点からその光景はまるで、自分が知ってる、と話したくて仕方が無い幼児達のようにだった。もしくは自分の知識をひけらかしたいちよつと陰険な性格のオタクか。

とりあえずそれらの話を纏めると、事の顛末は要約してこうだ。

ノーネームのメンバー……主に耀が大食いゲーム的な催しで物凄い勢いの喰らい付きを見せていたところに、ヒツポグリフの二人がやってきて陰口を叩いた。だがそれを売り子をやっていたりリリが聞いてしまい、その発言に怒ったりリリがその言葉の訂正を要求したのだ。

だがノーネームに下げる頭など無いと大声でその要求を一蹴した。それにカチンときた耀が参戦。更に、どうやらそのヒツポグリフ達がノーネームだけでなくサラを侮辱したらしく、怒りを募らせた耀が訂正を要求し、拒否したヒツポグリフを上空200mまで殴り飛ばしたとのこと。これは瑛噺達も遠目で見たから知っている。

そして地面に降り立ったヒツポグリフが怒り、耀もなんら怒りが収まらず、まさしく一触即発といった様子で衝突する——瞬間で瑛噺の制裁……仲裁が入ったというわけだ。

「ふむ……そらまあ、色々考えなあかん要素はあるけど……とりあえずヒツポグリフの二人は行き過ぎた侮辱ではあるものの、名無しの君らは過剰防衛や」

「だろうな」

「なっ……なんでよ!?!」

「ええか、確かにコイツらの君らへの侮辱は許されへん、正式な場でちゃんした謝罪をすべきところや。が、それでも決闘でも何でもない状況で相手に拳を振るうのはあか

ん。それはただの暴力や」

蛟劉の言い分は、正しかった。故に、耀達は反論も出来なかった。納得は出来なかったが、理解する事は出来るからだ。

対して、ヒツポグリフ達はその意見に調子づく。

「そうだ！ 貴様のやったことは重罪だ！」

「せやけど」

「っ!？」

だが、その言葉は蛟劉の冷たい刃物の様な視線で遮られる。

「元々は君らの不用意な侮辱発言が原因や。そこは反省して貰わなあかんで？」

「なっ……この方をどなたと心得るか！ 『二翼』の長にして、幻獣ヒツポグリフのグリフェイス様だぞ！」

だが、断固として頭を下げる——そうでなくとも発言の訂正を拒否するヒツポグリフ達。分不相応な権威は、人に傲慢さを与えるようだ。とはいえ、このままでは堂々巡りである。

どうしたものか、と蛟劉が困り顔で頬を搔く。このままこの状況が続けば瑛嗶という抑止力があるとはいえ、だんだんと両陣営のフラストレーションが溜まり、いつか絶対に均衡状態は崩れるだろう。

「おい、黙って聞いてりやめんどくさい口上をペラペラペラと喧しいぞマスタード臭えんだよお前」

「いやマスタード臭いの瑛喰のせいやん」

「それじゃ仕方ない、白夜叉ちゃんは後で力づくで黙らせるとしよう。おい馬共、ちよつとこつちこい証拠隠滅するから」

「は?」

「加害者……いや被害者、か? まあどちらにせよどつちかが消えれば証拠なんてなくなるだろ。塵も残さず消し飛ばすからちよつとこつち来い」

「嫌だよ!?! 何言ってるんだ貴様!?!」

瑛喰がちよいちよいと手招きするが、ヒツポグリフ達は逆に距離を取ってしまった。巨龍を一撃で消し飛ばした瑛喰のことは、『龍角ドラコ・グライフを持つ驚獅子連盟』であれば誰しもが知っていることなのだろう。ノーネームがどれ程のものか知らないが、瑛喰の事だけは知っていた。

「だったらここでそのやつすい頭下げてチャラにしようぜ? 面倒臭いのはそつちもいやだろろう?」

「やすつ……!?!」

「まあ——俺と事を構えるつもりなら、相手になるけどな。リリちゃんが」

「え!？」

「馬鹿にしているのか貴様!!」

瑛嗶がぐいっと可愛らしいピンクの水着を着た売り子のリリの背中を押して、前に出ます。リリは予想外という表情を浮かべ、ヒップグリフ達は顔を真っ赤にして憤慨した。

「馬鹿だなお前ら、お前らはこのリリちゃんにすら勝てない小物なんだよ。宣言してやるよ、お前はこの子に一瞬で敗北する」

「ぐ……ならば決闘だ! この場で、その娘と私が一対一で決闘し、負けた方がこの場で土下座でもすればいい!」

「いいだろう、格の違いを見せてつけてやれリリちゃん!! ファイト!!」

「え? え? ええええええええええええ!!」

こうして、リリとグリフィスの一対一の決闘が決定した。瑛嗶はいつも通りゆらりと笑い、蛟劉や耀達、周囲のギャラリーは引き攣った表情で固まった。

男性にとって最悪な

アンダーウッドの広場にて、二つの人影が対峙していた。

片や長身の男性、その正体は幻獣ヒツポグリフであり、コミュニケーション『二翼』の長であるグリフィス。その実力はこの階層であればそれ相応に高い。拳を握り、先程までは怒りに紅潮させていた顔を冷静に戻し、目の前の相手を叩きのめすことに集中している様だ。また、負けるわけがないという自信に充ち溢れた表情でもあった。

対して、対峙しているのはグリフィスよりも頭二つは小さい少女。ノーネームの非戦闘員であり、年長組を纏める頼れるお姉ちゃん、リリだ。薄ピンクの水着を身に纏い、内股で身を縮めている。そのくりくりとした丸い瞳からは若干涙が滲み、その華奢な身体はプルプルと震えている。申し訳程度に握り締めたおたまが、今の彼女の心の支えだ。

——勝負になるわけではない。

誰もがそう思う。正直、リリと同じノーネームの耀や飛鳥でさえ無茶な戦いだと思っ

ていた。だが、リリの後ろに佇む、この状況を作り出した張本人……瑛嗶は普段通りゆるゆら楽しんでそうに笑っている。

「おおおうおう瑛嗶さん……！ わ、わた、私っ……！」

「大丈夫だ、リリちゃんは一瞬であのアホヅラをぶっ飛ばしてやればいいんだ」

「出来ませんよっ」

瑛嗶に向かって涙を隠さずにあわあわと身振り手振りで無理だと告げるリリ。だが、瑛嗶はどこ吹く風でそれを受け流す。遂にはうわーん！ と泣きながらぽかぽかとおたまで瑛嗶の胸板を叩く始末。最早周囲の視線は、同情というよりは悲哀の視線だった。

「それでは……始めても良いか？」

「いいよ」

ヒップグリフの部下に問われ、瑛嗶が答える。リリの背中を押してグリフィスの前に差し出すと、リリはビクツと身体を震わせて硬直する。グリフィスも流石に可哀想に思えたのか、少し溜め息を付いていた。

「それでは……始め！」

—— 刹那だった。

「え？」

誰かが漏らしたそんな短い声。その一瞬後、轟音が轟く。その音は、グリフィスが立っていた場所の丁度背後にあった人混みから聞こえて来ていた。

誰も見逃した。何があったのかを。

誰もが知りえない。何が起こったのかを。

誰もが驚愕に目を見開いた。目の前の光景に。

何故なら、目の前には人混みの中にぶつ飛ばされ、力なく倒れているグリフィスと——
拳を前に突き出して佇む、リリの姿があったから。

誰がどう見ても、グリフィスが敗北し、リリが勝利した光景。

「何が………起こったんだ………!？」

ヒツポグリフの部下が、勝負の結果を宣言するのも忘れて、そう呟いた。そして、全員視線がリリに集められている中……瑛噺はゆらりと笑った。



ここで、今何が起こったかを説明しよう。ちよつと速過ぎて何が起こったのかを読者も見逃してしまったことだろう。

まず、部下のヒツポグリフが勝負を始めるべく宣言した訳だ。

「——始め！」

リリはこの時点で、ぎゅつと目を瞑つてグリフィスの攻撃に備えた。勿論防御の術があるわけじゃない。本能的に、意識的に、攻撃からくる衝撃に備えたのだ。

「……………っ……………っ」

だが、いつまで経つても衝撃どころか音すら聞こえない。おそるおそる目を開くと、そこには、

静止した世界があつた。

「え？」

「やあやあリリちゃん、どうよ？」

「！ 瑛嗶さん……ここ、これは？」

「時間を止めるギフトだよ。なじみの力だ」

リリがそれを聞いて、瑛嗶の後ろの方に佇むなじみに視線を送る。すると、なじみはニコツツと笑って手を振った。

「え、でも……なんで……」

「見てごらん」

瑛嗶が指差す先、そこには停止したまま動かないグリフィスの姿があった。リリは、それを見て動かないと知っていても小さな悲鳴を上げる。

「さ、やれ」

「え？」

ここで、なじみの能力について少し説明しておこう。時間を止めるギフト、というのは前々話で話したようになじみとなじみが選択した対象のみを停止した空間で動かすことが出来る。だが、なじみが協力しない限り静止した対象に干渉する事は出来ない。

だがここで、細かい部分に目を向けてみる。ここでいうなじみが停止した世界で動ける対象に選んだ存在が、例えば髪の毛を抜いて放り投げたでしょう。その場合、髪の毛

が対象の身体から離れた時点で空中で静止することになる。

あくまで、動けるのはその対象と止めた時点でその対象に触れているものだけということだ。

つまり、対象が動けばそこにあつた空気も動くが、対象が離れば空気はそこで停止する。対象が何かを叩けば、静止したものにダメージは無いが、衝撃はそこに残る。例えば時間を停止していたとしても、叩いた『事実』は消えない——時間を解除した瞬間に、叩かれた物はそのダメージを受けるといふ訳だ。

ならば、ここでいう瑛夏の「やれ」といふ言葉の真意は、今ならグリフィスを袋叩きにし放題ということだ。

「リリちゃん、とりあえずグリフィスのここら辺をおたまで叩き続けろ」

瑛夏がリリを連れてグリフィスに歩み寄り、そう言つて指差したのは……………所謂股間の部分。

「え、でも…………」

「大丈夫、静止したものに俺らは干渉出来ないから。ダメージは無いよ」

「わ、わかりました……………え、えいっ！ えいっ！」

リリは瑛夏の言葉に取り敢えず納得し、瑛夏にも何か意図があるのだろうと考えながらおたまで股間を叩き続ける。

そしてそれから10分ほど休んで、タオルでリリの汗を拭い、リリの呼吸も整った頃。瑛喰はリリを最初の立ち位置に立たせる。

「で、こう……こんな感じで拳を前に突き出して……そうそう、その体勢のまま立つててね」

「は、はい」

瑛喰はリリの拳を前に突き出させ、肩幅に足を開かせ、まるで拳を撃ち抜いた様な体勢で待機させる。そしてそのままなじみの隣まで戻った。

「じゃ、なじみお待たせ」

「うん、それじゃ解除するよー」

「ああ」

ほいつ、という府抜けた声と同時になじみが時間を元に戻す。静止した時間が動きだした。

すると、グリフィスの何度も何度もおたまで殴られた部分に溜まりに溜まった衝撃が爆発した。

結果、グリフィスは股間に物凄い衝撃を喰らい、その衝撃に後方へ吹き飛んだ。

時間を停止していた2時間と少し……止まっていた側からすれば一瞬の間に起こった出来事。リリは吹き飛ぶグリフィスを見て、顔を真っ青にする。とても不味いことをやってしまったと罪悪感が生まれ、俯く。

だが俯いたことでリリの表情が隠れ、さらに周囲の畏怖の念を買ってしまうことに彼女は気が付いていない。ただただ、グリフィスをぶつとばしてしまったという思いが胸中に渦巻いていた。

「な？　本当に一瞬で負けただろうか？」

そんなリリを差し置いて、リリの後方に佇む瑛瓊は宣言通りと胸を張ってそう言った。

半沢リリ

その後、リリはあわあわと挙動不審に身振り手振りしていたが、結果的にリリの勝利は紛れもない確定事項だ。結局、言いだした本人であるグリフィスが苦々しい表情で頭を下げた。その部下も同じ様にリリに向かって頭を下げた。それを見たリリは身分的には上のグリフィス達に頭を下げられているということに恐縮し、更に慌てた。

だが、瑛嗶はそうではない。

「おいおい、頭を下げるだけかよ。お前、最初に言っただろう——『土下座』だよ」
「ぐっ……！」

確かに、グリフィス達は最初に負けた方が土下座でも何でもすればいいと言っていた。ただ頭を下げるだけでは、その言葉を反故にしていると見える。だが、グリフィス達は自分達よりも身分が下のノーネームに対して土下座をする、ということはプライドが邪魔して出来ないようだった。身体を震わせて、歯を食いしばっている。

瑛嗶はそんな二人の前に立ち、静かに言う。

「お前達が振るってきた権力の前に、下げたくもない頭を下げた奴らがいる……お前達の振るう暴力から誰かを護る為に、屈辱に耐えてプライドと誇りを自ら押し折った奴ら

がいる……そいつらの想いを、悔しさを、後悔を、誇りを、自信を——思い知れ」
「ぐっ……ぐぐ……！」

「土下座しろ」

「くっ……ぐ……ああ……！」

「やれええええ!!」 大和d「それ以上は駄目ですううう!!」……良い所で邪魔するなあ……リリちゃん」

少し流行にノって見たただけだったが、リリによつて瑛叟のボケは遮られる事になった。

そして、リリは瑛叟の腰布を掴んで懇願するように涙目で見上げてくる。

「そ、そこまでしてもらわなくても大丈夫ですよ……！」

「何言ってるんだ、ノーネームを馬鹿にされたんだろ？ それに、お前自身も」

「それは……そう、ですけど……」

「ならやり返してやらないと駄目だろう？ いいかいリリちゃん、謝罪も出来ない奴は権力者であるほどクズだ。でもな、謝罪を要求することすら出来ない奴はただの臆病者だよ、馬鹿にされたって仕方ないんだぜ？」

謝罪を要求出来ない。それは要求される側から見れば、馬鹿にしても謝罪を要求されないということに他ならない。謝罪の必要が無いのなら、幾らでも馬鹿に出来る対象が

いれば、それは的にされるだろう。格下なら尚更だ。

だから、謝罪を要求出来もしない奴はただの臆病者。分かりやすい例を上げるのなら、虐めを止めて欲しいのなら、止める為にかしらの行動を取らなければならないということだ。

まあつまり――

「やられたらやり返す――倍返s「だから駄目です!」……君はなんでこんな時だけ勢いづくんだ」

「で、でも……」

「なあリリちゃん。お前はアレか? 仲間を馬鹿にされて、謝って貰わなくても良いのか?」

「! ……謝ってほしいです」

「なら言うことは一つだろう」

瑛唄がそう言うと、リリは決意した様に頷く。そして二人して未だに歯を食いしばっているグリフィス達に向き直る。

思いつきり息を吸い込んで、

「やれえええええ!! 大和d「いやいやいやいや! おかしいやろ!」………」

瑛唄とリリの叫びは蛟劉によって遮られる。だが、事態は止まらなかった。

「ぐ……く……ぐあああああ!!!」

「お前ら実は結構ノリ良いやろ!？」

グリフィス達は本気で悔しそうな表情のまま、ゆっくり、ゆっくりとその膝を地に付け、全力を振り絞って下げることが拒む頭を、地面に擦り付ける。

「——やられたらやり返す……倍返しです！」

リリは最早誰も止められぬ勢いで、そう決め台詞を残した。



それから、瑛唄達ノーネームとグリフィス達のいざこざはグリフィス達が恥を忍んで頭を下げたことにより、無事に解決した。追々話を聞いて怒りの表情を浮かべた十六夜も、馬鹿にされた本人であるリリがやり返して土下座させたという話を聞くと、リリの頭を乱暴に撫でながら可笑しそうにヤハハと笑顔を浮かべた。

というか、それ以前に耀の顔がマスタード臭かった時点少し笑いを堪えていたようで、その爆笑の声はしばらく留まらなかった。

「つーか、良くそのプライドの塊みたいな相手が素直に引いたな。土下座したのだから、決闘で負けたからであって、ノーネーム自体は認めてないんだろ？　しかも、その前に春日部が一回問答無用で殴り飛ばしたらしいし、それを指摘されたらヤバかったんじゃないのか？」

笑いが収まった十六夜が、呼吸を整えてそう言う。爆笑しながらも冷静に思考が出来るというのは、やはり彼の聡明さと頭脳が高いのだろうと再確認させられる。

「ああ、それなら確かに指摘されたな。『土下座はしたが、お前達は我らの同士を重傷に追いこんでいるのだぞ！』って」

「だったら」

「だけどさ、そんなのどうとでも出来る。負傷を反転させればホラ、無傷じゃん？　寧ろ肩こりとかその他諸々治してやったんだから感謝して貰いたいくらいだよ」

「ヤハハッ、確かに傷を負っていないんだったら何も言えないな」

グリフィス達の傷は全て瑕喰が反転で治した。指摘する要素がなくなった彼らに、ノーネームを告発することは出来ない。

そうでなくとも、白夜叉の同士であるノーネームを侮辱したということは、白夜叉を侮辱したも同然。太陽の主権者である白夜叉は、十四の太陽の主権を所持する人物。分かりやすく言えば、今回アンダーウッドを襲った巨龍を十四体纏めて敵に回すのと同じ

ということだ。寧ろこのような形に収まったことは、ノーネームにとってというよりは彼らにとつて良い結果だと言える。

「これはお祭り、変な敵対心を持つて嫌な雰囲気醸し出すのは駄目だよ。楽しめよ、少年少女達」

「そいつは良い、この収穫祭最大のゲームは『ヒツポカンプの騎手』だったか……瑛嗶はゲーム参加を拒否られてんだろ？ なら、その気遣いに甘えて楽しんでくるさ」

十六夜は瑛嗶の気遣いを受け取つて、楽しそうにヤハハと笑つた。

こんなやりとりもあつて

それからそれぞれ行動を開始し、蛟劉はまたふらりと何処かへ、ギフトゲームに参加出来ない瑛嗶は、これから何をしようかと考えていた。十六夜達はこれから先に開催される収穫祭最大のゲーム『ヒツポカンプの騎手』の戦略を練っていて、暇潰しの相手にもならない。話し相手とするのなら、ペストやりり、またなじみといった瑛嗶の所有物だったり非戦闘員だったりするメンバーしかいないのだ。

用意された客室のソファに寄り掛かり、脱力した姿勢で天井を眺めている瑛嗶の姿は、彼の持つ実力とその規格外さを目の当たりにしたペスト達からすれば、酷くギャップを感じさせるものだった。

「暇だなあ……」

深い溜め息と共に吐き出される呟き。正面に向かい合うように設置されたソファには、割烹着を着ていそいと編み物をしているリリと、それを見ながらちまちまと一生懸命同じ編み物を作ろうとしているペストがいる。そして隣を見れば紅茶を優雅に飲むなじみがいた。服装が巫女服からどこぞのセーラー服に変わっているのは、恐らく趣味か何かだろう。

瑛嗶の眩きに反応する者はいない。もうこれで五度目の眩きだからだ。

「……………ペストちゃん……………リリちゃん……………うん……………行けるか……………う？」

すると、瑛嗶が不意にペストとリリを眺めながらぶつぶつよ何か考え事を始めた。自分の名前が飛び出て来た事から、ペストとリリが瑛嗶に視線を向ける。なんだか嫌な予感しかしない。

「…は……………に投げて……………場所は……………裏切り者に確保させて……………」

なんだか秒刻みで何かの計画が立っている。

「日時は……………あのゲームの……………衣装は……………うん……………よし」

瑛嗶が一つ頷いた。そして、考え事をしていた表情を止め、リリやペスト達に向かってゆらり、といつもと同じ表情で笑みを向けた。この四人しかいない客室の中で、何かが始まろうとしていた。

◇ ◇ ◇

その日の夜のこと、夜も更けそろそろ日も跨ごうとしていた時刻。

月明かりの下、瑛嗶は蛟劉と共に白夜叉と一同に会していた。三者三様、別々の話があったからだ。紫色の着物を豪華に着飾った月明かりに反射して輝く白髪を持った白

夜叉の、金色の瞳が二人を射抜く。そしてその月明かりの下に瑛叟と蛟劉も躊躇なく悠々と踏み込んだ。金色の瞳を見返す、青く胡散臭げな瞳と、楽しそうに揺れる青黒い瞳が、視線を交わす。

「——さて、まずは私から話をさせてもらっても良いかの？」

「ええ、僕は特筆して何か話があるわけやないですからね」

「いいよ」

白夜叉の言葉に、瑛叟と蛟劉は首を縦に振った。

「まあと言ってもこれは提案という形なのじゃが……なあ蛟劉よ、おんしが望むのなら齊天大聖に会わせてやっても良いぞ？」

その言葉に、蛟劉の身体がびくつと反応した。

齊天大聖——孫悟空という存在は、蛟劉にとって並々ならぬ大きな存在だ。姉貴分と言っても過言ではない仲なのだ。故に、箱庭から姿を消した彼女と再会出来るというのは、彼にとつてクリティカルに効く甘言だった。

だが、何故そんな提案をしてくるのか？ 蛟劉は警戒心を高めて白夜叉を睨んだ。

「そう睨むな。ただ……覆海大聖と呼ばれたおんしが今や……『枯れ木の流木』と呼ばれているらしいではないか」

そう、今の蛟劉は以前の覆海大聖として名を馳せていた頃の覇気や気力が無い。まさ

しく根無し草、風来人、故に枯れ木の流木。高い実力を持つていながら、府抜けてしまった者なのだ。白夜叉には、それが見ていられない。知人であり、以前の彼を知っているからこそ、痛々しい。

だから、彼を元に戻せる者として齊天大聖孫悟空と会わせることを思いついた訳だ。勿論、何か企みがあることは、蛟劉でなくとも分かった。それと引き換えに、何を差し出せばいいのかと考えてしまう。

だが、それでも蛟劉にとつてその甘言はあまりにも誘惑として美味しいものだった。

「それで、白夜王がそこまでしてくれはるんやから……何かしら考えてはるんやろ？」
「まあな……それをやってやる代わりに——条件が二つほどある」

指を一本づつ立てながら、白夜叉は説明する。

一つ、サラドルトレイクが階層支配者になれるように手を貸すこと

「どうやら、階層支配者になる話が来て『龍角を持つ驚獅子連盟』の頭達が揉めているらしくてな……サラが階層支配者になるのを認められないらしい。例を上げるのなら、グリフィスの奴とか……な」

「あ……あの……」

蛟劉は瑗嗶をちらりと見ながら引き攣つた笑みを浮かべて相槌を打つ。

グリフィスは『二翼』の長。故に、階層支配者に就任したいと思つているのだ。そし

て、まだ若輩であるサラードルトレイクでは不資格だと述べたのだ。自分こそが相應しい、と。

「なるほどなあ……で、二つ目は？」

白夜叉は二本目の指を立てて、言う。

一つ、ヒップカンプの騎手にて優勝する事

「……どういふことや？」

「何、ちよつとした戯れよ」

「せやけど、僕が出場したらゲームそのものが無茶苦茶になるで？」

「そうかの？ 私にはおんしが優勝する確率の方が少ないと思うかの」

「？」

白夜叉の言葉に、蛟劉は眉を潜めて怪訝な表情を浮かべる。だが、斉天大聖に会えるというのならば破格の条件だ、と蛟劉はその話を呑んだ。

「で、おんしの話を聞こうかの？」

「あ、終わった？」

「ああ」

「うんうん、なんだかめんどくさい話をつらつらと述べてんじゃねーよ裏切り者が、と思つてたわけじゃないけど、それなら良かったよ」

「お、おう……それで、なんの話じゃ?」

瑛唄が笑顔でそう言うので、白夜叉は若干気まずそうに目を逸らしてそう問い返す。蚊劉はそんな白夜叉に、また何をしたんだこの人はと半ば呆れていた。

「ちよつと頼みたい事があるんだよ。——で——に……——をしたいんだけど」

「ふむ……なんだか楽しそうじゃな、いいじやろう。私も一肌脱ぐとしよう」

「ああ、別にお前は何もしなくていいからね? ただこれの為に裏方で協力してくれればいいから」

「おんし……なんか私に対して凄く冷たくないか?」

「冷たくないよ。何言ってるんだ裏切り者が」

「やつぱりおんし私がこの姿に戻ったこと許してないじゃろ!? 仕方ないじゃろおおお

!! 私にも立場というものがあつたんじゃもん!!」

白夜叉がおよよと崩れ落ちる。瑛唄はそんな白夜叉を見下しながら地面にペツと唾を吐き、頭に足を乗せた。

「鬼畜かおんし!?!」

「え? 何のこと? 何もしてないけど?」

「白々し過ぎて逆に何も無かった風に思えるけど調子に乗るな!!」

「あーはいはい」

「……………仕方ない、仮にも白夜王である私をコケにしたのじゃから、その頼みを聞く代わりにおんしにも条件を課す」

「帰って良い？」

「マイペース過ぎない？ 私の話聞こう？ 聞いて？」

瑛嗶は踵を返して帰ろうとしたが、白夜叉が腕を掴んで放さなかった。瑛嗶はそんな白夜叉に物凄く白い目を向けながら、心底面倒臭そうに深々と長い溜め息を吐くと、物凄く気だるそうな動きで白夜叉の方に身体を向けた。

「うん、なんかごめん……………でもちよつとくらい情状酌量を考えてくれても良いと思うのじゃが……………」

「で、条件って何？」

「う、うん……………えーと、じゃあおんしにもヒツポカンプの騎手に参加してもらおうかの……………ノーネームの別チームということだ」

「分かった、良いよ」

「え、ええの？ それで」

瑛嗶の即答に蛟劉が意外とばかりに言った。だが、瑛嗶はそんな蛟劉に苦笑しながら頷く。そしてその表情から、蛟劉は目を逸らしている白夜叉は気が付かないだろうと思

う。瑛噺は別に白夜叉を嫌っている訳ではない、ただ面白がつて虐めてるだけだと。

そしてその翌日、ヒツポカンプの騎手が開催される。

苦勞獸

翌日、ヒツポカンブの騎手が開催される会場は、大勢のギャラリーで溢れていた。このヒツポカンブの騎手というゲームは、水上を駆ける事の出来る騎獣に騎者が乗り、アンダーウッドの激流を含む水上コースを走る。そして、川岸にサポート役を置く事も出来る。

勝利条件は二つ、一つは高い標高の山の山頂に出来ている海から流れ落ちる運河を登り、山頂の海に聳え立つ海樹に生る果実を回収すること。もう一つは果実を回収した上でトップでゴールすること。この二つだ。ルールは至極簡単、だが簡単だからこそ難関だ。

勝利条件は以上の二つだけ、そしてルールもそれだけ。つまり、反則行為が無いということだ。最低条件として殺人は失格、落水も失格、騎獣への攻撃は禁止となっているが、それ以外ならば『如何なる妨害もあり』ということに他ならない。

まあそれはさておき。十六夜達を含めて先程参加者達がスタートした訳だ。先日の件で険悪なムードになっているグリフィス達がノーネームを牽制したりしながら着々と進んでいる。また、クイーン・ハロウインの寵愛者であり、巨龍騒動の時にウィル・オ・

ウイスプからの協力で活躍した仮面の騎士……フェイス・レスがその剣の猛威を振るい、白夜叉の悪ふざけで水着着用を義務化された女性達の水着を切り裂いたり、開始早々はつちやけているようだった。

そんな中、瑛嗶と蛟劉はというと

「なあ、僕ら参加者やん？」

「そっだよ」

「なんでスタートすらしてへんの？ ていうかなんでこんなことしてんねん」

何やら懸命にステージの様なものを作っていた。ギャラリーが囲んでいるメイン会場のど真ん中に作られているステージ、もうすぐ完成というレベルまで作りあげられている。瑛嗶と蛟劉はサウンドアイズから寄越された人員達と共に汗水流しているのだ。

「もう皆スタートしたで？」

「そっだなー……どうしよっかね？」

「まああの仮面の騎士さんが大量の参加者をなんやエロいやり方で失格にしとるけど……」

「ああ……白夜叉ちゃんが呼んだラプラスの精霊だっけ？ 中継映像みたいなこと出来るんだな」

「まあそれがメインの能力やないけど、情報収集的な能力を保有してんねんて」

ほのぼのとした様子で作業をしながら会話する二人。また二人が白夜叉から借りた騎獣がずつとこちらを見ているのだが、その視線は『え？ スタートしないの？ どうすんの？』といった困惑したものだった。

そして、瑛嗶が最後の作業を終わらせる。ステージが完成した。

「うん、こんなもんか」

「というかこれホンマにやるん？」

「やるやる。そろそろあの子達も……あ、来た」

瑛嗶がきよろきよろと周囲を見渡すと、ステージの裏からおおずとおおずと二人が出て来た。水着を基にフリフリのファンシーな衣装に作り変え、それを纏ったりりとペストだ。

そう、つまり瑛嗶が白夜叉に頼んだことはアイドル活動の一貫。ライブである。

「なんでいきなり……」

「わ、私……だだ、大丈夫でしょうか？」

「昨日死ぬほど練習したから大丈夫だよ」

ペストは呆れたように溜め息を吐き、リリは緊張でプルプルと震えていた。といつても、ダンスの練習はなじみが時を止めた状態でおおよそ二週間ほどやったので、動きに

問題はないのだが。精神と時の部屋みたいな修行法だった。

「まあ音響云々は全部なじみに任せてるから頑張つて」

「は、はい！」

「これが成功すればノーネームの名前は別の意味で大きく広がるから」

「本当に別の意味ね……」

瑛嗶の言葉にペストは頭を抱えた。他のメンバーは一生懸命魔王打倒で名を大きく広めようとしているというのに、この男はノーネームをどうしたいのだろうか。

「さて……それじゃあ俺らはスタートしますか……」

「お、やつとかいな」

瑛嗶と蛟劉は気だるげに肩を回し、コキツと首を鳴らしながら自分の騎獣へと歩み寄り、乗った。

「手加減はせえへんで？」

「俺もだ、抜かりなく手を抜いてやるよ」

「何その言い回し」

ギヤラリーの視線が、蛟劉と瑛嗶に向けられる。今からスタートするのかと若干馬鹿にした様な視線だ。既にスタートした参加者達とおおよそ10分程の差が付いている。騎獣の能力に差は殆ど無い故に、追い付くことはほぼ不可能だろう。それを覆すだけの

——ギフトが無い限りは。

「じゃあまあ……」

瑛噺がそう言いながら、そして蛟劉もにやりと好戦的な視線を送りながら、ぐつと力を込める。そして同時に言いながら、猛スピードでスタートを切った。

「——お先に」

水が大きく弾けた。水飛沫が数mの高さに昇り、そしてそれがパラパラと雨となった時……そこに瑛噺と蛟劉はいなかった。

ギヤラリーの視線がラプラスの精霊達の映し出す映像に向かう。そこには、蛟劉と瑛噺が猛スピードで水上を駆ける姿があった。差はほぼなく、お互いがお互いを牽制し合いつつ進んでいる。

覆海大聖たる蛟劉は、海を味方に付けた存在。故に、自分の周囲の水を操作し加速する。人外たる瑛噺は、水の抵抗や空気抵抗等を反転させて加速する。その速度は圧倒的で、見ただけで先行している参加者達にぐんぐん追い付いているのが分かった。

「さつさと落ちやー！」

「やなこつたー！」

隣を走る瑛嗶に蛟劉が水流操作で攻撃する。だが、瑛嗶はそれを反転させ、時に拳で叩き落す。また瑛嗶も蛟劉の上下を反転させ水中へと落とそうとするも、水を味方に付けた蛟劉は即座に水流操作で体勢を立て直す。水が弾け、風が空気を切り裂き、視線が水を挟んで交差する。相手を落とそうとするそのモーションの一つ一つが、規格外。

「落ちねーな」

「負けるわけにはいかへんもんで」

「面白〜」

ゆらりと笑う瑛嗶は、騎獸の背を掴み、跳び上がる。そしてそのまま騎獸をコースのずつと先へと投げた。悲鳴を上げてずつと先の水上へと着水し進む騎獸だが、瑛嗶が背にいないことに困惑していた。だが、瑛嗶は投げたその直後に空気を蹴り、脅威の速度で空中を駆けた。そして先を進んでいた自分の騎獸の背に着地する。

蛟劉はそんな瑛嗶の行動に引き攣った笑みを浮かべながら、自分と騎獸を一緒に水流操作による噴水に乗りながら瑛嗶に追い付いた。そして着水と同時に瑛嗶と蛟劉は騎獸の背から跳躍、空中で拳を振るった。

「わははっ！」

「っのっ！」

瑛嗶の拳が蛟劉の肩を浅く叩いた。それだけでも大きなダメージになる重みがあつ

だが、蛟劉はそれに耐えながら瑗嗶の脇腹に蹴りを入れて見せた。瑗嗶にとつてあまりダメージにはならなかったが、それでも反撃してきたことに若干の驚きが隠せない。

そして、お互いの騎獣を交換しながらまた前に進む。

「やるな」

「ホンマ勘弁してほしいなあ」

瑗嗶の言葉に、蛟劉は肩を抑えながら苦笑する。だが、二人とも楽しげに笑みを浮かべていた。

一部始終を見ていたギャラリーが湧く。歓声が大きく轟き、会場のボルテージはぐんぐん上昇していた。

だが、瑗嗶と蛟劉の乗っている騎獣は二匹とも視線を交わしながら同じことを思っていた。

『まじやばい！ やばいってついていけないってこれ!! 天地逆転とか聞いたことないって!!』

『空気抵抗無さ過ぎて酔うんだけど気持ち悪いんだけど吐きそうなんだけど!? つていうかこの人めっちゃ重いんだけど!?!』

一番の苦労人は、この二匹だということ、誰も知り得ないことだった。

好戦的に

瑛嗶と蛟劉の落とし合いは続いていた。加速を止めず、幾度となく宙で衝突し、その余波で水流を弄んで行く。時に水を割って地肌を露出させ、時に天地が反転し、時に少しの波が天津波へと変貌する。二人が通った後には、地面も木々も人も、濡れて災害に巻き込まれる。

何度もお互いの騎獣を交換しながらの爆走、正直な所騎獣の方が先に音を上げる勢いだった。

「わははっ、やつぱり水を味方に付けると強いな！」

「——つちゆうか、水を敵に回しといてなんで落ちないんや……！」

「おらっ！」

「つぐ……！」

空気の流れや水の流れを反転させることで、全ての抵抗力を加速の力として味方に付けた瑛嗶は、幾ら水を操り攻撃しようとも全てなんなく対処してしまう。故に、全ての水を味方に付けた蛟劉をもってしても攻めあぐねていた。

また逆に、瑛嗶は次々と際どく攻撃してくる。しかも、ギリギリ蛟劉が反応出来る速

度でだ。一つ間違えれば直ぐにでも水中へと叩き落される、そう思わせるほどの迫力と一撃一撃の重みが蛟劉を追い詰めていた。

（なんて奴や、この実力にこの戦闘におけるセンスの高さ……こんな下層に居て良い奴ちやうやろ……！）

瑛嘎の攻撃は、基本的に接近しての打撃技。近づかなければ問題ない攻撃方法だ。しかし、瑛嘎は戦闘においては誰よりも経験を積んでいる存在、自分の長所短所については誰よりも網羅している。攻撃手段が異能の力に頼れない場合、瑛嘎の攻撃手段は基本化け物染みた身体能力を最大限生かした徒手空拳のみ、故にミドルレンジでの戦いを強いられることになる。相手がロングレンジでの戦いを生かした者だったり、広域殲滅を得意とした者だった場合、瑛嘎にとっては最もやり辛い相手になるだろう。

だからこそ、瑛嘎はその欠点を欠点のままにはしない。ロングレンジを得意とするものは、逆にミドルレンジに攻め込まれれば極端に弱くなる。広域殲滅が得意な者も、近づかれれば自分も巻き込まれることになる。つまり、その二つの戦い方がミドルレンジの戦い方に強いのも同じで、ミドルレンジもその二つの天敵たる戦い方なのだ。踏み込んでしまえば、此方のものなのだから。

瑛嘎はその欠点をしっかりと理解している。だからこそ、『近づく』技術に関しては群を抜いて高い技術力を持っているのだ。

(距離を取れない……!)

蛟劉は距離を離せないでいた。瑛嗶は最早気が付けば目の前に踏みこんでいる、距離を離そうとしても離せないのだ。蛟劉が現在進行形で瑛嗶の攻撃を対処出来ているのは、それこそ彼も辛く厳しい修行を……それこそ覆海大聖たりえる為の修行を積んだからだ。これで自分自身が徒手空拳の心得が無かった場合を考えると、ぞつとする。

「——そろそろかな？」

「?」

瑛嗶が何かを見て呟いた。その視線は、蛟劉の足下に向けられている。そこに居るのは、

騎獣

蛟劉は焦った表情を浮かべた。

「——まさかっ!？」

「その通り、ちよつと騎獣を酷使し過ぎたな——俺に夢中で気が付かなかったかい？」
蛟劉の乗っていた騎獣の速度がガクンと落ちた。蛟劉の体勢が若干崩れるも、直ぐに立てなおす。しかし、その隙に未だ加速が止まらない瑛嗶の騎獣が先へと進んだ。

それもそうだ、ここまで瑛嗶達は騎獣を酷使してきた。蛟劉はそれこそ瑛嗶の攻撃に集中していて騎獣にまで気が回っていなかったのだ。故に、ここで蛟劉の乗っている騎獣は疲労で速度が落ちた。

「でも、なんで瑛嗶の騎獣は……!?!」

「俺のギフト、教えておいてやろう。全ての事象を反転させるギフト『嘘吐天邪鬼』オーバリーヴァーだ、それじゃお先」

瑛嗶はそう言つて、更に先へと進んだ。

瑛嗶の背中を見つめる蛟劉は悔しいとばかりに歯噛みする。つまり、瑛嗶は疲労した状態の騎獣を反転によつて全快にしたのだ。

「……………ハハハッ！　　なんや面白くなつてきたやん……………これなら僕も、本気出して良さそうや」

蛟劉はそう言つて一笑すると、屈んで先程よりはゆっくりだが進む騎獣に手を当てる。

「悪かつたなあ、ちよいと気が回らんかつたわ……………やから、少しの間休んでてええで？」

蛟劉がそう言つと、まだ進めますよ！　とでも言いたげに速度を上げた騎獣。だが、蛟劉は苦笑しながらぼんぼんと騎獣の背を叩く。

「ええから休んどぎ」

蛟劉の言葉に騎獣はしよぼんとしながら進むのを一旦止める。水流に流される様な形でごくゆっくりと進むようになった。だが、進む手段が無くなった訳じゃない。

蛟劉は好戦的に笑い、水流を操作する。周囲の水が、全て味方——進む為に、力を貸して貰おう。

「まだ諦めへんで？」

そう言った瞬間、騎獣が加速した。ぐんぐんと、先程よりも加速しながら進み始める。勿論騎獣はその足を動かしていないし、進もうともしていない。これは蛟劉の水流操作のみで進んでいるのだ。水を使い、騎獣を押し。水の流れを味方に付け、可能な限りで加速する。

そして、その速度と水の味方を見て——騎獣も気力を取り戻したのか、騎獣の力もその速度に加わった。加速し、更に加速し、何者をも寄せ付けない速度を実現する。

「ツハハハ！ 根性あるやん自分……よっしゃ、なら一緒にここか……まだ終わりちゃうで」

騎獣の見た根性に、蛟劉は楽しげに笑う。まさしく人騎一体だった。

そして、視界に瑛夏の背中が戻ってくる。

追い付いた

「おっと、なんだ遅かったじゃないか」

「諦め悪いんや、僕は」

「成程……それはそれは、面白い」

瑛嘎の隣の追いついて、並走する。

「まだまだ負けたわけちゃうからな」

「そりゃいい……んじやまあ、今度はアイツらも入れて勝負してみようか」

瑛嘎の指差した先、そこには十六夜達先行組の背中が見えており、向こうのぎよつとした表情が此方を見ていた。

瑛嘎はゆらりと笑い、蛟劉も楽しげに覇気を強めた。第二ラウンド、開始である。

「随分とゆっくり進んで待っててくれたようだぜ？」

「せやなあ……これなら優勝も簡単そうや——瑛嘎を倒せれば」

「わはは、やってみろりゅいりゅい☆」

「ぶち壊しや!？」

そんな会話をしながらも、瑛嘎と蛟劉は更に加速し十六夜達へと迫ったのだった。

騎獣の涙

先行していた十六夜達の背後から襲いかかってくるのは、二つの災害だった。まるで小さな天変地異が同時に襲いかかってくるかのような感覚。瑗嗶と蛟劉はお互いを攻撃し合いながら十六夜達へと合流したのだ。そしてその攻撃は、一つ一つが化け物じみた災害を生み出す規模——十六夜達がそれらに抵抗する術を持つている筈が無かった。天津波が迫り、天地が逆転し、水の流れが次々と切り替わり、追い風と向かい風が同時に襲ってくる。まるで台風、大嵐の最中にいるかのような気分だった。

覆海大聖、蛟魔王という魔王だけでも脅威的な相手であるのに、それを上回る最強の外人が同時に現れた。十六夜達はこれがゲームである事を忘れて必死に逃げた。

飛鳥や耀はもちろん、『あの』十六夜ですらもが一番最初に思ってしまったのだ。

——勝てない

圧倒的すぎる猛威。蛟劉だけであつたなら十六夜も真つ先に対峙したのだろうが、その蛟劉と対峙してテンションの上がった瑗嗶の覇気は凄まじかった。目の前に立った

だけで腰が抜けて失神してしまいそうなほどに重く、鋭い。

「お嬢様ア！ 全力で逃げろ！」

「今やってる！」

騎獣を鞭打ち、水上を全力で進む。そして、後方に迫り来る大津波が先行するチーム達を押し上げ——瑛嗶たちを含めた全チームが海襦の麓へとたどり着いた。残ったチームは、瑛嗶、蛟劉、十六夜達、そしてクイーンハロウインの寵愛者である仮面の騎士の四チームだけだ。折り返し地点に上ってきた故に、後は海樹の実を手に入れてゴールを誰よりも早く駆け抜けるだけ。だが、その後少しがひどく、遠い。

四チームは睨み合う。内三チームが最も警戒を置いているのが、瑛嗶だ。騎獣は常時全快状態、そして乗っている騎手が強すぎる。次の瞬間水中に叩き落とされていてもおかしくないのだ。

「わはは、蛟劉に十六夜ちゃん達、それに……フェイス・レスちゃんだっけ？ が、相手か……退屈しないねえ」

「ハッ、よく言うぜ、この中で一番強い癖に」

「おいおい、俺が一番強いなんて誰が言ったんだ？ やってみなきや分からないだろう？ 案外簡単かもしれないぜ、この俺を倒す事くらい」

両手を広げて、ゆらりと笑う瑛嗶。どの口が言うんだと思いたくなるような威圧感と

隙の無さ。不用意に近づけば、こちらがやられると確信出来る。

「というわけで、精々頑張ると良い」

だが、瑛喰はいつの間にかその手に海樹の実を手にしていた。本当にいつ取ったのか分からない。そして、驚愕に目を見開いたその瞬間には、瑛喰は既に動き出していた。十六夜達を置いて、ゴールへと駆け出したのだ。しかも、十六夜達へ土産とばかりにとてもムカつくドヤ顔を残して。

「……」

「……」

「……」

十六夜、蛟劉、フェイス・レスの視線が交錯する。そして、一瞬でその視線がお互いの意思を汲み取った。三チームは一斉に海樹の実を回収すると、蛟劉の水流操作と飛鳥の恩恵の極大化による加速で三チームは瑛喰を追いかける。そしてその速度はすぐに瑛喰に追いついて見せた。

「うおっ、3対1なんて卑怯だぞ！」

「うるせえ！ 卑怯もクソもあるかア！」

「さっきのは流石の僕もちよおつと腹立ったで」

「それはさておき優勝は渡しません」

瑛叟の糾弾に対して、徒党を組んだ三チームがおのおのそう返す。彼らは瑛叟を倒す為に一時組んだのだ。優勝をする為には、どうしても瑛叟が邪魔だと判断した結果だ。

「おおおおおつらあ!!」

十六夜が飛び上がり、瑛叟に拳を叩き付ける。その威力は、星を砕く一撃と評される程重い。威力だけでいえば瑛叟にダメージを与えられる程のものだ。まだまだ力任せでその力を扱う技術に欠けてはいるが、それでもその威力は箱庭の中でも高い。

瑛叟はその一撃を手のひらで受け止め、受け流す。騎獣へとその重みがのしかかる――が、

『いま……さ、ら……い……この程度の重み、屁でもねえええ!!』

彼は気合いでそれを受け止め、進む。歯を食いしばり、水を蹴る足に力を込める。ぶちぶちと筋肉の筋が切れていく音が身体の至る所から聞こえてきたが、切れた瞬間に反転によってそれは完治する。痛みは残るが、彼はそれを耐えて咆哮をあげる。

「!？」

だが、十六夜達の目的はこの一撃ではない。この一撃は、瑛叟の進む速度を少しでも抑える為のもの。そしてその隙に瑛叟よりも前に出たフェイス・レスが自身の武器である剣を振るう。十六夜は拳をひいて高く振り上げた足を振り下ろした。

「――っ」

瑛嗶は十六夜の蹴りを腕で防御しながら、フェイス・レスの振るう高速の剣を屈む事で紙一重に躲した。

「——もろたで」

だが、それすらもブラフ。本命は、蛟劉が握っていた。屈んだ瑛嗶の目の前に、蛟劉は踏み込んでいた。辛く厳しい環境で、仙人としての過酷な修行を積んだ蛟劉の速度は、十六夜をも容易に上回る。そして、瑛嗶が気がついた時にはもう遅い。蛟劉はその両の掌底を瑛嗶の屈んだ事で空いた腹部へと叩きこんだ。

「おおおおおっ!!」

そして、叩き込むだけでは終わらない。彼はそのまま両の掌底を打ち抜きながらも瑛嗶の身体から離さない。その掌底は生み出した衝撃を全て、余すところなく瑛嗶の身体の中へと浸透させる。それは瑛嗶もよく使う、衝撃通しの技術に他ならなかった。

「ぐっ……ふ……ふ……」

その衝撃に、瑛嗶は肺から息を吐き出させられた。そして、その隙を見逃さず、体勢を整えた十六夜が瑛嗶の背中を全力で、蹴った。

「落ちやがれええええ!!」

その言葉と同時に、瑛嗶の身体が騎獣の上から大きく吹き飛ばされる。飛んだ先は、水上。

「わはは、いいねえ……面白いっ！」

だが、吹き飛ぶ中で瑛噺はゆらりと笑った。十六夜達はその笑みにまだ何か来るかと身構えた、が、瑛噺はその予想に反してくるりと空中で体勢を整えると、水面を蹴って跳び、自身の騎獣の上に戻っただけだった。そして、そのまま両手をひらひらと掲げてニツと笑いながら言った。

「うん——降参しよう」

降参宣言。十六夜達はその言葉にきよとんと滑稽な顔を浮かべる。

もとより、瑛噺はこの競技に参加しようと思つていた訳ではない。白夜叉からの条件で出場していただけに過ぎないのだ。故に、優勝するつもりは毛頭なかった。まあとはいつても、十六夜達が自分を楽しませてくれなければそのままぶちぎつていたのだが。

だが、瑛噺の期待通り十六夜達は曲がりなりにも瑛噺を多少追いつめた。まあ瑛噺もあるていど十六夜達に合わせて力を制限してはいたが、それでもこの結果は十分に楽しめたと言える。だからこそ、瑛噺は降参する。あとは十六夜達が頑張れば良い。この収穫祭が始まってから瑛噺は言っている。祭は楽しむものだ、力のあるものがぶつちぎったところで意味は無いのだ。

「でもまあ、最後にこれくらいはやらせてもらおうかな？」

「「えっ」」

そう言ったが否や、瑛嗶はその足を振り上げ、水面を蹴り抜いた。そして、その蹴りは水を割り、上がった飛沫が波となって十六夜達を襲った。

「ほらほら、早く進まないかと失格になるぜ？」

その言葉に我に返った十六夜達は、一斉に駆け出す。覚えてやがれという視線で瑛嗶を睨んだ後、彼らの背中はずぐに見えなくなった。

「……………」

『ぜえっ…………ぜえっ…………』

残った瑛嗶は、自分の乗っている騎獣に手をやり、二度三度と撫でる。

「よく頑張ったな。もう良い、休め」

『は、はは…………！ ちくしょう…………もう少し、だっただけだな…………！ すまねえ…………！ 後は、頼んだ…………』

騎獣はもう限界だった。いくら反転で回復しても、痛みは残る。全身に残った激痛は彼の精神を痛めつけ、肉体を軋ませる。瑛嗶には騎獣が具体的に何を言ったのか、分からなかったけれど…………それでも気持ちには伝わった。悔しさ、不甲斐なさ、そしてゴール出来なかつた後悔。瑛嗶は思う、彼はこの先、もつともつと強くなるだろうと。そして、誰にも負けない最速のヒッポカンブとして、アンダーウッドに名を轟かせるのだ、と。

感動のラスト

その後、十六夜達、蛟劉、フェイス・レスの三棘みの勝負は十六夜達の勝利で終わった。中でも飛び抜けて強かった筈の蛟劉がなぜ負けたかという点、十六夜とタイマンで勝負して論されたからだ。元々優勝すれば斉天大聖と会えるから参加していたのだが、『枯れ木の流木』とまで落ちぶれた蛟劉が、姉貴分にとの面下げて会いに行くんだと。ちなみにその時蛟劉が覆海大聖だと知った十六夜は眼を丸くし、それを映像で見っていた琰の笑い誘った。

まあそんな事もあり、たしかにそうだと思った蛟劉は敗北を宣言。リタイヤした。その後、十六夜達のチームとフェイス・レスの接戦の末、十六夜達が勝った。終了。

といつてもまあ、その大接戦と迫力ある戦いのおかげで会場のボルテージは上がり上がりまくっている。そんな中で、琰は更なるエンターテイメントを開始する。白夜叉の協力によって作りあげられた豪華なステージと、なじみや琰を始めとする化け物達のセッティングしたライブ。そして、育てに育てて来たアイドル達（一部除外）のお披露目である。

司会は勿論、その手の業務に着手している黒ウサギ。ヒップカンパの騎手にて審判を

務めていたのだが、その際白夜叉の暴走により水着着用を余儀なくされている。それは今も変わらない、着替える暇も無く瓊噺にステージ上へと叩き込まれた。

「えー、皆様！ ヒツポカンブの騎手の優勝者も決まった所で！ エンディングセレモニーを用意いたしました！ 不肖この黒ウサギも所属いたしますコミュニケーション、ノーネームの出し物として——我がコミュニケーションのアイドル達のライブを開演致します！！」

その言葉と同時に、ステージ上のスポットライトが点灯した。そこに居たのは、三人の水着を改造した衣装を着た美少女達。

一人は、黒い上下の別れた水着を着た、黒死斑の魔王——ペスト

一人は、ピンクのワンピース型の水着を着た、ノーネームのお姉ちゃん——リリ

そして最後に、青色のセパレートを着た、純血の吸血姫——レティシア

会場はレティシアの姿を見て騒然とする。何せ、彼女は巨龍騒動の首謀者とも言える存在だからだ。しかし、黒ウサギに代わって瓊噺が説明をした。

「はい皆様、此処に居るレティシアちゃんですが、巨龍云々騒動起こした本人であります。最早ただのアイドルなのでライブが終わった後に文句が言えるようなら文句足れてくださいませ」

巨龍騒動を起こした張本人を、解決した張本人が庇ったので観客はもう何も言えな

かった。どころか、寧ろそう言うんだつたら見てろうじやないかと更に湧きあがる。「では、ミュージック——スタート!」

瑛夏の言葉と共に、音響役のなじみが一齐に機材を操作する。音楽が流れ始めた。

リリを中心として立っていた三人が息を吸い——唄う

湧きあがる歓声が、止まった

一番最初のフレーズを歌っただけで、観客は三人に魅せられた。ライトに照らされた髪を揺らし、まだ未成熟な肢体を華麗に、まるで演武を想わせるように動かす、歌声は観客の心の中へ直接響くように美しく、三人の少女が舞踏の最中に視線を交わす姿は、まるで三人が三人とも心が通じ合っているかのような絆を感じさせる。

ふと浮かべる微笑みは幼さの中に何処か大人びた妖艶さを見出し、観客の心を一気に惹き付ける。水着故に見える白く張りのある肌を伝い落ちる汗の一つ一つも、少女達の周囲にある空気の音ですら、彼女達を惹き立てるようにも思えた。

——光り、輝いている

スポットライトに照らされているから、という訳ではない。まるで、少女達一人一人が輝いて見えた。満天の空に輝く星のように、深い闇の中で道を示す月のように、煌々と全てを照らす絶対の太陽のように、美しく光り輝いていた。

それはまさしく、壮大で美しく穢れの一点も無い奇跡の光景を見た様な感動を齎した。踊り歌う少女達には、それだけの感動があつた。会場にいたどんな存在も、彼女達に魅了された。

自然と肌に浮かぶ鳥肌、瞬きすら出来ない存在感。しかし圧倒的な強者に会つた時の威圧感ではない、これは圧倒的な魅力に魅せられたからこそその威圧感。まるで、自分達の存在が酷く小さなものに見えるほどだった。

そして、曲は終わりを迎える。紡がれる音が段々と小さくなり、華麗に繰り広げられた舞踏が終わり、曲の終了と共に——少女達は静かに静止した。

だが、観客はそんな彼女達にすら美を感じた。たったの数分の中で魅せられた。

しかし、観客たちはこの後、全員が更に魅せられる。

「えへっ♪」

先程までリリが踊りの中で見せた微笑みとは違う、彼女はその幼い外見に似合う可愛らしい笑顔を浮かべた。

先程までの美しさの中から咲いた、一輪の花のような可憐さに——これ以上なく、心を打ち抜かれた。

それは、感動ではない。恐怖でもない。畏怖でもない。知能のある生物全てが必ず何処かで持っている、好きという感情を超越した、時に生物の理性を破壊し、本能のままに行動させてしまうもの。狂気を加速させ、生物が手を出してはいけないと分かっているのに触れてしまう甘い毒。

そしてそれは、リリの見せた幼く純粋な笑顔によって此処に生まれてしまった。だが彼女達はそれを加速させる。

踊り終えた、やりきった、達成感に包まれたレテイシアとペストは、自然と歓喜の表情でリリと中心に三人で抱きあつた。目尻に嬉し涙を浮かべ、スポットライトに照らされる中で、もみくちゃになる三人。その姿は、見ただ目相應に微笑ましく、また魅力的だった。

それからリリ達が二曲目を歌い始める。

一時間後、ライブが終了した時……会場にいた全ての生物が、許容量を超えた『萌え』による精神攻撃によって、幸せそうな表情で倒れ伏していたのだった。

「えーそれでは、これにてヒツポキャンプの騎手エンディングセレモニーを終了いたしますーす」

そんな中、ステージ上で最後の曲をやりきって喜ぶ三人を余所に、瑛嗶が誰も聞いていない締めという言葉を言ったのだった。

黒死斑の魔王ペストたんを妹に！ 甘えん坊の妹ボイス 小説

初詣。それは神社へとこれまでの一年を振り返りながら神様へ挨拶をし、一年の反省と感謝、そして次の一年への平穩を祈願する為の行事だ。今日は一月一日、箱庭の中でも初詣と似た様な行事は存在しているのを知ったので、俺は『妹』のペストと二人で初詣に来ていた。

妹は寒いのが苦手なのか、普段のちよつと変な袖の長い格好ではなく、初詣らしい着物の上にポンチョを羽織っていた。にもかかわらず、俺の手を握る小さな手は手袋をしていない。なにはどうあれ甘えん坊な奴なのだ。素直じゃないが。

「……何見てるの馬鹿兄」

じとつとした眼で見てる、可愛い妹。

「全く……こんなに寒いのになんでこんな人の多い所に……」

別と一緒にいるこうなんて一階も言っていないんだけどなあ。なので嫌なら帰っても良いんだぞ、と言ってみる。

「……………べ、別に帰りたいなんて言っていないでしょ……それより、兄さんは私以外に一緒

に初詣に行くような人はいなかったの？」

そわそわとしながら聞いてくるペスト。まあ十六夜とか飛鳥とか耀とか黒ウサギとか、誘えば一緒に行ける様な相手は幾らでもいるな。なんなら従者であるレティシアなら確実に一緒に行つてくれるだろう。

だが、昔からお兄ちゃんお兄ちゃんとお兄ちゃんつ子だったペスト、こんな様子で実は今も兄離れ出来ていない妹だ。なので、ここはちよつと意地悪に誰とは言わないが、いると答えた。

「え……いる、の？　そ、そうなんだ……いるんだ……へえ……」

ペストはしゅんとした様子で肩を落としながら俯いた。やはりまだまだ兄離れの出来ていない妹だ、これだから猫可愛がりしたくなるんだよな。

苦笑しながら俯いた頭に手を置いて、嘘だよと言つてやった。

「え……わ、分かつてたわよ！　どうせそんな事だろうと思つてたし！」

嘘付け

「嘘じゃないしー！」

ムキになつて両手をバタバタ振りながら抗議してくるペストをどうどうと抑えながら、大量の人で作られた行列を進む。そして、丁度俺達の出番になった。

ほら、俺達の番だぞ。

「むう……仮にも魔王の私がお祈りだなんて……皮肉な話ね」

まあそんなお前の兄さん俺はなんなんだろうね。

とりあえず、俺とペストは形式に基づいて手を合わせ、お祈りをすませた。俺の願いは、ノーネームの再興……と、まあなんだ……妹とこれからも一緒にいれますようにってところかな。俺も妹離れ出来ていないらしい。離れるつもりないけど。

「……」

となりでペストが凄く真剣にお祈りしている。俺がお祈りを終わらせてから十数秒ほど経って、やっとペストは祈りを終わらせた。何を祈ってたのかと聞いてみた。

「………内緒……特に、馬鹿兄には」

顔を赤くしながら、そっぽを向いた。指をちよんちよんとくつき合わせている姿は、どうにもいじらしく、可愛かった。

試しに俺が祈ったことを正直に伝えてみた。すると、

「なっ……私とずつと……こ、このシスコン！ 全く……」

ぷりぷり怒っているが、それでもペストの口元は嬉しそうにやっていた。隠せてないぞ、妹よ。

「……さ、帰りましょ……そろそろ寒くなってきたし」

はいはい、それじゃあまあ帰りましょう。妹様の御達しだしね。

「……ん」

何を言わずとも自然と俺の手を握るペスト。すっかりこの状態が定番になってしまっているな。まあ寒いのもあるんだらうけれど。

そう思いながらも、俺は手を握り返す。小さな手は、息が白くなるほど寒いのに、温かい。

「ねえ……兄さん」

ん？

「明けてまして、おめでと……」

先程までのやり取りが気まずいと思っっているのか、ペストは俯きながら小さくそう言った。思わず苦笑が漏れる。だから、俺も同じ様に返した。

明けてまして、おめでと。今年もよろしく、ペスト。

「……うん……♪」

ペストは今度こそニコニコと嬉しそうに、スキップでもしそうな勢いで隣を歩く。繋いだ手は放さずに、もと来た道を歩く。空中に浮かぶ提灯の灯りが、橙色に道を照らしている。人の賑わい、緩やかな時間が、二人だけの時間をゆつくりと続かせているように思えた。



家に帰って来ると、ペストはパタパタと足早に炬燵へと入った。最近黒ウサギやジン、レティシアと一緒に作った本格的なものだ。ペストはかなりこの炬燵が気に入ったようで、最近では専らこの炬燵に入ってぬくぬくと過ごしている。

「ああー……これを発明した人は神様ね、神社に居る奴よりまだマシだわ」

そこまで言うか。さつきまでその神様に真剣な祈りを捧げてたくせに。まあ、こんなペストは此処でないと見られないから、珍しいものを見られたとして良しとしよう。

というわけで、俺も一緒に炬燵に入る。その際、二―ソックスを穿いたペストの脚と俺の脚がぶつかる。ペストはそれが気になったのか、むくれたような表情でこちらを見て、だが直ぐに力の抜けた表情でテーブルに突っ伏した。

「……ねえ、兄さん」

ん？

「兄さんは……今のノーネームでの生活は気に入ってる？」

そりやまあそれなりに

「私は気に入ってるわ。金髪小僧も、ジンも、黒ウサギも皆呆れるほどのお人好しで……居心地も良いしね。でも、多分一番は兄さんが一緒にいるから、だと思っ……やっぱり

このコミュニケーションとはまだ少し壁がある様に思えるし、やっぱり気兼ねしなくて済む兄さんが一緒だから私はこうして此処が好きなんだと思うわ」

いきなりだな。良く見ればペストの目がうつらうつらしている。どうやら半分寝始めている様だ。普段隠している本音が、少しづつ漏れだしたんだろう。

けどまあ……そう言つて貰えるのなら嬉しいな。兄としてこれ以上ない褒め言葉だよ。

「おに……ちや……大好き……」

寝たか。全く、本当に可愛い妹だよ……こいつは。

——おやすみ、ペスト

{IMG1729}

魔王詰め合わせセットⅡ魔王連盟

収穫祭最終日、サラッドルトレイクが無事階層支配者となり、『ヒツポカンブの騎手』で優勝したノーネームのメンバーには、白夜叉から恩恵が与えられた。

今回与えられた恩恵は、十六夜が望んだこともあつて鷲獅子のグリー。原作では翼を失った彼を、責任として十六夜が欲した結果だったが、今回は瑛嗶のおかげもあつてそんなことは起こっていない。

つまり、今回は普通に欲しかったからということだろう。吸血鬼相手に共に戦ったからこそ、成し得た絆という物だろうか。

まあ、グリーも若干迷ったようだが、白夜叉の後押しもあつてそれを承諾。晴れてノーネームへの出奔を決めたのだった。

更に、白夜叉が務めていた東の階層支配者の座に、覆海大聖である蛟劉が就いた。白夜叉が魔王討伐の為に階層支配者の座から降りたことで、その後継者として彼が選ばれたのだ。

そして、その階層支配者である蛟劉の権限で、瑛嗶となじみはノーネームから一時的

に『外された』。

理由としては、まず単純にノーネームに置いておくには危険かつ強すぎるからだ。今はまだ下層に居を構えるノーネームに、これほどの存在がいたとなると、魔王よりもっと恐ろしい存在になる。しかも、瑛嗶はノーネームに所属しているだけであつて、その行動はノーネームの為というよりは、単独行動に近い。好き勝手に行動している分、半分魔王みたいなものだ。

今や、階層支配者である蛟劉であつても、瑛嗶が何か仕出かした時、上手く諫められる気がしない。

故に、彼は瑛嗶をノーネームから一旦除籍させた。とはいつても、ノーネームが今の七桁の外門から最低でも五桁の外門まで上りつめた時、その時は瑛嗶を再度ノーネームに配属しようと考えての行動だ。そしてそれは瑛嗶達にもすっかり伝達されている。

何故五桁なのかと言われれば、蛟劉もノーネームの戦力を加味して考えた結果、そのくらいまでなら普通に昇り詰めるだろうと考えているからだ。

十六夜は勿論、月の兎である黒ウサギ、瑛嗶によつて超強化された飛鳥や、地力でパワーアップを果たした耀、もつと言えばレイシアや五桁の実力を持つ魔王であるペストもいるのだ。これで五桁に行けないなど、考えられない。

では瑛嗶はどうなるのか？

その答えは、『魔王連盟』に対応する人材として蛟劉の傍に置かれるになった。まあつまり、一時的にサウザンドアイズに仮所属する事になったのだ。

で、現在ノーネームは今の七桁の外門から六桁の外門へと上がる為に、自分達の旗を作ることにした。だが、自分達の旗が無い以上、新しく作るしかない。

そこで思い至ったのが、三つ以上のコミュニティで作る連盟旗を作り、それを旗代わりにすること。

そして、その同盟を組む為に蛟劉が『階層支配者』を招集して行う会談、ノーネームとその同盟コミュニティを招待した。場所は、サラマンドラが管理する、かつて火龍誕生祭が行われた『煌炎の都』。

そこで、瑛嗶となじみを欠いたノーネームの面々は、『魔王連盟』——いや、『ウロボロス連盟』と呼ばれる、強大な魔王達を率いた組織の一端に触れることになる。



さて、ノーネームが煌炎の都へと向かっていた時、瑛嗶はというと、なじみと共に蛟劉の仕事を手伝っていた。

なんだかんだ知らないが、蛟劉が引き継いだ階層支配者の仕事というのは存外多かったようで、白夜叉を恐れて引つ込んでいた面倒な輩を抑えつける事も含めて、多くの仕事に見舞われているらしい。

瑛嗶が手伝うのは、面倒な輩を力で捻子伏せること。

瑛嗶はサウザンドアイズの庇護下に置かれてはいるものの、ある意味無所属の様なものなのだ。箱庭に居る限りはコミュニティに所属しなければならぬ故に、サウザンドアイズに名前を置いていただけであって、瑛嗶がサウザンドアイズに何か貢献しなければならぬという訳ではない。

「あー面倒臭いなあ……あのね？ お前らがそういう風に出しやばるなら、俺がこうして出張って来てんだっての」

瑛嗶はそう言つて、手をパンパンと二度叩き、溜め息を吐く。

その背後には、正座で項垂れている何処かのコミュニティ。瑛嗶の拳を一人一発落とされた結果、全員が『あ、これ白夜叉よりやべえわ』という感想を抱き、無謀な真似はしないことに決めた。これで数十件目である。

「全く……なんか知らないけど上の権限とかでノーネームから外されるし、そのせいでアイドル活動も出来なくなつたし、相手といつてもこんなチンケな弱小コミュニティしかないし……散々だわー、マジそういうトコ融通利かないのは何処に行つても一緒

かあ……めんどくせえなあ……魔王出て来いよ……ウロボロス連盟とかいう魔王詰め合わせセットがあるんだろー？ それ出て来いよっての」

「瑛嗶、それはなんというかこの辺滅ぶと思うんだ。いや瑛嗶が負けるとは思わないんだけどさ」

「はあ……まあいいや。帰ろうなじみ、もうじき蛟劉の開く『階層支配者』の会談があるんだし……せめてそこでくらはマシなの出てくれば良いけど……」

「……まあ、ノーネームの皆も来るんだし、そこそこ面白いことになると思うよ？」
だいたいいいけど、瑛嗶はあまり期待して無さそうな表情で、そう呟いた。

人類最終試練

それからしばらく。瑛嗶は階層支配者の集う集会の会場、煌炎の都へとやって来ていた。火龍誕生祭の会場だったあの場所、紅や橙の淡い光で満たされた、温かい都市だ。

そして、その道すがら、瑛嗶はサンドラに会った。アイドル活動が出来なくなった今、彼女は瑛嗶のアイドルではなく、サラマンドラのトップ、階層支配者である。無論、今回の集会にも階層支配者として出席することになっている。

「やあサンドラちゃん、あれ？ ちよつと縮んだ？」

「縮んでません！ お久しぶりです瑛嗶さん、ノーネームを抜けられたそうですね……」
「ああうん、なんでも俺が居ると下層コミュニティには強すぎるんだってさ。五桁まで上がったら戻って良いんだってさ」

「なるほど……それは先の長い話ですね……何かあれば、友人として力になりますよ！」
「わはは、ありがとうサンドラちゃん。大丈夫大丈夫、いざとなればノーネームの旗奪った魔王をぶつ殺して、適当な形で旗をノーネームに戻すから。そうすれば、十六夜ちゃんも居るんだし、すぐに中層まであがるさ」

瑛嗶がそう言うと、サンドラは引き攣った笑みを浮かべた。瑛嗶ならやりかねないと

思ったのだろう。実際、瑛嗶なら普通に殺しそうだ。例え一桁の猛者達を相手にしても戦えそうな人物なのだ、魔王を倒すなど片手間でやってしまおうだろう。

サンドラは、ペストの時にそれを思い知っている、五桁の実力を持つ魔王ペストを、ただの盥で弄んだ事実。聞く所によれば、巨人たちの襲来時も、巨龍を拳一発で消し飛ばしたとか。

「それで、今は何をされてるんですか？」

「まあ、蛟劉の付き添いというか……集会をしている間の街の防衛？　魔王連盟とかいう奴らが攻め込んで来た時、それを撃退、もしくははぶつ殺すのが俺の役目」

「そ、そうですか」

滅茶苦茶心強すぎると思うサンドラだった。どうやら、今回の集会は恙無く進みそう。とはいえ、瑛嗶が妙な気を起こさなければの話だが。彼の場合、ほんの気まぐれで敵を迎え入れる様な気もする。というか、そっちの方がやりそうで怖い。

だが、やはりこの男がいると、どうも緊張感が無くなって仕方ない。たった一人の存在だけで、こうも変わるのかと思うと、ソレが出来る瑛嗶はやはりすごいのだろうかと思う。

「魔王連盟、正式名称ウロボロス連盟……なんだか名前からして勝手に自滅していきそうないメージだね。まあ、頭を潰せばすぐに壊れそうだけど、あまり強いイメージが湧

かないんだよねえ」

「でも、白夜叉様によれば強力な魔王が加入しているらしいですよ?」

「ああ、マクスウエルの悪魔だっけ。境界を操る魔王だとかなんとか……んー、でも大したことなさそうだなあ……何処かのハンバーガーショップみたいじゃん?」

「もしかしてそれはマクド○ルドの事を言ってますか? マクしか合っていないんですけど!」

それ以前に何故マクド○ルドの事を知っているんだと突っ込むと、どうやら十六夜經由でジンに伝わり、ジンからサンドラに伝わったらしい。最近では、リリがその味を再現しようと、洋食好きのペストと共に画策しているとかなんとか。

「そういえば、魔王といえば蛟劉から面白い事を聞いたね」

「はい?」

「煌炎の都には、なにやら面白い魔王が封印されているらしいじゃないか」

「っ!? 何故それを!」

「いやだから蛟劉に聞いたって言ってんだろ耳遠いのか?」

「あ、はいすいません」

そう、瑛嗶の言った通り、この煌炎の都には、とある魔王が封印されている。それは、『ラスト・エンブリオ人類最終試練』と呼ばれる、人類の永遠のテーマ、難解な問題、例に挙げるとすれば、

それは、

閉鎖世界
デイストピア

絶対悪
アジッドカーハ

退廃の風
エンド・エンブレイトス

永久機関
コッペリア

人類が実現不可能とした、人類史上最大かつ難関とした問題。最古の魔王の総称であり、人類を根絶させかねない試練が顕現したものだ。かつては、白夜叉の『天動説』もその一つであったが、今は仏門に下ることとそれを抑えている。

煌炎の都に封印されし魔王は、その人類最終試練の内の一つ。絶対にして、正義など持っていない、最悪の魔王。その実力は三桁にも及び、人間の持ち得る全ての悪そのものの顕現が、この魔王。

その名は——『絶対悪』
アジィダカーハ

悪行を働くことを目的に生み出された、絶対の魔王である。

「その絶対悪とか名乗ってる中二病の魔王をね、いっちよぶつ殺してやりたいんだよねー。ほら、悪は滅ぼさなきゃダメじゃん？」

「いや、そう簡単に倒せるような相手では………ない、ん、ですよ？」

「今すっごい溜めたね。しかも最後疑問形かよ」

「いえ……瑛嗶さんなら倒しそうだなあと思いました………そういえば、瑛嗶さんの恋人が箱庭に来たと聞いているんですが、その方はどうしたんですか？」

「ああ、だからアジィダカーハの封印を解きに行つて貰った」

「何してるんですかあああ!!」

青褪めた表情で、涙目になりながらぼかぼかと叩いてくるサンドラに対して、瑛嗶は冗談冗談と苦笑しながら宥めるのだった。

とはいえ、瑛嗶はアジィダカーハと戦うつもり満々であることは、冗談ではないようだが。

問題児によって魔王連盟が着々と潰されていくようですよ？

煌炎の都、瑛嗶がやってきたこの都市の中……サラマンドラには魔王連盟の一員である所の、そして巨龍召喚時にも姿を見せた、リンと呼ばれた少女と、殿下と呼ばれる少年がいた。

サンドラとは面識があり、現在はジンとペストとサンドラの三人と共に、その二人も行動を共にしていた。

それというのも、現在瑛嗶のいないノーネームは階層支配者の集まる召集会に出る為に、煌炎の都へとやって来ているのだが、召集会が始まる前にちよつとした問題が起こったのだ。

つい先日から、煌炎の都では『神隠し騒動』が起こっているのだ。現在の時点で、既に三人もの被害者が姿を眩ませている。共通点と言えば、どの被害者も幼い子供であるというところか。

サンドラ達は、召集会が始まる前にさくつと解決しようというところで行動しているのだ。

とはいえ、ペストは『グリムグリモワールハーメルン』で行動していた時、魔王連盟の一員であるリンと殿下の二人と行動を共にしている。この二人が、ただの商店コミュニティと自称しているとおりの人物ではないことを知っているのだ。

だからこそ、何も知らないジンとサンドラとは違って、ペストだけは二人を警戒していた。

ちなみにサンドラ達だけではなく、十六夜もこの『神隠し騒動』解決へと身を乗り出している。まあ、面白半分で首を突っ込んでいるだけではあるが、彼が介入すれば百人力であるということは、現場で解決に出張っているマンドラ達も分かっていることだ。

まあそれはさておき、ペストはどうにかしてこのリンと殿下から逃げ切りたかった。ノーネームのメンバーの内、十六夜や黒ウサギと合流出来ればそれも出来る可能性がある。ほのかな可能性に賭けて、ペストは成り行きを見守っていた。

にも拘らず、

「あれ？ こんな所にチビが5人もいるー」

ペストはそのほんの僅かな可能性の中から、一番最高の奇跡と対面した。そう、ペス

トを隷属させ、現在はノーネームから離れている瑛嗶と、偶然にも遭遇したのだ。

「瑛嗶さん、また会いましたね」

「あれ？ サンドドラちゃんじゃん、あの後別れたのに良く会うね」

「ええ、客人を待たせていたので」

「客人？ ……その二人か？ て、あれー？ お前、この前のナイフ娘じゃーん元気？」

魔王連盟の活動は捗ってるー？」

「……………!!」

そして、リンは最悪の相手と対面したことに、青褪めた表情をしていた。ダラダラと嫌な汗が頬を伝い、目線は挙動不審に忙しく動いている。そしてその隣にいた殿下と呼ばれる白髪金眼の少年は、そんなリンの様子に首を傾げながら、瑛嗶をじつと観察している。

特に、魔王連盟の人間であると暴露されたのは痛い。ここはどう動くかがかなり重要になって来る。

「お、瑛嗶さん？ その、リンが魔王連盟……というのは……？」

「え？ だつてこいつこの前の巨龍の騒動で俺にナイフ刺してきた奴だよ？ 巨龍騒動

を裏で手引きしていたみたいだし、絶対魔王連盟の一員じゃん。え？ 何？ サンドドラ

ちゃんこいつらと友達になっちゃった系？ あはは、お前馬鹿だなあ、魔王連盟の奴ら

をサラマンドラの中に入れちゃったわけ？ どうしようもねえな！」

次々と重要事項を暴露していく瑛嗶。最早この場に留まるのは得策ではないと、殿下もリンも考えていた。

そろそろと後退し、そしてそのまま逃げようとした——瞬間だった。

「おいおい何処行くんだよ。俺は鬼ごっこは嫌いじゃないけど、そういうのはもつとルールとかはつきりさせてからやろうぜ」

「ツ……!?!」

既に瑛嗶は背後へと回り込んでいた。その逞しい胸板に、後退しようとした二人の少年少女はぶつかり、結局逃げられなかった。

だが、リンと殿下が驚愕したのは、背後を取られたことではなく、逃げようとした自分達——もつと言えばリンの逃走を、『阻止』したことだ。

リンのギフトは、概念的な距離を操る空間支配のギフトだ。彼女との距離を詰めることだけでも、至難の業であるというのに、まさか背後を取れるなどと、規格外過ぎる。

「で、まあ冗談はここまでにして、俺の今の役目は魔王連盟の邪魔なんだよねえ。とりあえず——」

瑛嗶がそう言つて言葉を切ると、リンと殿下はその一挙手一投足を警戒する。

だが、その警戒は無意味だ。何故なら、瑛嗶は動かなくとも二人の行動を拘束する事

が出来る。そのギフトは、例え概念的な距離を支配するリンのギフトでも、防ぐことは適わない。

「——二名様、捕獲な」

瑛唄はそう言つて、パチンと指を鳴らした。

瞬間、リンと殿下は電源が切れた様に意識を失う。覚醒状態の『反転』、意識がある状態を反転させて、強制的に気絶させたのだ。そして、瑛唄はリンと殿下の襟首を掴んで持ち上げると、どこからともなく取り出した縄で、二人とも亀甲縛りに縛り上げた。

「うん、中々良い感じじゃない？」

「……ねえマスター、流石に亀甲縛りは可哀想だと思ふの」

「いやでもほら？ 運びやすいし？」

「社会的には死ぬわね、その二人……」

「大丈夫大丈夫、人通りの多い所を歩くようにするから」

「社会的に死んだわね！ その二人！」

こんな感じで、人知れず魔王連盟の企みが潰されていく。

選択肢

さてさて、ここでの煌焰の都にて起こっている騒動、『神隠し騒動』の詳細について語るとしよう。

まずはこの神隠し、その元凶である魔王だ。その名は、『混世魔王』。そして、子供の放蕩心に付け入る悪魔だ。

虚度光陰という、相手の体感時間を制止させるそのギフトを使い、幼い子供を攫い、あたかも神隠しの様に姿を消してしまうその悪魔は、この煌焰の都にて開催される階層支配者の召集会にて『覆海大聖』を襲撃するつもりだった。

つまり、白夜叉の後継である蛟劉を、襲撃するつもりだったのだ。

そう、つもりだった。

だが、ノーネームの面々が煌焰の都にやって来た事で、その企みは失敗に終わる。十六夜という頭の切れる上に実力も高い存在が、混世魔王の存在に気が付いたのだ。そして、ギフトの詳細も一目で看破、その異常なまでの身体能力を駆使して混世魔王を追い詰めた。

原作では、いや正史というべきか、その正しい歴史では、十六夜は混世魔王を追い詰

めたものの、魔王連盟の助力によって逃げられてしまう。

しかしだ、今回、その魔王連盟のリンと殿下は、瑛嗶によって捕らえられている。そう、つまりはこの混世魔王を助ける魔王連盟が、行動不能においやられているのだ。

そしてそれは、混世魔王が十六夜によって打倒されることを示している。その背中に背負った『混』の文字は、十六夜の手によって掴まれ、引かれ、殴られた。混世魔王は絞劉を襲撃するまでもなく十六夜によって打倒され、拘束されたのだ。

瑛嗶がリンと殿下を捕らえたことによる連鎖反応が、此処に起こっていた。

そして、混世魔王も捕らえられ、殿下とリンも瑛嗶の手の内にある。そんな中で、魔王連盟のメンバーの内焔焔の都へやって来ているのは、残り二人……境界を操る悪魔、マクスウエルの魔王と、黄金の豎琴を所持するフードの女、アウラのみ。

だがそのどちらもが、瑛嗶の敵ではない。四桁の魔王『程度』の存在が、どうして瑛嗶に勝てるというのか。

故に、この都にて開催される召集会は今、開催するのになんの障害も無かった。なんの邪魔もなかった。なんの弊害も無かった。敵はおらず、現れても人外によって阻止される。

今、この焔焔の都は箱庭の中で最も——安全だと言って良かった。

「そういう訳で、お前さん達……話を聞かせて貰おうじゃないか」

そして、瑛嗶はそんな中自分で取った宿の一室で、殿下とリンにそう話し掛けていた。真面目な話かと思えば、殿下とリンは亀甲縛りで天井から吊るされた状態故に、それほど真剣な表情に見えない。

「……」

「……」

「おいおい、何か話せよー、殺しちやうぞ?」

「っ……お前はなんだ? リンのギフトを超えて、尚且つ一瞬で俺とリンの意識を断つた……こんな下層に居て良い存在じゃないだろう?」

瑛嗶の言葉に、殿下は睨みつけるように視線を送りながらそう問う。

だが、瑛嗶はその問いに対してゆらりと笑うだけ。そして、ベッドに腰掛けながら淡々と述べる。

「俺はただの人外だよ、下層にいるのだから俺の勝手だろう。ほら、マクスウェルの魔王だって四桁の癖に下層に降りて来てるみたいだし、正直その問いにはなんの生産性もない」

「っ……俺達をどうするつもりだ?」

「んー……如何して欲しい？　ぶつ殺す？　拷問に掛ける？　洗脳する？　寝返らせる？　魔王連盟のことについて吐かせる？　ああ、そうだ——ギフトを全部、根こそぎ消してやるのも良さそうだ」

「ッ!？」

ギフトを消す、それは瑛嗶にとつてかなり容易だ。『ギフトを所持する』を反転させれば、『ギフトを所持しない』という事象の反転が完了し、その対象はギフトを失う。数も、質も関係ない。持っているギフトを全てだ。

殿下も、リンも、無力な少年少女になる一歩手前、崖っぷちに立たされていた。それは、瑛嗶の気まぐれで突き落とされる、本当に綱渡りの状態。

選択を間違えればこの先の未来は無いと、幾らなんでも理解出来た。だが、舌戦を得意とするゲームメイカー役のリンは、まだ気絶中。どうするべきか、と思考を加速させる。

「……………そうしたいのか？」

「いや別に？　俺はどれでも良いよ、お前が選べ」

「なっ……………選べ、だと？」

「そう」

殺害、拷問、洗脳、裏切り、情報漏洩、恩恵消失、好きな未来を、好きなように選択

すると良い。瑛噎はそう言って、ゆらりと笑った。

「ぐ……」

殿下と呼ばれた少年は、その選択肢の中で最もマシな物を考えるが、殺害や恩恵の消失は論外、情報漏洩など、魔王連盟から殺されるし、裏切りも同じ。残るは洗脳と拷問だが、拷問は内容が分からない以上死の可能性は排除出来ない。かといって、洗脳というのも不味い。魔王連盟と対峙した時、洗脳だからといって助けられる可能性は半々だ。

どの選択肢も、地獄に繋がっている。

「——他に、選択肢は無いのですか？」

「んっ。」

「リ、リン……!」

するとそこで、リンが起きた。どうやら途中から話は聞こえていたようで、途中介入でも話について行けるらしい。

そして、提示された選択肢の中から最善を得ようとしていた殿下とは違って、リンは新たな選択肢を模索した。瑛噎はそんなリンに対して、ゆらりと笑う。

「今なら、アジィダカーハの封印の解除を条件に解放してあげること出来るぜ?」

新たな選択肢は、死よりも理解不能なものだった。

設定、物語、キャラクター

瑛嗶が密かに暗躍している頃、煌焰の都では大きなギフトゲーム、『造物主達の決闘』が行われていた。

そこには、以前のリベンジをするべく出場した春日部様に加え、同盟を組む相手であるウイル・オ・ウイスプからの贈り物を貰った飛鳥が出場していた。そして、そのウイル・オ・ウイスプのトップである生死の境界を操作するギフトを持つ、ウイラザグニフアトウスも、その参加者の中に入っている。

飛鳥が手に入れた新たなギフトは、『アルマティアの城塞』と呼ばれる、山羊の神獣の恩恵。

本来ならば、飛鳥の霊格では従える事の出来ないギフトではあるが、ウイラの生死の境界を操る力をちよちよいと使って、その霊格を飛鳥が従えられる程に劣化させ、飛鳥の支配下に置いたのだ。

そして、その劣化分は飛鳥の『極大化』によって元の力を取り戻すことが出来る。実質、神獣を神獣のまま裏技で従えたという訳だ。

実力のある三人が同じギフトゲームに参加して、死闘を繰り広げようとしている。

だがその裏で、琰嗶の解放した殿下とリンは、混世魔王をサラマンドラの牢屋から早々に解放。十六夜達の動向を見張りながら、アジィダカーハの解放を目的に動いていた。

解放された故に、大人しく琰嗶の言う事を聞く必要はないのだろうか、殿下達が大人しく言う事を聞いている理由がある。

それは、どれほど逃げようと逃げられないお目付け役がいるからだ。

「ほらほら、早くアジィだかヒラメだか知らないけど、さっさと解放してよ」

「むう……色々と準備があるんだ、黙っててくれ」

「へえ、そんなこと言つて良いのかな？ 勢い余つて殺しちゃうだろ」

そう安心院なじみである。リンが幾ら距離を操作しようと、時を止めるギフトの前には無駄。概念や時空間每停止して、距離は全て埋められる。

というより、時間に干渉するギフト故に、時間と空間は表裏一体、空間にもある程度干渉出来るのだ。そうなれば、距離など空間の中の一部として簡単に埋められる。リンのギフトの天敵とも言えるだろう。

しかも、霊格で言えば神格を持つ存在や、神獣、並大抵の魔王が束になつても適わない格上。長い年月を生きているだけではなく、様々な世界を渡つて来た事で、多くの因果をその身に宿した少女だ。

文字通り、格が違う。

「それにしても、君達も災難だったねえ。まさか瑛唄に偶然会っちゃうなんて、しかも敵サイド……わっはっは、壊滅的な負けフラグが立ってるね」

「……あの男やお前みたいな人外が、こんな下層に居ること自体がおかしいんだ。持っているギフトも、俺の理解が及ばない規格外な代物だしな」

なじみの言葉に、殿下と呼ばれる少年は齒痒そうにそう漏らす。

なじみは異世界の——というより、最早物語の壁を超えた向こう側の力。スキルと呼ばれる、ギフトとは違う全く別の異常と過負荷の力。

瑛唄はそれ以前に、本当にこの物語を含めた、数多くの物語を統括管理する、唯一絶対の神によって与えられた、言わばこの世界のギフトと呼ばれる力を大きく上回る——それこそ、あらゆる物語において上位の力だ。

殿下と呼ばれた少年に……いや、この物語に住まう全ての登場人物に理解出来る筈がない。

「まあ、一つだけ言うのなら……僕と瑛唄の力は君達とは一線を大きく画す力つてこと。ああ、ついでもう一つ言わせて貰えば……君達に瑛唄は倒せない。絶対にね」

「……どういふことだ？」

なじみの言葉に、殿下だけではなく、周囲で会話の流れを見守るリンや混世魔王、ア

ウラといった面々も聞き耳を立てる。

それを確認しながら、なじみはつらつらと語る。

「もしも、この世界が漫画の世界だったとしたら。僕は僕の生まれた世界で本気でそう思っていたことがある。いや、というか確実にそうだろうね」

「は？」

「世界は全て全く別の……というより、次元の違う上位の世界によって生み出された空想の産物だね。分かり易く言うのなら漫画や小説の世界だ」

「……」

「この世界でいうところの神話も、ギフトも、箱庭も……そして、君自身や、君の送ってきた過去や記憶も全て、架空の物語上の設定でしかない訳だ。

そして、その物語の中には物語というだけあって、主人公という存在は必ずいる」

なじみの話は荒唐無稽で、殿下達には簡単に信じられない様な話だった。しかし、この人外の言葉には何故か奇妙な信憑性があり、信じてしまいそうな確信があった。

もつと言えば、否定出来るだけの材料もなかった。

「……それが、あの男だとも言うつもりか？」

「そうだよ、瑛腹はこの世界の物語の中で主人公の属性を持ったキャラクターなんだよ。そして、こんな謎解きとバトルが入り混じった様な世界で言うのなら、『必ず勝利するこ

とが決定づけられたキャラクター』だ」

モブキャラが偉く難しい難しいと嘯し立てる謎を、いとも簡単に解く。

設定上物凄く強いとされるキャラクターを、あっさり倒す。

権威と権力を持っている、全知全能の様なキャラクターに対し、マイペースに対応する。

雑魚は全て主人公の為の踏み台で、強者は主人公を飾る為のアクセサリー。

そんな横暴が許されるキャラクター。それが主人公。

最終的な勝利を決定付けられた、あらゆる最強の定義の中の一つに該当する、その世界の最強のキャラクター。

心優しく、人の為にどこまでも強くなれる最強の主人公。

悪逆非道で、復讐の為に大きな力を振るう最強の主人公。

楽天家で、どこまでも自分勝手に、マイペースな最強の主人公。

そんな数ある最強の主人公の内の一人。

「瓊瓊は主人公だ。勝利を決定付けられた、最強のキャラクターだ。だから、君達は勝てないんだよ。どう足掻こうと、それがこの物語で決められた——」

なじみはそこで一旦言葉を区切る。そして、クスツと笑いながら続けた。

「——最初の設定なんだからさ」

解放の為に

混世魔王を救い出したのは、アジィダカーハを開放する為に必要な準備をする為だった。

殿下達は、最早瑛嗶に出会ったことで当初の目的通りに行動出来なくなっている。作戦は失敗したと言っても良いだろう。失敗した上で、更なる失敗を重ねさせられようとしている。

なにも準備が整っていない。そんな状態で、ただアジィダカーハの封印を解くなど、愚の骨頂。かの悪の化身は殿下達の味方という訳ではないのだ、封印を解けば確実にその被害に巻き込まれる。

焔焔の都に集まる全ての恩恵や財産、人材を奪取しようと画策していたというのに、瑛嗶一人のせいで台無しだ。

しかも、お目付け役として人外の少女が付いている。お手上げにも程がある。逃げる事も出来ない、戦っても負ける。どうしようもないのだ。

現に一度、殿下はなじみに攻撃を仕掛けて、何も理解出来ない内に地面に組み伏せられていたのだから。

「……で、準備は進んでいるのかな？」

「ああ……とりあえず混世魔王がサンドラを神隠しに遭わせて連れてくる。まあ目的はサンドラじゃなくて、サラマンドラの持つ『聖海龍王の角』だけだな」

「ふーん、サンドラちゃんの安全は保障するのかな？」

「さあな、そこまではお前らに何も言われてない。どうしようがこっちの勝手だ」

だから、殿下達に出来る最後の手段は、アジィダカーハを封印から解放するという行動の中で、出来る限り恩恵や財産を奪い取ることに。

瑛嗶から言われたのは、アジィダカーハの解放のみ。それさえこなすことが出来れば、その途中で恩恵や財産を奪ったとしてもルール違反ではない。

屁理屈かも知れないが、言葉による契約で、そのみに強制力はないのだ。これは何も言わなかった瑛嗶が悪い。

だがしかし、瑛嗶とてソレに気が付かない訳ではない。気が付いて尚何も言わなかったのだ。

奪いたければ奪えば良い。瑛嗶にとって、この煌焔の都にある全ての財産が無価値でなんの興味もない代物なのだから。

それに、奪われた所で瑛嗶にはなんの支障もない。

なじみの視線を受けながら、殿下は瑛嗶との会話を思い出す。



「……アジ、ダカーハの封印を解く……？ お前、それ本気で言ってるのか？」

「本気も本気だよ。まあ、この眼で悪の化身とまで言われる魔王を見てみたいってのもあるけど、なにより『悪の化身』を名乗ってる奴がいるなら、指差して笑ってやりたい」
瑛嗶の目の前で亀甲縛りで縛りあげられた殿下とリン。自分達の解放の条件が、アジ、ダカーハの解放だと聞いて、驚愕に目を見開いていた。

瑛嗶はゆらりと笑いながら、殿下を見据える。その青黒い瞳に見られると、何もかも見透されている気分になる。思わず、目を逸らしてしまう。

「まあ……それだけが目的ってわけじゃないけど、お前らが解放される条件はそれだけ……どうする？ 変態チビと変態チビ」

「どっちも変態チビじゃね？」

「亀甲縛りで縛られてる奴なんて皆変態だろ。そんでお前らチビだし」

「縛ったの貴方ですよ？ 縛った方も変態じゃないんですか？」

「男は皆変態なんだよ」

「……………」

瑛嗶の言葉に、リンは押し黙ってしまった。

そして考える。瑛嗶の目的を。

アジールダカーハを解放することで、この男になんの得がある？ 情報によれば、この男は今ノーネームではなく、サウザンドアイズの庇護下に置かれているらしい。覆海大聖の補佐役であるとするならば、魔王の開放など許す前に止めなければならぬ立ち場の筈。

そんな彼が、何故わざわざ悪の化身、人類最終試練とも呼ばれる魔王を復活させたいのか？

—— 待てよ？

「……一つ、聞いても良いですか？」

「なんだ？」

「貴方は、何故この煌焔の都に『悪の化身』たる魔王が封印されている事を知っているんですか？ 貴方は元々ノーネームに所属していた筈、サラマンドラとはそれほど交流も無い筈です。それなのに、魔王が封印されていると知っているならいざしらず、その魔王の詳細まで知っているなんて……」

そう、瑛嗶が封印されている魔王の詳細まで知っているのはおかしいのだ。

例え、覆海大聖から魔王の存在を知らされていたとしても、あの男の性格上その詳細

まで教えるなんて真似、しないだろう。教えれば、瑛嗶がどんな行動を起こすか分からないのだから。

現に、瑛嗶が蛟劉から聞いていたのは、『煌焔の都には、魔王が封印されている』ということだけだった。

ならば何故瑛嗶がその魔王の詳細を知っているのか？

「……貴方、アジⅡダカーハの封印の間に行ったんですね？」

「……察しが良いね、その通り。俺はアジⅡダカーハの封印の間に行った。まあ、最奥までは行けなかったけどね、どうやら最奥に行くには何かしらの条件を整えないといけないみたいだ」

でも、と瑛嗶は続ける。

「あの場所には聖海龍王の言葉でこう書かれていた」

——星の地図を紐解けば、星の海は三つに碎けるだろう。

凶星は輝く事を望まず、災厄を縛りこの地に眠り続ける。

「まあこれだけじゃないけど、凶星つてのは人類にとっての悪影響を及ぼす天体。つまりは人類にとっての『悪』だ」

「……」

「そして、こんな大都市を使つての大規模な封印に、聖海龍王とかいう偉そうな奴が危険視してるんだ……並の魔王じゃない。となれば、当て嵌まるのは人類最終試練、つまりアジィダカーハつてことだ。まあ、確証を得たのはお前らの反応からだけだな」

リンは考える。

この男は、封印の間に行つてゐる。だから魔王の正体を知ることが出来た。

そして自分でやるのではなく、リン達に封印解除をやらせる。

そこには何か理由があるのではないか？

考えても、答えは出ない。思い当たるといえば、アジィダカーハと戦つてみたい、という突拍子もない考えや、魔王連盟の策略を全て叩き潰す為に、自分の実力を敢えてアジィダカーハを使つて知らしめる、といったところだが……リンにはそれだけだとは思えなかった。

「……分かりました、封印を解きます」

「リン？」

「殿下、どちらにせよ選択肢はないです。此処は無事に解放される道を選びましょう」

「……ああ、分かった」

いくら考えたとしても、結局その答えは出ない。なんにせよ、その選択肢以外は全て

地獄なのだ。そうする他に、選択肢はなかった。

◇

「……ん、戻ったか」

「ああ、サラマンドラのお嬢ちゃんを攫って来たぜ」

思考に耽っていた殿下の下へ、サンドラの身体を乗っ取った混世魔王が戻って来た。無事に聖海龍王の角も回収出来ている。

これで、全ての準備は整った。

「……それじゃ、地獄の釜の……蓋を開けよう」

殿下は、目の前にいるリンや混世魔王、マクスウエルの悪魔、アウラに向かってそう告げる。

背後に佇む、人外の少女は、不敵に笑みを浮かべた。

善悪と愉快

地獄の釜は開かれた。

殿下を始めとして、瑛嗶が一度捕らえたリン、そしてマクスウエルの悪魔、サンドラの身体を乗っ取った混世魔王、アウラといった面々が、聖海龍王の角と、ジンや十六夜達が命に代えても取り戻したかった——一枚の旗を使って。

赤い布地に金色の縁、陽の昇る丘と少女を象った、この箱庭にたった一枚しかない唯一の旗。過去、人類史上、最多の魔王を倒したコミュニティの旗。

その旗の輝きを持って、最悪最凶、悪の化身である、人類最終試練の『悪』の魔王、アジィダカーハは復活した。

殿下達は逃げる。アジィダカーハを復活させて、逃げた。あの魔王は味方ではないのだ。全ての存在に対する絶対的な悪。当然、自分達にもその圧倒的力の矛先を向けてくる。

封印の間が崩壊していく。リンの距離という概念を操作する空間操作のギフトを

使つて、殿下達は逃げて行く。

——だが、逃げようとする殿下達は、瞬間。その動きを止めた。

否、止められた。時間という概念ごと、その動きと思考と全ての動きを止められた。

「復活復活、これは随分とまあ……素晴らしい物を復活させたもんだ」

そして、その横を擦れ違う様に通り抜ける人影。殿下達の横を通り過ぎ、崩壊寸前で停止している封印の間へと足を踏み入れる。

そこには、一人の女が立っていた。時間を止めた張本人、安心院なじみだ。彼女の手には封印を解く鍵であつた、一枚の旗があつた。

「やあ瑛唄、目論見通りだね」

「ああ、これがウサギちゃん達の旗かあ……随分とまあ古いね」

「仕方ないよ、魔王の手にあつたんだから、大して大事にされていなかったんだろう」

瑛唄の目的。それは、リンと殿下が探ろうとしていたことでもある。

その目的は、アジィダカーハの封印の解除と共にこの地に姿を現すであろう、ノーネームの旗を手に入れること。聖海龍王の角も、殿下達も、アジィダカーハも、その為の駒だった。

瑛唄はこの旗を手に入れるために、この封印を解こうとしたのだ。

「はい、これ」

「ん、確かに」

瑛嗶は旗を受け取り、ゆらりと笑う。ノーネームの旗、ジン達を取り戻そうとしていた旗、そこにはノーネーム本来の名と、その旗印があった。

だが、瑛嗶は今ノーネームではない。この旗を手に入れた所で、ノーネームに戻って来るわけではないのだ。更に言えば、この旗の所有権はまだ瑛嗶にはない。旗はギフトゲームで奪われた物、ならば同じギフトゲームで奪い返さねばならない。

だが、

「反転っ」と

所有権が誰かにある状態を反転すれば、旗の所有権が誰にもない状態になる。そして、それを瑛嗶が手にしているということは、この旗の所有権は瑛嗶に依属することになる。

正真正銘、ノーネームの旗は瑛嗶のものとなった。

と、そこへ――

「……貴様らか、この世界の時を止めているのは」

そんな声が掛かった。

「ん?」

「っ……!?!」

瑛喰はふいっとその声の方を向き、なじみは驚いた様にその声の方を見た。

そこには、三つの頭を持った白い龍がいた。不倶戴天の悪の旗を身に纏い、その巨大な身体で瑛喰達を見下ろしている。

その身体はなじみのギフトで停止しているようだが、どうやらこの停止の強制力の中でも、意識だけはその力の拘束から逃れているらしい。

「なじみの時を止めるギフトの中で動けるんだ? 中々面白いじゃないか、一応原初の生物のギフトだぜ?」

「フン……例え原初の生物であろうと、そこに命がある以上悪は存在し、正義は存在する。この私の霊格とて負けてはいない」

アジィダカーハは悪を顕現した魔王。なじみが生物であり、自我がある時点で、悪と正義もそこに生まれたということ。

故に、6兆年の年月を生きようが、それと同等の因果がアジィダカーハにも絡んでくるのだ。おそらくはなじみの方が霊格が高いのだろうが、拮抗している以上、全てを停止させることは適わなかったらしい。

「それで? 復活した気分はどうよ? 悪の化身、アジィダカーハ」

「復活して早々にこのような拘束に遭うなど、良い気分ではないな」

「そりやそうだ……まあ俺としては目的を果たしたから拘束自体は解いても良いけど……解いたら襲ってくるだろ？」 お前」

「無論だ。私は不倶戴天の悪の化身、アジッダカーハ！ 悪業を為すことを目的に生まれた魔王なのだから！」

アジッダカーハは、そう言つて瑛嗶を睨みつける。そして驚くべきことに、少しづつその巨大な身体を動かしているのだ。停止の恩恵に反抗し、その拘束から力づくで逃れようとしている。

なじみの時を止める恩恵を、その悪の御旗を持つて砕こうとしていた。

「はあ……仕方ないなあ、それじゃなじみ……時を再開させてくれ」

「な……いいの？」

「いいよ、元々俺はこの旗を取り戻すのが目的だったんだし……目的達成のついでだ。それに、『悪』そのものであるコレをぶつ殺したらさ……何をしたつて俺が正義つてことになるんだろ？」

なじみは、瑛嗶の言葉に眼を見開いて驚愕した。

つまり、この怪物を殺すと言っているのだ。瑛嗶は。

瑛嗶は反転することで時間の停止した世界でも動くことが出来る。でも、アジッダ

カーハの霊格はなじみと同等……つまり瑛嘎よりも上なのだ。神から恩恵を受けていることから、瑛嘎には多少神格があるが、アジィダカーハも悪と善の二元論から世界の理を解くという、得意な宇宙観を持つ神群の一派、つまりは神格を持っている。はつきり言えば——瑛嘎の反転のギフトは、効果を為さない可能性が高い。

「フン……貴様が私を倒すと？ 随分と威勢が良いな——面白い」

「ソレは俺の台詞だよ。俺の足の下に屍として這い蹲れ、魔王アジィダカーハ」

だが、瑛嘎にとって形成が不利なことは特に問題ではない。久方ぶりに、まともに勝負が出来そうだと思ったからこそ、こうしてゆらりと笑っている。

人外と悪の化身の戦いが、此処に始まろうとしていた。

火蓋を切るのは、時間の再開。

勝った方が悪であり、勝った方が正義になる、善悪が複雑に絡み合った戦いが——この煌炎の都で、時間の流れと共に始まる。

第三者から

何かと何かがぶつかった様な、そんな音がした。

そしてその音から数秒遅れて、煌煌の都にいた十六夜達が感じたのは、まず大きな地震。次に、凄まじい衝撃の嵐。自身の身体が吹き飛んでしまいそうなのを、必死で堪えて、それが収まった頃に衝撃波が飛んで来た方向を見た。

そこには、箱庭には在ってはならない存在の姿と、ノーネームが失ってしまった存在の姿があった。

衝突し、お互いがお互いの命を奪おうとしている。

片や、三つの頭を持った龍であり、巨大な身体と圧倒的威圧感を持った悪の化身。

片や、人間の姿ではあるものの、その内には人間とは思えない規格外を秘めた人外。

この二つの存在の衝突は、ぶつかるごとに衝撃を撒き散らし、建物を吹き飛ばす。ノーネームの面々は驚愕し、動きを止めていたが、それは他のコミュニケーションも同じ。進行中だったギフトゲームも、開催していたサラマンドラも、力のあるコミュニケーションですら、同じ様にその戦いを見て、動きを止めていた。

止めざるを得ないだろう、何故なら、この場に居る全員が知っているのだ。その二つ

の存在を。

不倶戴天の悪の化身。人類最終試練に数えられる最悪の魔王——アジィダカーハ

箱庭にやって来て、巨龍や黒死斑の魔王を弄んだ超新星の人外——瑛嗶

どちらが勝つのかなど、誰にも予想が付かない。

アジィダカーハの名は、誰でも知っている。その力がどれ程強いモノなのか、どれほどの脅威なのか、どれほどの物を奪って来たのか、箱庭全土に伝わっている。本来なら、人間が一人で倒せるほど軽い存在ではない。

だが、瑛嗶は本当に規格外なのだ、この箱庭においても。

アンダーウッドに現れた巨龍を片手で抑えつけ、巨人族の軍勢を一瞬で全滅させ、拳の一撃で巨龍を消し飛ばした。更に言えば、それ以前に黒死斑の魔王を盥一つで持て遊んだのだ。しかも、今はサウザンドアイズのトップ、蛟劉のお助け役の様な立ち場に収まっている。

もしかしたら、という期待を抱かせるだけの功績を立てているのだ。

この場合全てのコミユニティが勝って欲しいのは、間違いなく瑛嗶だろう。悪の化身を

応援する者など、それこそ魔王に与する存在しかない。

だが、問題なのは何故此処にアジィダカーハが居るのかということだ。

サラマンドラの一員なら知っているが、アジィダカーハは封印されている筈。それが何故――

「いや、それは問題じゃねえな……黒ウサギ！」

「はい！」

「今すぐこの場に居るコミュニティを避難させる！ ギフトゲームは中断だ！」

「分かりました！」

――だが、十六夜は真っ先に行動に移した。

黒ウサギにギフトゲームを中断させ、全コミュニティの非難を優先させる。どうしてこうも、自分達の行く先々で魔王に出会えるのかと、内心少し高揚していた十六夜ではあるが、魔王打倒を掲げている自分達のやる行動は一つだ。今は非戦闘系コミュニティを避難させ、魔王の即時打倒に力を注ぐべきだ。

そして、十六夜の動き出しにサラマンドラや開催側のコミュニティが動き出す。黒ウサギの行動の意図を察知し、避難誘導を援助する。

だが、混世魔王の仕業でサンドラは行方不明だ。サラマンドラは困惑していて行動があまり迅速ではない。そのせいもあって、避難が若干滞っている。

十六夜は密かに舌打ちした。

「これはやべえな……このままだと瑛嗶とアレの戦いの余波がこつちまで来ちまう……！」

「なんや凄まじいモンが出てきとるなあ」

「っ！ よう覆海大聖さん……唐突で悪いが、どうする？」

「任せとき、余波は僕が対応する。避難は最低でも数分あれば完了するやろ、まずはあの魔王、アジッダカーハをどうにかせんと……瑛嗶が戦つとるようやけど……僕は勝算は正直五分やと見とる……まずは誰がああ魔王の封印を解いたか、やけど……」

十六夜の下に、蛟劉がやって来た。

そして、その力を持って戦闘の余波を全て己が恩恵にて齎した水の荒波によつて防ぐ。飛んでくる家の破片や、瓦礫も、水を操作して叩き落す。

更に、その状態でこの状況の原因、封印を解いた犯人を考える。

目の前には、封印されたばかりの魔王と何故か戦っている瑛嗶。思考の余地がある要素はそれだけしかない。そこから導き出される結論は——

「……瑛嗶じゃね？」

「その可能性が否定出来んのが難儀やなあ……僕、瑛嗶にアジッダカーハの存在を教えたり」

「お前のせいじゃねえか」

「それを言われると言い訳の余地もないなあ」

瑛嗶がやったんじゃないか？ というモノだった。否定も出来ず、動機など面白そうだからの一つで納得出来る。瑛嗶はそういう男だ。

「でもまあ、もう一つの原因としては……魔王連盟の手によるものか」

「んー、混世魔王も焔焰の都の中に居たようやけど、その可能性はないと思うで」

「なんでだ？」

「瑛嗶には魔王連盟の妨害を頼んでおいたからなあ」

「あー……それじゃ瑛嗶だ、確定だろコレ」

「また厄介なのを箱庭に呼んだなあ、月の兎達は」

「否定はしない」

十六夜と蛟劉は、そんな会話で瑛嗶が犯人だと確信する。そして、数秒の沈黙の後、アジィダカーハと瑛嗶の戦いを見ながら、溜め息を吐いた。

悪は滅びる

アジィダカーハと瑛嗶の戦いは、かなり熾烈を極めた。

まず、予想通り瑛嗶の反転のギフトはアジィダカーハに対して効果が薄かった。それこそ、全力で使っても意識を奪う事や、生死の反転といった物は一切出来なかった。

対して、アジィダカーハは神霊級の分身を傷口から生み出す事が出来、更には千の魔術を行使する事も出来る。しかも、対巨龍線の時の様に、レイシア同様自身の影を使う事も出来る。身体能力による近接格闘の瑛嗶に対して、アジィダカーハは手札が多いのだ。

しかし、瑛嗶の拳による打撃技は、傷口を作らない。神霊級の分身を生み出す為の傷口が出来ない故に、アジィダカーハに対して相性は良かった。

魔術も、影を操った死角からの攻撃も、瑛嗶の危機察知能力をもつてすれば躲すのは簡単。つまり、最終的にはアジィダカーハと瑛嗶の戦いは肉体を使った超近接格闘に持ち込まれる事になったのだ。

「うらっ！」

「グッ………！ はああああ!!」

「ッ………！」

瑛嗶の拳がアジィダカーハの爪を砕く。呻き声をあげるアジィダカーハだが、もう一方の手で瑛嗶を押し潰す。瑛嗶もそれを受け止めながら、若干歯を食いしばった。

瑛嗶の今持っているギフトや身体能力は、一見チートの様に見えるが、実はそうでもない。反転の力だつて、靈格で負けてしまえば機能しない上に、身体能力でも付いて来れる相手となれば、最早打つ手がなくなつてしまう。

後はもう、技術と経験で補うしかない。

だが、瑛嗶の場合はその技術と経験自体が一つの武器に成り得る。

「おつりやあああー！」

「ウグッ……あああああ!!?」

現に、アジィダカーハの押し潰すように放たれたその手を受け止めた瑛嗶は、逆にアジィダカーハの身体を持ち上げたのだ。これは、ただ単に筋力が凄まじいからではない。相手の力を逆に利用することで、大して力も使わずに持ち上げる事が出来たのだ。

そして、瑛嗶は逆さまになったアジィダカーハを空高く放り投げ——そのアジィダカーハに向かって跳躍した。

「まずは——その三つの頭、一個に纏めてやるよ」

「ッ!?!」

瑛嗶はそう言うのと、アジィダカーハの三つ首の頭を——一つ引き千切った。

「——ギッ……ガアアアアアアアアアア!!?!」

「もう一丁!」

「グッ……!!?!」

そして、返す刀でもう一つの首を掴み、地面に叩き付けることでぐしゃあつ! と潰した。三つあつた龍の頭が、たつた一つだけになる。アジィタカーハに対して、此処まで酷い損傷を与えたのは恐らく……瑛嗶が最初だろう。

だが、アジィダカーハも唯では終わらない。無くなつてしまった二つの首の断面から、神霊級の分身が生み出される。これが、アジィダカーハが封印という手段でしか対処出来ない魔王とされた原因。幾ら傷付けても、そこから分身が生まれてくるのだ。

これが、何よりの強みでもあつた。

しかし、

「こいつには効くだろ」

「何っ!?!」

瑛嗶の反転が、ここで作用する。分身は、あくまで分身、アジィダカーハではないのだ。その一部だというのなら、霊格は瑛嗶の方が上——!

分身に対しては、反転のギフトが効果を及ぼすのだ。

分身の存在を、『在る』から『無い』へと反転。生まれた瞬間から消滅させた。

それを目の当たりにして、アジィダカーハは驚愕の声を上げる。まさか、この分身を一瞬で消滅させるとは思っていなかったようだ。本人に瑛嗶のギフトが通用していなかったことから、瑛嗶のギフトがどんなものを理解していなかったのもあるのだろう。

「貴様……何をした？」

「分身を消した」

「そういうことじゃない」

「うん分かっている」

アジィダカーハは、なんとなく勘付いていた。目の前に居るこの男は、自分を打倒し得る存在だと。先程から、傷口から生み出した分身が、何度も何度も生み出しては消滅させられている。

この分では、魔術も影も、避けてはいるがその気になれば簡単に消滅させられるのだろう。不倶戴天を掲げる悪の魔王である自分を倒し、正義の御旗を立てる者が、遂に現れたのかもしれないと、そう思った。

「ふはは……だが強いな、これは私が敗北を喫することもあるやもしれぬな」

「いやあるやもしれぬじゃねえよ、あるよ」

「大した自信だな……だが、その自信も理解出来る。その実力ならば当然か」
「とりあえずぶつ殺すから、とつとと死んでくれ」

そして戦いは再開される。アジィダカーハの爪と、瑛嗶の拳が衝突し、衝撃波と共に地面にクレーターを作った。盛り上がる地面と共に、巻き上がる土煙が周囲を全て吹き飛ばす。

そしてその土煙が晴れた時、瑛嗶とアジィダカーハの拳と爪が、更に衝突する。今度は土煙が巻き上がらない。巻き上がるだけの土煙が、初撃で全て吹き飛ばされたからだ。

何度も、何度も、ぶつかっては衝撃波を撒き散らし、周囲の地面に亀裂を入れる。煌焔の都の建造物は崩壊し、瓦礫の山と化する。

拳が龍の肉体を叩く。爪が人外の拳を弾く。

「おつるあああ!!」

「はあああああ!!」

拳と爪が衝突し、そして――

「がふっ……!!?」

悪の魔王の爪が全て、音を立てて碎かれた。更に、爪が碎かれた事で怯んだアジィダカーハの顔を、瑛嗶が殴り飛ばした。全力且つ、巨龍にした様に『衝撃透し』を使っ

た拳。結果、悪の魔王の心臓が破壊された。

残った頭の口から、大量の血液が吐き出された。

「反転」

「ぐううううう……!!」

そして、その心臓部から生み出された分身が、瑛嗶の反転で消滅する。

「俺の勝ち、でオーケー？」

瑛嗶はゆらりと笑いながら、崩れ落ちていくアジィダカーハを見て、そう言った。

人外の考え

アジッドカーハは倒された。

人外の名の下に、いや——今の人外はとある旗を保有している。

そう、かつて人類史上魔王を最も多く倒したコミユニティの旗を持っている。つまり、つまりだ、その事實は新たな事實を齎す。

——かつてのノーネームの旗が『人類最終試練の魔王』を倒した。

史上最多の魔王討伐コミユニティは、その猛威を人外の力の下復活したと思う者も出てくるだろう。事実、その旗がまた魔王を討伐してみせたのだから。

かつて、最強を誇ったコミユニティが、力を取り戻しつつある。それだけで、魔王連盟は勿論、上層のコミユニティの面々からは注目を浴びる。

瑛嗶は、アジッドカーハとやり合う前に、これを狙っていた。

上層からの注目を浴びるのであるこの状況を創り出すことで——その状況で続々と功績を立て、ノーネームの名前を一気に上昇させるつもりなのだ。瑛嗶は。

旗を取り戻せばこっちの物だ。瑛嗶はゆらりと笑って内心でそう呟く。

これが人外。

これが瑛嗶のやり方。

手っ取り早く、かつ最速最短ルートで全てを搔っ攫う。

「だからアジールダカーハ、お前の登場は都合が良かったよ。ずっと狙ってたんだ。この旗が強力な魔王と共に俺の前に現れるのを」

ずっと狙っていた。虎視眈々と、ずっと狙っていた。瑛嗶が今まで大して動かなかつたのは、ノーネームの為に動かなかつたのは、一発逆転のチャンスを狙っていたからなのだ。そう、この状況を。

だから十六夜達をおちよくりながらも育ててきた。ノーネームを強化する為に多少ふざけて注目を集めながらも、戦力を集めていた。

ペルセウスを出来る限り圧倒的な形で消し飛ばすことで、ノーネームの打倒魔王の活動に派手な狼煙をあげた。

ペストとの戦いでは、五桁の魔王を弄んだという事実を残しつつ、完全な形で魔王を隷属させ、ノーネームの戦力にした。

加えて、サラマンドラのトップであるサンドラ、太陽の主権を持ち白夜の精霊である

白夜叉、八千万の死者の群霊の代表である魔王ペスト、そして箱庭の騎士であり純潔の吸血鬼であるレイシシアを、アイドルユニットとして纏めることで、ノーネームに強力な『コネ』を作りあげた。

アイドル活動で稼いだお金で、ノーネームの活動資金を作った。十六夜に儲けの半分を渡したのは、ノーネームの為に使われることが分かっていたからだ。

収穫祭では、覆海大聖である蛟劉と親交を深め、いざという時に力を借りられる人材を開拓した。

更に、巨龍騒動に乗じて遅咲きの桜である飛鳥を身体的にもギフト的にも強化、覚醒させることで、十六夜クラスの實力に成長させ、ノーネームの戦力を向上させた。

そして巨龍をその拳一撃で消し飛ばすことで、収穫祭に集まっていた全コミュニティへノーネームの力を示した。これによって、ノーネームは更に名を上げる。

そして今、そのノーネームの旗を取り戻し、その旗の下最悪の魔王アジールダカーハを

打倒してみせた。

瑛嗶はこれまで、この状況を想定してきたのだ。更に言えば、ここに十六夜達の戦果も加わってくる。しかも、瑛嗶の思った以上にノーネームの名は広がっている。その理由は、『あの』白夜叉を含めたアイドルユニットという存在が、上層の方にまで名を轟かせたからだ。魅力もそうだが、売れたグッズの内の一部が上層で出回っていることを、瑛嗶は知らない。

もはや、ノーネームは名無しではあり得ない程のビックネームになっているのだ。

瑛嗶の狙いは、今この時の為にあつた。こうして目の前にノーネームの旗が現れるまで、ずっと動かずに居たのだ。

ノーネームに対してずっと献身的では無かった様だった瑛嗶は、実は誰よりもノーネームに貢献していたのだ。

「瑛嗶！」

「よー十六夜ちゃん、悪は滅んだぞ」

「……倒したのかよ……」

とそこへ、十六夜がやってきた。倒れ伏すアジィダカーハを見て、十六夜は目を丸くしながらも呆れた様子だ。

しかし、その表情は瑛嗶の手にあるソレを見て、一気に驚愕に染まる。

「——瑛嗶……ソレは……!?」

そう、十六夜も知っている。ジンと黒ウサギから、聞かされた話と渡された資料を読んで、知っている。元々ノーネームが持っていた、その旗の姿を。

それこそ、今現在瑛嗶の手の中にある……その旗なのだから。

「ああ、これが奪われたお前らノーネームの旗だ」

瑛嗶がそう言うと、十六夜は驚愕の表情のまま少しの間言葉が出なかった。まさか、まさかまさか、こんな形で奪われた旗が、取り戻そうと奮起していた旗が、まだまだ遠い先の夢物語だった旗が、目の前に現れた。

しかも、ノーネームの仲間だった瑛嗶の手の中に収まっている。

夢なら覚めるな。これほど、これほど……!!

——これほど嬉しい現実は無い!

「……ヤハハッ！　なんだよそりや……なんだなんだ……！　本当お前何者だよ、どこまで規格外なんだオイ……！」

「嬉しいか？　お前らの旗が今、ここにあることが」

「ああ！　嬉しいね！　何より、その旗が今——お前の手の中にある事が！」

十六夜は分かっている。瑛叟は今、ノーネームに所属していない。立場上はサウザンドアイズの預かりだ。つまり、十六夜達の下に旗が戻って来た訳ではない。

あくまでこの旗は今、瑛叟のものなのだ。

でもだからこそ、十六夜は歓喜する。十六夜が、こいつこそ最強だと、無敵だと思っていた人外が、自分達の旗を掲げて目の前に佇んでいる。ゆらりと笑って目の前に立っている。

素直に渡してくれるほど、奴は甘くは無いし、優しくも無い。

ならばどうする？

「つまり、お前を倒せば……その旗が取り戻せるってことだ!!」

十六夜はそう言って、拳を鳴らした。闘志がメラメラと燃えあがり、凶悪に吊りあ

がった口端が、歯を剥いて笑みを作り出す。

「正解だよ」

瑛喰はそう言つて、ギフトカードの中に旗をしまいこむ。そして、首をパキパキと鳴らしてゆらりと笑う。

「さて……」

そして、十六夜と、その後ろに現れた者達を見据えた。

現れたのは、飛鳥、耀、黒ウサギ、ジン、ペスト……ノーネームに所属し、且つこの煌焰の都へやって来ていた全員。その全員の視線が、瑛喰と十六夜に集まる。何をしているのか、何故対峙しているのか、分からないことだらけであったが、それは全員の眼の前に現れた契約書類ギアスロールが教えてくれた。

◇

ギフトゲーム『その名前が欲しければ』

【ゲームマスター】

泉ヶ仙瑛喰

【プレイヤー】

名前を失ったコミュニニティに属する者全員

【参加者側勝利条件】
プレイヤー

・手前は問わず、ゲームマスターに対して一撃を入れられた場合

【主催者側勝利条件】
ゲームマスター

・なし

【備考】

・このゲームにプレイヤーが勝利した場合、ゲームマスターは自身の持つ旗を譲渡することを誓います。

・このゲームでプレイヤー側が勝利出来なかった場合、全員が最も大事にしているモノを一つ失う。



「——さあ始めようぜ、これは……悪を倒した正義の味方から、名無しのモブが楯突く戦いだ」

失った名前を取り戻したければ、それ相応の大事なものを賭けて戦え。それはギフトだったり、記憶だったり、友情だったり、仲間だったり、金銭だったり、様々だ。負けた時失うモノが大きいことは、全員が理解した。

でも、それでもだ。

「上等だ！」

「やってやるわよ」

「絶対に……勝つ！」

「黒ウサギたちの旗、取り戻します！」

「隷属したマスターに楯突く魔王って、おかしい話ね」

「僕も、異論はありません」

彼らは即答でそのギフトゲームを受けた。人外を相手に、そのギフトゲームを何のたゆめらいも無く受けた。無論、負ける気などどこにもない。

かつて仲間として戦った人外を倒す為に……名無しの問題児達が牙を剥く。

「さあ、掛かって来い——ゲーム開始だ」

玖瓊はその即答を受けて……ゆらりと笑ってそう言った。

その名前が欲しければ

瑛夏のギフト『嘘吐天邪鬼』オーバリーヴァーは、あらゆる事象を霊格が勝る限り反転させる強力なギフトだ。シンプルな効果であるからこそ、最強の領域にも足を踏み入れる。

これを打倒しようとしても、勝利と敗北を反転させられてしまえば例え勝利したとしても勝てない。結末は全て反転し、瑛夏の都合の良い形へと引っくり返ってしまうのだから。

だが、瑛夏が勝敗の反転をする事がないことは、十六夜達は良く知っている。そんなつまらない行動を取るほど、瑛夏は低俗な存在ではないのだ。当たり前の様に勝利を手にし、当たり前のように敗北を受け入れる。

勝つても負けても、どちらにしても面白い。そう考えるのが瑛夏なのだ。

だからこそ、十六夜達が瑛夏に勝つ最低限の条件は1つ。

—— 『瑛夏の反転をどうにかすること』

反転をどうにかして防がなければ、十六夜達に勝ち目は無い。

十六夜は単体であれば、ギフトを砕く力をもつてしてその効果から逃れることが出来る。だが、飛鳥達はそうではない。十六夜単体で瑛夏に勝てない以上、飛鳥達の助けは

必要、ならばやはりギフトを砕く力以外の突破口を切り開かなければならない。

となれば、十六夜達は読まなくてはならない。瑛嗶の思考を。どこで、どういう風に、何を反転させるのかを、そのタイミングを読まなくてはならない。

それが出来なければ、十六夜達に勝利は無いのだ。

「さあ、掛かって来い」

瑛嗶の言葉を皮切りに、飛鳥が前に出て、十六夜達の動き出しを止めた。

まずは、様子見だ。瑛嗶は基本的に先手必勝を取るよりも、受け手に回って後の先を取る方が多い。ならば、少しでも不得意な戦闘を強いる方が良く考えたのだ。

飛鳥はそれを、誰よりも知っている。瑛嗶からカウンターのなんたるかを全て叩き込まれた飛鳥は、瑛嗶が自分以上に変幻自在縦横無尽なカウンターを入れられることを知っている。

隙だらけに見えて、隙は無い。例え背後を取ったと思っても、それは瑛嗶が取らせてくれたものなのだ、飛鳥は理解している。

だからこそ、自分から踏み込むのは最大の悪手だ。

「お？……へえ、成程色々学んでるんだな」

飛鳥のその行動に、瑛嗶は少しだけ驚いた様な表情を浮かべる。

てつきり、我武者羅に個々人や連携も取らずに突っ込んでくるのかと思っていたの

に、案外仲間の事を考えているじゃないか、とそう思った。

そして、それならば——と、飛鳥の目の前に踏み込む。

「っ!?!」

「先手必勝——ほら、行くぞ」

見えなかった。踏み込んだタイミングも、駆けた速度も、何も見えなかった。でも、飛鳥は反応した。身体が無意識に反応した。瑛嗶の打ち上げる様な拳に、飛鳥は条件反射の如く速度で十字剣を振るった。

でも、間に合わなかった。

考えて動かしただ訳ではない、本当に条件反射的速度で、反射速度で、脊髄反射よりも速く、動いた筈だったのに、それでも……瑛嗶の速度はそれを上回ってきたのだ。

特訓の時とは違う、最早それは手加減された速度ではない。確実に飛鳥の首を取りに来た、瑛嗶の戦闘速度——!!

「飛鳥ア!!」

「ぐッ!?!」

だが、それを十六夜が助けた。飛鳥の真後ろに居た事もあって、十六夜は飛鳥の襟首を掴んで後ろへ引つ張ったのだ。瑛嗶が動き出すのを読んで、瑛嗶が動き出すよりも早く飛鳥に近づいていた。第三宇宙速度で飛鳥の真後ろまで踏み込んで、彼女の身体を

引つ張っていた。

瑛叟との差は、フライングのおかげで瑛叟よりも速かったが、ほんの数コマ。引つ張られた飛鳥だが、瑛叟の拳は飛鳥の顎を若干掠めた。

そして、それだけで十分。顎に掠っただけで十分な威力が飛鳥の身体に伝わった。脳震盪が起き、意識ははつきりしているものの、身体が動かない。

「なっ……これ、は……！」

「軽い脳震盪だ、少し休めば元に戻るぜ。一旦後ろに下がるとけ」

「え、ええ……そうさせて貰うわ」

舌打ちする十六夜。飛鳥が瑛叟の攻撃で行動不能に陥ったからではない、瑛叟によって早々に戦力を削られてしまったこと、そしてそれを防げなかった自分に対する舌打ちだ。

「やってくれんじやねーか、瑛叟……！」

「え？ まだ俺何もしてないけど？ 何かされたの？ それは残念だったね」

「チツ……！」

そして、戦力を削ったことでさえもまだ何もした覚えは無いという瑛叟の言動に、再度舌打ちする。この男を打倒する為に、どうすれば良い。今の1度の攻撃で、1人が行動不能に追いやられたのだ。再起不能ではないが、飛鳥は今格好の的になる。それを護

りながら行動するとなれば、そこから十六夜や耀も次々に落とされてしまう。
どうする……！

「十六夜さん」

「っ！ 黒ウサギ……」

「私が瑛唄さんの気を引きます……その隙に耀さんとなんとか攻撃を入れて下さい」

「なんとかってなんだよ……」

「なんとかはなんとかですよ……その辺は自分で考えて下さい」

「随分と行き当たりばったりな作戦で」

「いけませんか？」

「いや、上等だ！ 行くぞ、春日部！」

「何処に？」

「作戦位伝えとけ黒ウサギイ!!」

黒ウサギが駆け出し、瑛唄に迫る。ギフトカードを取りだして、その中から『叙事詩・マハーラーバタの紙片』を取りだす。

そして、そこから『インドラの槍』、そして『黄金の鎧』を召喚した。この2つのギフトを使えば副作用がある、が……それでも黒ウサギ的には良かった。ここで自分が倒れたとしても、ノーネームの旗を取り戻せるのなら、それで良いと思った。

十六夜も、耀も、飛鳥も、まだ完全に覚醒した訳ではないが将来必ずノーネームを牽引する存在になると確信している。

ならば、月の兎として——彼らに全力を捧げよう。

「はああああああ!!!」

そして、瑛嗶へと放たれたそのインドラの槍——それは、

「ほいつ」

瑛嗶のそんな声と共に空を切った。瑛嗶と黒ウサギの位置関係が反転したのだ。結果、瑛嗶の居た場所へ移動した黒ウサギは槍で空を切り、黒ウサギの居た場所へ移動した瑛嗶は動くことなく槍をやりすごした。槍だけに。

身体の向きまでは反転していない以上、そうなるのは必然だった。

「なっ……!?!」

「残念だったなウサギちゃん……でもその意気は買っぜ?」

ぱりん、と割れる様に鎧と槍が消える。瑛嗶が発動したことを反転して発動していな

かったことにしたのだ。これで、黒ウサギには副作用が襲い掛からない。

「そんで——」

そして、黒ウサギに向けていた視線を切つて前を向く。そこには、十六夜と耀が近づいていた。それぞれの拳と蹴りをその手で受け止め、黒ウサギの方へと投げ飛ばす。

「きやつ……!」

「くつ……!」

瑛嘎という存在に、月の兎の力も、人類史上最強のギフト保有者達も、まるで歯が立たない。どうやって一撃を入れるか……彼らには全くイメージが湧かなかった。

近づく終わり

瑛嘎に勝つ、なんてことはこの箱庭に来た時からずっと考えてた。

てか、確実に瑛嘎は俺達ノーネームの敵に回るだろうってことくらい、ペルセウスの一件でアイツの力の規格外さを垣間見た時から分かってたさ。だから仲間で居る内はアイツの持つてる技術やギフトの使い方を、密かに観察したり、自由奔放な発想に多少嫉妬したこともある。

そして、その凄さを見る度思ってたんだ。こいつが敵に回った時、勝てるイメージが一切湧かないって。

今は無いがかつての2000京のスキルを始めとして、圧倒的な戦闘能力、俺の予想を遥かに上回る身体能力、新たに手に入れた反転のギフト……どれもこれも俺には無い完全な『格上』の力。

一応、俺にも『奥の手』と呼べる一撃はある。だがソレを当てるまでの過程が、どうしても思い浮かばない。

そう、俺一人なら。

今の俺にはノーネームの仲間がいる。今までの俺は、きつとこの仲間達を一人として

信頼していなかった。ソレはひとえに、俺の力が跳び抜けて強かったからだ。

強いから、弱い奴らの前に立って戦わないといけない。

強いから、弱い奴らを護ってやらなきゃならない。

そう思っていた。

でも違った。今はもう違う。

飛鳥なんて、身体能力こそ俺よりも格段に劣るが、瑛叟によつて鍛えられた直感と変幻自在なカウンター技で、俺と互角に戦えるだけの剣術を得た。その上、恩恵の極大化なんて『与える側』のギフトまでもつてやがる。心強い。

春日部の奴は、元々身体能力でいえば幻獣並。五感の鋭さなんて、人間の域を大きく超えてやがるし、今じゃ幻獣の力を扱える位自分のギフトを使いこなしてやがる。心強い。

黒ウサギ……あいつにやいつも支えて貰ってる。俺も含めて、ノーネームの全員がアイツの事を慕ってたんだ。誰よりもノーネームの事を考え、誰よりもノーネームを愛し、誰よりも仲間の身を案じている。月の兎だとか、そんな力がアイツに無かったとしても……俺達にとっては無くてはならない存在だろう。心強い。

色々挙げりゃあ気付くが……ちよつと目を放した際に全員俺の隣に並んでやがる。

俺と『一緒』に戦おうとしてやがる。本当に……心強いつたらありやしねえ。

でも、だからこそ勝てる。あの瑛バケモに、1人じゃ勝てねえ人外に、勝てる。これだけ背中を預けられる奴らがいるんだ、確信して言える。

勝てるさ——この俺が今、この最高の問題な児達かまを信じてんだから。

この右腕……この仲間達の為に、全力で振るおう。

「どうした十六夜ちゃん……黙りこくって」

「いや何……お前に勝つ算段が付いただけだ」

「へえ……そりや楽しみだ」

瑛バケモがゆらりと笑う。初めて会った時も、そんな感じに笑ってたよな、お前。正直に言わせて貰うぜ。

「お前のその笑顔……最っ高にムカつくわ!!」

最初からずっと、その顔歪ませてやりたかったぜ——瑛バケモ！

「黒ウサギ、飛鳥、春日部、ジン、ペスト！ 作戦がある！」

この勝負、勝たせて貰うぜ。そんで、その旗絶対取り戻す。

◇ ◇ ◇

十六夜の作戦が全員に伝わるだけの時間は、瑛嗶が手を出さなかった事で確保出来た。余裕の表れか、それとも何か作戦があるのか……ソレは明らかではないが、十六夜達にとってはありがたかった。

それに……瑛嗶としても、十六夜の作戦には興味がある。何故なら、十六夜は非戦闘員であるジンも作戦に加えているのだ。一撃を入れるというこのゲームの中、瑛嗶という敵に対してジンを作戦に組み込むなど、正気の沙汰とは思えない。

それでも、ジンを戦いに組み込む十六夜の作戦。ソレは瑛嗶の興味を引いた。

「瑛嗶、どうするつもり？」

「ん？ いやいや、分かりきったことを聞くなよなじみ」

「あはは、そつか。いやはや、めだかちゃんとかと戦った時のことを思い出すねえ」

「世界が違うんだ、その話は出さないのがお約束だ」

そこに、なじみが近づいてきた。十六夜達が作戦を確認している隙に、瑛嗶の隣まで

近づいて来たのだ。勿論、彼女はこのゲームに参加していないから、手出しは無用だ。

しかし、彼女の表情は何処か浮かない。まるで、瑛夏の戦いに不満がある様な表情だった。

「瑛夏、今だから言うけれど……僕は今、物語の終わりを感じている」

「……」

「僕が残した2つのギフト、1つは時間停止……もう1つは分かるかい？」

「さあね」

なじみは言う。この物語が、もうすぐ終わってしまうということを……彼女は感じていた。そして、その終わりが何を意味しているのかを、彼女は分かっている。

そして告げた。彼女の持っている2つ目のギフト……いや、彼女自身がかつて『自身』に行使しようとした終わりのギフトにしてスキル。

「僕を終わらせるスキル……僕の命を終わらせる為のスキル……『トゥルーエンド自殺祈願』……自殺の為のスキルだよ」

そう、自殺用のスキル。自殺の為のギフト。恩恵なのに、自殺する為のものなど、おかしな話だ。しかし、なじみは分かっている。

——この世界が、この箱庭が、瑛夏と居られる最後の世界なのだということを。

物語が終われば、瑛夏はまた違う世界へと行ってしまおうだろう。そして今、それを追

う為の手段がなじみにはない。

つまり、この戦いが終われば……物語は終わりを遂げ、なじみは瑛嗶と決別する時を迎える。二度と会えぬ最後の別れを。

だから、なじみは自殺用のスキルを残した。自分を殺せる様な相手を探す方が、彼女にとつては難しい。わざわざ外門を上がって、一桁や二桁の領域まで上るのに、どれだけ時間が掛かるのかも分からない。

ならば、なじみは自分自身で自分自身を終わらせることを覚悟したのだ。

「……そういうことか、そりや大したトゥルーエンドだ」

「でも、止めるつもりは無いんだろう？」

「ああ、俺は物語を終わらせる。ここまでお膳立てしたんだ、今更止められねーよ」

「それでこそ瑛嗶だよ、僕が惚れた男だ」

ふと視線を移すと、十六夜達が既に戦闘準備を整えている。後はなじみが一步下がれば、戦闘が再開するだろう。

なじみは苦笑する。瑛嗶も苦笑する。

「頑張れ瑛嗶——愛してんぜ」

なじみはそんな応援と共に、一步下がった。そして、その瞬間瑛嗶とノーネームの勝負が再開される。

十六夜達が地面を蹴り、瑛嗶に迫って来る。瑛嗶はソレを迎え撃つべく、両手を広げて大きく息を吐いた。

そして——ゆらりと笑って小さく呟く。

「ああ——俺もだよ、なじみ」

物語の終わりは、様々なモノの終わりを意味している。それでも、瑛嗶は止まらない。

ハッピーエンドは、誰もが笑顔になれる訳ではないのだ。

最強

——勝てるかじゃない、勝つんだ。

そんな言葉を、あの十六夜が言った。あの勝気で、傲慢で、快樂主義で、自分が負けるなんて微塵も思っていない様な態度を取ってきた、あの逆廻十六夜が、そう言ったんだ。

——無茶かも知れねえ、でも……俺は勝ちたい！

あんな十六夜は、初めて見た。相手が瑛霞さんだったからかもしれないけど、私は初めて見た。真剣で、必死で、何が何でも勝ちたいと思ってる十六夜の顔は、ほんのちよつと格好良いと思つた。

今まで理性的で、知的的で、強くて、私達よりもずっと大人みたいに見える彼だけ……今この時だけは、私達と同一年で、年相応の、負けず嫌いの男の子。初めて私は彼を、本当の仲間だと思えた気がする。

私に出来るのは、友達の力を借りることだけ。でも、友達の為なら……なんだってやる覚悟は出来る。私の使う力は、友達の為の力。だから今、黒ウサギたちが必死に取り戻そうとしたあの旗を取り戻す為に、私に出来る事は何でもやろう。

十六夜の作戦は、1人の負担が大きい。私は勿論、飛鳥、黒ウサギ、ペストの負担だつ

て大きい。それになにより、ジンの役割が一番危険だ。正直、成功する確率は高くない。でも、私達の中で最も強く、最も知識を持ち、最も戦略を練ることに長けているのは十六夜だ。相手、環境、自分の戦力、ギフト、全部を考慮して練りあげた作戦なのだろう。なら、私達にそれを拒否する理由は無い。

「うん、やろう」

「ええ、異論は無いわ。私も動けるようになったし、あの瑛唄さんに一発ぶちかましてあげようじゃないの」

「YES！ 黒ウサギも精一杯尽力するでございますよ！」

「まあ、マスターには色々とからかわれてきたし、一枚噛ませて貰うわ」

私達戦闘員側の意見は一致している。十六夜も、私達の返答に笑みを浮かべながら頷いた。多分、十六夜は私達が嫌だと言えばやらないだろう。彼はぶつきらぼうではあるけれど、とても仲間想いの男だ。それは良く分かってる。

だから、私達戦闘員側の間達拒否しない事はある程度予想していた筈だ。彼が覚悟を決めたのなら、負けず嫌いの私達がそれから逃げるなんてあり得ない。

つまり、後は『彼』次第。

「……おチビ、お前はどうかだ？」

十六夜が、ジンに視線を向けて聞く。

そう、この作戦は一番危険な役割であるジンがやりたくないと言えば、出来ない。何故なら、それを強制する事は出来ないからだ。仲間だから、最も危険な役割を押し付けることは出来ない。

でも、私達は信じてる。ジン、貴方がこの作戦を受け入れてくれることを。危険を知でお願いしてるのは、分かってる。だからこそ、私達を信じて欲しい。貴方を最も危険な場所へと置いてしまふけれど、私達は貴方の事を必ず護つて見せる。

そして、ジンが出した答えは――

「やります。僕はノーネームのリーダーです。皆さんが命を賭ける以上、僕だってその覚悟は出来てます！」

是、だった。

「上等だ！ おチビ！」

「ええ、流石ジン坊ちゃんでございます！」

「それでこそリーダーね」

「ありがとう、私達を信じてくれて」

後はもう、瑛嗶さんに立ち向かうだけだ。

不思議と、怖くは無い。過去の瑛嗶さんを思い返してみると、彼はいつだって私達の一步後ろにいて、時には風のように前へと駆け抜けていくし、時には嵐のように私達を掻き

回す。

誰も言葉にはしなかったけれど、そんな瑛嗶さんがいたから、ちよつとだけ安心出来た。心地良かったと言つても良いかな？

間違っている事は、間違っているとはつきり言わないで、それとなく正してくれた。ちよつと心地悪な方法ではあつたけど、そのおかげで私は友達がお金や物で成り立つものじゃない事を知つた。

飛鳥も、十六夜も、皆瑛嗶さんに対する愚痴をぼやくけれど、きつと本心じゃ瑛嗶さんを悪くは思っていない筈だ。その内心は、尊敬か、友情か、羨望か、憧れか、仲間か……どれにしたつて、私達は結局のところ問題児なんだけどね。

ちよつと違うけれど、瑛嗶さんも友達なのかな？ 悪友つて感じだけどね。瑛嗶さんもそう思つてくれると、嬉しいな。

「じゃ、行くか……あのにやけ面、歪めてやろうぜ」

「当然、弟子は師を超えるものよ」

「頑張ろう」

十六夜、飛鳥、そして私……そこに瑛嗶さんを加えた四人で、私達はこの世界に来了。でも、今は瑛嗶さんが敵で、残された私達が立ち向かう。

思えば初めてかもしれないね。瑛嗶さんと本気で戦うのは。それも、十六夜と飛鳥

や、黒ウサギたちと一緒に戦うのも、きつと初めて。

「さ、作戦会議は終わったか？」

瑛嗶さんが首を傾げ、相変わらず楽しそうにゆらゆら笑う。その後方で、安心院さんが少し苦笑気味に下がるのが見えた。何か話していたのかな？

「ああ、終わったぜ。そつちも何やら話してみたみてえじゃねえか」

「ん、まあそうだな……ちよつとした雑談をしてんだ」

「ヤハハ、余裕じゃねえか……ま、時間も惜しいし、さくつと終わらせようぜ。ギャラリーも増えて来たしな」

十六夜の言葉に、ハツとなる。気が付けば、周囲には多くのギャラリーがいた。白夜叉、サラマンドラ、蛟劉さん、そして様々なコミュニティの人達……それに、白髪金眼の少年を始めとする異様な集団も。

この場に居る全コミュニティが、私達の行き先を見つめていた。真剣な表情で、特に白夜叉はいつものふざけた雰囲気を通して、事の顛末を見守っている。

巨龍騒動で知っている人もいるかもしれないが、それでもなくともアジールダカーハを打倒した瑛嗶さん。

そして、ノーネームでありながら快進撃を見せる私達の勝負。しかも、旗が掛かった勝負。

考えてみればこれは、今後の箱庭に関わって来る大勝負だ。

なにせ、黒ウサギの話では私達のコミュニティはかつて、最も多くの魔王を倒した最強のコミュニティだったのだから。

「じゃ、掛かって来い。手加減位はしてやれるぞ?」

そっか、つまりこの戦いは……『旗』さいきょうを取り戻す為の、戦いつてことだ。

遊ばれ飛鳥

今ほど、強敵を前に安心した時はないわ。

春日部さんと、十六夜君、私、そこに瑛嗶さんを加えた四人でこの世界へと喚ばれて、思えば遠い所までやってきたと思う。

ペルセウス相手に瑛嗶さんが星を消滅させたあの日から、私達は必死に戦ってきた。本当に必死に、戦ってきたんだ。それが無駄じゃなかった、無意味じゃなかった、今この時、ようやく実を結んだ。

それがとても——誇らしい。

十六夜君の作戦に乗った私は、春日部さん達も同じ気持ちだと知って、柄にもなく昂揚している。負ける気なんてさらさらないわ。だって、私達が今敵に回しているのは……瑛嗶さんなんだから。勝ち負けじゃなく、瑛嗶さんが私達にその拳を向けて立ち塞がっているという事実が嬉しい。

だってそうでしょう？ あの人、私達なんかよりもずっと強く、頼もしいあの人、私達を認めてくれたってことだもの。味方としては無かったけれど、敵として戦う相手として、私達を認めてくれた。

こう言ってしまうばなんだけれど、弟子冥利に尽きるというものじゃない？

あの人に鍛えて貰ったカウンター、死ぬ思いをして会得した。

あの人に貰った恩恵、才能、それが私をもっと強くしてくれた。

だからこそ、私は瑛嗶さんにだけは強くなつた自分を認めさせたい。このカウンター
の技術も恩恵の使い方も、全部瑛嗶さんに鍛えて貰ったからきつと瑛嗶さんには全部お
見通しだと思う。だから多分私の戦術は全て通用しない。私単体で瑛嗶さんに勝つ事
は絶対に無理だと断言出来る。

でも、私単体で勝つ必要は無い。だって私には今、十六夜君や春日部さん、黒ウサギ
達という信頼出来る仲間がいるんだから。たった一撃、たった一撃入れられれば私達の
勝ちだというのなら、私が決定打である必要は何処にもない。

それこそ、今ここには十六夜君や黒ウサギ、春日部さんという私なんかよりも決定的
な一撃を放てる人材が揃っている。なら、それをサポートするのが私の役目……出来る
わ、だって私達は問題児なにかまだもの。同類のやりたいこと、やりそうなことくらい、簡単に
分かる。

「でも……私だって大人しくしているのは性に合わないのよね」

あら？

自然と、そんな言葉が漏れた。瑛嗶さんが移つちやつたかしら？ 私
の口端が吊りあ

がって、笑みを浮かべているのが分かる。そして、私の考えとは裏腹に、私の身体は瑛嗶さんへと一直線に向かって行った。十字剣で空気を斬って、自分の出せる最高速で瑛嗶さんに迫った。

ああ———どうやら私は、サポートに徹せるほど真面目な性格はしていないらしい。身体が勝手に動く。瑛嗶さんと戦っているから、昂揚した身体がサポートに徹してくれない。私が一撃を入れるんだとばかりに、暴れ回る。

「十六夜君！」

「ああ！」

十字剣を下から斬り上げる様に振るうも、バックステップで瑛嗶さんはそれを躲した。でも、私は振り上げた剣を地面と水平に構え、十六夜君を呼んだ。

すると、私の意図を察していたのだろう。十六夜君は私が呼ぶと同時に、水平に構えた剣の上に着地した。普通なら、人間一人分の重みを私が支えられる筈もない。

でも、それを補う術を私は持っている。

「デーン!!」

「DEEEEEEN!!」

ギフトカードからさかさずデーンを召喚、現れたデーンは十字剣の下に手を差し込み、十六夜君の着地の為の地面となる。

そして、十六夜君はタイミング良く瑛嗶さんの下へと跳躍した。入れ替わる様に私はディーンの手の上に乗れり、瑛嗶さんの下へとディーンを走らせる。

「瑛嗶ああああああ!!」

「良いねえ、問題児なりに連携してるじゃないか」

迫りくる十六夜君の拳を、瑛嗶さんはぱしんと乾いた音と共に受け止め、投げ飛ばす。でもそこで終わりじゃない。間髪入れずのディーンの押し潰す様な拳が瑛嗶さんを襲った。

これなら――

「残念」

当たる、そう思ったその瞬間だった。瑛嗶さんのそんな言葉と同時に、地面に向かって振り下ろされていた筈のディーンが、青空へと振り上げられていた。

いや違う、私達が存在していた筈の天地が反転したのだ。つまり地面は空になり、空が地面になった。その結果、ディーンと私は頭から地面に落ちることになり、ディーンは拳を切ったのだ。

ごしや、と自重でディーンが地面に落ちた。私の身体も遅れて地面に落ちていく。

やつぱり、瑛嗶さんの反転は規格外だ。十六夜君は反転を無効化したようだけど、その恩恵を砕く力は周囲にまで作用する訳じゃない。あの反転をどうにかするのを十六

夜君が『諦めた』のは、理解出来る。潔い判断ね。

「飛鳥！」

「ツ!? 春日部さん——!」

そんなことを考えていると、背中を打つ筈だった私の身体を春日部さんが空中でキャッチしてくれた。彼女は空が跳べるから、天地反転の効果は薄かったらしい。天地が反転した瞬間に体勢を逆転して直ぐに立て直したんだろう。頼もしい。

「ありがとう、春日部さん」

「ううん、友達だから」

「っ……………」

お礼を言うと、春日部さんはくすぐったそうにはにかんだ。な、なんだか春日部さんが可愛い……胸がきゅんきゅんする……な、なにかしらこの気持ち……か、顔が熱くなってきた。

はっ! 今私春日部さんに御姫様だっこされてる!? は、恥ずかしい……あ、でも春日部さんの胸が腕に当たって……結構柔らかか——って違う!!

「琰嗶さんね?」

「わはは、飛鳥ちゃんの春日部さんに対する恋愛感情の有無を反転した」

「元に戻せ!!」

瑛嗶さんの反転はずるい。私に春日部さんに対する恋愛感情が無いことを反転出来るなんて、末恐ろしい能力ね……これがあればハーレム作成も一瞬ね。まあ安心院さんがいるから無いでしょうけど。

「舐められてるわね……!」

「遊ばれてるんじゃない?」

「か、春日部さん……もう大丈夫だから下ろして……!」

春日部さんの匂いで頭がくらくらしてくる。これ以上春日部さんとくつついていたら心臓が爆発してしまうわ。早急に瑛嗶さんを倒して元に戻して貰わないといけないわね……!」

瑛嘎の劣勢

瑛嘎に対して、十六夜の考えた作戦を実行するべく、十六夜、飛鳥、耀、黒ウサギ、ペストが行動を開始する。

全員が全員、瑛嘎に対して全力の攻撃を、一瞬の間もおかない早さで始めたのだ。十六夜が殴り掛かり、ソレをいなした瑛嘎に、ディーンの拳が振り下ろされ、それを躲した先に飛鳥の剣が待つており、それを受け止め投げた瞬間耀が踵落としを繰り出し、それを軌道を逸らすことで躲すと黒ウサギが髪を真っ赤に染めて拳を繰り出して、それを受け止めると背後から十六夜が。そんな感じで連続した攻撃を絶え間なく繰り出してくるのだ。

瑛嘎はそれをなんとか紙一重で躲し続けるものの、十六夜達の速度がどんどん上がっていく。恐らく、全員がお互いの無駄を補い合うことに慣れて来たのだろう。その結果、無駄の無くなっていく連携が加速していくのだ。

瑛嘎としても、人数の多さと連携の上達速度に、ほんの少しだけ押され始めていた。そもそも、瑛嘎から決定的な攻撃を受けていないのだ、十六夜達は。だから無傷で、掠り傷程度の傷のまままでいられる。

だが、そんなことは十六夜達全員が分かっている。分かっているでそうしているのだ。決定的な一撃を加える為に、虎視眈々とその時を待っているのだ。

「はあああああ!!」

「つ……良い連携だ、お兄さん困っちゃうねえ」

耀の蹴りに、それを受け止めながら瑛嗶は言う。だがその言葉の途中で飛鳥の剣が迫り、伏せて躲すと真下から十六夜の拳が迫る。凄まじい連携速度、躲す為の時間が全くなくなつて来る。そしてソレを躲す為に反転を使つても、立て直しが早過ぎる。

まるで、瑛嗶の反転を読んでいるかのように、互いが互いを支え合つて体勢を立て直して行く。しかも、その間もギフトが通用しない十六夜の攻撃が迫り、ソレを躲す間に体勢を立て直した飛鳥達が攻撃を再開する。

まるで、反転を引きだされている気分だった。

これほどの連携を躲し続ける瑛嗶も瑛嗶だが、瑛嗶を追い詰める程の連携も凄まじい。瑛嗶が反撃に出れば崩れるであろうこの連携だが、瑛嗶は何故か攻撃しない。

あたかも、防御に全力を置いて、それを十六夜達が抜けるのかを試しているかのような感覚。

「ツ最初から攻撃するつもりなんてないってかア!?!」

「わはは、だつて攻撃したらお前ら一発でダウンしちゃうだろ?」

十六夜のとび蹴りを躲しながら、尚も挑発する瑛嗶。続々と攻撃の嵐の中で正確に躲していく瑛嗶の身体には、一切の傷が無い。まだ彼らは勝利条件である一撃を、入れられていないのだ。戦いが始まってから、およそ30分は経っているというのに――

「ヤハハッ！ 舐めたこといつてくれんじゃねーか！」

「ええ、不愉快ね！」

「おっと？」

十六夜の回し蹴りをジャンプして躲した瑛嗶に、飛鳥の十字剣による攻撃が迫る。空中では躲せない、普通なら。瑛嗶は空を蹴って更に跳躍し、飛鳥の剣を躲す。

だが十六夜達に驚愕の色はない。その位やってのけてもおかしくはないだろうと思っているからだ。寧ろ、これからだとばかりに動きを止めない。

汗だくになりながらも、チャンスを探す。息は切れ、汗が地面に流れ、それでも動きは加速していく。まだまだ止まる訳にはいかないのだ。

瑛嗶が攻撃の手を休めない十六夜、飛鳥、耀、黒ウサギに意識を向けている所で、不意打ちの様にペストが黒い死の風を叩きつけてきた。

「喰らいなさいー！」

「ッ……やるねえ……！」

瑛嗶はその攻撃に一瞬硬直するも、直ぐに動く。死の風の向かう先を反転し、跳ね返

した。

しかし、ペストはソレを予想していたのか、既にその場には居らず、寧ろ死の風に隠れて瑛唄の近くに接近していた。

「隙あり——貰ったわ!!」

「わはは……鹽娘はまだ懲りないみたいだな」

「はぎゅっ!!」

接近してきたペストの頭上に、瑛唄はチョップを落とした。いつかの鹽攻撃の様な衝撃に、ペストは涙目になるも、グツと痛みを堪えてその場に伏せた。

その行動に怪訝な表情を浮かべる瑛唄だが——そこには黒ウサギが黄金の槍を構えて立っていた。しかも、既に放たれる瞬間だ。

「これ、は——!」

「インドラの槍!!」

瑛唄の肉体に、その槍の穂先が迫る。これは穿った、そう思った。事実、穂先が瑛唄の肉体から本の数cmの所まで迫っていたからだ。

しかし、瑛唄はギリギリソレを躲した。身体を強引に捻り、青黒い着物を破りながらも、その肉体には一切傷を付けずに躲した。体勢は崩れたものの、今の一撃は瑛唄に届くかもしれない一撃——それを瑛唄は紙一重で躲してみせた。

ゆらりと笑い、黒ウサギの表情を覗き見る。が、黒ウサギの表情には、不敵な笑みが浮かんでいた。

「——まさか……?!?」

「もおおらつたああああああああ!!!」

ペストが作り出した黒い風、反転して上空へと上って行ったあの黒い風、それに隠れて上空から迫っていたのだ——十六夜が。

その右拳が太陽に重なり、十六夜の決定打をほんの一瞬隠す。

「ぐっ……」

その右拳から、『光の柱』が出現する。それは、星を砕く一撃——この辺り一帯を吹き飛ばす事の出来る最強の一撃。恐らくは、瑛噺でさえも直撃を受ければ唯では済まないだろう。星を砕く威力など、常識の範囲外の力なのだから。

だがしかし、この一撃はもうすぐそこまで迫っていた。気付いた時にはもう遅い。黒ウサギの槍を躲し、体勢の崩れている瑛噺は、それを躲せるかどうか分からない。

そして——

「うらああああああああ!!!」

十六夜の咆哮と共に、その光の柱が落とされた——

諦めない限り

迫りくる光の柱は、地面を抉り、広い範囲で亀裂を生んだ。吹き飛ぶ石や地面の破片、噴き上がる砂煙、そして辺りに核爆弾の様に光を散らす巨大な光の柱。

その柱の真下には、瑛嗶が居た。直撃、確実に当たったという手応えが十六夜にはあった。集束する光と共に、柱が消え失せ、十六夜も念の為後方へと大きく下がる。

——どうなった？

誰もが今の攻撃の結果に身を乗り出していた。ギャラリーも、ノーネームの仲間も、そして安心院なじみも。

光の柱の威力からして、既に今の攻撃は規格外と呼べるだけの物なのだろうということとは誰もが理解している。しているのだが、あの瑛嗶だ。瑛嗶ならば——と、考えてしまうだけの強さを、彼は持っている。あの光の柱に対して、何か防御策を講じていたのではないか？ ギリギリで躲していたのではないか？ そう考えてしまう。

しかし、それでも尚……彼らは願った。全力でやった。直撃だった。如何にあの瑛嗶であろうと、ほんの少し位の傷はつけられたのではないかと。付けられていて欲しい、と。切に。

「はあ……はあ……はあ……」

十六夜は肩で息をしているものの、まだまだ余裕がある。体力的には大分削られているが、瑛叟が反撃して来なかった故に無傷なのだ。戦うだけの余力は、まだある。そしてそれは、他のメンバーも同様だ。仮に瑛叟が未だ健在だとしても、再度戦うだけの力は残っている。

だが、同じ手が通用するのは格下まで。瑛叟に同じ手は通用しないだろう。それをやつてのけるだけの技量も、彼らにはない。

なのに、現実是非常だった。

「——いやはや、驚きを通り越して感心するね。まさか俺が此処まで追い詰められるとは思ってなかったよ」

立ち込める土煙の中から、そんな声が聞こえた。声音に、ダメージの色はない。土煙の向こうから、その声の主が歩いてくる音が聞こえる。段々と近づいてくる足音と同時に、うつすらと人影が見えた。歩く動作に乱れはなく、着実に近づいて来ている。

そして、土煙から青黒い着物が姿を見せた。黒い袴、緑色の腰布、黒いインナー、青

黒い着物、少し撥ねた髪の毛を揺らしながら、瑛嗶は、目の前に現れた。

見た所、傷はない。怪我もなければ、服装に乱れもなく、そして土の汚れすらついていない。これ以上なく、万全だった。そしてそれは、攻撃の失敗を意味する。

「流石にこれだけの実力者を数人相手にしてつてのは、ちよつと無理があつたかねえ。さっきの一撃も、当たれば確実にヤバかつた……でも、空中からの攻撃つてのが不味かつたな」

「なんだと……！」

「光の柱は、十六夜ちゃんの拳から発生している。なら、その拳の矛先をちよいとずらしやれば、俺には当たらないだろう？ 地面に足を付けていれば少し難しかったが、空中なら身体をちよいと押すだけで簡単にずらせたよ」

「っ……!?!」

瑛嗶は、十六夜の攻撃の前にギリギリ手を伸ばしていた。迫りくる柱と共にいた十六夜の服を掴み、そして横へと引つ張った。拳を振り抜く際に十六夜の身体は捻じれる、それと同じタイミングで捻じれる方向へと服を引つ張ったのだ。

結果、身体が思った以上に回転した十六夜は、その光の柱を瑛嗶の直ぐとなりの地面に放つてしまったのだ。それはつまり、十六夜の攻撃が失敗に終わったということ。

「ただ、見事な連携と知恵だった。流石にひやつとしたぜ」

「あれだけやって無傷かよ、ちよつとショックだぜ」

「うんうん、これほどの連携を見せられちゃ俺も大人しくしているのは行儀が良くない。今度は折れ時から反撃させて貰おうか」

瑛夏の言葉に、全員が身構えた。

瞬間——黒ウサギが後方へと吹き飛んだ。

「……………え？」

誰かが漏らした声。黒ウサギが居た場所に、瑛夏がいる。幾らなんでも速過ぎる——一切目視出来なかった上に、黒ウサギがなにをされて吹き飛んだのかも分からなかった。それもそうだ、吹き飛んだ黒ウサギでさえ、何をされたのか分からなかったのだから。

ただお腹に少し、痛みを感じることからお腹に打撃を喰らったのだろうということ、予測出来る。

吹き飛んだ黒ウサギは立ち上がり、瑛夏を見据える。同時に、飛鳥達の視線も瑛夏へと移された。

しかし、そこに瑛夏は既いない。

「なにっ……………!?!」

「後ろだよ、ほらー!」

「うぐっ!？」

驚愕する十六夜の目の前で、耀が空中へと投げ出された。腰を前に突き出すように身体を反らせ、受動的に宙へと身体を投げ出している。

そして、耀が立っていた場所には、片脚を軽く上げた瑛嗶。耀を背後から蹴りあげたのだろう。但し、手加減はされている。本気だったら、黒ウサギも耀もこの時点で死んでいるからだ。

どうする! どうする!! 十六夜は考える。瑛嗶が攻勢に打って出たということは、今までの様な時間稼ぎも、隙を作る連続攻撃も崩されることを意味する。

となれば、十六夜達も取れる手段はもう残り少ない。幸い、耀と黒ウサギはまだ続行可能だ。ならば。

「……………全員、話した通りの作戦で行く! おチビ! 分かっているな?」

「……………はい、分かっています!」

全員に呼び掛ける十六夜。特に、名指しで指されたジンが前に出た。瑛嗶は内心で首を傾げる、あの子に何が出来たのかと。非戦闘員で、かつ持っているギフトも強力ながら今の状況では活用できそうにない。ならば、どうするつもりだ——?

「いっくぜえええ!! 瑛嗶ア!!」

「わはは、掛かって来い十六夜ちゃん——真正面から叩き潰してやる!」

しかし、地面を蹴り、第三宇宙速度で接近してきた十六夜に、瑛嗶は笑う。ゆらゆらと笑って、受け止める。拳を受け流し、蹴りを逸らし、追撃を躲して、空いた隙に掌底を叩きこんだ。十六夜の胸から、みしみしと嫌な音が響く。

だが、走る激痛を堪えて、十六夜はまた前に出た。これには瑛嗶も驚きである。ただ人間の身体で、瑛嗶の一撃に耐えるとは思わなかったからだ。

十六夜の肉体の耐久力が、瑛嗶の想像よりも高かった。

「うるああ!!」

「つと、おらっ!」

「ッ……!」

抉りこむ様な回し蹴りを、瑛嗶は身体を反らして躲し、逆に通り過ぎる足首を掴んで後方へと投げ飛ばした。危なげなく着地する十六夜だが、足首に軽い痛みを感じた。みると、履いていたズボンに瑛嗶の手の痕が残っている。凄まじい握力で掴まれたらしい。

「……ちっ……足首痛めたか」

「その気になれば折れたけどな」

「つくづく、嫌になるぜその強さ……!」

「いずれお前らが超えるべき強さだったんだ、今とは超えろとは言わないから、せめて一

撃くらい入れて見せろ——お前らにはソレが出来ると、俺は思ってる」
「高く買っておいでで……！」

瑛叟の言葉に、十六夜だけでなく飛鳥達も微かに笑みを浮かべる。それほどまでに高く買ってくれているのなら、是非も無い。俄然やる気が湧いてきたという表情だ。

「行くぞ瑛叟、もう少しだけ付き合つて貰おうか！」

「良いぜ、時間はたっぷりあるさ。諦めない限り、幾らでも付き合つてやるよ」

言葉と同時に、瑛叟と十六夜がまた……地面を蹴った。

託し、託され

十六夜の作戦は、少しづつ進行していた。これは、完全に瑛叟の裏を搔いた作戦である。

十六夜も瑛叟も、簡単に言えば頭が良いといえる。戦略、策謀、知略、あらゆる面において、この2人はずば抜けて頭が良いと言えるだろう。

だからこそその作戦だった。十六夜の、1回限りで通用する頭の悪い作戦だった。頭の悪い瑛叟なら、頭の良い十六夜の戦略を高く買っていることは明白。普通の評価だ。だからこそ、十六夜は頭の悪い作戦を敢えて考えた。頭の良い十六夜が、頭の悪い作戦を頭の良い方向で使えるように組み立てたのだ。

十六夜が拳を躲す。反撃に蹴りを繰り出した。だが、受け流されてしまう。

瑛叟が拳を繰り出す。紙一重で躲す。手加減されているのが見え見えな一撃だった。思わず歯噛みする。

飛鳥が耀に投げられて剣を振るう。同時に黒ウサギとデイーンも瑛叟に攻撃を入れるべく動いていた。しかし、瑛叟は三方向からの攻撃に対処してみせる。飛鳥の身体を投げ飛ばして黒ウサギに当て、デイーンの手は己の手で圧倒する。

「フツ……!!」

「口数が減ったな——十六夜ちゃん？」

「うるせツ……!!」

問題は、十六夜達のスタミナは無敵大ではないということだ。戦闘が始まってから、ずつと絶えず動き続けている。瑛嗶相手ではかなりスタミナを消費してしまうのだ。呼吸も乱れ、動きにも大分鈍さが混じってきていた。

しかも、瑛嗶からの攻撃によるダメージで更にスタミナが消費されるのだ。痛みはそのまま、身体の動きを鈍らせる。

恐るべきは瑛嗶の体力。無限大に続くのではないかと思う程のスタミナ量、いい加減嫌になるほどだった。

しかし、十六夜はそれでもこの作戦に掛けた。今までの瑛嗶の言葉にこの作戦での勝機を見出したからだ。成功すれば、勝てる……ソレが分かったから、この足は止めない。

「お、おとおおとおおとおおとおお!!」

「っ……っ？」

突然、十六夜が叫んだ。攻撃して来るわけでもなく、その場で地面に向かって叫んだのだ。

そして、叫び終えた十六夜は顔を上げる。その表情に、疲れはなかった。

「気合、入れ直したぜ……行くぞ瑛唄……これがラストアタックだ!!」

十六夜の言葉に、飛鳥達はふっと笑った。十六夜はこの作戦において、ジンと同列に扱って良いほど重要な役目を背負っている。しかも、ジンと違って彼は自分の力でそれをやつてのけなければならない。瑛唄相手だ、そのプレッシャーは凄まじいだろう。

しかし、今十六夜は心の準備を終えた。プレッシャーを撥ね退け、やつてやると不敵に笑った。

そして——その時はやつてくる。

「隙有り………よ!!」

「! ……残念、俺に隙はない」

「ツ………いいえ、大きな隙よ」

背後から、十六夜に気を取られていた瑛唄に迫ったペスト。黒い風で瑛唄を攻撃するも、瑛唄はそれを躲してペストの細腕を掴んで地面にたたき付けた。

しかし、ペストの表情はまだ攻撃は終わっていないとばかりに笑みを浮かべていた。そう、まだ終わっていないのだ。

「——ツ!?!」

「はあああ!!」

ペストを叩きつけた瞬間、黒い風に隠れて………ジンが現れたのだ。彼は上空から耀によつて全力で投げ飛ばされていた。故に、速度は凄まじく速い……瑛嗶も、まさか非戦闘員のジンを投入してくるとは思わなかった。だから、反応が一瞬遅れた。

しかし対応出来ない速さではない。だがこのまま瑛嗶が避ければ、ジンは地面に叩き付けられて大怪我を負うだろう。

だから、瑛嗶はジンの体当たりを躲し、流れる様にジンの小さな身体を受け止め、地面に転がした。意表を付いた作戦ではあったが、ジンは瑛嗶の足下に転がっている。

しかし——それが十六夜の作戦だった。

「おおおおおおお!!」

「なっ……!!」

瑛嗶の真上から、黒ウサギによつて真下に投げ飛ばされた十六夜がその右拳に再度光の柱を生み出して迫っていた。しかも、ジンに気を取られていた故に反応が遅れている。

だが、瑛嗶は敢えてその攻撃を無視した。何故なら、瑛嗶の真下にはジンやペストが

いるのだ。こんな状況下で光の柱を打ち込めば、確実にジンは重傷ではすまないだろう。

だから、他方向から攻撃が来るのだと思った。

「——？」

でも、飛鳥も耀も黒ウサギもディーンも動かない。

「まさか……………本当にやる気か!？」

「これで終わりだあああああ!!！」

目の前まで迫って来ていた十六夜が、光の柱を振り下ろす。ジンやペストの身を鑑みず、本気で拳を振り落としてきた。

瑛嗶は、嘘だろうと目を見開く。このままならばジンとペストが死ぬ——ならば十六夜はどうやってこの二人を救うつもりだ？

答えは簡単、瑛嗶に救わせるのだ。

「面白い——……………」

瑛嗶はその思惑に気が付いて、ペストとジンを持ち上げ遠くへと投げ飛ばした。そして、次は自分……………しかし、もう光の柱は躲せない所まで迫っている。

だが、瑛嗶にはこれに対応出来る手段がまだ残っていた。

「ゴツ……………!？」

「ソレが効いたのは、さっきまでだよ」

十六夜の顔を殴った。光の柱を止められないのなら、それを出している本人をどうにかすればいい。先程は攻撃ではなく、防御をしたのだが、今は瑛嗶も反撃を宣言している。十六夜を殴り飛ばし、光の柱ごと勢いを止めてしまえばいいのだ。

殴られた十六夜は、それでもなお光の柱を叩き付けた。

当たれ——

!!!!

全身全霊、脳を揺らす一撃を気力で耐えて、霞む視界に微かに映る瑛嗶に当たれと、全力を振り絞った。そして光の柱を放った後、十六夜は意識を失う。

「残念だったね十六夜ちゃん——外れだ」

だが、十六夜の全力でも瑛嗶に光の柱は当たらなかつた。見当違いの方向へと当たり、地面を吹っ飛ばすだけで終わってしまった。

瑛嗶は気を失って地面に倒れる十六夜を見下ろして、ふうと溜め息を吐く。光の柱のまばゆい光のせいで、少し視界チカチカと白くなっているが、これも直ぐに収まるだろう。

——それが、瑛嗶の最大の油断だった。

十六夜を倒して、これで終わりだと思った訳ではない。

しかし、十六夜という最大の武器が消えたことで、もうノーネーム側に勝機はなくなつたと判断したのだ。

そして、光の柱で視界が眩んでいるほんの数秒とその油断が組み合わさって、十六夜の本当の一撃に気が付かなかつた。

「——アルマテイエア!!!」

瞬間、瑛嗶を眩い雷が襲つた。

◇ ◇ ◇

——まさか、此処までやるとは思わなかつた。

瑛嗶は、雷による攻撃を受けて、内心そう思った。視線を落とせば、着物の右袖が吹っ飛び、右腕が雷によって焼け爛れている。

決定的な、敗北の証拠だった。

舞い上がった粉塵の中で、瑛嗶はゆらりと笑う。まさか、十六夜がこんな作戦を取る

とは思わなかったからだ。自分自身を決定打に置かなかった作戦。

今までの十六夜を見ていれば、絶対に取らないであろう作戦だ。何故なら、結果を見れば十六夜は途中で意識を失っている。つまり……その後は完全に仲間頼り、完全に仲間を信頼していないと出来ない戦法だ。

瑛嗶は、十六夜はそれほど仲間を信頼していないと認識していた故に、その作戦に気が付かなかった。

十六夜が気を失った時点で、十六夜の作戦は終わったのだと思ってしまった。だからその瞬間を狙った、雷の攻撃……人間の動体速度を遥かに上回る雷の攻撃だ、こればかりは見て対応する事は出来なかった。更に言えば、見ることも出来なかった。光の柱の光で目が眩んでいたのだ、雷を視界で捉えることが出来なかった。それも躲せなかった理由の一つだろう。

粉塵が晴れる。飛鳥達の前に、右腕を負傷した瑛嗶の姿が現れた。

「……や……つた？」

飛鳥が、そう漏らす。静かな空間の中で、やけに響く眩きだった。

だが、瑛嗶の返答はその眩きに籠った期待に、見事に応える。

「ああ、そだよ。飛鳥ちゃん達の勝ちだ」

その言葉は、その場に居た誰もが望んでいた答え。気を失った十六夜が、仲間託し

た想い。

——勝ったのだ、十六夜達は……瑛嘎に……！

「おめでとう、この旗はお前らの物だ」

そして、ノーネームが全てを引き換えにしても取り返したいと思っていた旗が、最高の形で返ってきたのだった。

エピソード

「まさか、本当におんしらが此処まで来るとはの」

「わはは、これで俺も晴れてノーネームに戻れるつてもんだよ」

そんな会話をしていたのは、白夜叉と瑛叟。サウザンドアイズの下層支店内、白夜叉の私室にて二人、向かい合っている。白夜叉の姿は、最初に会った頃の十六夜曰く和服口りの姿で、瑛叟もいつもの青黒い着物を着ており、空間が和装であることもあって、中々の風情を感じさせる光景がそこにあった。

白夜叉は用意され、少し温くなったお茶を一口啜ると、その金色の瞳を瑛叟に向ける。その表情は不満気というより、どちらかという満足気だ。

瑛叟はそんな白夜叉に対してゆらりと笑って眼を伏せた。こんな会話をしている理由は、話の中にあるノーネームに関わるからだ。

アジⅡダカーハとの一戦、ひいてはノーネームとの戦いから、およそ2年の時が経っていた。

あの日、瑛叟から旗を取り戻したノーネームは、瑛叟の鍛錬や自主訓練の末に強くなっていき、この箱庭で快進撃を遂げていた。無名であった時には出来なかつた多くの

事が、旗を取り戻したことによって出来るようになったのだ。

まず、上層に上がる事が出来るようになり、功績を挙げれば挙げるだけ、手に入れた名前がどんどん有名になっていくのだ。すると、ノーネーム……ああ、今はもうノーネームではないのだが、彼らのコミュニティに入りたいという者も多くなり、更に彼らと同盟を組もうとするコミュニティも多くなった。

その結果、旗を取りあげられる以前、最強時代のノーネームのメンバーではなく、十六夜を始めとしたノーネーム復興時代のメンバーが先導になり、彼らのコミュニティはその勢力を瞬く間に増して行つた。今や、下層では相手になる様なコミュニティは少ない。ギフトゲームに出場すれば上位に必ず喰い込んでくるし、十六夜に至つてはあらゆるギフトゲームで1位を独占しようとしているらしく、現在23戦23連勝、1位独占記録を更新中である。

まあ、瑛嗶の出場するギフトゲームには必ず出て来なかつたことから、独占記録というのも変な話だが。

さておき、そういう訳で快進撃を遂げている彼らのコミュニティは今……本拠の所属階層を上げようとしていた。七桁の外門に位置していた彼らは、旗を取り戻した段階で六桁の外門へと上がっている。ソレを今から、五桁へと引き上げようとしているのだ。五桁、といえばかのアジールダカーハの出現した煌焰の都のある階層だ。

彼らの実力ならば、2年でこのペースは随分と遅いと思われるかもしれないが、十六夜達は瑛叟が戻って来るのを待ってから四桁以上に進もうと思っっている。四桁に進むには、確実に瑛叟の力が必要になって来るからだ。

そして、その時はやってきた。白夜叉の補佐役としてノーネームを離れていた瑛叟は、彼らが五桁に上がるといふことで、コミユニティに戻ることにしたのだ。

「おんしがいなくなったら、あの小僧共は今も尚旗を取り戻そうと躍起になっておったじゃろうな？」

「わはは、いやいや……どうだろうね。あの日の段階で、あいつ等は俺に一矢報いる事が出来る位には強かったんだし……案外、2年も経てば旗も取り戻してたんじゃね？」

「前から思っていたが、おんしかなり自己評価高いよな」

「己を知りて、人は前に進む事が出来るんだよ。俺の場合、自分の実力を知っているから自信家なんだ……ぶっちゃけ、俺に勝てる奴そういないし」

「まあこの前私の付き添いでサウザンドアイズの本拠に行くべく、四桁の外門を潜った時なんか、強い奴らに対して片っぱしから怒りを買っていたしなあ……しかも無傷で帰って来おったし」

「いや、あの時は俺も結構きつかったよ。反転無しじゃ四桁が限界だね」

呆れる様に苦笑する白夜叉に、瑛叟はゆらゆらと笑う。

「それで……今日呼び出したのは何の様だ？　本当なら今頃十六夜ちゃん達と合流して
る時間なんだけど」

「……おんしを呼び出したのは、魔王連盟についてだ」

「ああ……」

白夜叉の言葉に、瑛嗶は成程と頷く。

魔王連盟、かつてアジィダカーハを復活させたコミュニティだ。まああの時は瑛嗶が
強制したわけだが、それでも多くのコミュニティに大きな被害を与えた事には変わりな
い。

実はあれ以降、ノーネームと金髪金眼の少年——『殿下』と呼ばれていたあの少年と
仲間達はかなりの頻度で衝突している。なんでも、ペストと十六夜を取り込もうとして
いるらしく、なんども嫌らしく襲撃してくるのだ。

今の所十六夜達は負けてはいないものの、殿下達もやはり手強い様で、追い詰めても
一步届かずいつも逃げられている。彼らは魔王連盟の中で頻繁に動いている面子なの
で、是非とも捕まえたい所だが……何分混世魔王のギフトやリンのギフトもあって、こ
と遁走においては凄まじい能力を持っている。捕らえるのはそう簡単ではない。

「最近、北部六桁の階層でマクスウェルの悪魔が頻繁に現れているらしい」

「ふーん……ウィル・オ・ウィスプのリーダー目当てじゃねえの？　ほら、アレって結構

なロリコンじゃん」

「いやまあそうかもしれないが、奴はロリコンでも強い。六桁のコミュニティで対抗出来るとすれば、小僧共やウィル・オ・ウィスプとかじゃろうな……おんし、これから小僧共の所に戻るのじゃし……五桁に上がる前に奴をどうにかしてつてくれんか？」

「わははっ……仕方ないなあ、一つ貸しにしておくぜ」

「うーむ……これで12個めの貸しか……増えていくばかりじゃな。面倒掛ける」

「面倒なら大歓迎だ、迷惑は掛けられたくないけどね」

瑛嗶はそう言って立ち上がり、部屋を出る。そのまま自分の家の様に慣れ親しんだサウザンドアイズ支店内を歩き、外に出た。空高く、偽物の太陽がさんと光り輝いていた。

「うーん……それじゃ、行きますか」

瑛嗶はそう呟いて、十六夜達の待つ……始まりの場所、今はもう本拠ではないが、七桁に置かれた拠点へと向かった。



「おせえよ、瑛嗶」

「悪いね、白夜叉ちゃんと話しこんでたんだ」

拠点に戻って来た瑛霞を見つけると、十六夜達は直ぐに駆け寄ってきた。来るのが遅いと少しばかり不満な顔をしているが、中々どうして……彼らはこの2年で随分と逞しい顔立ちになっている。十六夜はもう19歳、高校生を卒業し大学に入るか、二年に上がる頃の年齢となり、身体も大人の体格へと成長していた。まだ未成熟だった身体は、既に出来上がっており、以前とは格段に強くなっているのが見た目と貫録で分かる。

そしてそれは飛鳥や耀も同じであり、飛鳥は17歳に、耀は16歳となった。

飛鳥はまだ成長期真っ只中ではあるが、元々の教養の良さと丁寧な佇まいから、既に大人の魅力を醸し出しており、スタイルも段々と出る所は出て、引っ込む所は引っ込み始めている。

耀は16歳ということで、本格的に成長期に入ったようだ。幻獣や動物の身体能力や特性を恩恵として身に付けることができる彼女は、成長期に入って瞬く間に身長が伸び、今では飛鳥と並んでいる。すらりと伸びた足は長く、そしてまだあるよりはないうだった胸も2年前の飛鳥と同等位には膨らんできた。髪もショートだったのが少し伸び、首の根元程にまで伸びていた。

三人の問題児は、2年という時を経て見た目も実力も凄まじい成長を遂げていたのだ。ちなみに、ペストやレティシアは種族や身体の性質から特に変化なし、リリやジン

は多少背が伸びているようだが、まだ幼さの残る顔立ちのままだ。問題は黒ウサギだ。

彼女は2年前の時点で随分と抜群のスタイルと美貌を持っていた。にも関わらず、その成長は止まらなかつたらしい。胸は巨乳から爆乳へと成長、且つ形と肌の張りは美しく整つたまま、そしてヒップもウエストモより肉付きが良く、そして引き締まっている。抜群のプロポーションが、究極のエロスタイルへと進化を遂げていた。

更に、彼女は精神面でも大きな成長を遂げている。瑛嗶によつて十六夜達と鍛えられた黒ウサギだが、最も実力を伸ばしたのは彼女だろう。最早ちよつとやそつこのことでは感情を昂らせることはなく、2年前は良く見れた赤い髪の色は黒ウサギは、今ではそう見れるものではない。

十六夜達が悪ふぎけの過ぎる行動を取つたとしても、今ではうふふと笑つて大人の笑みを浮かべながら窘めるように止めている。かといつて擲い甲斐がないかと言われれば、そうでもない。弄れば嗜虐心をくすぐる反応を返してくるから、今でも十六夜達は黒ウサギを弄つては面白おかしく日々を過ごしている。

ただ、最近では黒ウサギに求婚してくる男が増えたので、十六夜達は内心ハラハラしながら露払いをしていたりする。

「瑛嗶さん、お帰りなさい」

「お帰りなさい、アホ師匠」

「お帰りマスター」

「変わらないな、マスターは」

「お帰りなさい、瑛唄さん！」

「ま……お帰りだ、瑛唄」

「お帰りなさい、瑛唄さん。お元気そうで何よりでございますよ」

上から、耀、飛鳥、ペスト、レティシア、ジン、十六夜、そして黒ウサギだ。

成長した面々は、随分と雰囲気が変わった。既に瑛唄とほぼ同じ位の背丈に成長した十六夜とハイタッチして、瑛唄はゆらりと笑う。お帰り、と言われて悪い気はしない。

そして、

「やあ瑛唄、調子はどうかかな？」

「ようなじみ、絶好調だ」

安心院なじみ。アジィダカーハを倒し、瑛唄と死に別れる覚悟を決めた少女が、瑛唄を迎え出た。実はあの後、なじみは直ぐに瑛唄が別の世界へと移動するかと思っていたのだが、なんと瑛唄、気まぐれでもうちよつと残ることを決定、もう少しだけ共にいることになった。

あの時のなじみはがっくりとこけて、シリアスな雰囲気をぶち壊されていたが、表情

は嬉しそうだつたのを瑛嗶は覚えている。

「さて……皆、白夜叉ちゃんから頼まれごとだ。この依頼を済ませて、さつさと五桁に上がろうぜ」

瑛嗶の言葉に、ノーネーム……いや、もうノーネームではないのだつた。とにかく彼らは瑛嗶の言葉にまたかと首を振つた。そして不敵な笑みを浮かべながら、仕方ないとはばかりに自分に気合を入れる。十六夜は拳を打ち鳴らし、飛鳥は十字剣を軽く振るい、耀は腕をぐいっと伸ばす。黒ウサギはいつも通りにそんな三人を笑顔で見守っていた。

瑛嗶はそんな彼らに、わははと笑つた。中々どうして、ノリの良い面子になつたものだ。というより、瑛嗶の様なコミュニテイに育つたと言えるだろう。

「それじゃ、行きますか」

『おうー』

瑛嗶の言葉に、全員が頷いた。

そして瑛嗶はまた、太陽を見上げる。この元ノーネームの拠点にある丘と、太陽……まるでこのコミュニテイの旗を移した様な光景だ。

十六夜達が笑い合っている姿と相まって、本当に輝きのあるコミュニテイに成長したものだ、と感慨深くなる。

わはは、と瑛嗶は人知れず笑い——そして、いつも通りに呟いた。

「うんうん……この箱庭、やっぱり面白いねえ」

元ノーネーム、そして現在はその名を取り戻したコミュニティの名は、

——” アルカディア ”

日の昇る丘と少女が目印の、問題児だらけのコミュニティである。